

Tab.25 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
500	SK19	染付又は白磁	仏飯器	—	—	5.0	—	外) 灰白2.5GY8/1 断) 灰白N8/		脚部外面にロクロ目。	肥前産又は肥前系
501	SK19 中層	白磁	水滴 又は 人形か	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 型による陽刻文 様。籠	型押成形。内面ユビナデ。	肥前産
502	SK19 中層	磁器 染付	不明	—	—	—	—	外) 白 断) 白	把手) 墨弾きによる檜 垣文		肥前産
503	SK19 中層	白磁又は 染付	うがい 茶碗	14.0	—	—	—	外) 白 断) 白			肥前産
504	SK19	白磁	紅皿 菊花形	4.6	1.3	1.4	—	外) 白 断) 白	外) 型による菊弁	型押成形。外面下半無釉。	肥前産
505	SK19 上層	白磁	ミニ チュア	2.4	1.1	1.0	—	外) 白 断) 白	外) 型による菊花と菊 弁	型押成形。	肥前産
506	SK19 下層	白磁	ミニ チュア	2.4	1.0	1.0	—	外) 白 断) 白	外) 型による菊花と菊 弁	型押成形。	肥前産
507	SK19 下層	陶器	中碗 広東形	11.8	6.0	5.8	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) 浅黄橙10YR8/3	外) 白土・鉄錆による 梅文 灰釉	枝は鉄錆、花弁は白土で描き分ける。 灰釉は浅黄色を帯びる透明の 釉。	尾戸窯
508	SK19	陶器	中碗 端反形	12.0	—	—	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) 淡黄2.5Y8/3	外) 印刻による桐文灰 釉	印刻による鉄錆象嵌の文様。灰釉 は焼成不良気味で部分的に白濁。	尾戸窯
509	SK19 下層	陶器	中碗 丸形	11.0	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	内外面に緩やかなロクロ目。灰白 色を帯びる半透明の釉で細かな貫 入が入る。	尾戸窯
510	SK19 中層	陶器	中碗	約9.8	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	外) 錆絵、注連縄文灰 釉	外面に強いロクロ目。鉄絵は灰オ リーブ色。灰釉は透明で細かな貫 入が入る。	尾戸窯
511	SK19 上層	陶器	中碗	—	—	5.0	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	外) 錆絵、笹文 灰釉	鉄絵は灰オリーブ色。高台無釉。 灰オリーブ色を帯びる半透明の 釉。	尾戸窯
512	SK19 中層	陶器	中碗	—	—	5.0	—	外) 黒褐7.5YR3/2 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉	内外面に緩やかなロクロ目。高台 内に渦状の皷痕。高台無釉。黒褐 色の釉。内底に目痕。	尾戸窯
513	SK19 中層	陶器	小碗	—	—	4.2	—	外) 浅黄5Y7/3 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	高台無釉。浅黄色を帯びる半透明 の釉で細かな貫入が入る。	尾戸窯
514	SK19 下層	陶器	中碗	—	—	5.6	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	高台内平坦。高台無釉。灰白色を 帯びる半透明の釉で細かな貫入が 入る。内底に目痕。	尾戸窯
515	SK19 上層	陶器	中碗	—	—	4.4	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	高台内に渦状の皷痕。高台無釉。 灰白色を帯びる半透明の釉で細か な貫入が入る。内底に目痕。	尾戸窯
516	SK19 中層	陶器	中碗 広東形	—	—	6.6	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	灰釉	高台施釉。灰白色を帯びる半透明 の釉で細かな貫入が入る。	尾戸窯
517	SK19 下層	陶器	中碗 腰張形	13.0	8.6	5.6	—	外) オリーブ黄 5Y6/3 断) 灰白7.5Y7/1	灰釉	高台無釉。オリーブ黄色を帯びる 半透明の釉で細かな貫入が入る。 内底に目痕。	尾戸窯
518	SK19 下層	陶器	中碗 丸形	12.6	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	灰釉	内外面ロクロ目。明オリーブ灰色 を帯びる透明の釉。	尾戸窯
519	SK19 上層	陶器	中碗 丸形	11.2	8.9	5.2	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	内面にゆるやかなロクロ目。高台 無釉。灰釉は淡黄色を帯び貫入が 入る。内底に目痕4足。	肥前系
520	SK19 中層・ 下層	陶器	中碗 丸形	11.0	7.5	4.0	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白5Y8/1	外) 錆絵、注連縄文 灰釉	外面緩やかなロクロ目。高台無釉。	京都・信楽系
521	SK19	陶器	中碗 丸形	10.0	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	外) 錆絵、注連縄文 灰釉		京都・信楽系
522	SK19	陶器	碗					外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y8/1	外) 錆絵、注連縄文 灰釉	灰釉は透明で粗い貫入が入る。	京都・信楽系
523	SK19 下層	陶器	中碗 堯形	11.0	7.2	4.0	—	外) 浅黄2.5Y7/4 断) 灰黄2.5Y7/2	外) 錆絵、笹文 灰釉	内外面ロクロ目。高台無釉。浅黄 色を帯びる透明の釉で粗い貫入が 入る。	京都系
524	SK19 中層	陶器	中碗	—	—	4.2	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白5GY8/1	外) 錆絵、注連縄文か 灰釉	高台施釉。灰釉は透で粗い貫入が 入る。	京都・信楽系
525	SK19 下層	陶器	中碗 丸形	10.6	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y8/1	外) 鉄錆による帯線 灰釉		京都・信楽系
526	SK19 下層	陶器	中碗	11.0	—	—	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	外) 飛皷灰釉	外面下半に飛皷。外面上半から内 面に灰釉。灰オリーブ色を帯びる 半透明の釉で粗い貫入が入る。	
527	SK19 中層	陶器 色絵	碗	—	—	—	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白5Y8/1	外) 上絵付 (赤) による 海老 灰釉		京都系

Tab.26 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
528	SK19 中層	陶器 色絵	小碗 半球形	9.0	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	外) 上絵付 (赤・薄緑・ 不明) による笹文・花文 灰釉		京都系
529	SK19 下層	陶器	小碗 半球形	—	—	2.6	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	高台無釉。灰釉は焼成不良気味で 灰白色。	京都系 18世紀中葉
530	SK19 上層	陶器	小碗 杉形	—	—	3.6	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白5Y8/1	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる透明の 釉で細かい貫入が入る。	京都・信楽系
531	SK19 上層	陶器	小碗 端反形	約8.4	—	—	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/1	外) 鉄錆と具須による 草文 灰釉	浅黄色を帯びる透明の釉で貫入が 入る。	京都系
532	SK19 中層	陶器	小碗 端反形	9.0	5.2	2.8	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白5Y8/1	緑釉 灰釉	口縁部内外面に緑色の釉を流し掛 け。高台無釉。浅黄色を帯びる透 明の釉で貫入が入る。	信楽 19世紀
533	SK19 下層	陶器	小碗 端反形	7.4	4.6	3.0	—	外) 灰白5Y8/2・ 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰5Y6/1	外) 錆絵、海老か 灰釉、白土	高台内兜巾状。高台施釉。白土を 内面全面と外面の双方に施し、灰 オリーブ色を帯びる透明の釉を施 釉。	
534	SK19 中層	陶器	小碗 端反形	8.8	4.4	3.4	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白2.5Y7/1	外) 白土イッチン描き による花文 灰釉	高台施釉。灰オリーブ色の釉。内 底に目痕3足。	
535	SK19 上層	陶器	小杯 丸形	5.4	3.1	2.0	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	外) 錆絵 灰釉	高台内兜巾状。高台無釉。灰白色 を帯びる透明の釉で細かい貫入が 入る。	京都系
536	SK19 中層	陶器	小杯 丸形	5.6	3.4	2.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉	高台内兜巾状。高台無釉。灰白色 を帯びる半透明の釉で細かい貫入 が入る。	京都系
537	SK19 上層・ 中層	陶器	小杯 丸形	4.4	2.6	1.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/	灰釉	高台内兜巾状。高台無釉。浅黄色 を帯びる透明の釉で貫入が入る。	京都系
538	SK19 上層	陶器	碗蓋	笠部径 10.6	3.5	—	幅み径 4.2	外) 灰オリーブ 7.5Y4/2 断) 黒褐2.5Y3/1・ にぶい橙7.5YR6/4	外) 白土による花文白 化粧土刷毛目 灰釉	内外面白化粧土刷毛目。	肥前産 17世紀後半～ 18世紀前半
539	SK19 中層	陶器	碗蓋	笠部径 10.4	2.9	—	幅み径 4.0	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白5Y8/1	外) 錆絵、松葉文 内) 錆絵、松葉文 灰釉・緑釉	口錆。部分的に緑釉を施釉。透明 釉は粗い貫入が入る。	瀬戸・美濃産
540	SK19	陶器	手塩皿 変形形	5.4	0.9	2.4	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	灰釉	口錆。型作り。内面に型による梅 花。外面ナデ。外底無釉。	尾戸窯
541	SK19 下層	陶器	極小皿	6.8	1.9	3.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉	口縁部波縁状。高台施釉。灰白色 を帯びる透明の釉で粗い貫入が入 る。	瀬戸・美濃産
542	SK19	陶器	小皿	12.4	5.1	5.8	—	外) 暗褐 7.5YR3/3 断) 灰白10YR8/1	鉄釉	高台内を曲線的に削り出す。高台 内平坦。高台無釉。暗褐色の釉。 目痕5足。	尾戸窯か
543	SK19 中層	陶器	小皿 丸形	12.2	4.1	6.0	—	外) (釉) 暗褐 7.5YR3/4 断) 黄灰2.5Y6/1	鉄釉	内外面ロクロ目。高台内を鋭角 的に削り出す。高台無釉。内底に目 痕。暗褐色の半透明の釉。	尾戸窯又は能茶山 窯
544	SK19 上層	陶器	小皿 端反形	12.4	5.2	4.8	—	外) 黒褐色 7.5YR2/2 断) オリーブ黒 5Y3/1	鉄釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台内兜巾 状。高台無釉。黒褐色の釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
545	SK19 中層	陶器	中皿	18.0	—	—	—	外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 断) 灰5Y6/1	内) 鉄錆による文字 灰釉	口縁部溝縁状。外面緩やかなロク ロ目。灰釉は灰オリーブ色を帯び 細かな貫入が入る。	尾戸窯か
546	SK19 上層	陶器	中皿 丸形	25.4	5.8	12.8	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/1	内) 鉄錆による渦 灰釉	馬の目皿。口錆。蛇の目高台。高 台無釉。内底に目痕。	瀬戸・美濃産 19世紀
547	SK19 上層・ 下層	陶器	鉢	17.0	7.9	6.6	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白N7/	灰釉	口縁の6箇所を内側に折り曲げ輪 花形に形作る。外面に強いロクロ 目。灰白色を帯びる半透明の釉で 細かな貫入が入る。口縁に暗オ リーブ色の釉を掛け分ける。	尾戸窯
548	SK19	軟質施 釉陶器 か	鉢	10.2	5.6	7.2	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 灰白2.5Y8/2	外) 蓮弁文か	釉が著しく変質し文様は不明であ るが、一部に幾何状の文様が見え る	二次被熱により釉 は変質。
549	SK19 下層	陶器	鉢 菊花形	—	—	10.0	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	外) 錆絵 灰釉	碁筈底。底部脇に布目痕が残る。 底部無釉。灰白色を帯びる半透明 の釉で細かな貫入が入る。	京都か
550	SK19 上層～ 中層	陶器	鉢か	—	—	7.3	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 黄灰2.5Y7/2	灰釉	高台無釉。浅黄色を帯びる透明の 釉で細かい貫入が入る。	
551	SK19 中層	陶器	鉢	6.6	—	—	—	外) 灰白10YR8/1 断) 黄灰2.5Y7/2	内) 錆絵、山水文 灰釉	高台内に渦状の匏痕。高台無釉。 灰釉は焼成不良で白濁。内底に目 痕3足。	尾戸窯

Tab.27 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
552	SK19 上層	陶器	片口	24.0	—	—	—	外) 灰褐 7.5YR5/2 断) 橙2.5YR7/6	白化粧土刷毛目 灰釉	手捏ねによる片口を貼付。内外面 ロクロ目。	肥前産
553	SK19 上層・ 下層	陶器	片口	19.6	—	7.2	—	外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	灰釉	高台施釉。灰オリーブ色を帯びる 半透明の釉で粗い貫入が入る。内 底に目痕3足。	
554	SK19 下層	陶器	片口	20.0	—	—	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	内外面ロクロ目。灰白色を帯びる 半透明の釉で細かな貫入が入る。	尾戸窯
555	SK19 上層・ 下層	陶器	捏鉢	14.8	7.5	6.0	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉	外面下半無釉。浅黄色を帯びる透 明の釉で貫入が入る。内底に目痕 5足。	瀬戸・美濃産
556	SK19 上層・ 下層	陶器	播鉢	19.0	6.0	8.6	—	外) にぶい褐 7.5YR5/3 断) 明赤褐2.5YR5/6	焼締め	口縁部外面凹線。体部外面ケズリ 後ナデ、内面櫛目。外底に凹凸、 粗砂が付着。	堺・明石系
557	SK19 上層・ 下層	陶器	播鉢	28.8	10.2	13.0	—	外) 赤10R5/6 断) 赤10R5/6	焼締め	口縁部外面凹線。口縁部内面櫛目 後回転ナデ。体部外面ケズリ、内 面櫛目。外底に凹凸、粗砂が付着。	堺・明石系
558	SK19 中層	陶器	播鉢	—	—	—	—	外) 赤灰2.5YR4/1 断) にぶい赤褐 5YR4/4	焼締め	体部外面ケズリ後回転ナデ、内面 櫛目。外底に凹凸、周縁に回転ナ デによる凹み。	備前
559	SK19 上層	陶器	播鉢	—	—	24.0	—	外) にぶい褐 2.5YR5/4 断) にぶい橙 2.5YR6/4	焼締め	体部外面回転ナデ、内面櫛目。底 部に輪高台を貼付。	備前
560	SK19 中層	陶器	鍋	17.2	6.7	8.0	—	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 褐灰10YR6/1	鉄釉	三足を貼付。外底無釉。暗褐色の 釉。内底に目痕。	能茶山窯又は尾戸 窯 外底に煤。
561	SK19 中層	陶器	鍋	14.6	5.8	7.0	—	外) にぶい赤褐 5YR4/3 断) 灰黄褐10YR6/2	鉄釉	外底無釉。にぶい赤褐色の釉。	能茶山窯又は尾戸 窯 外底に煤。
562	SK19 上層	陶器	鍋	15.4	5.6	6.0	—	外) 暗褐 7.5YR3/3 断) 灰5Y6/1	鉄釉	三足を貼付。底部無釉。暗褐色の 釉。	能茶山窯又は尾戸 窯 外底に煤。
563	SK19 上層	陶器	行平か	17.0	—	—	—	釉) 暗赤褐 5YR3/2 断) にぶい褐 7.5YR6/3	外) 鉄釉刷毛塗り後飛 鉋 内) 鉄釉		能茶山窯か
564	SK19 上層・ 中層	陶器	鍋	9.0	—	3.4	—	外) 暗褐 7.5YR3/3 断) 黄灰2.5Y6/1	鉄釉	把手は欠損する。三足を貼付。内 面施釉。外面下半無釉。暗褐色の 釉。	
565	SK19 下層	陶器	水注又 は急須 後手形	4.6	4.0	3.6	—	外) 褐7.5YR4/3 断) 灰N5/	焼締め		
566	SK19 上層	陶器	鍋蓋	笠部径 16.0	—	—	—	釉) 暗褐 7.5YR3/4 外) にぶい褐 7.5YR5/3	外) 飛鉋・白土イッ チン 描き・白土と緑釉に よる丸文 鉄釉	内面と鋸部に鉄釉。	
567	SK19 中層	陶器	急須 横手形	6.3	8.6	5.8	11.7	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白5Y8/2	外) 白土と緑釉による 草花文 灰釉	把手は欠損する。内面施釉。灰釉 は焼成不良気味で白濁。	外底に煤。
568	SK19 中層・ 下層	陶器	土瓶 丸形	6.8	13.5	7.2	16.4	外) 灰黄褐 10YR5/2 断) にぶい黄橙 10YR7/3	外) 鉄錆と白土による 梅文 灰釉	三足貼付。内面に強いロクロ目。 内面施釉。口縁部～口縁部内面 無釉。梅花は白土を盛上げて描く。	
569	SK19	陶器	土瓶 丸形	6.8	9.7	6.2	13.5	外) にぶい赤褐 5YR4/4 断) 灰5Y6/1	灰釉・鉄釉	三足無し。外面の両側に鉄釉を白 抜きし灰白色の釉を施す。口縁内 面と内面下半施釉。	
570	SK19 中層・ 下層	陶器	急須 横手形	7.2	10.0	6.0	15.0	外) 灰オリーブ 5Y4/2 断) 黄灰2.5Y5/1	灰釉	口縁部輪花形。外面上半に多条の 沈線。灰オリーブ色を帯びる透明 の釉。	
571	SK19 上層・ 下層	陶器	土瓶 茶釜形	8.0	13.7	8.2	—	外) 黒10YR2/1 断) 灰黄2.5Y7/2	外) 丸彫りによる文様 鉄釉	三足貼付。内面に強いロクロ目。 黒色の釉。	
572	SK19 下層	陶器	土瓶 算盤 玉形	6.4	—	—	14.0	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	灰釉	灰オリーブ色を帯びる透明の釉で 貫入が入る。	
573	SK19 下層	陶器	土瓶 算盤 玉形	7.8	12.0	8.8	19.7	外) オリーブ灰 2.5GY6/1 断) 灰白7.5Y6/1	灰釉	三足貼付。オリーブ灰色を帯びる 半透明の釉で粗い貫入が入る。	
574	SK19 上層・ 下層	陶器	土瓶 算盤 玉形	7.2	10.3	7.2	17.4	外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 断) にぶい黄橙 10YR7/3	灰釉	三足貼付。外面ロクロ目。内面と 口縁部無釉。灰オリーブ色を帯 びる透明の釉で貫入が入る。	

Tab.28 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大径				
575	SK19 下層	陶器	土瓶 算盤 玉形	7.2	10.7	7.4	17.9	外) オリーブ黄 5Y6/3 断) 灰5Y6/1	灰釉	三足貼付。オリーブ黄色を帯びる 透明の釉で貫入が入る。	外底に煤。
576	SK19 中層	陶器	水注又 は土瓶 雲助形	6.0	—	—	—	外) にぶい褐 7.5YR6/3 断) 浅黄橙10YR8/3	外) 白土イッチン描き と呉須・緑釉による花文 灰釉	薄手。内面施釉。灰釉は透明で細 かな貫入が入る。	
577	SK19 中層	陶器	土瓶蓋	笠部径 8.4	2.5	4.6	摘み径 1.2	外) 褐7.5YR4/3 断) 灰白5Y8/1	鉄釉	花形の摘みを貼付しヘラで整形。 外面無釉。	
578	SK19 下層	陶器	土瓶蓋	笠部径 8.0	2.1	3.4	摘み径 1.4	外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 断) 黄灰2.5Y6/1	灰釉	手捏ねによる摘みを貼付。外面無 釉。灰オリーブ色を帯びる透明の 釉で粗い貫入が入る。	
579	SK19 中層	陶器	土瓶蓋	笠部径 8.0	—	かえり 径 5.8	—	外) 灰褐 7.5YR5/2 断) 浅黄2.5Y7/3	外) 鉄錆と白土による 文様 灰釉	外面周縁に沈線。内面とかえり無 釉。灰褐色の釉。	
580	SK19 下層	陶器	土瓶蓋	笠部径 6.8	3.0	かえり 径 5.0	摘み径 1.4	外) 灰白 5Y8/2 断) 浅黄橙 10YR8/3	外) 緑釉流し掛け 白化粧土・灰釉	内面とかえり無釉。外面に白化粧 土施釉の後灰釉施釉。	
581	SK19 下層	陶器	土瓶蓋	笠部径 7.8	3.3	かえり 径 5.2	摘み径 1.6	外) にぶい赤褐 5YR4/4 断) 灰N5/	鉄釉	内面とかえり無釉。笠部下面に灰 白色の砂が付着。	
582	SK19 中層	陶器	土瓶蓋	笠部径 10.4	2.6	かえり 径 8.4	摘み径 1.6	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 灰白2.5Y8/2	外) 錆絵 灰釉	内面施釉。かえり無釉。淡黄色を 帯びる透明の釉。	
583	SK19 下層	陶器	土瓶蓋	笠部径 9.6	—	かえり 径 8.0	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 灰白2.5Y8/2	外) 錆絵、竹文 灰釉	内面施釉。かえり無釉。淡黄色を 帯びる透明の釉で貫入が入る。	
584	SK19 下層	陶器	土瓶又 は急須 の蓋	笠部径 6.0	—	—	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 灰白2.5Y8/2	外) 錆絵、白土と緑釉 による丸文 灰釉	円孔あり。灰釉は焼成不良気味で 浅黄色に発色。	
585	SK19	陶器	茶入 肩衝形	3.2	10.0	5.0	8.0	外) 黒7.5YR2/1 断) 灰白2.5Y8/1	鉄釉	内外面ロクロ目。外底回転糸切り。 内面施釉。外面下半無釉。黒色の 釉。	
586	SK19 下層	陶器	壺 胴丸形	9.4	9.9	7.2	11.6	外) 灰白7.5Y7/2 断) 灰白7.5Y8/1	灰釉	双耳を貼付。内面ロクロ目。外面 ケズリ。内面無釉。灰白色の釉。	瀬戸・美濃産
587	SK19 中層	陶器	大瓶 鶴首逆 蕉形	17.9	—	10.8	17.3	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 灰白2.5Y8/2	外) 錆絵、鳥・草	高台施釉。浅黄色を帯びる透明の 釉で細かい貫入が入る。	尾戸窯か
588	SK19 上層	陶器	甕	20.0	—	17.0	26.8	外) にぶい黄褐 10YR4/3 断) 黄灰2.5Y6/1	鉄釉	口縁端部に3条の凹線。外面上半 に多段の沈線。内面強いロクロ目。 内面施釉。鉄釉はにぶい黄褐色に 発色。外底に砂が付着。	丹波
589	SK19 下層	陶器	大瓶 撫肩形	—	—	10.4	14.9	外) 黒褐10YR3/1 断) 褐灰10YR6/1	鉄釉	内面に強いロクロ目。外底に直線 方向のナデ。内面無釉。黒褐色の 釉。外底周縁に輪状の灰色粘土の 溶着痕。	尾戸窯又は能茶山 窯
590	SK19 上層～ 中層	陶器	德利	3.6	—	—	9.0	外) 浅黄5Y7/3 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	内面に強いロクロ目。内面無釉。 浅黄色を帯びる透明の釉で粗い貫 入が入る。	瀬戸・美濃産
591	SK19 中層	陶器	瓶	2.8	—	—	—	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 黄灰2.5Y6/1	鉄釉	内面無釉。暗褐色の釉。	
592	SK19 中層	陶器	爛德利	—	—	—	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白7.5Y7/1	灰釉	内外面ロクロ目。灰オリーブ色を 帯びる透明の釉で粗い貫入が入 る。	
593	SK19 中層	陶器	爛德利	—	—	5.8	—	外) にぶい橙 5YR6/4 断) 浅黄橙7.5YR8/3	灰釉	内面と高台内施釉。透明の釉。	
594	SK19 上層～ 中層	陶器	爛德利	—	—	9.4	—	外) 灰白7.5Y7/2 断) 灰白7.5Y8/1	灰釉	内面ロクロ目。外面に飽痕が残る。 内面施釉。灰オリーブ色を帯びる 半透明の釉で細かい貫入が入る。	
595	SK19 中層	陶器	水注 後手 半筒形	7.2	10.3	5.0	—	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 灰白7.5Y7/1	鉄釉	内面ロクロ目。内面施釉。端部無 釉。高台無釉。	
596	SK19	陶器	小瓶	—	—	3.0	—	外) にぶい赤褐 5YR4/3 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉	外底回転糸切り。内面と外面下位 無釉。にぶい赤褐色の釉。	
597	SK19 上層	陶器	蓋	笠部径 6.0	1.3	かえり 径 4.2	—	外) 黄灰2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	外) 錆絵、蝶 灰釉	内面とかえり無釉。灰釉は浅黄色 を帯びる透明の釉で貫入が入る。	
598	SK19 中層・ 下層	陶器	蓋	笠部径 8.0	1.1	かえり 径 6.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	灰釉	内面とかえり無釉。灰白色を帯び る半透明の釉で粗い貫入が入る。	京都・信楽系
599	SK19 上層	陶器 色絵	合子	笠部径 6.6	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	外) 上絵付 (薄緑) に よる文様 灰釉	内面施釉。端部無釉。浅黄色を帯 びる半透明の釉で細かい貫入が入 る。	京都

Tab.29 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
600	SK19 上層～ 中層	陶器	合子	6.6	2.5	5.2	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/2	灰釉	外底回転ケズリ。灰オリーブ色を帯びる透明の釉で貫入が入る。	関西系
601	SK19 中層	陶器	蓋物	10.8	5.3	7.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	灰釉	端部無釉。内面施釉。灰白色を帯びる半透明の釉。内底に目痕3足。	関西系
602	SK19 下層	陶器	蓋物	9.6	—	—	14.4	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	外) 錆絵、笹文か 灰釉	内面施釉。浅黄色を帯びる透明の釉で貫入が入る。	関西系
603	SK19 下層	SK19 4 下層	柄杓	7.6	5.6	5.2	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	内) 鉄錆による圏線灰 釉	把手穴の下部に穿孔あり。高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉で細かい貫入が入る。	京都系
604	SK19 上層～ 中層	陶器	柄杓	8.6	5.3	4.2	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	内) 鉄錆による圏線 灰釉	高台無釉。浅黄色を帯びる透明の釉で細かい貫入が入る。	京都系
605	SK19 上層・ 中層	陶器	水指	15.2	—	8.0	13.5	外) 灰褐7.5YR5/2 断) 褐灰10YR5/1	外) ヘラ彫り 焼締め	体部中位の一箇所を押し変形させる。側面にヘラ彫り。	備前
606	SK19 下層	陶器	不明	—	—	—	—	外) 黒褐10YR2/3 断) 灰白5Y7/1	茄子形鉄釉	内外面施釉。	尾戸窯か
607	SK19 上層	陶器	不明	—	—	7.6	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/2	太鼓形 無釉・鉄釉	前面に窓。太鼓を形取る。側面にヘラ彫りによる文様。底部脇に玉状の飾りを貼付し鉄釉を施す。その他は無釉。内面ロクロ目。外底ナデ。	尾戸窯か
608	SK19 下層	陶器	水滴	全長 12.1	4.6	全幅 5.7	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白5Y8/1	船 灰釉・鉄錆・緑釉	上面に円孔。型押し成形貼り合わせ。中空。内面ユビナデ。外面ナデ。上面に陽刻による宝文、部分的に鉄錆と緑釉を施す。	
609	SK19 中層	陶器	灯明 受皿	11.0	2.3	4.0	—	外) 灰白2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/1	内) 菊花・櫛目 灰釉	内面櫛目。内面に菊花を貼付しヘラ彫りで花卉を作り出す。浅黄色を帯びる透明の釉で貫入が入る。内底に目痕3足。	京都系
610	SK19 下層	陶器	灯明 受皿	10.8	2.6	3.8	受部径 6.8	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 灰白10YR8/2	灰釉	油溝半月状。外底回転糸切り。外面下半と受け部無釉。浅黄色を帯びる透明の釉で細かい貫入が入る。	京都系
611	SK19 中層・ 下層	陶器	灯明受 皿	10.9	2.2	4.0	受部径 7.0	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉	外面無釉。浅黄色を帯びる透明の釉。	京都系
612	SK19 中層・ 下層	陶器	灰吹き	7.4	12.5	7.4	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) におい黄橙 10YR7/3	外) 白化粧土後灰釉。 緑釉流し掛け 内) 灰釉	内面ロクロ目。内面施釉。外底に白化粧。灰釉は透明で粗い貫入が入る。	外底に墨書。
613	SK19 上層	陶器 又は 軟質施 釉陶器	火入れ	10.2	8.9	8.2	—	外) 橙2.5YR6/8 断) 橙5YR7/8	橙色の釉	内面ロクロ目。内面下半無釉。高台施釉。釉は焼成不良気味。胎土は軟質。	口縁部に煤、敲打痕。
614	SK19 下層	陶器	不明	12.6	8.1	5.0	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	内面無釉。灰釉は透明で粗い貫入が入る。	瀬戸・美濃産
615	SK19 中層・ 下層	陶器	水鉢	37.6	15.6	20.4	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/1	外) ヘラ彫りによる文 様 灰釉・鉄釉・緑釉	高台無釉。灰釉は浅黄色を帯びる透明の釉で粗い貫入が入る。部分的に鉄釉と緑釉を施す。内底に砂目。	瀬戸・美濃産
616	SK19 中層	陶器	鉢	21.4	12.8	13.8	—	外) 赤褐10R4/4 断) 赤10R4/6	焼締め	内外面に強いロクロ目。外底に凹凸。	備前 底部に穿孔を穿ち 植木鉢に転用。
617	SK19 下層	陶器	鉢	22.2	13.9	13.4	—	外) におい赤褐 2.5YR4/3 断) 暗赤褐2.5YR3/4	焼締め	内外面に強いロクロ目。外底に凹凸。外面から外底に自然釉が厚く掛かる。内底に火摺。	備前 底部に穿孔を穿ち 植木鉢に転用。
618	SK19 上層～ 中層	陶器	火鉢又 は水鉢	22.6	—	—	—	外) オリーブ黒 5Y3/2 断) 灰5Y6/1	外) ヘラ彫りと削り出 しによる文様 鉄釉	内面無釉。オリーブ黒色の釉。	
619	SK19 下層	陶器	火鉢か	—	—	—	—	外) 褐7.5YR4/3 断) 灰白5Y8/1	鉄釉	型による獣面を貼付。内面施釉。	
620	SK19 下層・ 床	陶器	鳥の 水入れ	全長 13.2	3.8	全幅 8.8	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰N7/	灰釉	たたら成形。外底イタナデ。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
621	SK19 上層～ 中層	陶器	餌猪口	3.9	2.2	3.6	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白5Y8/1	灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉。	
622	SK19 上層	陶器	餌猪口	3.4	2.0	3.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	灰釉	外底ケズリ後回転ナデ。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯か
623	SK19 上層～ 中層	陶器	ミニ チュア 鍋	—	—	2.0	—	外) 暗褐10YR3/3 断) におい黄橙 10YR7/2	鉄釉	三足貼付。内面施釉。外面下位無釉。暗褐色の釉。	

Tab.30 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
624	SK19 中層	陶器	鍋	7.0	2.6	3.8	—	外) 暗褐色10YR3/3 断) 灰黄2.5Y7/2	鉄釉	把手は欠損する。三足貼付。内面 施釉。外面下位無釉。暗褐色の釉。	外底に煤。
625	SK19 上層	窯道具	ハマ	径 9.0	1.4	—	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白5Y8/1		上面と下面回転糸切り。側面ナデ。 5足。	尾戸窯か
626	SK19 下層	土師質 土器	白土器 小皿	11.6	2.0	8.8	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による寿字文	内面周縁回転方向のナデ。外面上 半回転ナデ、下半回転ケズリ後ナ デ。外底直線方向のナデ。	尾戸窯
627	SK19 上層・ 中層	土師質 土器	白土器 小皿	11.8	2.0	8.6	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による寿字文	内面周縁ヨコナデ。外面上半回転 ナデ、下半回転ケズリ後ナデ。外 底回転ケズリ後直線方向のナデ。	尾戸窯
628	SK19 下層	土師質 土器	白土器 小皿	11.1	1.8	8.2	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による寿字文	内面摩耗し調整不明。外面回転ナ デ。外底回転ケズリ。	尾戸窯
629	SK19 上層	土師質 土器	白土器 小皿	10.8	1.9	8.6	—	外) 灰白10YR8/1 断) 灰白10YR8/1	内) 陽刻による寿字文	内面周縁ヨコナデ。外面回転ナデ。 外底回転ケズリ。ケズリ・ナデと も粗く乱れる。	尾戸窯 口縁部に灯芯油 痕。
630	SK19 下層	土師質 土器	白土器 小皿	11.2	1.7	7.6	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による高砂文	内面周縁回転方向のナデ。外面ヨ コナデ。外底直線方向のナデ。	尾戸窯
631	SK19 上層	土師質 土器	白土器 小皿	11.9	2.0	9.2	—	外) 灰白10YR8/2 断) 灰白10YR8/2	内) 陽刻による高砂文	内面周縁回転方向のナデ。外面上 半回転ナデ、下半回転ケズリ後ナ デ。外底摩耗し調整不明。	尾戸窯
632	SK19 上層～ 中層	土師質 土器	白土器 小皿	11.7	1.7	8.8	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による高砂文	外面ケズリ後ヨコナデ。外底直線 方向のナデ。	尾戸窯
633	SK19 下層	土師質 土器	白土器 小皿	11.9	2.2	9.1	—	外) 灰白10YR8/2 断) 灰白10YR8/2	内) 陽刻による松竹梅 鶴亀文	摩耗し調整不明。外底回転ケズリ。	尾戸窯
634	SK19 中層	土師質 土器	白土器 小皿	11.0	2.1	8.2	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による高砂文	内面周縁ヨコナデ。外面ヨコナデ。 外底ナデ。	尾戸窯
635	SK19 中層	土師質 土器	白土器 小皿	11.0	1.6	8.4	—	外) 灰白10YR8/1 断) 灰白10YR8/1	内) 陽刻による高砂文	摩耗し調整不明。	尾戸窯
636	SK19 中層	土師質 土器	白土器 小皿	12.1	2.0	8.7	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による高砂文	内面周縁ヨコナデ。外面回転ケズ リ後ヨコナデ。外底ナデ。	尾戸窯
637	SK19 中層	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	8.6	—	外) 灰白10YR8/1 断) 灰白10YR8/1	内) 陽刻による松竹梅 鶴亀文	内面周縁回転ナデ。外底回転ケズ リ。	尾戸窯
638	SK19 上層	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	8.6	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による松竹梅 鶴亀文	内面周縁ヨコナデ。外面回転ケズ リ。外底回転ケズリ。	尾戸窯
639	SK19 中層	土師質 土器	白土器 小皿	11.0	1.7	8.2	—	外) 灰白10YR8/1 断) 灰白10YR8/1	内) 文様の有無は不明	内面周縁ヨコナデ。外面ヨコナデ。 外底ナデ。	尾戸窯
640	SK19 下層	土師質 土器	小皿	11.0	2.1	7.5	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	尾戸窯
641	SK19 中層	土師質 土器	小皿	11.0	2.2	7.4	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	尾戸窯
642	SK19 上層	土師質 土器	小皿	11.0	1.8	7.0	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
643	SK19 上層	土師質 土器	小皿	11.4	1.7	8.0	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。内面中央に強い 渦状のロクロ目。外底回転糸切り。	
644	SK19 中層・ 下層	土師質 土器	小皿	10.4	1.8	6.4	—	外) にぶい黄橙 10YR7/4 断) にぶい黄橙 10YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。 内底中央に渦状のロクロ目。	
645	SK19 下層	土師質 土器	杯	11.3	3.3	6.9	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
646	SK19	土師質 土器	小皿	7.2	1.0	5.1	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
647	SK19	土師質 土器	小皿	7.4	1.0	5.2	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
648	SK19	土師質 土器	小皿	6.4	1.2	3.9	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油 痕。

Tab.31 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
649	SK19 中層	土師質 土器	小皿	6.8	1.4	4.6	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	649～655が7枚重 ねて出土。全て使 用痕なし。
650	SK19 中層	土師質 土器	小皿	7.6	1.1	5.2	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	同上
651	SK19 中層	土師質 土器	小皿	7.3	1.1	5.2	—	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	同上
652	SK19 中層	土師質 土器	小皿	7.4	1.2	5.0	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	同上
653	SK19 中層	土師質 土器	小皿	7.0	1.0	5.4	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	同上
654	SK19 中層	土師質 土器	小皿	7.2	0.9	5.4	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	同上
655	SK19 中層	土師質 土器	小皿	7.3	1.1	5.2	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	同上
656	SK19	土師質 土器	小皿	7.2	1.6	4.8	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	656～659が4枚重 ねて出土。全て使 用痕なし。
657	SK19	土師質 土器	小皿	7.0	1.0	4.8	—	外)にぶい橙 7.5YR6/4 断)にぶい橙 7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	同上
658	SK19	土師質 土器	小皿	7.4	1.2	5.7	—	外)にぶい橙 7.5YR6/4 断)にぶい橙 7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	同上
659	SK19	土師質 土器	小皿	7.5	1.0	5.4	—	外)にぶい橙 7.5YR6/4 断)にぶい橙 7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	同上
660	SK19 下層	土師質 土器	小皿	—	—	3.9	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	底部中央に径4mm の穿孔。
661	SK19 上層	土師質 土器	胡麻 煎り	—	—	全幅 9.4	—	外)にぶい黄橙 10YR6/4 断)にぶい黄橙 10YR7/3	外)型による陽刻文様 と文字「胡麻□」	型押成形貼り合わせ。内面ユビオ サエ。	内面と上面に焦 げ。
662	SK19	土師質 土器	胡麻 煎り	—	—	—	—	外)明黄褐10YR6/8 断)にぶい橙 7.5YR7/3	外)型による陽刻文字 「胡麻煎」 明黄褐色の低下度釉	型押成形貼り合わせ。内面ユビオ サエ・ナデ。	
663	SK19	土師質 土器	胡麻 煎り	—	—	—	—	外)明赤褐 5YR5/6 断)橙5YR6/6	外)型による陽刻文字 明赤褐色の低下度釉	型押成形貼り合わせ。上部に楕円 形の窓。内面ユビナデ。	
664	SK19	土師質 土器	胡麻 煎り	—	—	—	—	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい黄橙 10YR7/3		型押成形貼り合わせ。内面ユビオ サエ。	外面に煤。
665	SK19 上層・ 中層	土師質 土器	羽釜	9.2	—	—	—	外)灰白2.5Y8/1 断)灰白2.5Y8/1		内外面回転ナデ。	外面に煤。
666	SK19 下層	土師質 土器	鍋	12.6	—	—	—	外)灰白10YR8/1 断)灰白10YR8/1		内外面回転ナデ。	外面に煤と焦げ。
667	SK19	土師質 土器	焙烙	18.0	2.5	17.7	—	外)橙7.5YR6/6 断)にぶい橙 7.5YR6/4		口縁部外面回転ナデ。内面回転ナ デ。外底に凹凸。	関西産 外底に煤。内底に 焦げ痕。
668	SK19 中層	土師質 土器	焙烙	23.6	3.0	22.4	—	外)にぶい橙 7.5YR6/4 断)にぶい橙 7.5YR6/4		口縁部外面回転ナデ。内面回転ナ デ。外底に凹凸。	関西産 外底に煤。内底に 焦げ痕。

Tab.32 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
669	SK19 中層・ 下層	土師質 土器	焙烙	30.6	5.5	—	—	外) 灰黄2.5Y6/2 断) 暗灰N3/		口縁部外面ユビオサエ後回転ナ デ。内面回転ナデ。外底ナデ。	関西系
670	SK19 下層	土師質 土器	焙烙	31.4	6.3	—	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4		口縁部外面回転ナデ。内面回転ナ デ。外底ナデ。	関西系 外底に煤。内底に 焦げ痕。
671	SK19 下層	土師質 土器	焙烙	31.6	6.5	—	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 7.5YR6/4		口縁部外面回転ナデ。内面回転ナ デ。外底ナデ。	関西系
672	SK19 下層	土師質 土器	焙烙	44.8	5.9	—	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4		口縁部内外面回転ナデ。内底ナデ。 外底イタナデ。	讃岐 岡本系 内底に焦げ、外面 に煤。
673	SK19	土師質 土器	焙烙	37.0	—	—	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 7.5YR6/4		口縁部外面回転ナデ。内面回転ナ デ。外底に凹凸。	在地系 外底に煤。内底に 焦げ痕。
674	SK19	土師質 土器	焙烙	—	—	—	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 7.5YR6/4		口縁部外面回転ナデ。内面回転ナ デ。外底に凹凸。	関西産 外底に煤。内底に 焦げ痕。
675	SK19 上層・ 中層	土師質 土器	竈	43.8	—	—	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3		粘土紐積み上げ成形。接合部付近 にユビオサエ。内外面回転ナデ。	
676	SK19 中層	土師質 土器	焜炉 筒形	14.4	16.6	13.0	—	外) 灰白10YR8/2 断) 灰白10YR8/2	外) 印刻による文字 「春花秋月萌相」	体部前方下位に楕円形の窓。内部 施設の前方に方形の窓、上位に円 孔。外面ナデ。外底回転ケズリ。 外底に五角形の三足を貼付。	京都系 口縁部内外面に煤 と滲み。
677	SK19 中層	土師質 土器	焜炉か	12.1	11.3	10.0	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1		焜炉の内部施設か。前方に口縁部 から切り込む窓をもつ。外底不定 方向のイタナデ。内外面回転ナデ。	京都系 内面に煤。
678	SK19 下層	土師質 土器	焜炉 丸形	20.0	—	—	23.7	外) にぶい黄橙 10YR7/2 断) にぶい黄橙 10YR7/2		手捏ねによる突起を内面の三方に 貼付。突起に穿孔あり。窓部分は 欠損する。外面ナデ・ミガキ。内 面回転ナデ。	関西産
679	SK19 上層	土師質 土器	焜炉 五角形 又は 六角形	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	外) 印刻による文字	体部前方下位に楕円形の窓。内部 施設は欠損する。外底に五角形の 三足を貼付。体部内外面イタナデ。 内底ナデ。外底に凹凸。	京都系
680	SK19 上層・ 中層	土師質 土器	焜炉 筒形	14.5	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	外) 印刻による文字	内面に内部施設をもつ。口縁部内 面に台形状の突起を貼付。内外面 回転ナデ。	京都系 口縁部と突起に 煤。
681	SK19 上層	施釉 土器	焜炉 竹形	14.1	—	—	—	外) 緑色 断) 淡黄2.5Y8/2	外) 緑色の低下度釉	内面に内部施設をもつ。口縁部内 面に台形状の突起を貼付。内外面 回転ナデ。	
682	SK19 中層	施釉 土器	焜炉 筒形	10.8	—	—	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) にぶい橙 7.5YR6/4	外) 不明	内面に内部施設をもつ。内面回転 ナデ。焼成不良で釉は白濁。	口縁部内面に煤。
683	SK19 上層・ 中層	土師質 土器	焜炉 筒形	14.2	19.9	11.8	—	外) 明赤褐5YR5/6 断) にぶい橙 5YR6/4		体部前方下位に楕円形の窓。体部 中位の三方に径1.7mmの円孔、内 面下位に断面三角形の受けを巡ら す。外面ナデ・ミガキ。内面ロク ロ目、後櫛目。脚は削り出しによ る。	口縁部内面に煤。
684	SK19 中層・ 下層	瓦質 土器	火鉢	14.0	7.9	14.6	—	外) 灰N4/ 断) 灰N4/		内外面回転ナデ。内面に強いロク ロ目。外底回転ナデ。外底に筒形 の三足を貼付。	
685	SK19 上層・ 中層	土師質 土器	火消 し壺	12.6	19.1	14.2	19.4	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4		粘土紐積み上げ成形。内面ユビオ サエ後ナデ。外面ナデ。外底に凹 凸。	関西産 内面上位に弱い 煤。
686	SK19 上層・ 中層	土師質 土器	火消 し壺	13.4	—	16.6	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4		粘土紐積み上げ成形。内面ユビオ サエ後ナデ。外面ナデ。外底に凹 凸。外底に粗砂が付着。	関西産
687	SK19 下層	土師質 土器	火消 し壺	14.6	—	—	20.1	外) にぶい黄橙 10YR7/4 断) 灰白10YR8/2		口縁部内外面と体部外面ユビオサ エ後回転ナデ。内面ユビオサエ・ ユビナデ。	口縁部内面に煤。
688	SK19 中層・ 下層	土師質 土器	火消し 壺蓋	笠部径 11.0	5.8	—	摘み径 6.2	外) 橙7.5YR6/6 断) 橙7.5YR6/6		外面回転ナデ。内面ナデ。	内面に弱い煤。
689	SK19 下層	施釉 土器	不明	—	—	—	—	外) 灰白10YR8/2 断) 灰白10YR8/2	外) 陽刻型押しによる 稲穂 薄緑の低下度釉	型押成形。内面イタナデ。部分的 に薄緑色の釉を施釉。	京都系



Tab.33 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大径				
690	SK19 中層	土師質 土器	蓋	笠部径 5.0	1.3	—	—	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6		花形の摘みを貼付しヘラで整形。 外面ナデ。下面に凹凸。	関西産
691	SK19 中層	施釉 土器	蓋	笠部径 3.0	—	—	—	断) 浅黄橙7.5YR8/3 釉) 薄緑	緑色の低下度釉	型作り。周縁に陽刻の圏線。かえり と内面回転ナデ。	
692	SK19 中層	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外) 浅黄橙10YR8/3 断) 浅黄橙10YR8/3	きつね	型押成形左右貼り合わせ。中実。 外底に径2mmの円孔。	
693	SK19 上層	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	亀	型押成形貼り合わせ。中空。内面 ユビオサエ。	京都系
694	SK19 下層	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	笠。人物の一部か。	接合部で剥離。型押成形。中実。	京都系
695	SK19	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4	猫か	型押成形貼り合わせ。中空。内面 ユビオサエ・ユビナデ。	
696	SK19 中層	土師質 土器	ミニ チュア 土瓶か	3.8	3.0	3.0	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1		内外面回転ナデ。	京都系
697	SK19 上層	土師質 土器	ミニ チュア 焔炉	6.4	—	—	—	外) にぶい赤褐 5YR5/4 断) にぶい赤褐 5YR5/4		内面上位に手握ねによる突起を貼 付。外面ミガキ。内面回転ナデ。	
698	SK19 中層	施釉 土器	箱庭道 具灯籠	—	4.0	—	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/1	全体に透明の釉。部分 的に薄緑の釉。	型押成形貼り合わせ。中実。底部 に径1.7cmの円孔。焼成は硬質。	京都系
719	SK20	磁器 染付	中碗	—	—	4.9	—	外) 白 断) 白	外) 草花文 高台内) 圏線・「大明 年製」		肥前産 18世紀前半
720	SK20 床	磁器 染付	小碗 端反形	8.6	5.5	4.4	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	外) 草花文 高台外) 二重圏線		肥前産
721	SK20	磁器 染付	小碗 丸形	8.7	5.0	3.7	—	外) 明オリープ灰 5GY7/1 断) 灰白N8/	外) 草花文	くらわんか手。呉須はオリープ灰 色。畳付に灰白色の砂が付着。	肥前産
722	SK20 床	白磁	小杯 端反形	6.6	4.9	3.0	—	外) 灰白10Y8/1 断) 白		高台施釉。内定に灰白色の砂が付 着。	肥前産
723	SK20	磁器 染付	小皿 変形形	—	2.0	—	—	外) 灰白2.5GY8/1 断) 白	外) 草文 高台外) 竹文 内) 鶴	糸切り細工。貼付高台。	肥前産 有田 17世紀末～18世紀 初頭
724	SK20	磁器 染付	五寸皿 丸形	14.2	2.4	8.4	—	外) 白 断) 白	外) 圏線 内) 不明 高台内) 圏線		肥前産 二次被熱により釉 は変質。
725	SK20	磁器 染付	不明	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 花文・松葉	多角形。内面と外底無釉。コンニャ ク印判による花文・手描きによる 松葉文。	肥前産18世紀前半
726	SK20	磁器 染付	瓶	—	—	5.2	8.4	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 不明	呉須は青灰色。畳付に灰白色の粗 砂が付着。	肥前産
727	SK20	陶器	中碗 丸形	12.0	—	—	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 灰黄2.5Y7/2	外) 呉須による山水文 灰釉	京焼風陶器。	肥前産 17世紀後半～18世 紀前半 二次被熱により釉 は変質。
728	SK20	陶器	中碗	—	—	5.4	—	外) にぶい黄 2.5Y6/3 断) 灰黄2.5Y7/2	外) 不明 灰釉	京焼風陶器。	肥前産 17世紀後半 高台内に「清水」 銘印。
729	SK20	陶器	火入れ 又は 香炉	12.2	—	—	—	外) にぶい黄橙 10YR6/4 断) にぶい黄橙 10YR7/3	外) 呉須絵 灰釉	内外面強いロクロ目。内面無釉。 灰釉は透明で貫入が入る。	
730	SK20 床	陶器	火入れ 又は 香炉	12.2	—	—	—	外) 灰黄褐10YR4/2 断) 灰黄褐10YR5/2	外) 白化粧土刷毛目	内面と外底無釉。	肥前産 17世紀後半～18世 紀前半
731	SK20 床	施釉 土器	鬚水 入れか	—	—	—	—	外) 明黄褐10YR7/6 断) 浅黄橙10YR8/3	明黄褐色の低火度釉	楕円形。外底ナデ。内面と外底施 釉。	
732	SK20	施釉 土器	鬚 水入れ	—	—	—	—	外) 明黄褐10YR6/6 断) 浅黄橙10YR8/3	明黄褐色の低火度釉 口縁) 緑色の釉	楕円形。外底ナデ。内面と外底施 釉。口縁端部に緑色の釉を点状に 施す。	
733	SK20	土師質 土器	小皿	8.8	1.5	5.6	—	外) にぶい褐 7.5YR5/4 断) にぶい褐 7.5YR5/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油 痕。
734	SK20 床	土師質 土器	小皿	7.9	1.5	4.7	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	

Tab.34 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
735	SK20 床	土師質 土器	焜炉	—	—	17.5	—	外)にぶい黄橙 10YR6/4 断)にぶい黄橙 10YR6/4		窓の形状は不明。外面ヨコナデ、 内面ユビオサエ・ユビナデ。外底 に凹凸。外底に三足を貼付。	
736	SK20	陶器	不明	—	—	—	径約 9.2	外)黒5Y2/1 断)灰N4/	外)ヘラ彫りによる文 字 焼締め	内面ロクロ目。	
737	SK20	瓦質 土器	不明	—	—	—	—	外)灰7.5Y5/1 断)灰白5Y7/1		外面に板ナデとヘラ彫りによる文 様。内面板ナデ。	
744	SK21 上層	磁器 染付	中碗 広東形	10.6	7.0	5.0	—	外)灰白N8/ 断)白	外)雁・圏線 口縁内)二重圏線 見込み)圏線	内底に目痕3足。	能茶山窯か
745	SK21 中層	磁器 染付	中碗 広東形	—	—	5.1	—	外)灰白5GY8/1 断)白	外)草花文 高台外)二重圏線 見込み)亀・圏線	内底に目痕3足。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内「サ」銘。
746	SK21 上層	磁器 染付	小皿 輪花形	11.0	2.9	6.4	—	外)白 断)白	外)如意頭連続唐草文 内)花卉・櫛歯文・十 字花文 高台内)圏線・角枠内 銘 高台外)二重圏線	口縁部輪花形。	肥前産
747	SK21 上層	磁器 染付	うがい 茶碗	14.0	—	—	—	外)白 断)白	外)花文 内)不明		肥前産
748	SK21 下層	磁器 色絵	小瓶	—	—	3.4	4.3	外)白 断)白	外)上絵付(赤)による 文様	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前産
749	SK21	白磁	水滴又は 人形	—	—	5.1	—	外)白 断)白	外)型による籠状の陽 刻文様	型押成形。内面ユビナデ。内底布 目。	肥前産
750	SK21 上層	磁器 染付	人形又は 水滴	—	—	—	—	外)橙7.5YR6/6 断)白	人物	型押成形前後貼り合わせ。中空。 衣服を呉須と鉄釉で彩色。	肥前産
751	SK21	白磁	戸車	—	全厚 1.3	全幅 5.0	—	外)白 断)白		両面に灰白色の粗砂が付着。	
752	SK21 上層	陶器	小皿 端反形	12.1	4.5	5.1	—	外)暗褐10YR3/3 断)にぶい橙 7.5YR6/4	鉄釉	見込み蛇の目釉剥ぎの後白土を刷 毛塗り。高台無釉。暗褐色の釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
753	SK21 下層	陶器	中皿 折縁形	21.0	5.1	8.4	—	外)黄灰2.5Y4/1 断)黄灰2.5Y5/1	灰釉	見込み蛇の目釉剥ぎの後白土を刷 毛塗り。高台無釉。	能茶山窯又は尾戸 窯
754	SK21	陶器	碗又は鉢	—	—	8.5	—	外)灰白5Y7/1 断)灰白5Y7/1	灰釉	内面ロクロ目。高台無釉。灰白色 を帯びる半透明の釉で細かな貫入 が入る。	尾戸窯
755	SK21	陶器	土瓶	11.0	—	—	21.0	外)明赤褐2.5YR5/8 断)橙5YR7/8	外)イッチン描きによる 文様 橙色の低下度釉	内外面ロクロ目。内面無釉。	
756	SK21 中層	陶器	甕	25.0	—	—	28.8	外)暗赤褐5YR3/2 断)黄灰2.5Y5/1	外)肩部に灰釉の流し 掛け 鉄釉	内面ロクロ目。内面施釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
757	SK21 上層	土師質 土器	中皿	17.0	—	—	—	外)橙5YR7/6 断)橙5YR7/6		内外面回転ナデ。外面下位回転ケ ズリ。	
758	SK21 下層	土師質 土器	焙烙	28.8	—	—	—	外)黄灰2.5Y4/1 断)浅黄2.5Y7/3		口縁部内外面と内底回転ナデ。外 底チヂレ目。	関西系
759	SK21 中層	土師質 土器	焜炉 丸形	21.6	19.9	19.8	26.5	外)橙7.5YR7/6 断)橙7.5YR7/6		前方に口縁部から切り込む窓。体 部に径8mmの円孔数穴。内面上位 に型による突起を貼付(剥離)。 輪高台を貼付。高台の前方に円孔 1穴。体部外面ナデ・ミガキ、内 面回転ナデ。外底ナデ。	在地系 内底に煤。
760	SK21 上層	土師質 土器	焜炉 さな	—	—	—	—	外)灰白2.5Y8/1 断)灰白2.5Y8/1		上面と側面回転ナデ。下面回転糸 切り。径1cmの円孔数穴。	京都系
761	SK21 上層	土師質 土器	焜炉 筒形	—	—	14.0	14.9	外)灰白10YR8/1 断)灰白10YR8/1	外)陽刻文様	体部前方下位に楕円形の窓。内底 に内部施設を貼付(欠損)。輪高 台を貼付し、三方にアーチ状の切 り込み。体部内面に強いロクロ目。 外底ナデ、外底周縁回転ナデ。	京都系
762	SK21 下層	瓦質 土器	焜炉 箱形	—	—	12.4	—	外)黒N2/ 内)橙7.5YR7/6 断)橙7.5YR7/6		体部前方下位に長方形の窓。体部 両側面に扇形の把手を貼付。外底 の四隅に脚を貼付。外面ナデ・ミ ガキ。内面ハケ、接合部にユビナ デ。外底ハケ。	内面に煤。
763	SK21 下層	土師質 土器	焜炉 筒形	—	—	—	—	外)灰白10YR8/1 断)灰白10YR8/1	外)鉄錆と上絵具(赤) による梅文	体部前方に窓。内外面回転ナデ。 内面ロクロ目。	京都系
764	SK21 上層	土師質 土器	不明 五徳か	—	—	—	—	外)灰白2.5Y8/2 断)灰白2.5Y8/2		手捏ね成形。内外面ユビオサエ・ ユビナデ。底部付近ヨコナデ。	

Tab.35 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
765	SK21	土師質 土器	人形 又は 泥面子	—	—	—	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4	動物	型押成形。上面型による陽刻文様。 下面ナデ。	
766	SK21 上層	土師質 土器	人形 又は 泥面子	—	—	—	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4	動物	型押成形。上面型による陽刻文様 とチヂレ目。下面ナデ。	
767	SK21 上層	土師質 土器	泥面子	径 3.0	全厚 0.6	—	—	外)にぶい黄橙 10YR7/3	花文	型押成形。上面型による陽刻文様。 下面ナデ。	
774	SK24 下層	磁器 染付	中碗 丸形	10.0	—	—	—	外)白 断)白	外)雪輪草花文	呉須は暗青灰色。	肥前産 波佐見 18世紀
775	SK24 下層	白磁	中碗 丸形	9.6	4.8	3.6	—	外)白 断)白			肥前産
776	SK24 下層	磁器 染付	猪口か	9.6	—	—	—	外)灰白5GY8/1 断)灰白5N8/	外)松文	口縁部折湾形。呉須は青灰色。コ ンニャク印判による松文。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
777	SK24 上層	青花	中碗	—	—	5.7	—	外)白 断)白	外)不明・圏線 内)不明 高台外)二重圏線	万頭心碗。	中国 景德鎮窯系 16世紀後半～17世 紀初頭
778	SK24 中層	白磁	猪口	9.7	6.0	6.2	—	外)白 断)白		型打成形。口縁部輪花形。	肥前産
779	SK24 下層	白磁	紅皿 菊花形	—	2.1	—	—	外)白 断)白	内)型による菊弁	糸切り細工。貼付高台。	肥前産
780	SK24 上層	磁器 染付	小皿 丸形	11.4	2.2	6.0	—	外)灰白5GY8/1 断)白	外)不明 内)芭蕉葉・文字	透明釉は貫入が入る。	肥前産
781	SK24 下層・ 床	陶器	中碗 丸形	12.4	7.7	4.8	—	外)灰オリーブ 5Y6/2 断)黄灰2.5Y6/1・ 浅黄橙10YR8/3	外)鉄錆と呉須による 稲束・笠文 灰釉	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。 灰オリーブ色を帯びる半透明の釉 で細かな貫入が入る。御本が入る。 内底に目痕4足。	尾戸窯
782	SK24 下層	陶器	中碗	—	—	5.9	—	外)灰白7.5Y7/1 断)灰白2.5Y7/1・ 2.5Y8/2	灰釉	灰オリーブ色を帯びる半透明の釉 で細かな貫入が入る。御本が入る 目痕なし。	尾戸窯
783	SK24 下層	陶器	中碗	—	—	5.6	—	外)灰白5Y7/2 断)黄灰2.5Y6/1	灰釉	高台内に乱れた渦状の鉋痕。高台 無釉。釉は焼成不良気味で白濁。 内底に目痕4足。	尾戸窯
784	SK24 下層	陶器	中碗	—	—	5.6	—	外)灰白5Y7/2 断)灰白5Y7/2	灰釉	高台無釉。灰オリーブ色を帯びる 半透明の釉で細かな貫入が入る。 内底に目痕4足。	尾戸窯
785	SK24 下層	陶器	中碗 丸形	9.6	5.0	4.0	—	外)灰黄褐10YR4/2 断)灰黄褐10YR5/2	外)白化粧土打刷毛 目・錆絵、草文 内)白化粧土打刷毛目	畳付に灰白色の粗砂が付着。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
786	SK24 下層	陶器 色絵	中碗 丸形	9.2	—	—	—	外)淡黄2.5Y8/3 断)灰白2.5Y8/2	外)上絵付(薄緑・青) による竹・若松 灰釉	釉は透明で貫入が入る。	京焼
787	SK24 下層	陶器	碗	—	—	4.6	—	外)浅黄橙10YR8/3 断)灰白2.5Y8/1	灰釉	高台無釉。浅黄色を帯びる透明の 釉で細かな貫入が入る。	京都 18世紀後半 高台内に「清口」 銘印。
788	SK24 上層	陶器	中碗	—	—	—	—	外)浅黄2.5Y7/3 断)淡黄2.5Y8/3	外)錆絵、山水文 灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で細か な貫入が入る。	京都系
789	SK24 下層	陶器	皿か	—	—	—	—	外)灰白2.5Y8/1 断)灰白10YR8/1	外)錆絵 長石釉		美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
790	SK24 上層・ 下層	陶器	播鉢	38.0	—	18.0	—	外)暗赤褐2.5YR3/4 断)にぶい赤褐 2.5YR5/3	焼締	口縁部外面に凹線。体部内面と内 底に櫛目。外面回転ナデ。外底ナ デ、輪高台を貼付。外面に火襷。	備前 18世紀 外底に窯印あり。
791	SK24 下層	陶器	壺 双耳 肩衝形	7.0	—	—	11.6	外)灰オリーブ 5Y6/2・黒褐 10YR3/2 内)暗褐 10YR3/4 断)灰白10YR7/1	不明	肩部に双耳を貼付。内面ロクロ目。 内面施釉。口縁部無釉。釉は焼 成不良で灰オリーブ色に発色。	
792	SK24 下層	陶器	灯明 受皿	10.4	1.7	3.0	—	外)にぶい赤褐 5YR4/3 断)にぶい赤褐 5YR4/3	錆釉	内面回転ナデ。外面回転ケズリ。 内面に錆釉を刷毛塗り。外面無釉。	備前 外面にタール状の 焦げ。口縁部に灯 芯油痕。
793	SK24 下層	陶器	水指か 箱形	—	—	—	—	外)黄灰2.5Y6/1 断)灰白2.5Y7/1	灰釉	箱形。たたら成形貼り合わせ。上 部に円形の口。内外面ナデ。灰白 色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯

Tab.36 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
794	SK24 下層	土師質 土器	焜炉 筒形	12.4	—	—	15.0	外) にぶい黄橙 10YR7/2 断) にぶい黄橙 10YR7/2		体部前方下位に窓。後方の中位に 径2cmの円孔1穴。口縁部の1箇所 にアーチ状の切り込みあり。外面 ナデ。口縁部内面回転ナデ、体部 内面ユビナデ。	内外面に煤。
795	SK25	磁器 染付	大碗 丸形	15.6	7.2	5.2	—	外) 白 断) 白	外) 松・竹 高台外) 二重圏線 口縁内) 四方襷 見込み) 松竹梅円形 文・二重圏線		肥前産
796	SK25 中層	磁器 染付	中碗 望料形	11.7	6.1	5.2	—	外) 白 断) 白	外) 区画割りに丸・雲・ 格子、丸内に雪輪・草花 口縁内) 四方襷 見込み) 若松・二重圏 線	透明釉は貫入が入る。	肥前産 18世紀後半
797	SK25 中層	磁器 染付	中碗 望料形	—	—	4.4	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	外) 花文 高台外) 二重圏線 見込み) 寿・二重圏線		肥前産 18世紀後半
798	SK25 下層・ 床	磁器 染付	中碗 望料形	11.4	6.6	5.4	—	外) 明緑灰 7.5GY8/1 断) 白	外) 花卉・唐草・蓮弁文 高台外) 二重圏線 口縁内) 四方襷 見込み) 寿・圏線・二 重圏線		肥前産 18世紀後半
799	SK25 上層	磁器 染付	中碗 広東形	11.9	6.1	6.6	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 蓮弁文 口縁内) 二重圏線 見込み) 宝文・圏線 高台内) 銘・圏線		肥前産 1780年代～19世紀 前半
800	SK25 中層	磁器 染付	中碗 広東形	10.3	5.9	6.0	—	外) 灰白10Y8/1 断) 白	外) 雨龍・宝文 高台外) 二重圏線 口縁内) 二重圏線 見込み) 火焰宝珠か・ 圏線	透明釉は貫入が入る。	肥前産又は肥前系 1780年代～19世紀 前半
801	SK25	磁器 染付	中碗 広東形	11.6	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 山水文 口縁内) 二重圏線 見込み) 岩波・圏線		肥前産又は肥前系 1780年代～19世紀 前半 801・817組。
802	SK25 上層・ 中層	磁器 染付	中碗 丸形	11.4	6.3	4.0	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白N8/	外) 桐文	呉須は暗青灰色。	肥前産
803	SK25 下層	青磁 染付	中碗 丸形	11.3	6.5	4.2	—	外) オリーブ灰 2.5GY6/1 断) 灰白N8/	外) 青磁釉 口縁内) 四方襷 見込み) 手描きによる 五弁花文・二重圏線 高台内) 渦「福」	畳付に灰白色の砂が付着。	肥前産 18世紀後半
804	SK25 上層	磁器 染付	小碗	10.0	5.3	4.4	—	外) 白 断) 白	外) 雲龍文 内) 雲龍文		肥前産
805	SK25	磁器 染付	小碗 半筒形	7.2	5.8	3.6	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白5Y8/1	外) 区画間に四方襷・ 半菊文 口縁内) 二重圏線 見込み) 手描きによる 五弁花文・二重圏線		肥前産 18世紀後半～19世 紀初頭
806	SK25 下層・ 床	磁器 染付	小碗 半筒形	7.2	5.6	3.6	—	外) 灰白10Y8/1 断) 白	外) 捻割花文 外底) 圏線・不明 口縁内) 四方襷 見込み) 五弁花文・圏線	コンニャク印判による五弁花文。	肥前産 18世紀後半～19世 紀初頭
807	SK25	磁器 染付	小碗 浅半 球形	8.2	3.8	2.8	—	外) 灰白N8/ 断) 白	外) 菊花散らし・格子 による地埋め 内) 同		肥前産
808	SK25 上層・ 中層	磁器 染付	小碗 丸形	7.4	4.0	2.8	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白N8/	外) 草花文 高台外) 圏線	呉須は青灰色	肥前 波佐見 18世紀
809	SK25	白磁	小杯 桶形	6.0	4.2	3.6	—	外) 白 断) 白	文様の有無は不明。	釉は明緑灰色を帯びる。	肥前産 1780年代～1820年 代
810	SK25 上層	磁器 染付	碗又は 猪口	7.7	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 蕨 口縁内) 蕨か		肥前産
811	SK25 中層	青磁 染付	小碗 筒丸形	6.8	—	—	—	外) 明緑灰 10GY7/1 断) 白	外) 青磁釉・草花文 口縁内) 四方襷 見込み) 二重圏線		肥前産
812	SK25 下層	磁器 染付	蓋	笠部径 13.9	2.7	—	摘み径 5.9	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 龍・鶴・波 摘み内) 渦「福」・圏線 内) 四方襷・松竹梅円 形文・二重圏線	透明釉は貫入が入る。	肥前産

Tab.37 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
813	SK25 中層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 12.8	2.5	—	摘み径 7.0	外) 白 断) 白	外) 山水文 摘み内) 文字「□□□ 宝□□之珍」 内) 十字花	広東形碗の蓋。	肥前産 1780年代～19世紀 前半
814	SK25 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.3	3.0	—	摘み径 4.1	外) 白 断) 白	外) 区画割に垣と植物 内) 四方櫛・丸に垣と 植物・圏線	望料碗の蓋。	肥前産 18世紀後半
815	SK25 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.8	3.3	—	摘み径 5.0	外) 白 断) 白	外) 丸に寿・寿 内) 丸に寿・二重圏線	望料碗の蓋。	肥前産 18世紀後半
816	SK25	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.0	3.3	—	摘み径 3.4	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白N8/	外) 雪輪・コンニャク 印判による桐文 内) 四方櫛・圏線・五 弁花文	摘み端部に灰白色の砂が附着。コ ンニャク印判による桐文と五弁花 文。	肥前産 18世紀後半
817	SK25	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.8	2.7	—	摘み径 5.6	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 山水文 内) 岩波・圏線	広東形碗の蓋。呉須は暗灰色。	肥前産 1780年代～19世紀 前半 801・817組。
818	SK25	白磁	皿 菊花形	14.0	5.6	10.0	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白N8/	内) 型による菊花		肥前産
819	SK25 下層	白磁	皿 菊花形	13.6	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	内) 型による菊花・陽 刻菊花文	陽刻型打成形。内面の2箇所に陽 刻による菊花文。	肥前産
820	SK25	磁器 染付	小皿	8.8	1.6	4.0	—	外) 白 断) 白	外) 如意頭連続唐草文 高台外) 二重圏線 内) 不明		肥前産
821	SK25 上層	磁器 色絵	皿	—	—	—	—	外) 灰白N8/ 断) 灰白N8/	外) 上絵付(赤)による 文様 白色の釉		肥前産
822	SK25	磁器 色絵	猪口	約6.8	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 上絵付(赤・黄・黒) による水仙	文様は赤と黒で輪郭を描く。	肥前産
823	SK25	白磁	紅皿 菊花形	4.6	1.5	1.6	—	外) 白 断) 白	外) 型による菊弁・一 箇所に陽刻による花文	型押成形。	肥前産
824	SK25 下層	磁器 染付	蓋物 丸形	5.0	2.5	2.6	—	外) 灰白 2.5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 牡丹・縹 高台外) 二重圏線	呉須は暗青灰色。	肥前産
825	SK25	磁器 染付	蓋物 半筒形	11.0	5.7	7.0	—	外) 白 断) 白	外) 宝文 高台外) 二重圏線	口縁端部無釉。	肥前産
826	SK25 中層	磁器 染付	段重	12.2	5.0	8.6	—	外) 灰白N8/ 断) 灰白N8/	外) 唐草文 高台外) 圏線	腰部括れあり。口縁端部と腰部無 釉。腰部に灰白色の砂が附着。	肥前産
827	SK25 中層・ 下層	磁器 染付	段重	12.6	4.9	9.2	—	外) 白 断) 白	外) 唐草文 高台外) 圏線	腰部括れあり。口縁端部と腰部無 釉。	肥前産
828	SK25 中層	磁器 染付	合子	笠部径 4.2	1.2	—	—	外) 白 断) 白	外) 宝文	内面施釉。端部無釉。	肥前産
829	SK25 中層	磁器 染付	髪油 壺	2.4	9.0	4.4	9.7	外) 明オリープ 灰5GY7/1 断) 灰白N8/	外) 草花文	呉須は暗緑灰色に発色。透明釉は 明オリープ灰色を帯びる。	肥前産
830	SK25 下層	磁器 染付	小瓶	—	—	3.0	4.7	外) 明オリープ灰 5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 梅花・笹		肥前産
831	SK25	磁器 色絵	水滴又 は人形	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 上絵具(赤)で部分 的に彩色	内面ユビナデ、内底と外底に布目 痕。内面と外底無釉。白色で半透 明の釉。	肥前産
832	SK25 中層	陶器	中碗 丸形	11.6	8.3	5.8	—	外) 灰白2.5Y8/2・ 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	内外面ロクロ目。高台内に渦状の 鮑痕。透明の釉で細かな貫入が 入る。内底に目痕3足。	尾戸窯
833	SK25	陶器	中碗 腰張形	10.8	7.1	5.0	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	外面緩やかなロクロ目。高台内に 強い渦状の鮑痕。高台無釉。灰白 色を帯びる半透明の釉で細かな貫 入が入る。	尾戸窯
834	SK25 中層	陶器	中碗 腰張形	10.0	6.6	4.8	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	内外面緩やかなロクロ目。高台内 に渦状の鮑痕。灰釉は白濁する。 内底に目痕3足。	尾戸窯
835	SK25 上層	陶器	中碗 丸形	11.6	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 浅黄橙10YR8/4	灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で細か な貫入が入る。御本が入る。	尾戸窯
836	SK25 上層・ 中層・ 下層	陶器	中碗 丸形	11.4	7.6	5.0	—	外) 灰白7.5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	外) 錆絵、草文 灰釉	内底に目痕3足。	尾戸窯
837	SK25 上層	陶器	中碗 丸形	12.3	—	—	—	外) 灰オリープ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	外) 錆絵、笹文 灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で細か な貫入が入る。御本が入る。	尾戸窯

Tab.38 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
838	SK25 下層	陶器	中碗	—	—	4.6	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 淡黄2.5Y8/3	灰釉	高台内に強い渦状の皷痕。高台無 釉。灰白色を帯びる半透明の釉で 細かな貫入が入る。	尾戸窯
839	SK25 上層	陶器	中碗	—	—	3.4	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 浅黄橙10YR8/3	灰釉	高台内平坦。高台無釉。灰白色を 帯びる半透明の釉で貫入が入る。	京都系又は尾戸窯
840	SK25 上層	陶器	小碗	9.0	5.9	4.5	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y7/2	灰釉	口縁部の数箇所を押圧し、輪花形 に変形させる。体部外面に粗い工 具痕が残る。高台施釉。灰釉は灰 オリーブ色を帯び光沢が強い。	尾戸窯
841	SK25 中層	陶器	小碗	7.8	—	—	—	外) 灰7.5Y6/1 断) 灰白5Y7/1	外) 白土と鉄錆による 梅文灰釉	花は白土、枝は鉄錆で描く。内面 ロクロ目。透明の釉で貫入が入る。	尾戸窯
842	SK25 上層	陶器	小碗 端反形	9.4	5.9	4.1	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	高台内に円圈状の段。高台無釉。 光沢の強い透明の釉で、部分的に 白色～薄紫色を帯びる。	京都系
843	SK25 上層	陶器	小碗 端反形	8.8	5.5	3.8	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	高台内に円圈状の段。高台無釉。 光沢の強い透明の釉で、部分的に 白色～薄紫色を帯びる。	京都系
844	SK25	陶器 色絵	小碗 丸形	9.0	6.5	3.4	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/1	外) 上絵付(赤・剥離し 不明)による月・雲・ 兎・草花 灰釉	高台内を曲線的に削り出す。高台 無釉。淡黄色を帯びる透明の釉で 貫入が入る。	京都
845	SK25 中層・ 下層	陶器 色絵	小碗 丸形	8.2	6.1	3.4	—	外) 灰白7.5Y8/2 断) 灰白7.5Y8/1	外) 上絵付(赤・薄緑) による月・雲・兎・草花 灰釉	高台内を曲線的に削り出す。高台 無釉。淡黄色を帯びる透明の釉で 粗い貫入が入る。	京都
846	SK25 上層	陶器 色絵	小碗 丸形	9.8	6.4	3.0	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 灰白2.5Y8/1	外) 上絵付(赤・薄緑) による文様、山水文か 灰釉	高台内を曲線的に削り出す。高台 無釉。淡黄色を帯びる透明の釉で 貫入が入る。	京都
847	SK25	陶器 色絵	小碗 半球形	7.2	5.6	2.9	—	外) 灰白10Y7/1 断) 灰白N8/	外) 上絵付(赤・薄緑) による笹文 灰釉	高台無釉。明オリーブ灰色を帯び る透明の釉で粗い貫入が入る。	京都・信楽系 18世紀中葉
848	SK25 上層・ 床	陶器	小碗 半球形	9.4	5.7	3.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	外) 錆絵、笹文か 灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明 の釉で貫入が入る。	京都・信楽系 18世紀後半
849	SK25	陶器	小碗 半球形	8.6	5.0	2.3	—	外) 灰白2.5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 錆絵、草花文 灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明 の釉で貫入が入る。	京都・信楽系 18世紀後半
850	SK25 中層・ 下層	陶器	小碗 杉形	10.2	5.8	4.1	—	外) 灰白7.5Y8/2 断) 灰白7.5Y8/1	外) 錆絵、若松文 灰釉	高台無釉。オリーブ灰色を帯びる 透明の釉で粗い貫入が入る。	京都・信楽系 18世紀後葉
851	SK25 上層	陶器	中碗	10.2	7.0	4.6	—	外) 黒褐2.5Y3/1 断) 灰白2.5Y8/1	外) 部分的に白土を掛 ける 鉄釉	げんこつ碗。ユビオサエにより体 部中位を窪ませる。高台無釉。黒 褐色の釉。	瀬戸 豊付に「〇」印。
852	SK25 下層	陶器	中碗	—	—	3.2	—	外) 黄褐2.5Y5/6 断) 浅黄橙10YR8/3	練り込み手	高台内に渦状の皷痕。橙色の素地 に白色土を練り込む。黄褐色を帯 びる半透明の釉を全面施釉。	
853	SK25 下層	陶器	中碗	—	—	5.6	—	外) 灰黄褐10YR6/2 断) 浅黄橙10YR8/4	灰釉	京焼風陶器。文様部分は欠損。高 台内に円圈状の段。灰釉は焼成不 良で白濁。	肥前産 17世紀後半 高台内に「清水」 銘印。
854	SK25 上層・ 中層	陶器	小皿	9.8	2.4	4.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) におい黄橙 10YR7/4・灰白 5Y8/1	内) 錆絵 灰釉	蛇の目高台。外面下半無釉。灰オ リーブ色を帯びる半透明の釉で貫 入が入る。	京都系
855	SK25	陶器	小皿 又は灯 明受皿	10.2	2.1	4.0	—	外) 黄褐10YR5/6 断) 灰白10YR7/1	鉄釉	外面ロクロ目。外底回転ケズリ。 鉄釉は薄く掛かり黄褐色に発色。 内底に砂目。外底に砂が付着。	
856	SK25	陶器	鉢か 変形形	—	—	—	—	外) 浅黄5Y7/3 断) 灰黄2.5Y7/2	灰釉	体部を押圧し変形させる。浅黄色 を帯びる光沢の強い透明の釉。	尾戸窯か
857	SK25 上層	陶器	水注類	6.4	—	—	11.6	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉	内面ロクロ目。内面施釉。暗褐色 の釉。	尾戸窯
858	SK25	陶器	土瓶	—	—	—	11.0	外) 黒褐7.5YR3/1 断) におい橙 7.5YR7/3	鉄釉	内面は部分的に鉄釉が掛かる。	
859	SK25 下層	陶器	鍋	8.4	—	—	—	外) 褐7.5YR4/3 断) 褐灰10YR6/1	鉄釉	手握ねによる把手を貼付。褐色の 釉。	
860	SK25	陶器	鍋	20.5	10.7	8.8	—	外) 暗赤褐5YR3/4 断) におい橙 5YR7/4	鉄釉	三足を貼付。外面下位無釉。暗赤 褐色の釉。内底に目痕5足。	外底に煤。
861	SK25	陶器	鍋	11.6	6.0	4.0	—	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 浅黄橙10YR8/3	鉄釉	三足を貼付。外面下位無釉。暗褐 色の釉。内底に目痕。	外底に煤。
862	SK25 中層	陶器	播鉢	35.0	13.8	7.5	—	外) におい赤褐 2.5YR4/3 断) 赤褐2.5YR4/6	焼締め	口縁部外面に凹線。体部内面櫛目、 外面回転ケズリ。内底に不定方向 の3条の櫛目。外底に凹凸、粗砂 が付着。	堺産

Tab.39 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
863	SK25 中層	陶器	播鉢	26.0	10.1	12.4	—	外)にぶい赤褐 25YR4/4 断)赤褐25YR4/6	焼締め	口縁部外面に凹線。体部内面櫛目、 外面回転ケズリ。内底に不定方向 の3条の櫛目。外底に凹凸、粗砂 が付着。	堺産
864	SK25 床	陶器	甕	20.0	—	14.2	23.7	外)暗褐7.5YR3/3 断)灰白10YR8/1	鉄釉	外面中位に多段のロクロ目。外底 に凹凸。内面施釉。暗褐色の釉。 外面上位に黒色の釉を流し掛け。	関西系
865	SK25 下層	陶器	甕	16.2	—	—	—	外)暗褐2.5YR3/3 断)灰白5Y7/1 内)オリーブ黄 5Y6/3	焼締め・灰釉	内面ロクロ目。外面焼締、部分的 にオリーブ黄色の灰釉を流し掛 け。口縁端部と内面に灰釉施釉。	丹波 18世紀
866	SK25	陶器	甕 口寄形	約38	—	—	—	外)褐7.5YR4/3 断)灰白10Y8/1	鉄釉	頸部外面に強いロクロ目。頸部内 面に鉄釉を刷毛塗り。	関西系
867	SK25	陶器	火鉢 又は 水鉢か	—	—	—	—	外)灰白5Y7/2 断)灰白2.5Y8/1	灰釉	浅黄色を帯びる透明の釉で粗い貫 入が入る。	瀬戸・美濃産
868	SK25	陶器	瓶	3.2	—	—	—	外)暗褐7.5YR3/3 断)褐灰10YR5/1	鉄釉	内面に強いロクロ目。内面無釉。 暗褐色の釉。	
869	SK25	陶器	瓶	3.7	—	—	—	外)暗褐7.5YR3/3 断)灰白10Y7/1	鉄釉	内外面ロクロ目。内面無釉。	
870	SK25 下層	陶器	瓶	—	—	5.8	9.5	外)灰黄7.5Y7/1 断)灰白2.5Y7/1	外)呉須絵、獅子・草 花	内面施釉。高台施釉。呉須は明オ リーブ灰色。灰釉は明オリーブ灰 色を帯びる透明の釉で光沢が強い。	尾戸窯
871	SK25 床	陶器	植木鉢	16.8	11.4	13.5	—	外)にぶい赤褐 5YR4/3 断)にぶい赤褐 5YR4/3	焼締め	内面と外面上半ロクロ目。外面下 半回転ケズリ。外底に凹凸。底部 中央に円孔。	
872	SK25 中層	陶器	大鉢か	—	—	—	—	外)灰白5Y7/2 断)褐灰7.5YR4/1	白化粧土・灰釉	外面と内面上半に白化粧土を厚く 施釉し、灰釉を施す。	
873	SK25 下層	陶器	蓋	笠部径 9.6	0.9	—	—	外)(上面)褐 10YR4/4 断)褐灰10YR6/1	鉄釉	摘みの有無は不明。外面ナデ、下 面回転ナデ。下面無釉。褐色の釉。	
874	SK25 下層	陶器	香炉 又は火 入れか	10.4	—	—	—	外)にぶい黄 2.5Y6/4 断)淡黄2.5Y8/3	外)丸彫りによる文様	内面無釉。にぶい黄色の釉。	
875	SK25 上層	陶器	不明	—	—	7.4	—	外)灰オリーブ 5Y6/2・灰黄 2.5Y7/2 断)灰黄2.5Y7/2・ 黄灰2.5Y6/1	灰釉	内面施釉。高台外側まで施釉。灰 オリーブ色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯 二次被熱により釉 は変質。
876	SK25	陶器	香炉 又は火 入れ	10.0	—	—	—	外)淡黄2.5Y8/3 断)灰白2.5Y8/2	外)鏤絵、笹文 灰釉	内面下半無釉。浅黄色を帯びる透 明の釉で貫入が入る。	尾戸窯
877	SK25	陶器 色絵	火入 れか	約9.5	—	—	—	外)灰白5Y8/2 断)灰白2.5Y8/2	外)上絵付(赤・薄緑) による草花文 灰釉	内面無釉。透明の釉で貫入が入る。	京都
878	SK25 上層	陶器	香炉 又は火 入れ	—	—	10.0	—	外)淡黄2.5Y8/3 断)灰白2.5Y8/2	灰釉	高台にアーチ状の抉り。高台内無 釉。淡黄色を帯びる半透明の釉で 貫入が入る。	京都系
879	SK25	陶器	不明	—	—	9.0	—	外)灰白5Y8/1 断)灰白2.5Y8/2	外)白化粧後、呉須と 緑釉による植物文 灰釉	クリ底。外底中央に渦状の砲痕。 内面と外底無釉。透明の釉。	京都 18世紀後半 高台内に角枠内 「錦光山」銘印。
880	SK25 中層	陶器	不明	14.2	—	—	—	外)褐7.5YR4/3 断)にぶい橙 7.5YR7/3	鉄釉	外面上位に2条の凹線。内面施釉。 褐色の釉。	
881	SK25 下層	陶器	灯明 受皿	8.2	1.4	4.0	受部径 6.0	外)にぶい赤褐 2.5YR4/4 断)橙2.5YR6/6	錆釉	三方に半月状の溝溝。外底回転ケ ズリ。全面施釉。	
882	SK25 下層	陶器	灯明 受皿	7.7	1.2	3.0	受部径 5.2	外)にぶい赤褐 2.5YR4/3 断)にぶい赤褐 2.5YR5/4	錆釉	三方に半月状の溝溝。外底回転ケ ズリ。外面無釉。	口縁部に灯芯油 痕。
883	SK25	陶器	餌鉢	5.6	1.4	5.2	—	外)灰黄2.5Y7/2 断)灰白2.5Y8/2	灰釉	外底回転ナデ。灰黄色を帯びる半 透明の釉で細かな貫入が入る。	尾戸窯
884	SK25 上層	陶器	人形又 は水滴	—	—	—	—	外)オリーブ黄 5Y6/3 断)灰黄2.5Y7/2	灰釉	中空。型押成形。内面ユビオサエ。 オリーブ黄色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
885	SK25 下層	陶器	人形又 は水滴	—	—	—	—	外)灰白5Y7/2 断)灰白2.5Y8/2	灰釉	中空。型押成形。内面ユビオサエ。	尾戸窯
886	SK25	陶器	人形又 は水滴	—	—	—	—	外)灰白5Y7/2 断)灰白2.5Y8/2	錆釉・灰釉	中空。型押成形。内面ユビオサエ。 浅黄色を帯びる透明の釉。部分的 に鉄錆を施す。	尾戸窯

Tab.40 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
887	SK25	土師質 土器	杯	11.8	4.1	6.0	—	外) 橙7.5YR7/6 断) 橙7.5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
888	SK25 床	土師質 土器	杯	11.6	3.3	5.4	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
889	SK25 上層	土師質 土器	杯	10.6	3.6	6.0	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
890	SK25 上層	土師質 土器	杯	9.4	2.8	5.8	—	外) 橙7.5YR7/6 断) 橙7.5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
891	SK25 下層	土師質 土器	小皿	10.8	2.3	6.0	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部外面にター ル状の焦げ。外底 に煤。
892	SK25 上層	土師質 土器	小皿	11.4	2.2	5.0	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
893	SK25	土師質 土器	小皿	11.8	2.4	6.0	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。 内底に渦状のロクロ目。	
894	SK25 下層	土師質 土器	小皿	11.6	2.5	6.4	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
895	SK25 床	土師質 土器	小皿	11.6	2.1	5.4	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
896	SK25	土師質 土器	小皿	7.0	1.0	4.0	—	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
897	SK25 上層	土師質 土器	小皿	6.8	1.2	4.0	—	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油 痕。
898	SK25 中層	土師質 土器	小皿	7.0	1.1	4.6	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
899	SK25	土師質 土器	小皿	6.7	1.3	4.2	—	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油 痕。
900	SK25	土師質 土器	白土器 小皿	11.6	1.7	7.0	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による高砂文	内底型押しによる陽刻文様。内面 周縁と外面ヨコナデ。外底直線方 向のナデ。	尾戸窯
901	SK25 床	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	7.0	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による寿字文	内底型押しによる陽刻文様。内面 周縁と外面ヨコナデ。外底直線方 向のナデ。	尾戸窯
902	SK25	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による高砂文	内底型押しによる陽刻文様。内面 周縁と外面ヨコナデ。外底直線方 向のナデ。	尾戸窯
903	SK25 床	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による高砂文	内底型押しによる陽刻文様。磨耗 し調整不明。	尾戸窯 数箇所にも円孔を穿 ち、さなに転用。
904	SK25	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による松竹梅 鶴亀文	内底型押しによる陽刻文様。磨耗 し調整不明。	尾戸窯 数箇所にも円孔を穿 ち、さなに転用。
905	SK25 中層	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による松竹梅 鶴亀文	内底型押しによる陽刻文様。外底 直線方向のナデ。	尾戸窯 数箇所にも円孔を穿 ち、さなに転用。
906	SK25	土師質 土器	焙烙	31.0	7.8	—	—	外) にぶい橙 7.5YR6/6 断) にぶい橙 7.5YR6/4		内面と口縁部外面回転ナデ。外底 に凹凸。口縁端部に貫通しない楕 円形の穿孔。	関西産 内底に焦げ、外底 に煤。
907	SK25 上層・ 中層	土師質 土器	焙烙	31.0	—	—	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4		内面と口縁部外面回転ナデ。外底 に凹凸。口縁端部に貫通しない楕 円形の穿孔。	関西産 内底に焦げ、外底 に煤。
908	SK25 中層	土師質 土器	焙烙	30.8	—	—	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 7.5YR6/4		内面と口縁部外面回転ナデ。外底 に凹凸。口縁端部に貫通しない楕 円形の穿孔。	関西産 内底に焦げ、外底 に煤。



Tab.41 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
909	SK25 上層	土師質 土器	火消し 壺蓋	笠部径 25.4	—	—	—	外)にぶい褐 7.5YR5/4 断)にぶい褐 7.5YR5/4		天井部外面回転ナデ・イタナデ。 笠部外面と内面回転ナデ。	関西産
910	SK25 下層	瓦質 土器	焜炉	—	—	—	—	外)オリーフ黒 7.5Y3/1 断)オリーフ黒 7.5Y3/1		口縁部に半円形の切り込みあり。 部分的に口縁部内面に粘土貼付。 外面ミガキ、内面ナデ。	
911	SK25	土師質 土器	焜炉 丸形	17.6	—	—	—	外)にぶい褐 7.5YR5/4 断)にぶい橙 7.5YR6/4		粘土紐積み上げ成形。前方に口縁 部から半円形に切り込む窓。斜め 後方に径6mmの円孔。内面上位 に手捏ねによる突起を貼付。外面 ナデ・ミガキ。口縁部内面回転ナ デ、体部内面ナデ。	関西産 内面上位に煤。
912	SK25 床	土師質 土器	焜炉 丸形	—	—	—	—	外)にぶい褐 7.5YR5/4 断)にぶい褐 7.5YR5/4		粘土紐積み上げ成形。前方に口縁 部から半円形に切り込む窓。斜め 後方に円孔。外面ナデ・ミガキ。 体部内面ヨコナデ、接合部付近に ユビオサエ。外底に凹凸、輪高台 を貼付。	関西産
913	SK25 上層・ 中層・ 下層	土師質 土器	焜炉 筒形	16.0	15.4	13.0	—	外)にぶい橙 7.5YR6/4 断)にぶい橙 7.5YR6/4		体部前方下位に楕円形の窓。斜 め後方の二箇所に径1.7cmの円孔。 内面下位に断面三角形の段。外底 に三足を貼付。外面回転ナデ・ミ ガキ。内面接合部付近にユビオサ エ後回転ナデ・タテハケ。外底に 凹凸。	関西産 内面上位に煤。
914	SK25 下層	施釉 土器	匙	—	—	—	—	外)淡黄2.5Y8/3 断)灰白2.5Y8/1	薄緑の低火度釉	外面にヘラ彫りによる鏝。	
915	SK25	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい黄橙 10YR7/3	銅	中空。型押成形左右貼り合わせ。 底部中央に径3mmの穿孔。	
916	SK25 下層	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外)にぶい橙 7.5YR6/4 断)にぶい橙 7.5YR6/4	人物	中空。型押成形前後貼り合わせ。 内面ユビオサエ・ナデ。内面にキ ラ粉を使用。	
923	SK26	陶器	不明	—	—	—	—	外)黒褐2.5Y3/1 断)橙5YR6/6	鉄釉	把手部分か。中空。先端部付近に 円孔あり。	
925	SK28 床	磁器 染付	中碗 丸形	11.8	6.1	4.3	—	外)白 断)白	外)雨降り文・花卉 高台外)二重圏線 高台内)圏線・「大明 年製」		肥前産 17世紀後葉
926	SK28 上層	磁器 染付	猪口 端反形	10.0	6.1	4.4	—	外)白 断)白	外)コンニャク印判に よる桐文 高台外)二重圏線 高台内)略化した「大 明年製」		肥前産 17世紀末～18世紀 前半
927	SK28 下層	磁器 染付	猪口	—	—	4.4	—	外)白 断)白	外)不明 高台外)二重圏線 高台内)略化した「大 明年製」		肥前産 17世紀末～18世紀 前半
928	SK28 下層	白磁	鉢 菊花形	—	—	—	—	外)白 断)白		型打成形。口縁部輪花形。	肥前産
929	SK28 上層	磁器 染付	中皿 丸形	21.2	3.4	12.8	—	外)白 断)白	外)如意頭連続唐草文 高台外)二重圏線 内)墨弾きによる植物		肥前産
930	SK28	陶器	中碗 丸形	10.0	—	—	—	外)暗オリーフ 5Y4/3 断)にぶい褐 7.5YR5/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。暗オリーフ色の 釉で、厚く掛かる部分は白濁し流 れる。高台無釉。	肥前産 16世紀末～17世紀 前葉
931	SK28 下層	陶器	中碗	—	—	—	—	外)灰白5Y7/1 断)灰白5Y7/1	灰釉	外面ロクロ目。灰白色を帯びる半 透明の釉。御本が入る。	尾戸窯 二次被熱により釉 は変質。
932	SK28	陶器	向付	—	—	—	—	外)灰白5Y8/1 断)灰白5Y8/1	長石釉	釉は厚く掛かり粗い貫入が入る。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
933	SK28 下層	陶器	中碗	—	—	—	—	外)にぶい黄褐 10YR5/3 断)にぶい黄橙 10YR7/2	灰釉	薄手。外面下位にヘラ彫りによる 列点文。高台無釉。	尾戸窯
934	SK28 上層	陶器	皿 変形形	12.4	5.3	4.4	—	外)灰黄褐10YR4/2 断)灰黄褐10YR5/2	内) 錆絵	絵唐津。口縁部の四方を折り曲げ 方形に変形させる。口縁部内外面 に鉄錆。内底に渦状のコテ痕。	肥前産 16世紀末～17世紀 初頭

Tab.42 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
935	SK28	陶器	鉢 変形形	19.1	6.3	10.6	—	外) 灰オリーブ 5Y5/3 断) 灰5Y6/1	白化粧土刷毛目 灰釉	口縁下側を部分的にユビオサエし 変形させる。蛇の目高台。手捏ね による三足を貼付。内外面白化粧 土刷毛塗りの後灰釉施釉。高台無 釉。	
936	SK28 上層	陶器	向付	—	—	11.8	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 錆絵 長石釉	基筒底。外底施釉。底部脇に団子 状の胎土目痕。釉は厚く掛り粗い 貫入が入る。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
937	SK28	土師質 土器	杯	9.0	—	—	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。	
938	SK28	土師質 土器	杯	—	—	5.2	—	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
939	SK28	土師質 土器	小皿	11.4	3.1	5.4	—	外) 灰5Y4/1 断) にぶい黄橙 10YR6/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	外面と断面に強い 煤。
940	SK28	土師質 土器	小皿	8.6	2.1	6.0	—	外) 橙7.5YR6/6 断) 橙7.5YR6/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油 痕。
941	SK28 上層	土師質 土器	小皿	8.2	1.3	5.0	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。 内底に渦状の強いロクロ目。	
942	SK28 下層	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	6.0	—	外) 灰白10YR8/2 断) 灰白10YR8/2	無文	外面下位ケズリ後ヨコナデ。外底 直線方向のナデ。内面周縁ヨコナ デ。内底直線方向のナデ。	尾戸窯
943	SK28 上層	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	文様の有無は不明。	内面周縁と外面ヨコナデ。	尾戸窯
944	SK29 上層	陶器	中碗 腰張形	11.8	7.8	5.8	—	外) 灰白7.5GY8/1 断) 灰N7/	外) 呉須絵、山水文 白化粧土・灰釉	外面に緩やかなロクロ目。高台施 釉。釉は透明で粗い貫入が入る。	
945	SK29 上層	陶器	柄杓	7.4	5.8	4.0	—	外) 暗赤褐5YR3/4 断) 灰白10YR8/1	鉄釉	柄差し込み部分の上下に穿孔。高 台無釉。褐色の釉。	高台内に墨書。
946	SK29	土師質 土器	小皿	9.3	2.5	4.8	—	外) 橙5YR7/6 断) 橙5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。 内底に強い渦状のロクロ目。	口縁部に灯芯油 痕。
947	SK30	磁器 染付	蓋付 の鉢	—	—	—	—	外) 灰白2.5GY8/1 断) 白	外) 唐草文・二重圏線	呉須は青色で滲む。口縁部内面と 端部無釉。	肥前産 17世紀後半
948	SK30	白磁	合子蓋	笠部径 6.2	1.5	—	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	外) 片切彫りによる陽 刻文様	内面施釉	肥前産 17世紀後半
949	SK30	陶器	小皿 変形形	—	—	6.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白N8/	灰釉	高台無釉。灰釉は灰白色を帯び粗 い貫入が入る。	瀬戸・美濃産か
950	SK30	陶器	灯明 受皿	10.5	1.5	5.5	—	外) 灰赤2.5YR4/2 断) 灰赤2.5YR4/2	焼締め	薄手。口縁部内外面回転ナデ。外 面下位回転ケズリ。内面不定方向 のナデ。	備前 内外面に煤。
952	SK31 上層	土師質 土器	小皿	—	—	5.0	—	外) 橙5YR7/6 断) 橙5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
953	SK32 上層	陶器	香炉又 は置物	—	—	—	—	外) 暗赤褐5YR3/3 断) 灰N6/	獅子 鉄釉	目と背の部分に穿孔。内外面ナ デ。ハケとヘラ彫りで細部を作り 出す。外面に暗褐色の釉。	
954	SK35 上層	磁器 染付	小碗 丸形	9.8	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 桐文	口錆。	肥前産
955	SK35	磁器 染付	小皿 丸形	12.8	4.2	7.6	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白N8/	外) 如意頭連続唐草文 内) 草花文 見込み) 五弁花 高台内) 略化した渦 「福」・圏線	呉須は青灰色。コンニャク印判に よる五弁花文。	肥前産 波佐見 18世紀
956	SK35	陶器	中碗 丸形	11.9	7.8	5.6	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	高台無釉。内底に目痕。	尾戸窯
957	SK35 上層	陶器	中碗 丸形	11.0	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉	灰釉は焼成不良で白濁。	尾戸窯
958	SK35	陶器	小碗	—	—	4.2	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	高台内に渦状の鈍痕。灰釉は焼成 不良で白濁。目痕なし。	尾戸窯
959	SK35 上層	陶器	大碗	13.6	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白N7/	灰釉	外面ロクロ目。オリーブ灰色を帯 びる透明の釉。	尾戸窯
960	SK35 上層	陶器	中碗	—	—	6.6	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	高台施釉。灰白色を帯びる透明の 釉で細かな貫入が入る。畳付に灰 白色の粗砂が付着。	尾戸窯
961	SK35 上層	陶器	皿か	31.0	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y8/1	灰釉	外面中位に段。灰白色を帯びる半 透明の釉で貫入が入る。	尾戸窯か

Tab.43 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
962	SK35	陶器	壺	8.5	—	—	—	外) 暗褐7.5YR3/4 断) 淡黄2.5Y8/1	暗褐色の釉灰釉	腰白茶壺。肩部に四耳を貼付。外面と口縁部内面に暗褐色の釉。肩部に灰オリープ色の釉を流し掛け。	信楽 中津窯 江戸中期～後期
963	SK35	陶器	瓶類か	—	—	8.6	—	外) 淡黄5Y8/3 断) 灰白5Y8/1	灰釉	内面ロクロ目。内面無釉。外面下位と高台無釉。淡黄色を帯びる透明の釉。	瀬戸
964	SK35 上層	陶器	甕	—	—	—	—	外) オリープ黒 5Y3/2・暗赤褐 5YR3/4 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉	頸部外面に暗赤褐色の釉。口縁部端部から内面にオリープ黒色の釉。	
965	SK35 中層	陶器	火鉢か	—	—	15.4	—	外) 薄緑 断) 灰白2.5Y8/1 内) 灰白2.5Y8/1	外) 印刻による花文・ 唐草文、ヘラ彫りによる 圏線 緑釉	内面ロクロ目。高台にアーチ状の 抉り。内面無釉。	外底に墨書。
966	SK35 上層	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	約8.0	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による松竹梅 鶴亀文	内底型押しによる陽刻文様。内面 周縁回転ナデ。外面下位と外底回 転ケズリ。	尾戸窯
967	SK36 2層	磁器 染付	小碗 筒丸形	7.4	6.6	4.4	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	外) 丸文 高台外) 二重圏線 口縁内) 室文	胎土は透明感をもつ。	関西系
968	SK36 2層	磁器 染付	小碗 端反形	9.0	4.6	3.6	—	外) 白 断) 白	外) 菊・草花・垣	胎土は透明感をもつ。	関西系
969	SK36 2層	磁器 色絵	小皿	11.8	2.6	4.4	—	外) 白 断) 白	内) 上絵付 (薄緑・赤・ 黒)による龍	文様は黒で輪郭を描く。	肥前産
970	SK36 2層	磁器 染付	鉢	14.6	5.4	8.7	—	外) 白 断) 白	外) 草花文 内) 芭蕉葉・鶴・雲	蛇の目凹形高台。透明釉は貫入が 入る。	肥前産
971	SK36 上層	磁器 染付	灰吹き 閉口 寄口形	3.8	7.1	4.8	7.0	外) 白 断) 白	外) 植物	内面無釉。	肥前産
972	SK36 上層	磁器 染付	小瓶 辣韭形	1.4	—	—	8.6	外) 白 断) 白	外) 松	内面ロクロ目。	肥前産
973	SK36 1層	陶器	中碗	11.4	—	—	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) 浅黄橙10YR8/3	外) 錆絵	外面緩やかなロクロ目。浅黄色を 帯びる透明の釉で細かな貫入が 入る。	尾戸窯又は京都系
974	SK36 2層	陶器	碗	—	—	—	—	外) 灰白7.5Y8/1 断) 灰白5Y8/1	外) 呉須と鉄錆による 注連縄文	透明の釉で粗い貫入が入る。	京都・信楽系
975	SK36 2層	陶器	香炉 又は火 もらい	—	—	—	—	外) 褐7.5YR4/4 断) 灰白5Y7/1	鉄釉	褐色の釉。体部の前方に楕円形の 窓。内面下位無釉。	尾戸窯
976	SK36 2層	陶器	甕	24.0	—	—	—	外) 褐7.5YR4/3 断) 灰黄褐10YR6/2	鉄釉		尾戸窯又は能茶山 窯
977	SK36 上層	陶器	甕又 は壺	—	—	16.0	—	外) 暗赤灰10R3/1 断) 灰白2.5Y7/1 内) オリープ黒 5Y3/2	外) 焼締め 内) 灰釉	内面にオリープ黒色の釉。外底に 粗砂が付着。	丹波
978	SK36 上層	陶器	捏鉢	42.0	17.5	17.0	—	外) にぶい赤褐 5YR4/4 断) 明赤褐2.5YR5/6	焼締め	内面回転ナデ。外面ケズリ。内底 に別個体陶器の溶着痕。外底周縁 に輪状の焼台痕が残る。外底に粗 砂が付着。	
979	SK36 2層	施釉 土器	小皿	11.2	—	—	—	外) 黒7.5YR2/1 断) 灰白10YR8/ 内) 赤10R4/6	外) 黒色の低火度釉 内) 赤色の低火度釉	釉は薄く掛かり剥離する。	
980	SK36 1・2層	土師質 土器	焙烙	29.0	—	—	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4		内面回転ナデ。口縁部外面回転ナ デ。外底に凹凸とチヂレ目。	関西系
984	SK37	磁器 染付	小碗 丸形	9.5	5.5	5.6	—	外) 白 断) 白	外) 花唐草・唐草と扇 内) 花唐草 口縁内) 雷文帯	透明釉は貫入が入る。	肥前系
985	SK37 上層	磁器 染付	小碗 端反形	8.4	—	—	—	外) 灰白2.5GY8/1 断) 白	外) 花・蝶 口縁内) 雷文帯		肥前産又は肥前系
986	SK37	磁器 染付	小皿	9.2	2.3	5.8	—	外) 白 断) 白	内) 山水文・東屋 高台内) 銘	口縁部輪花形。口縁端部に呉須。 外面ナデ。高台内ユビオサエ・ユ ビナデ。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内「サ」銘。
987	SK37	磁器 染付	皿又 は鉢	—	—	11.0	—	外) 白 断) 白	外) 不明・二重圏線 内) 十字花・区画割り に花卉と渦文 高台外) 二重圏線		肥前産又は肥前系
988	SK37 下層	磁器 染付	鉢又 は皿	5.4	—	7.4	—	外) 白 断) 白	外) 土坡・草 内) 山水文・東屋・松	蛇の目凹形高台。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に角枠内 「茶」銘。

Tab.44 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
989	SK37 下層	磁器 染付	小皿 変形形	—	—	—	—	外) 灰白7.5Y8/1 断) 白	内) 山水文 高台内) 銘	貼付高台。透明釉は焼成不良で白濁。畳付に灰白色の粗砂が付着。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に角枠内 「茶」銘。
990	SK37・ SX14	磁器 色絵	小皿	—	—	8.2	—	外) 灰白10Y8/1 断) 白	内) 上絵付 (赤・黒・ 薄緑・茶) による鶴文	内底に輪状に砂が付着。	肥前産
991	SK37	磁器 染付	蓋物 蓋	笠部径 6.6	—	—	かえり 径 5.8	外) 灰白10Y8/1 断) 白	外) 草花文・圏線	内面施釉。かえり無釉。	肥前系 991・994同一個体。
992	SK37	磁器 染付	蓋物 蓋	笠部径 5.8	—	—	かえり 径 4.4	外) 白 断) 白	外) 草花文	内面施釉。かえり無釉。	肥前産又は肥前系
993	SK37	磁器 染付	蓋物 丸形	6.8	3.8	3.8	—	外) 白 断) 白	外) 宝文・縞 高台外) 二重圏線 高台内) 銘	口縁部内面と端部無釉。透明釉は 貫入が入る。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に「サ」銘。
994	SK37	磁器 染付	蓋物 丸形	6.6	3.9	3.0	—	外) 灰白10Y8/1 断) 白	外) 草花文・圏線	口縁部内面と端部無釉。透明釉は 貫入が入る。	肥前系 991・994同一個体。
995	SK37	白磁	水滴 箱形	全長 5.3	全厚 2.2	全幅 3.4	—	外) 白 断) 白		型作り。上面の隅に円孔、中央に 方形の孔。外底の四隅に型による 脚。外底施釉。外側面の一面が無 釉。	肥前産
996	SK37	白磁	紅皿	4.1	1.2	2.2	—	外) 白 断) 白			肥前産
997	SK37	白磁	ミニ チュア	2.0	1.4	0.8	—	外) 白 断) 白	外) 陽刻による菊弁	型押成形。	肥前産
998	SK37 上層～ 中層	陶器	中碗	—	—	4.6	—	外) 浅黄橙10YR8/3 断) 浅黄橙10YR8/3	灰釉	高台無釉。灰釉は焼成不良で白濁。 内底に目痕。	尾戸窯
999	SK37	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	外) 錆絵、連縄文 灰釉	灰釉は透明で粗い貫入が入る。	京都・信楽系
1000	SK37 下層	陶器	小杯 丸形	6.0	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	外面に荒いコテ痕が残る。光沢の 強い透明の釉。	尾戸窯
1001	SK37	陶器	小皿 端反形	12.5	5.0	4.9	—	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 灰N5/	鉄釉	外面に1条の沈線。見込み蛇の目 釉剥ぎ後白化粧土刷毛塗り。高台 無釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
1002	SK37 下層	陶器	皿	—	—	9.0	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	内) 錆絵 灰釉	高台施釉。灰白色を帯びる透明の 釉で細かい貫入が入る。内底に目 痕。	尾戸窯
1003	SK37 上層～ 中層	陶器	蓋	笠部径 6.8	器高 2.0	—	かえり 径 5.8	外) オリーブ褐 2.5Y4/3 断) 淡黄2.5Y8/3	外) 沈線 灰釉	外面に3条の沈線。天井部内面に 渦状のロクロ目。オリーブ褐色の 釉。	尾戸窯
1004	SK37	陶器	水指	15.0	14.8	13.4	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白10Y8/1	外) 呉須による鶉・草花 灰釉	内面ロクロ目。外底回転ケズリ後 回転ナデ。内面施釉。外底無釉。 灰白色を帯びる透明の釉で貫入が 入る。内底に目痕。	尾戸窯
1005	SK37・ SX14 下層	陶器	行平	10.8	—	—	—	外) 黒褐7.5YR3/2 内) 灰黄2.5Y6/2 断) にぶい黄橙 10YR7/2	把手) 陽刻文様、雷文 外) 鉄釉 内) 灰釉	型押成形貼り合わせによる把手を 貼付。	把手の下面に印刻 による銘。
1006	SK37	陶器	行平	17.0	—	—	—	外) オリーブ灰 2.5GY6/1 断) 黄灰2.5Y5/1	把手) 陽刻文様、寿 灰釉	型押成形貼り合わせによる把手を 貼付。オリーブ灰色の釉。	
1007	SK37 中層	陶器	壺	10.0	27.0	12.0	20.0	外) 褐7.5YR4/3 断) 灰白2.5Y7/1	外) 2条沈線 焼締め	茶壺。型部に2条のヘラ描き沈線。 外面ユビオサエ後回転ナデ。内面 上半ヨコナデ、下半回転ナデ。内 面部分的に粘土帯接合痕が残る。 部分的に自然釉が掛かる。外底に 輪状の焼台痕。	信楽 直勒窯 16世紀末～
1008	SK37 下層	陶器	水注 後手 半筒形	7.0	7.5	7.0	—	外) 灰白7.5Y8/1 断) 灰白5Y7/1	外) 錆絵 白化粧土・灰釉	角形の把手を貼付。内面ロクロ目。 内面施釉。外面白化粧後灰釉。	
1009	SK37	陶器	燗徳利 か	—	—	7.6	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 内) 暗褐7.5YR3/3 断) 灰白5Y7/1	外) 灰釉 内) 鉄釉	内面ロクロ目。内面施釉。外底無 釉。	外底に墨書。
1010	SK37	陶器	甕	27.4	—	—	30.0	外) 黒・黒褐 10YR3/1 断) 灰黄褐10YR6/2	外) ヘラ描き波状文 鉄釉	型部にヘラ描き波状文。内外面ロ クロ目。	能茶山窯 1820年代～幕末
1011	SK37・ SX14	陶器	植木鉢	20.0	16.0	13.2	—	外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 断) 灰黄2.5Y7/2	灰釉	内外面ロクロ目。内面と高台無釉。 灰オリーブ色の釉。	

Tab.45 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1012	SK37	陶器	植木鉢	21.8	16.7	12.8	—	外) 淡黄5Y8/3 断) 灰白5Y8/2	灰釉	底部に径2.3cmの円孔。高台の3方にアーチ状の挟り。内面ロクロ目。内面と高台無釉。淡黄色透明の釉。	瀬戸・美濃産
1013	SK37	陶器	火鉢	—	—	—	25.0	外) 緑 内) ぶい赤褐 5YR4/4 断) 灰白2.5Y8/1	外) 朝顔 緑釉・鉄錆	外面の双方に型による陽刻文様。型による獣面を貼付。外面に緑色の釉。内面に鉄錆を刷毛塗り。	瀬戸・美濃産
1014	SK37	陶器	焜炉	—	—	7.3	20.9	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉・鉄錆	前方に窓。円形の三足を貼付。淡黄色を帯びる半透明の釉。部分的に白色～青緑色の釉を流し掛り。外底に鉄錆を刷毛塗り。	瀬戸・美濃産
1015	SK37 上層～ 中層	土師質 土器	焙烙	29.8	—	—	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底に凹凸。外底に灰白色の粗砂が付着。	関西系 内底と外底に焦げ。
1016	SK37	瓦質 土器	火鉢 胴丸形	16.8	7.5	14.5	—	外) 灰N4/ 断) 灰白5Y7/1		楕円形に歪む。外底に玉状の三足を貼付。粘土紐積み上げ成形。内面に粘土帯接合痕が残る。外面回転ナデ。内面ユビオサエ・回転ナデ。内底と外底ナデ。	
1017	SK37 下層	瓦質 土器	不明	12.0	—	—	—	外) 黒N2/ 内) にぶい黄橙 10YR6/3 断) にぶい橙 7.5YR6/4	外) 陰刻による文字 「秋□□」	外面ミガキ。内面ロクロ目。	
1018	SK37	施釉 土器	焜炉 竹形か	—	—	12.0	—	外) 緑 内) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	緑色の低下度釉	外面に凹線を巡らせ竹節を模倣。三足は欠損する。内外面回転ナデ。外底回転ケズリ。内面と外底無釉。	京都又は京都系
1019	SK37	土師質 土器	白土器 小皿	11.2	1.9	6.4	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による松竹梅 鶴亀文	内底に型による陽刻文様。内面周縁回転ナデ。外面回転ナデ。外底回転ナデ。	尾戸窯
1020	SK37 上層～ 中層	土師質 土器	白土器 小皿	11.4	2.1	7.2	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による松竹梅 鶴亀文	内底に型による陽刻文様。内面周縁回転ナデ。外面上半回転ナデ、下半回転ケズリ。外底回転ケズリ。	尾戸窯
1021	SK37・ SX14	土師質 土器	白土器 小皿	11.4	2.3	7.6	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	内) 陽刻による高砂文	内底に型による陽刻文様。内面周縁回転ナデ。外面回転ケズリ。外底回転ケズリ。	尾戸窯
1022	SK37	土師質 土器	小皿	9.8	1.6	7.0	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1023	SK37	土師質 土器	小皿	7.8	1.3	5.2	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1027	SK38	陶器	中碗 丸形	11.2	6.0	5.0	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	外) 上絵付(赤・黒・ 薄緑)による花木 灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。	京焼 高台内に「清」銘印。
1028	SK38	陶器	中碗 無稜 杉形	11.6	6.6	5.0	—	外) にぶい黄褐 10YR4/3 断) 灰白10YR8/1	鉄釉	口縁部の一部を内側へユビオサエし変形させる。外面斜め上方へへラ彫り。外面ロクロ目。高台施釉。にぶい黄褐色の釉。	
1029	SK38	陶器	中碗 呉器形	—	—	6.0	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	灰釉	呉器手碗。外面中に多段の凹線。高台内兜巾状。高台施釉。灰白色を帯びる半透明の釉が薄く掛かり御本が入る。	17世紀
1030	SK38	磁器 染付	段重 の蓋	—	1.9	—	—	外) 白 断) 白	外) 花木・花唐草文	隅に芯棒を差す突起をもつ。内面施釉。端部無釉。	中国 景德鎮窯 17世紀前半
1031	SK38	陶器	甕	18.0	—	—	—	外) 灰赤 2.5YR4/2 断) 灰白5Y7/1	焼締め	輪状の双耳を貼付しユビオサエ。外面に多段の強いロクロ目。口縁部に自然釉がかかる。	丹波 17世紀後半以降
1032	SK38	瓦質 土器	火鉢	37.8	—	—	—	外) 灰5Y4/1 断) 灰白N7/		外面タタキ。口縁部内面回転ナデ。体部内面横方向のイタナデ。	
1049	SK41 床	磁器 染付	中碗 丸形	9.4	5.3	4.2	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 松・鶴 高台外) 二重圏線 高台内) 略化した「大明年製」・圏線	外面にコンニャク印判による松・鶴。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1050	SK41 下層	磁器 染付	小皿	11.5	3.3	3.5	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	内) 略化した折松葉文	見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部に粗砂が付着。呉須は暗緑灰色。	肥前産 波佐見 17世紀末～18世紀 前半
1051	SK41	青磁	猪口 腰張形	9.4	5.9	4.4	—	外) 明オリープ灰 5GY7/1 断) 灰白N8/	青磁釉	明オリープ灰色の釉。畳付に灰白色の粗砂が付着。	肥前産

Tab.46 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1052	SK41	白磁	紅皿 浅丸形	4.5	1.5	2.2	—	外)白 断)白	白磁釉		肥前産
1053	SK41	青磁	大皿	28.0	—	—	—	外)オリーブ灰 10Y6/2 断)灰白N8/	内)陽刻による花卉・ 紅葉	オリーブ灰色の釉。	肥前産
1054	SK41 下層	陶器	中碗	—	—	—	—	外)灰黄2.5Y6/2 断)灰黄2.5Y7/2	灰釉	灰黄色を帯びる半透明の釉で貫入 が入る。	尾戸窯か
1055	SK41 下層	陶器	鉢 菊花形	14.2	6.5	8.0	—	外)灰白5Y7/1 断)灰白5Y7/1	外)呉須と鉄錆による 松文	型押成形。外面に布目。クリ底。 高台内に円圈状の段。外底無釉灰 黄色を帯びる半透明の釉で貫入が 入る。	京焼 揃いで4個体が出 土。
1056	SK41 床	陶器	中皿 端反形	16.8	5.3	7.0	—	外)にぶい黄 2.5Y6/3 断)浅黄橙10YR8/3	外)灰釉 内)白化粧刷毛目・灰 釉	見込み蛇の目剥ぎ。高台無釉。 灰釉は黄褐色を帯びる透明の釉。	
1057	SK41	陶器	灯明 受皿	10.0	2.4	—	—	外)にぶい褐 7.5Y6/3 内)灰褐5YR4/2 断)褐灰5YR6/1	内)錆釉	外面無釉。	
1058	SK41 下層	陶器	灯明 受皿	8.8	2.0	4.5	—	外)赤灰 2.5YR4/2 断)灰白2.5Y7/1	錆釉	全面施釉。外面と外底回転ケズリ。	
1059	SK41	陶器	鳥の 水入れ	全長 13.0	器高 2.9	全幅 6.5	—	外)褐7.5YR4/3 断)灰白N8/	外)ヘラ彫りによる格 子文、鉄錆刷毛塗り 内)透明釉	たたら成形。内面施釉。口縁部内 面無釉。外底チアレ目・ナデ。	
1060	SK41 下層	陶器	甕	—	—	31.4	—	外)褐灰7.5YR 断)灰褐5YR5/2	焼締め	内外面回転ナデ。外底に凹凸とチ アレ目。	備前
1065	SK43 上層	磁器 染付	小皿 盤形	9.0	2.6	6.2	—	外)白 断)白	外)花文 内)山水文 高台外)二重圈線 高台内)二重角枠内渦 「福」	透明釉は貫入が入る。	肥前産 17世紀末～18世紀
1066	SK43	磁器 染付	皿	—	—	5.7	—	外)灰白5GY8/1 断)灰白N8/	内)山水文	透明釉は貫入が入る。畳付に灰白 色の粗砂が付着。	肥前産
1067	SK43	磁器 染付	猪口 端反形	10.4	6.5	5.0	—	外)白 断)白	外)型紙刷りと手描き による桐文・鳥 高台外)二重圈線 高台内)圈線	透明釉は貫入が入る。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1068	SK43	磁器 染付	猪口 端反形	9.6	5.8	4.2	—	外)白 断)白	外)型紙刷りと手描き による草花文・二重 圈線 高台内)圈線・略化し た「大明年製」		肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1069	SK43 上層	磁器 色絵	猪口 桶形	7.4	—	—	—	外)白 断)白	外)上絵付(赤・薄緑・ 黒)による水仙	文様の輪郭は黒で描く。	肥前産
1070	SK43 上層	磁器 染付	瓶	—	—	5.0	7.9	外)灰白7.5Y7/1 断)灰白8/	外)草花文・圈線・二 重圈線 高台外)二重圈線	内面無釉。呉須は灰オリーブ色。	肥前産
1071	SK43 下層	磁器色 絵染付	蓋物 変形形	—	3.3	—	—	外)白 断)白	外)呉須による蓮弁 文、上絵付(剥離)に よる草文	型押成形。内面ナデ。外底無釉。	肥前産
1072	SK43	磁器 染付	人形又 は水滴	—	—	—	—	外)灰白N8/ 断)白	人物	型押成形前後貼り合わせ。背の部 分に円孔あり。衣服を呉須で彩色。	肥前産
1073	SK43 下層	磁器 色絵	人形又 は水滴	—	—	—	—	外)白 断)白	外)上絵付(赤・薄緑・ 黒)人物	中空。型押成形貼り合わせ。内面 ユビオサエ・ユビナデ。	肥前産
1074	SK43 上層	陶器	中碗 丸形	11.0	7.7	4.4	—	外)灰白7.5Y7/1 断)灰白N8/	外)錆絵、笹文 灰釉	内外面に緩やかなロクロ目。高台 無釉。灰白色を帯びる半透明の釉 で細かい貫入が入る。	尾戸窯
1075	SK43	陶器	中碗 端反形	12.0	—	—	—	外)灰7.5Y6/1 断)灰白7.5Y7/1	外)錆絵 灰釉	外面に緩やかなロクロ目。灰白色 を帯びる透明の釉で細かい貫入が 入る。	尾戸窯
1076	SK43	陶器	中碗	—	—	4.3	—	外)灰白5Y7/1 断)灰白5Y7/1	灰釉	高台内兜巾状。外面下位に鉋痕が 残る。高台無釉。灰白色を帯びる 半透明の釉で細かい貫入が入る。	尾戸窯
1077	SK43	陶器	中碗	—	—	5.8	—	外)にぶい橙 7.5YR7/3 断)浅黄橙7.5YR8/4	灰釉	高台内兜巾状。高台施釉。灰白色 を帯びる半透明の釉。	
1078	SK43 下層	陶器	中碗 丸形	11.2	6.3	6.2	—	外)淡黄2.5Y8/3 断)灰白2.5Y8/1	外)呉須による楼閣山 水文 灰釉	京焼風陶器。高台内に円圈状の段。	肥前産 17世紀後半 高台内に「清水」 銘印。
1079	SK43	陶器	中碗	—	—	5.1	—	外)淡黄2.5Y8/3 断)灰白2.5Y8/1	外)文様不明 灰釉	京焼風陶器。高台内にヘラ彫りの 渦。高台無釉。淡黄色を帯びる透 明の釉で貫入が入る。	肥前産 17世紀後半 高台内銘印。

Tab.47 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1080	SK43	陶器	小皿	—	—	5.1	—	外) 黒褐10YR3/1 断) 灰白10Y7/1	内) 白抜き文様 鉄釉	口縁部菊弁状。型打成形。内面に 布目。高台施釉。黒褐色の釉。内 底中央を白抜きし透明釉施釉。	
1081	SK43 下層	陶器	小皿 長方形	—	—	8.5× 5.6	—	外) 灰白7.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉	貼付高台。高台施釉。灰白色の釉。	
1082	SK43	陶器	碗蓋	—	—	—	幅み径 5.6	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	外) 錆絵 灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で貫入 が入る。	尾戸窯か
1083	SK43 上層	陶器	鍋	20.2	9.8	9.3	—	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 黄灰2.5Y6/1	鉄釉	三足を貼付。外底無釉。暗褐色の 釉。内底に目痕。	尾戸窯か
1084	SK43	陶器	甕	31.0	—	—	—	外) 灰赤2.5YR4/2 断) ぶい黄橙 10YR7/3	外) 多段の凹線。焼締 め	内外面回転ナデ。双耳の有無は不 明。外面に自然釉が掛る。	丹波
1085	SK43 上層	陶器	小壺 肩衝形	—	—	—	4.1	外) 黒2.5Y2/1 断) 灰白2.5Y8/2	鉄釉	内面無釉。釉は黒色で斑状に褐色 に発色。	瀬戸か
1086	SK43	陶器	灯明 受皿	10.6	2.3	5.0	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	灰釉	外面上半回転ナデ、下半回転ケズ リ。外底回転ケズリ。外面下半無 釉。灰オリーブ色を帯びる透明の 釉で細かい貫入が入る。	尾戸窯か
1087	SK43 中層	陶器	灯明 受皿	12.0	2.1	—	受部径 8.9	外) 灰黄褐10YR4/2 断) 灰褐5YR4/2	焼締め	外面上半回転ナデ、下半回転ケズ リ。外底回転糸切り。油溝アーチ 状、3箇所。外底に火襷。	備前 18世紀～19世紀 受部に灯芯油痕。
1088	SK43 上層	陶器	大甕	69.2	—	—	—	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 灰白2.5Y8/1	鉄釉	内外面に強いロクロ目。頸部内面 施釉。鉄釉を刷毛塗り。暗褐色の 釉。	関西系
1089	SK43	陶器	不明	12.0	9.8	9.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	内外面に強いロクロ目。外底回転 ケズリ。内面と外底無釉。淡黄色 を帯びる半透明の釉。	瀬戸
1090	SK43 上層	土師質 土器	杯	12.2	4.0	6.6	—	外) 浅黄橙10YR8/3 断) 浅黄橙10YR8/3		内外面回転ナデ。内底に渦状のロ クロ目。外底回転糸切り。	
1091	SK43	土師質 土器	小皿	11.4	2.0	7.0	—	外) 灰白5Y8/1 断) 褐灰10YR4/2	白化粧	外面ナデ。内面周縁ヨコナデ、中 央不定方向のナデ。褐灰色の胎土 に全面へ白土を塗る。	尾戸窯か 口縁部に灯芯油 痕。
1092	SK43 中層	土師質 土器	小皿 変形形	9.0	1.4	5.0	—	外) ぶい黄橙 10YR7/3 断) ぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油 痕。
1093	SK43 上層	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外) ぶい橙 7.5YR7/4 断) 浅黄橙7.5YR8/4	人物か	中実。型押成形前後貼り合わせ。 底部から径1.1cmの円錐形の穿孔 を穿つ。	関西産
1101	SK45	陶器	皿又は鉢	—	—	6.6	—	外) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰黄2.5Y7/2	内) 呉須絵、水仙 灰釉	外底中央に円筒状の段。高台無釉。 呉須は暗緑灰色。	京都 高台内に「清」銘 印。
1102	SK45	陶器	皿又は鉢	—	—	—	—	外) 黄灰2.5Y5/1 断) 黄灰2.5Y6/1	内) 鉄錆による暦手 灰釉	外面回転ナデ後、下位にヘラによ る面取り。	尾戸窯
1103	SK45	陶器	中碗	—	—	6.0	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰5Y4/1	白化粧土・灰釉	外側面の一部にヘラによる面取 あり。内外面白化粧の後透明の釉。	二次被熱により釉 は変質。
1104	SK45	土師質 土器	小皿	8.5	2.0	5.3	—	外) ぶい橙 7.5YR6/4 断) ぶい橙 7.5YR6/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1105	SK44	土師質 土器	杯又は皿	—	—	6.0	—	外) ぶい黄橙 10YR7/3 断) ぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1106	SK48 下層	陶器	小壺	2.2	—	3.6	—	外) 暗赤褐2.5YR3/2 断) 灰5Y5/1	鉄釉	内外面回転ナデ。内面無釉。	尾戸窯
1107	SK48・ SK49	陶器	鉢 変形形	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	灰釉	薄手。内外面に緩やかなロクロ目。 灰白色を帯びる透明の釉で貫入 が入る。	尾戸窯
1108	SK49 上層	磁器 染付	香炉か	約12.4	6.9	—	—	外) 白 断) 白	外) 花文・折松葉	六角形。内面ナデ。内面無釉。外 面にコンニャク印判による花文と 手描きによる折松葉文。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1109	SK49 下層	土師質 土器	焜炉	—	—	20.0	—	外) 橙7.5YR6/6 断) 橙7.5YR6/6		筒形。内面下位に貼付による段を 設ける。外底に三足を貼付。外面 ナデ・ミガキ。内面櫛目・イタナデ。	
1110	SK49 上層	陶器	小皿	—	—	6.7	—	外) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	内面蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部分に 白土を塗る。高台内無釉。灰白色 を帯びる透明の釉。	
1111	SK49 下層	陶器	甕	—	—	—	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 内) ぶい褐 7.5YR5/3 断) 黄灰2.5Y6/1	焼締め	口縁端部に3条の凹線。体部外面 上位に多段の凹線。	丹波

Tab.48 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1112	SK49 上層	陶器	大鉢	36.6	—	13.6	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白N8/	灰釉	高台施釉。明オリープ灰色を帯びる透明の釉で粗い貫入が入る。畳付に砂が付着。	
1113	SK50	磁器 染付	中碗 丸形	14.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 不明・二重圏線		肥前産 17世紀後半
1114	SK50 中層	磁器 染付	中碗 丸形	10.8	6.4	5.4	—	外) 白 断) 白	外) 丸に山水・草花 高台内) 略化した「大明年製」	透明釉は貫入が入る。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1115	SK50 中層	磁器 色絵	小碗 丸形	8.2	3.9	3.0	—	外) 白 断) 白	外) 上絵付 (赤・剥離) による文様		肥前産
1116	SK50 下層	青磁 染付	小碗 半筒形	7.0	6.5	3.9	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 青磁釉 口縁内) 四方襷 見込み) 五弁花・二重 圏線	コンニャク印判による五弁花。	肥前産 18世紀後半～19世 紀初頭
1117	SK50	磁器 染付	小杯 丸形	5.0	2.7	2.1	—	外) 白 断) 白	外) 海老		肥前産
1118	SK50 下層	磁器 染付	小杯 丸形	5.8	2.9	2.0	—	外) 白 断) 白	外) 松竹梅		肥前産
1119	SK50	磁器 色絵	小杯 端反形	5.4	3.5	2.2	—	外) 白 断) 白	外) 上絵付 (赤・剥離) による草花文		肥前産
1120	SK50	磁器 染付	小皿 丸形	9.7	2.2	5.4	—	外) 白 断) 白	外) 梅 内) 草花 高台内) 二重角枠内渦 「福」・二重圏線		肥前産 17世紀末～18世紀
1121	SK50	磁器 染付	中皿 端反形	20.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 不明 内) 唐草・植物		肥前産
1122	SK50 下層	磁器 染付	鉢	—	—	8.6	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	外) 不明 内) 植物・二重圏線 高台内) 二重圏線		肥前産
1123	SK50	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.8	器高 3.0	—	摘み径 4.4	外) 白 断) 白	外) 梅文 内) 四方襷・五弁花・ 二重圏線 摘み内) 二重角枠内渦 「福」	透明釉は貫入が入る。見込み手描きによる五弁花文。	肥前産 17世紀末～18世紀
1124	SK50	青磁	碗蓋	笠部径 10.0	器高 3.4	—	摘み径 3.8	外) 明緑灰10GY7/1 断) 白	青磁釉	明緑灰色の釉。	肥前産 18世紀後半
1125	SK50	磁器 染付	猪口 端反形	8.7	6.0	4.1	—	外) 白 断) 白	外) 梅文 口縁内) 四方襷 見込み) 二重圏線		肥前産
1126	SK50	青磁 染付	猪口	9.6	7.2	5.6	—	外) 明オリープ灰 2.5GY7/1 断) 白	外) 青磁釉 口縁内) 四方襷 見込み) 五弁花・二重 圏線 高台内) 銘	口縁部輪花形。明オリープ灰色の釉。見込み手描きによる五弁花文。	肥前産 18世紀
1127	SK50	青磁	猪口 端反形	7.8	6.4	3.8	—	外) 明緑灰10G7/1 断) 白	青磁釉	口縁部輪花形。明緑灰色の釉。	肥前産
1128	SK50 上層	青磁	香炉	9.0	6.8	6.0	—	外) 明緑灰7.5GY7/1 断) 白	青磁釉	蛇の目凹形高台の釉剥ぎ部分に鉄錆を施す。内面無釉。明緑灰色の釉。	肥前産
1129	SK50	磁器 染付	蓋物 腰張形	9.2	5.1	5.6	—	外) 灰白10Y8/1 断) 白	外) 草花 高台外) 二重圏線	口縁部無釉。	肥前産
1130	SK50 上層	磁器 色絵	蓋物	5.2	2.6	2.9	—	外) 白 断) 白	外) 上絵付 (赤・緑) による文様	口縁部無釉。	肥前産
1131	SK50 上層	白磁	紅皿 浅丸形	4.8	1.5	2.4	—	外) 白 断) 白			肥前産
1132	SK50	磁器 染付	不明	—	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 不明	箱形。内面ナデ。	肥前産
1133	SK50 中層	陶器	中碗 丸形	11.4	7.0	5.4	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉	高台内に渦状の匏痕。高台無釉。浅黄色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。内底に目痕3足。	尾戸窯
1134	SK50 下層	陶器	中碗 丸形	11.6	7.5	5.3	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	外) 錆絵、宝文 灰釉	高台内に渦状の匏痕。高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉で細かい貫入が入る。内底に目痕。	尾戸窯
1135	SK50	陶器	中碗	—	—	5.7	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y8/1	灰釉	高台内に乱れた渦状の匏痕。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。内底に目痕。	尾戸窯
1136	SK50	陶器	小碗 腰張形	9.2	6.4	4.4	—	外) 淡黄2.5Y8/4 断) 淡黄2.5Y8/3	外) 錆絵 灰釉	高台内平坦。高台無釉。淡黄色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。目痕なし。	尾戸窯



Tab.49 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1137	SK50	陶器	中碗	10.7	—	—	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白5Y8/1	外) 鉄錆と呉須による 文様 灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で細か い貫入が入る。	京都系又は尾戸窯
1138	SK50 下層	陶器	中碗 甕形	10.6	7.3	4.4	—	外) にぶい黄 2.5Y6/4 断) 灰黄2.5Y7/2	外) 錆絵、笹文か 灰釉	高台無釉。にぶい黄色を帯びる透 明の釉で粗い貫入が入る。	京都系
1139	SK50 下層	陶器	中碗 胴縮形	11.1	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	外) 錆絵、草花文 灰釉	外面中位に強いロクロ目。体部中 位を窪ませる。	京都系
1140	SK50	陶器	中碗	12.4	7.2	6.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	外) 鉄錆と白土による 花木と垣	高台脇に波状の鈿痕を装飾的に巡 らす。花卉を白土で描き分ける。 灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉 で粗い貫入が入る。内底に目痕。	京都 18世紀前半
1141	SK50	陶器	小碗 半球形	9.2	5.8	3.2	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	外) 錆絵、略化した草 花文 灰釉	高台無釉。オリーブ黄色を帯びる 透明の釉で細かい貫入が入る。	京都・信楽系 18世紀中葉
1142	SK50	陶器	小碗 半球形	9.0	5.6	3.1	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	外) 錆絵、略化した草 花文 灰釉	高台無釉。オリーブ黄色を帯びる 透明の釉で細かい貫入が入る。	京都・信楽系 18世紀中葉
1143	SK50	陶器	小碗 半球形	—	—	3.4	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白N8/	灰釉	文様の有無は不明。高台無釉。灰 白色を帯びる半透明の釉で粗い貫 入が入る。	京都系
1144	SK50 中層	陶器 色絵	小碗 半球形	9.2	5.7	3.4	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	外) 上絵付 (赤・緑) による花文 灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で細か い貫入が入る。	京都・信楽系 18世紀中葉
1145	SK50 上層	陶器	小碗 半球形	8.9	5.5	3.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	外) 上絵付 (赤・薄緑) による花文 灰釉	高台無釉。浅黄色を帯びる透明の 釉で粗い貫入が入る。	京都・信楽系 18世紀中葉
1146	SK50	陶器 色絵	中碗	8.9	—	—	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	外) 上絵付 (薄緑) に よる笹文 灰釉	外面に強いロクロ目。灰白色を帯 びる半透明の釉で細かい貫入が入 る。	京都系
1147	SK50	陶器	中碗	—	—	5.4	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉	京焼風陶器。文様は不明。高台内 に円圈状の段。高台無釉。浅黄色 を帯びる半透明の釉で貫入が入 る。	肥前産 高台内に「清水」 銘印。
1148	SK50	陶器	中碗	—	—	4.9	—	外) にぶい黄 2.5Y6/4 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	外面に緩やかなロクロ目。高台施 釉。にぶい黄色を帯びる半透明の 釉で貫入が入る。	肥前産
1149	SK50	陶器	中碗	—	—	4.4	—	外) 黒褐10YR3/2 断) にぶい褐 7.5YR6/3	白化粧土打刷毛目	高台施釉。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1150	SK50	陶器	小碗 半球形	6.5	4.1	2.5	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白5Y8/1	外) 鉄錆と呉須による 草花文 灰釉	花は呉須、枝は鉄錆で描き分ける。 高台無釉。	京都系 18世紀
1151	SK50 中層	陶器 色絵	火入れ	8.2	7.2	6.0	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) にぶい橙 7.5YR7/3	外) 上絵付 (赤・薄緑) と鉄錆による松 灰釉	ロクロ成形の後、口縁部を輪花形 に変形させる。白化粧後灰釉施釉。 内面無釉。	京都
1152	SK50	陶器	片口	18.7	9.5	8.4	—	外) にぶい赤褐 5YR4/3 断) にぶい赤褐 5YR5/4	外) 上半に白濁した 釉、下位に鉄釉 内) 白濁した釉	手捏ねによる片口を貼付。高台無 釉。釉は焼成不良気味で白濁。	
1153	SK50	陶器 色絵	蓋物か	13.0	—	—	15.4	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	外) 上絵付 (赤・薄緑)・ 鉄錆・呉須・白土によ る松竹梅 灰釉	内面施釉。かえり無釉。灰黄色を 帯びる透明の釉で貫入が入る。	京都
1154	SK50	陶器	土瓶 丸形	8.6	—	—	16.8	外) 浅黄5Y7/3 断) 褐灰10YR6/1	外) 錆絵、草文 白化粧土・灰釉	外面白化粧の後、灰釉施釉。	
1155	SK50	陶器	土瓶	11.0	—	—	20.4	外) 暗褐10YR3/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3	鉄釉	体部上位に櫛目、数箇所を押圧し 窪ませる。肩部に灰釉を流し掛け。 内面施釉。	
1156	SK50	陶器	土瓶	—	—	—	—	外) 黒7.5YR2/1 断) 褐灰10YR6/1	鉄釉	内面無釉。黒色の釉。	
1157	SK50 中層	陶器	水注後 手嚢形	4.1	—	—	8.8	外) 黒N2/ 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉	注口部と把手は欠損する。内外面 ロクロ目。内面無釉。黒色の釉。	
1158	SK50	陶器	灯明 受皿	10.4	2.0	5.2	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰黄2.5Y7/2	内) 櫛目、菊花文 灰釉	型作りによる菊花を貼付。外面無 釉。灰オリーブ色を帯びる透明の 釉で細かい貫入が入る。内底に目 痕3足。	京都系
1159	SK50 中層	陶器	不明	—	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	型押成形。内面ユビオサエ。外底 ナデ。灰黄色を帯びる半透明の釉 で細かい貫入が入る。	尾戸窯か
1160	SK50 中層	土師質 土器	杯	10.3	4.0	4.9	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	外面に煤。

Tab.50 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1161	SK50	土師質 土器	杯	10.6	3.5	5.3	—	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1162	SK50	土師質 土器	杯	10.6	2.9	5.2	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1163	SK50	土師質 土器	小皿	9.8	1.9	6.0	—	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1164	SK50	土師質 土器	小皿	10.5	2.4	5.3	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1165	SK50	土師質 土器	小皿	10.4	1.6	6.5	—	外)にぶい黄橙 10YR7/2 断)にぶい黄橙 10YR7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。 内底に渦状のロクロ目。	
1166	SK50	土師質 土器	小皿	7.5	1.2	4.3	—	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油 痕。
1167	SK50	土師質 土器	小皿	6.9	1.5	3.7	—	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油 痕。
1168	SK50 上層	土師質 土器	白土器 小皿	11.1	1.7	8.0	—	外)灰白2.5Y8/1 断)灰白2.5Y8/1	不明	文様の有無は不明。外面回転方 向のナデ。内面ヨコナデ。外底不定 方向のナデ。	尾戸窯
1169	SK50 中層	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	7.8	—	外)灰白2.5Y8/1 断)灰白2.5Y8/1	無文	外面ヨコナデ。内面周縁回転方 向のナデ、内底不定方向のナデ。外 底直線方向のナデ。	尾戸窯
1170	SK50 下層	土師質 土器	五寸皿	13.7	1.4	7.0	—	外)にぶい橙 7.5YR6/4 断)にぶい橙 7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転ケズリ。	
1171	SK50	土師質 土器	焙烙	—	—	—	—	外)灰褐7.5YR4/2 内)にぶい橙 7.5YR6/4 断)にぶい橙 7.5YR6/4		口縁部外面回転ナデ。外面ユビオ サエ・ナデ。内面回転ナデ。	讃岐 岡本系
1172	SK50	土師質 土器	焜炉 筒形	14.0	—	—	15.4	外)灰黄2.5Y6/2 断)灰黄2.5Y6/2		内部施設を持たない。体部前方に 窓。後方中に径2cmの円孔。口 縁の1箇所にアーチ状の抉り。外 面ナデ、内面回転ナデ。	
1173	SK50 上層	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外)浅黄橙10YR8/3 断)にぶい黄橙 10YR7/3	人物	中実。型押成形貼り合わせ。底部 に径1.5cmの円錐形の穿孔を穿つ。	関西産
1174	SK50	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい黄橙 10YR7/3	かみしも人形	中実。型押成形貼り合わせ。底部 に径1.6cmの円錐形の穿孔を穿つ。	関西産
1175	SK50	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外)にぶい黄橙 10YR7/2 断)にぶい黄橙 10YR7/2	鳥	中空。型押成形貼り合わせ。内面 ユビオサエ・ナデ。	
1176	SK50	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外)にぶい橙 7.5YR6/4 断)にぶい橙 7.5YR6/4	人物か	中空。型押成形貼り合わせ。内面 ユビオサエ・ナデ。内外面にキラ 粉。	
1177	SK51 上層	磁器 染付	中碗 丸形	10.0	5.4	4.4	—	外)白 断)白	外) 桐文 高台外)二重圏線 高台内)「大明年製」・ 二重圏線	外面コンニャク印判による桐文。 透明釉は貫入が入る。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1178	SK51 上層	磁器 染付	中碗 丸形	10.0	5.5	4.0	—	外)白 断)白	外) 桐文・丸文 高台外)二重圏線 高台内)圏線・銘	外面コンニャク印判による桐文と 手描きによる丸文。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1179	SK51 上層	磁器 染付	中碗 丸形	9.2	5.0	3.7	—	外)灰白2.5GY8/1 断)白	外) 菊花・草文	外面コンニャク印判による菊花・ 手描きによる草文。透明釉は貫入 が入る。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1180	SK51	磁器 染付	中碗 丸形	10.2	6.5	4.3	—	外)白 断)白	外) 雨降り文 高台外)二重圏線 高台内)圏線・銘の有 無は不明	外面型紙刷りによる雨粒と雲、手 描きによる雨。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半

Tab.51 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1181	SK51 上層	磁器 染付	小杯 端反形	6.4	4.7	2.9	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白N8/	外) 花文 高台外) 二重圏線	コンニャク印判による花文。外面 にロクロ目。呉須はオリーブ灰色。 畳付に灰白色の粗砂が付着。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1182	SK51	白磁	小皿	9.0	1.9	4.6	—	外) 白 断) 白	内) 陽刻による菊弁と 花文	陽刻型打成形。	肥前産 二次被熱により釉 は変質。
1183	SK51 下層	磁器 染付	小皿 丸形	13.3	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 如意頭連続唐草文 内) 花草草文	口鏝	肥前産
1184	SK51 下層	青花	皿	—	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	内) 不明	白化粧土後透明釉を施釉。畳付に 灰白色の粗砂が付着。	中国 漳州窯系 16世紀末～17世紀 初頭
1185	SK51	青花	皿	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 芙蓉手 内) 芙蓉手		中国 景德鎮窯系 17世紀前半
1186	SK51 上層	磁器 染付	猪口	7.0	5.1	3.6	—	外) 灰白N8/ 断) 白	外) 雨降り文・圏線・ 二重圏線	呉須は青灰色。畳付に灰白色の粗 砂が付着。	肥前産
1187	SK51	磁器 色絵	蓋物蓋	笠部径 7.0	—	—	かえり 径 6.1	外) 白 断) 白	外) 上絵付 (赤) による 圏線	かえり無釉。	肥前産 1187・1188同一個 体。
1188	SK51 下層	磁器 色絵	蓋物	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 上絵付 (赤) による 圏線	内面施釉	肥前産 1187・1188同一個 体。
1189	SK51 上層	白磁又 は染付	人形又 は水滴	—	—	—	—	外) 白 断) 白	不明	型押成形貼り合わせ。内面ユビオ サエ・ユビナデ。	肥前産
1190	SK51 下層	青磁	人形又 は水滴	—	—	—	—	外) 明緑灰10GY7/1 断) 白	動物		肥前産 二次被熱により釉 は変質。
1191	SK51	白磁又 は染付	水滴か	—	—	—	—	外) 白 断) 白	不明	型押成形貼り合わせ。中空。径2 mmの穿孔あり。内面ユビナデ。	肥前産
1192	SK51 下層	陶器	中碗 丸形	12.8	7.9	5.6	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰5Y6/1	灰釉	内外面ロクロ目。高台内に渦状の 鉋痕。高台無釉。釉は焼成不良で 白濁。内底に目痕。	尾戸窯
1193	SK51 上層	陶器	中碗 丸形	13.0	—	—	—	外) 灰5Y6/1 断) 灰5Y6/1	灰釉	内外面ロクロ目。灰オリーブ色を 帯びる半透明の釉で細かい貫入が 入る。御本が入る。	尾戸窯
1194	SK51 下層	陶器	中碗	11.4	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	外) 鉄錆による幾何文・ 呉須による二重圏線 灰釉	灰釉は焼成不良気味で白濁。	尾戸窯
1195	SK51	陶器	中碗	—	—	5.7	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	外) 錆絵 灰釉	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。 灰オリーブ色を帯びる半透明の釉 で細かい貫入が入る。内底に目痕。	尾戸窯
1196	SK51	陶器	中碗	—	—	3.6	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1. 淡黄2.5Y8/3	外) 呉須による圏線 灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明 の釉で貫入が入る。御本が入る。	尾戸窯
1197	SK51 下層	陶器	中碗 丸形	10.1	6.5	4.9	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 灰白2.5Y8/2	外) 錆絵、楼閣山水文	京焼風陶器。高台無釉。浅黄色を 帯びる半透明の釉で貫入が入る。	肥前産 17世紀後半～18世紀 前半
1198	SK51 上層	陶器	中碗 丸形	10.8	7.8	5.5	—	外) 褐灰7.5YR4/1 断) 褐灰5YR4/1	白化粧土刷毛目	高台施釉。内外面に白化粧土刷毛 目、部分的に口縁部から白土を流 し掛け。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1199	SK51 下層	陶器	向付	—	5.8	—	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	外) 錆絵、草文 長石釉	クリ底。外底無釉。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
1200	SK51 下層	陶器	甕	30.8	—	—	—	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 黄灰2.5Y6/1	焼締め		丹波
1201	SK51	陶器	小皿	12.8	4.0	4.4	—	外) 灰黄2.5Y6/2 断) にぶい黄橙 10YR7/2	灰釉	口縁部折縁状。見込み蛇の目釉剥 ぎ。高台無釉。灰黄色を帯びる透 明の釉。	肥前 内野山 17世紀末～18世紀 前半
1202	SK51 上層	陶器	灯明 受皿	9.0	1.7	4.2	—	外) 灰褐5YR4/2 断) 灰褐5YR5/2	鉄釉	外面下位回転削り。外底回転糸切 り。外面無釉。	口縁部全体にター ル状の油痕。
1203	SK51 中層	土師質 土器	小皿	7.5	1.7	4.4	—	外) にぶい黄橙 10YR7/4 断) にぶい黄橙 10YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1204	SK51 下層	土師質 土器	焙烙	33.4	—	—	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 7.5YR6/4		外面叩き目。外底凹凸。内面ユビ オサエ後回転ナデ。双耳に円孔あ り。	関西産
1205	SK52 上層	磁器 染付	中碗 丸形	9.6	4.2	3.4	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 丸に菊花	呉須は暗オリーブ灰色。	肥前産
1206	SK52 上層	磁器 染付	中碗 丸形	10.0	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 雪輪		肥前産

Tab.52 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1207	SK52	磁器 染付	中碗 半筒形	10.0	7.3	5.4	—	外) 白 断) 白	外) 植物・二重圏線 高台外) 二重圏線 高台内) 「青明年製」 銘・圏線		肥前産 17世紀後半
1208	SK52 上層	青花	碗	—	—	—	—	外) 灰白2.5GY8/1 断) 灰白N7/	口縁外) 圏線 口縁内) 圏線	全面に白化粧土後透明釉。	中国 漳州窯系 16世紀末～17世紀 初頭
1209	SK52	磁器 染付	小皿	—	—	4.8	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白N8/	内) 寿字・二重圏線		肥前産 17世紀前半
1210	SK52 上層	磁器 染付	小皿	—	—	6.6	—	外) 灰白2.5GY8/1 断) 灰白7.5Y8/1	内) 草花文	透明釉は灰白色を帯び貫入が 入る。畳付に砂が附着。	肥前産
1211	SK52 上層	磁器 染付	小皿 丸形	9.8	2.3	6.4	—	外) 白 断) 白	外) 如意頭連続唐草文 高台外) 二重圏線 内) 竹・菊 高台内) 「大明成化年 製」銘・圏線		肥前産 17世紀後半～18世 紀前半
1212	SK52 上層	磁器 染付	皿	—	—	8.6	—	外) 白 断) 白	外) 不明 高台外) 二重圏線 内) 草花 高台内) 「大明成化年 製」銘・圏線	高台内にハリ支え痕。	肥前産 17世紀後半～18世 紀前半
1213	SK52 上層	磁器 染付	中皿 折縁形	21.3	3.3	8.7	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 圏線 内) 櫛歯文・不明		肥前産 1630～1650年代
1214	SK52 上層	磁器 染付	皿	—	—	8.7	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	内) 二重圏線・不明	見込み蛇の目釉剥ぎ。	肥前産
1215	SK52 下層	磁器 染付	小皿 丸形	12.3	7.7	3.3	—	外) 白 断) 白	外) 如意頭連続唐草文 内) 花唐草文 高台外) 二重圏線 高台内) 圏線		肥前産
1216	SK52	磁器 染付	鉢	14.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 如意頭連続唐草文 内) 区画割りに花・窓 に宝文	口縁部輪花形。	肥前産
1217	SK52 上層	白磁	皿	—	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 陽刻文様	陽刻型打成形。	肥前産
1218	SK52	白磁	小皿	—	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 陽刻による菊弁と 花文	陽刻型打成形。	肥前産
1219	SK52 下層	青花	皿 端反形	14.4	3.0	8.1	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 唐草 内) 花唐草・二重圏線	高台内に放射状の匏痕。	中国 景德鎮窯系 16世紀
1220	SK52 上層	青花	皿 端反形	15.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 不明 内) 草花・他・圏線		中国 景德鎮窯系 17世紀
1221	SK52 上層	青花	皿	—	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 土坡・植物	高台内に放射状の匏痕。	中国 景德鎮窯系 17世紀
1222	SK52 上層	青花	大皿	—	—	14.0	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白N8/	内) 松・水	呉須は暗青灰色。外底と高台に灰 黄褐色の粗砂が多量に附着。	中国 漳州窯系 16世紀末～17世紀 初頭
1223	SK52 上層	磁器 染付	鉢	21.0	—	—	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白5Y8/1	外) 草花文 内) 花文	口縁端部に呉須。透明釉は貫入が 入る。	肥前産
1224	SK52 上層	白磁	小杯 丸形	6.8	2.2	3.0	—	外) 白 断) 白		透明釉は貫入が入る。	肥前産
1225	SK52 上層	白磁	紅皿 菊花形	4.3	1.7	1.9	—	外) 白 断) 白	外) 菊弁	型押成形。外面下半無釉。	肥前産
1226	SK52 上層	磁器 色絵	蓋物	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 上絵付 (赤) による 圏線・唐草	口縁部内面と端部無釉。	肥前産 1660年代
1227	SK52	磁器 色絵	髪油壺	—	—	—	—	外) 明オリープ灰 2.5GY7/1 断) 灰白N8/	外) 上絵付 (赤・剥離) による網目文・圏線	内面クロロ目。内面無釉。	肥前産
1228	SK52 上層	青磁	水滴	—	—	—	—	外) 明緑灰色 10GY8/1 断) 明緑灰色 10GY8/1	兎か	型押成形貼り合わせ。内面ユビオ サエ・ユビナデ。上部に径3mmの 円孔。	肥前産
1229	SK52 下層	磁器 色絵	水滴 箱形	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 上絵付 (赤・剥離) による文様	型押成形底部貼り合わせ。内底に 布目。	肥前産
1230	SK52 上層	陶器	中碗 丸形	10.0	—	—	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	外) 白象嵌による圏 線・印花文 灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で貫入 が入る。御本が入る。	尾戸窯
1231	SK52	陶器	碗	—	—	—	—	外) 灰5Y6/1 断) 黄灰2.5Y6/1	外) 白象嵌による暦手	オリープ灰色を帯びる透明の釉で 貫入が入る。	尾戸窯
1232	SK52	陶器	中碗 端反形	9.9	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/2	外) 呉須による圏線・ 檜垣・暦手	呉須は暗緑灰色。灰釉は淡黄色を 帯びる透明の釉で貫入が入る。	尾戸窯

Tab.53 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種器 形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1233	SK52	陶器	中碗 丸形	10.5	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	外) 凹線 灰釉	外面上位にロクロ成形による凹 線。灰白色を帯びる透明の釉で細 かい貫入が入る。	尾戸窯
1234	SK52	陶器	中碗 丸形	11.8	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	外) 錆絵、笹文灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で貫入 が入る。	尾戸窯
1235	SK52 上層	陶器	中碗 丸形	13.2	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	灰釉	厚手。外面に粗い工具痕が残る。 オリーブ灰色を帯びる透明の釉で 粗い貫入が入る。	尾戸窯
1236	SK52	陶器	中碗 丸形	12.6	—	—	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白N8/	灰釉	灰釉は焼成不良気味で白濁。	尾戸窯
1237	SK52 上層	陶器	中碗 丸形	12.6	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で細か い貫入が入る。御本が入る。	尾戸窯
1238	SK52 上層	陶器	中碗	9.3	—	—	—	外) 灰5Y5/1 断) 灰5Y4/1	外) 文様の有無は不明 灰釉	灰釉は焼成不良気味で白濁。	尾戸窯
1239	SK52	陶器 未成 品か	中碗	—	—	5.3	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	素焼き	高台内に小さい渦状の鉋痕。	尾戸窯
1240	SK52 上層	陶器	中碗	—	—	3.8	—	外) 浅黄橙10YR8/3 断) 浅黄橙10YR8/3	灰釉	高台内兜巾状。高台無釉。透明の 釉。	
1241	SK52 上層	陶器	中碗 甕形	11.2	7.0	4.5	—	外) にぶい黄 2.5Y6/3 断) 灰白2.5Y7/1	外) 錆絵、笹文か 灰釉	高台内平坦。高台無釉。にぶい黄 色を帯びる透明の釉で粗い貫入が 入る。	
1242	SK52 下層	陶器	中碗 腰折形	9.0	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	外) 不明 灰釉	せんじ碗。文様の有無は不明。灰 白色を帯びる透明の釉。	京都系 18世紀中葉～後葉
1243	SK52 上層	陶器 色絵	小碗 半球形	7.0	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	外) 上絵付 (薄緑) に よる笹文灰釉		京都系 18世紀中葉
1244	SK52 上層	陶器	中碗 腰張形	10.4	—	5.2	—	外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	高台無釉。灰オリーブ色を帯びる 透明の釉で粗い貫入が入る。	瀬戸・美濃産
1245	SK52 上層	陶器	中碗 腰張形	—	—	5.4	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 灰白2.5Y8/1	外) 不明 灰釉	京焼風陶器。高台無釉。淡黄色を 帯びる透明の釉で貫入が入る。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1246	SK52 下層	陶器	中碗	—	—	4.5	—	外) 褐灰10YR4/1 断) にぶい赤褐 5YR5/3	外) 波状の白化粧土刷 毛目 内) 白化粧土打刷毛目 透明釉	高台施釉。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1247	SK52 上層	陶器	中皿 端反形	22.0	—	—	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	内) 錆絵 灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で貫入 が入る。	尾戸窯
1248	SK52	陶器	小皿	—	—	6.4	—	外) 灰白5Y7/1 断) にぶい橙 7.5YR7/4・灰白 2.5Y7/1	灰釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台内に渦 状の鉋痕。高台に円孔1穴。灰白 色を帯びる半透明の釉で貫入が 入る。御本が入る。	尾戸窯
1249	SK52	陶器	小皿	13.0	5.0	4.8	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) にぶい黄橙 10YR7/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部溝縁状。 内底に段。外面下位無釉。灰オリ ーブ色を帯びる透明の釉。内底に砂 目。	肥前産 1610～1630年代
1250	SK52 下層	陶器	向付	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 錆絵、草文・垣 長石釉	外側面に円形文を貼付。三足を貼 付。外底に輪状の溶着痕。外底無 釉。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
1251	SK52	陶器	不明	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y8/2	内) 錆絵 長石釉		美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
1252	SK52	陶器	不明	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y8/2	内) 錆絵 長石釉		美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
1253	SK52	陶器	不明	—	—	—	—	外) 灰白N7/ 断) 灰白2.5Y8/1	長石釉	高台内施釉。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
1254	SK52	陶器	深鉢	38.4	—	—	—	外) 灰オリーブ 5Y5/2 断) 灰褐5YR5/2	外) 白象嵌による幾何 文・花文・立鶴・波状 文	三島手。口縁部に印刻白象嵌によ る幾何文と花文。体部外面中に 印刻白象嵌と手描き鉄錆による立 鶴文。下位に白象嵌による波状文。 灰オリーブ色の釉。	肥前産 1660～1680年代
1255	SK52	陶器	壺	8.6	12.4	5.8	—	外) 灰7.5Y6/1 断) 灰褐10YR6/1	外) 錆絵、唐草文	絵唐津。碁笥底。内面施釉。口縁 端部と底部無釉。	肥前産 1590～1610年代
1256	SK52	陶器	德利	—	—	6.8	—	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 灰褐5YR4/2	焼締め	糸目德利。外面丁寧なナデ。内面 ロクロ目。	備前 17世紀末～18世紀 初頭 外底に銘印あり。
1257	SK52 上層	陶器	鳥の 水入れ	—	4.8	—	—	外) 灰褐7.5YR6/2 断) 灰白2.5Y7/1	焼締め	たたら成形。外面ナデ・ミガキ、 内面ユビオサエ・ユビナデ。外底 布目・ナデ。内底に自然釉が掛る。	

Tab.54 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1258	SK52 上層・ SK69	陶器	甕	25.4	—	—	—	外) 褐灰7.5YR4/1 断) におい橙 5YR6/4	外) 鉄釉	外面上位に多段の稜線。内面ロク ロ目	
1259	SK52 上層	陶器	甕	—	—	—	—	外) におい黄褐 10YR4/3 断) 黄灰2.5Y6/1	焼締め	口縁端部に凹線。体部外面上位に 多段の凹線。外面に自然釉。体部 内面に薄く釉が掛る。	丹波
1260	SK52 上層	陶器	灯明 受皿	10.1	—	—	—	外) におい赤褐 2.5YR4/4 断) におい赤褐 2.5YR5/4	内) 錆釉	油溝半月状。内面に鉄錆を刷毛塗 り。外面無釉。	
1261	SK52 下層	陶器	ひょう そく台 付たん ころ形	—	—	4.8	—	外) 黒褐10YR2/2 断) 橙5YR7/6	鉄釉	外底回転糸切り。外底に径6mmの 円錐形の穿孔。黒褐色の釉。	
1262	SK52 上層	土師質 土器	小皿	8.0	1.9	4.6	—	外) におい橙 7.5YR7/4 断) におい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。 内底に渦状のロクロ目。	
1263	SK52 上層	土師質 土器	小皿	7.3	1.2	4.5	—	外) におい黄橙 10YR7/3 断) におい黄橙 10YR7/3			
1264	SK52 上層	土師質 土器	小皿	6.6	1.2	4.4	—	外) 浅黄橙7.5YR8/4 断) 浅黄橙7.5YR8/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油 痕。
1265	SK52 上層	瓦質 土器	火鉢	34.0	—	—	—	外) 黒5Y2/1 断) 灰5Y4/1		型による獣面を貼付。体部外面に 粒状の凹凸。口縁部内外面回転ナ デ。内面連続したユビオサエ・ナ デ。内面に粘土帯接合痕。	
1266	SK53 下層	陶器	合子 菊花形	9.0	2.5	5.5	—	外) におい黄 2.5Y6/3 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	型押成形。外面ナデ、部分的に布 目痕が残る。内面ユビオサエ。内 面と外面下位無釉。におい黄色を 帯びる透明の釉。	尾戸窯か
1267	SK53 下層	土師質 土器	焼塩壺	5.9	7.0	3.0	—	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6		外面ナデ・ユビオサエ。内面ナデ、 部分的に布目痕が残る。	関西産か
1268	SK54	白磁	小皿	—	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 陽刻による菊弁	陽刻型打成形。	肥前産
1269	SK54	磁器 染付	瓶	—	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 陽刻による紗綾形 文・環珞文	型押成形。外面に陽刻文様。部分 的に呉須を施す。	肥前産
1270	SK54	陶器	小碗 端反形	9.0	—	—	—	外) 灰白10Y7/1 断) 灰白5Y7/1	灰釉	外面ロクロ目。灰白色を帯びる半 透明の釉。御本が入る。	
1271	SK55	磁器 染付	大皿	33.0	5.8	20.1	—	外) 白 断) 白	外) 如意頭連続唐草 文・圏線 高台外) 二重圏線 内) 花卉 高台内) 圏線	透明釉は貫入が入る。	肥前産
1272	SK56	磁器 染付	不明	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 草花文	外面コンニャク印判による草花 文。六角形。内面ナデ。内面無釉。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1273	SK60	白磁	小皿	—	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 陽刻による菊弁	陽刻型打成形。	肥前産
1274	SK68	磁器 染付	中碗 丸形	10.4	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 雲龍文 内) 雲龍文か		肥前産
1275	SK68 最下層	磁器 染付	小碗 丸形	8.2	5.5	3.5	—	外) 白 断) 白	外) 草花文 高台外) 二重圏線 高台内) 圏線・略化し た「大明年製」		肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1276	SK68	青磁 染付	猪口	8.2	—	—	—	外) 明オリープ灰 5GY7/1 断) 灰白5GY8/1	外) 青磁釉 口縁内) 四方襷	透明釉は貫入が入る。	肥前産 18世紀後半
1277	SK68	青花	中皿	—	—	10.0	—	外) 白 断) 白	高台外) 二重圏線 内) 人物 高台内) 二重圏線・「天 啓年製」銘	古染付。畳付に粗砂が付着。	中国 景德鎮窯系 17世紀前半
1278	SK68	青磁	皿	—	—	5.6	—	外) 明緑灰10GY7/1 断) 白	内) 片切彫りによる陰 刻文様 青磁釉	明緑灰色の釉。	肥前産 1630～1640年代 二次被熱により釉 は変質。
1279	SK68	磁器 染付	中皿	—	—	14.0	—	外) 白 断) 白	外) 唐草文 高台外) 二重圏線 内) 流水文 高台内) 圏線		肥前産 17世紀後半

Tab.55 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1280	SK68	磁器 染付	碗蓋	—	—	—	摘み径 4.0	外) 白 断) 白	外) 草花文 内) 四方襷・二重圏線 圏線・手描きによる五 弁花 摘み内) 二重角枠内渦 「福」		肥前産 17世紀末～18世紀
1281	SK68	白磁	鉢 折湾形	19.0	—	—	—	外) 白 断) 白			肥前産
1282	SK68	青磁	香炉又 は火入 れ半筒 形	6.8	—	—	—	外) 明緑灰7.5GY7/1 断) 灰白N8/	青磁釉	内面ロクロ目。内面無釉。明緑灰 色の釉。	肥前産
1283	SK68	陶器	小碗 半筒形	—	—	4.1	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉	文様の有無は不明。高台無釉。淡 黄色を帯びる半透明の釉で貫入が 入る。	京都系
1284	SK67	土師質 土器	焜炉 類か	—	—	—	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 5YR7/4		内面イタナデ。	銘印あり。
1285	SK67	陶器	急須か 後手形	—	—	—	—	外) にぶい赤褐 2.5YR4/4 断) 明赤褐2.5YR5/6	焼締め	内面ロクロ目。手捏ねによる把手 を貼付。体部は欠損。	備前 19世紀
1289	SK69	白磁	鉢	—	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 陽刻文様	陽刻型打成形。口縁部輪花形。	肥前産
1290	SK69	磁器 染付	不明	—	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 不明	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前産
1291	SK69	陶器	瓶類	—	—	8.0	—	外) 灰オリーブ 5Y4/2 断) 灰N6/	灰釉	外面と高台内に灰釉を刷毛塗り。 内面無釉。灰オリーブ色の釉。	
1292	SK69	陶器	壺	—	—	18.0	—	外) にぶい褐 7.5YR5/3 断) 褐灰7.5YR5/1	焼締め	内面ヨコナデ。	信楽産 16世紀
1293	SK69	陶器	漫瓶	—	—	—	—	外) 灰オリーブ 5Y4/2 断) 灰白5Y7/1	灰釉	天井部に把手を貼付する。	
1294	SK69	陶器	置物か	—	—	—	—	外) 黒褐5YR3/1 断) にぶい赤褐 5YR4/3	焼締め	獅子か。外面ナデとヘラ彫りで造 形する。	備前 18～19世紀
1295	SK69	土師質 土器	火鉢又 は焜炉 箱形	—	—	—	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) 橙5YR6/6		たたら成形。四隅を大きく面取る。 内外面ナデ。外底板圧痕。	関西産
1296	SK70	磁器 染付	小杯 丸形	4.4	1.7	2.0	—	外) 白 断) 白	外) 不明		肥前産
1297	SK70	白磁	小杯 端反形	4.0	2.3	2.0	—	外) 白 断) 白			肥前産
1298	SK70	陶器	中碗	—	—	5.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	外) 文様の有無は不明 灰釉	京焼風陶器。高台内に円圏状の段。 高台無釉。灰オリーブ色を帯びる 半透明の釉で貫入が入る。	肥前産 17世紀後半～18世 紀前半
1299	SK70	陶器	中碗 丸形	11.6	7.9	4.6	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	高台施釉。浅黄色を帯びる透明の 釉で貫入が入る。	肥前産 17世紀後半～18世 紀前半
1300	SK72	磁器 染付	中碗 丸形	12.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 花文		肥前産
1301	SK72	磁器 染付	中皿	—	—	12.2	—	外) 白 断) 白	高台外) 圏線 内) 文字・二重圏線		肥前産
1302	SK72	磁器 染付	蓋か	—	—	—	—	外) 白 断) 白	不明	型押成形。内面ユビナデ。	肥前産
1304	SK74	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	外) 白象嵌による暦手 灰釉	浅黄色を帯びる透明の釉で細かい 貫入が入る。	尾戸窯
1306	SK76	陶器	不明	14.3	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	灰釉	内面ロクロ目。内面施釉。灰白色 を帯びる透明の釉で細かい貫入が 入る。	尾戸窯
1307	SK76	陶器	壺又 は甕	—	—	—	—	外) 褐7.5YR4/3 断) 褐灰10YR6/1	鉄釉	外面に並行叩き。内面に同心円状 の当て具痕。	福岡か 1590～1610年代
1308	SK78	磁器 染付	中碗 半筒形	9.0	8.1	5.6	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 区画割りに鎬・四 方襷・七宝文、帯に七 宝文	外面に丸彫りによる鎬。透明釉は 明緑灰色を帯びる。量付に灰白色 の粗砂が付着。	肥前産
1309	SK78	磁器 染付	小碗	6.6	4.1	3.5	—	外) 白 断) 白	外) 草花文	量付と高台内に灰白色の粗砂と小 礫が付着。	肥前産 有田 1610～1630年代
1310	SK78	青花	皿	—	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 植物・土坡		中国 景德鎮窯系 17世紀初頭

Tab.56 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大径				
1311	SK78	陶器	小壺	3.4	4.0	3.8	—	外) 灰オリーブ 7.5Y4/2 断) 灰白N7/	灰釉	外底回転糸切り。底部無釉。内面施釉。灰オリーブ色の釉。	瀬戸 14世紀～15世紀 二次被熱により釉は変質。
1312	SK78	瓦質土器	焙烙	—	—	—	—	外) 黄灰2.5Y4/1 断) 黄灰2.5Y4/1		口縁端部回転ナデ。内面回転ナデ。外面に粗砂が多量に付着。	讃岐 御厩系 19世紀
1313	SK78	陶器	皿	—	—	8.6	—	外) 灰オリーブ 7.5Y5/3 断) 灰白N7/	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面クロロ目。外面下位無釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。内底に胎土目。	肥前産 1590～1610年代
1314	SK78	陶器	大皿 折縁形	39.2	—	—	—	外) オリーブ灰 10Y4/2・暗青灰 5B4/1 断) 灰5Y6/1	外) 銅緑釉 内) 銅緑釉	オリーブ灰色～暗青緋色の釉。	肥前 内野山 17世紀後半～18世紀前半
1315	SK78 床	陶器	大皿 折縁形	29.0	6.8	8.8	—	外) 黄灰2.5Y7/2 断) 黄灰2.5Y7/2	内) 波状の櫛刷毛目・ 鉄錆と緑釉による草文	刷毛目二彩手。内底に胎土目痕。	肥前産 武雄小田志窯 1620～1640年代
1316	SK78	陶器	灯明 受皿	10.6	—	—	—	外) 灰褐5YR4/2 断) 灰7.5Y6/1	鉄錆	油溝の有無は不明。外面上位回転ナデ、外底回転ケズリ。	
1317	SK77	陶器	小壺又は 徳利	—	—	5.1	—	外) にぶい赤褐 2.5YR5/4 断) にぶい赤褐 2.5YR5/4	焼締め	内面クロロ目。外底回転糸切り。	備前 16世紀末
1318	SK80	磁器 染付	蓋物蓋	笠部径 12.6	4.4	かえり 径 10.6	摘み径 5.8	外) 灰白2.5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 花唐草文・四方襷	かえり無釉。かえりに灰白色の粗砂が付着。	肥前産又は肥前系
1319	SK80	白磁	紅皿	6.4	1.3	3.3	—	外) 白 断) 白	内) 型による菊弁	糸切り細工。外面ナデ。輪高台を貼付。外面下半無釉。白磁釉は灰白色を帯びる。	肥前産
1320	SK80	白磁	小杯 桶形	5.1	3.3	3.2	—	外) 白 断) 白			肥前産
1321	SK80	白磁	中碗 腰折形	10.4	5.2	4.4	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白N8/		外面下位にコテ状の工具痕が残る。透明釉は灰白色を帯びる。	肥前産又は肥前系
1322	SK80	陶器	小碗 半球形	—	—	3.1	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y8/1	外) 錆絵 灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉で細かい貫入が入る。	京都・信楽系 18世紀中葉
1323	SK81	陶器	中碗 半筒形	11.0	8.6	4.8	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	外) 白象嵌による唇手 文と印花文・鉄錆象嵌 による二重圏線	内面クロロ目。高台内平坦。灰釉は透明で細かい貫入が入る。御本が入る。	尾戸窯
1324	SK83	青花	小碗 端反形	7.0	3.5	3.0	—	外) 白 断) 白	外) 花唐草文 高台外) 圏線 口縁内) 不明 見込み) 二重圏線・草 花 高台内) 銘	呉須は藍色で滲む。	中国 景德鎮窯 19世紀前半
1325	SK83	磁器 染付	小皿 変形	—	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 陽刻による菊花 高台内) 銘「□□化製」 (「宣明化製」か)	糸切り細工。輪高台を貼付。内面に型による陽刻文様。	肥前産 有田 1670～1710年代
1326	SK83	磁器 染付	蓋物	4.8	2.5	2.8	—	外) 白 断) 白	外) 3条の圏線	内面施釉。口縁部内面と端部無釉。	肥前産
1327	SK83 下層	陶器	中碗 丸形	11.8	7.5	5.5	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	灰釉	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。内底に目痕。	尾戸窯
1328	SK83	陶器	鉢	14.0	7.8	5.6	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉・鉄釉	口縁部輪花形。口縁の一部に鉄釉を施す。高台無釉。灰釉は淡黄色を帯びる透明の釉で貫入が入る。内底に目痕5足。	尾戸窯
1329	SK83	陶器	灯明 受皿	11.3	2.3	3.7	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	内) 菊花・櫛目灰釉	内面に型作りによる菊花を貼付。外面無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。	京都系
1333	SK84 上層	磁器 染付	中碗 広東形	11.2	7.2	6.3	—	外) 白 断) 白	外) 草花・柳 高台外) 二重圏線 口縁内) 二重圏線 見込み) 圏線・水に岩 高台内) 角棒内「茶」	目痕無し。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に角棒内「茶」銘。
1334	SK84 上層	磁器 染付	中碗 広東形	10.8	6.2	6.2	—	外) 白 断) 白	外) 草花文 高台外) 二重圏線 口縁内) 二重圏線 見込み) 圏線・水に鷲 高台内) 「サ」	目痕3足。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内「サ」銘。
1335	SK84 最下層	磁器 染付	中碗 広東形	11.6	6.3	6.3	—	外) 白 断) 白	外) 草花文 高台外) 二重圏線 口縁内) 二重圏線 見込み) 圏線・不明	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯 1820年代～幕末



Tab.57 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1336	SK84 上層	磁器 染付	中碗 端反形	10.6	6.1	4.4	—	外) 白 断) 白	外) 雲・龍 口縁内) 雲 見込み) 雲 高台内) 「能茶山製」	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内「能茶山製」 銘。
1337	SK84	磁器 染付	中碗 端反形	—	—	4.4	—	外) 灰白7.5Y8/1 断) 白	外) 窓に人物と馬・雲 高台外) 二重圏線 見込み) 丸内に人物と 馬・山水文 高台内) 角枠内「茶」	高台は外方へ開く。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に角枠内 「茶山」銘。
1338	SK84 上層・ 下層	磁器 染付	中碗 端反形	9.3	5.5	3.8	—	外) 白 断) 白	外) 草花・鳥 内) 草花文 見込み) 草花文		肥前産 1820年代～幕末
1339	SK84 最下層	磁器 染付	中碗 端反形	11.1	6.1	4.3	—	外) 白 断) 白	外) 人物・風水文・文 字「赤雁山是□」 口縁内) 圏線・帯線 見込み) 圏線・岩波	胎土は透明感をもつ。	瀬戸・美濃産 19世紀
1340	SK84 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.4	2.8	—	摘み径 3.6	外) 白 断) 白	外) 草花文・圏線 内) 波状文・丸文・圏 線・二重圏線・寿字 摘み内) 銘	胎土は透明感をもつ。	関西系
1341	SK84 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.4	2.9	—	摘み径 3.3	外) 灰白10Y8/1 断) 白	外) 帯線に菱・区画割 りに花文・「福寿」 内) 帯線に菱・花文	透明釉は貫入が入る。断面は粗い。	能茶山窯か
1342	SK84 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.0	2.6	—	摘み径 3.8	外) 白 断) 白	外) 蓮弁・花唐草 内) 四方襷・圏線・花 摘み内) 銘		肥前産 1820～1860年代
1343	SK84 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 7.2	2.2	—	摘み径 3.0	外) 白 断) 白	外) 花唐草文 内) 雷文帯・団龍文		肥前産 1850～1860年代
1344	SK84 上層・ 最下層	磁器 染付	小碗 丸形	8.2	5.6	3.6	—	外) 白 断) 白	外) 人物・葦・雁 口縁内) 二重圏線 見込み) 山水文と東 屋・圏線 高台内) 「サ」	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内「サ」銘。
1345	SK84 上層	磁器 染付	小碗 丸形	8.2	5.6	3.8	—	外) 白 断) 白	外) 草花文・蝶 高台外) 二重圏線 口縁内) 二重圏線 見込み) 圏線・宝珠高 台内) 「サ」	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内「サ」銘。
1346	SK84 最下層	磁器 染付	小碗 丸形	6.2	4.9	3.0	—	外) 白 断) 白	外) 丸文・宝珠・圏線 高台外) 二重圏線 口縁内) 四方襷の変形 か高台内) 角枠内「茶」		能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に角枠内 「茶」銘。
1347	SK84 最下層	磁器 色絵染 付	小碗 丸形	9.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 呉須による帯線と 花文・上絵付(赤)に よる寿字の変形		肥前産
1348	SK84	磁器 色絵	小碗 丸形	7.8	3.8	2.8	—	外) 白 断) 白	外) 上絵付(赤・その 他は剥離)による扇・ 窓絵・白抜きの花文	文様の輪郭は赤で描き、地を赤で 塗り埋める。	肥前産 揃いで4個体が出 土。
1349	SK84 上層	磁器 染付	小碗 平碗形	7.8	3.0	3.0	—	外) 白 断) 白	外) 不明	外面に強いロクロ目。	肥前産
1350	SK84 上層	白磁又 は染付	小碗 端反形	8.0	4.5	3.4	—	外) 白 断) 白		文様の有無は不明。高台内を浅く 曲線的に削り出す。	肥前産又は肥前系
1351	SK84 上層	磁器 色絵	小碗 端反形	7.8	4.4	3.4	—	外) 灰白2.5GY8/1 断) 白	外) 上絵付(赤)による 網目文 口縁内) 上絵付(赤) による網目文 見込み) 花文		肥前産
1352	SK84 上層	磁器 染付	小碗 筒丸形	7.0	—	—	—	外) 明緑灰5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 草花文・二重圏線	胎土は透明感をもつ。	関西系
1353	SK84 上層	磁器 染付	小碗 端反形	8.0	4.5	3.5	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	外) 草花・圏線 高台外) 二重圏線 口縁内) 二重圏線 見込み) 圏線・寿	畳付幅が広い。呉須は青色で滲む。 胎土は透明感をもつ。	関西系
1354	SK84	磁器 色絵	小碗 端反形	8.8	4.8	3.7	—	外) 白 断) 白	蛸手 外) 上絵付(赤・黄・黒・ 薄赤)による花文 見込み) 花文 高台内) 銘	文様の輪郭は黒で描く。胎土は透 明感をもつ。	関西系 高台内に銘。 揃いで3個体が出 土。
1355	SK84 上層	磁器 染付	小碗 端反形	8.1	4.1	3.7	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 海浜風景文・漢詩 口縁内) 不明 見込み) 二重圏線・「太 化年制」	畳付幅が広い。胎土は透明感をも つ。	関西系

Tab.58 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1356	SK84 上層	磁器 色絵	小碗 端反形	9.3	4.7	3.6	—	外) 灰白N8/ 断) 白	外) 上絵付 (赤・黒・ 剥離) による蓮弁文・ 花・鳥・詩歌	文様の輪郭は黒で描く。胎土は透 明感をもつ。	関西系
1357	SK84 上層	磁器 色絵 染付	小碗 端反形	8.4	4.6	3.4	—	外) 白 断) 白	外) 呉須による縞・上 絵付 (赤・黒・剥離) による花文	胎土は透明感をもつ。	関西系
1358	SK84 上層	磁器 染付	小杯	6.8	3.6	2.8	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 草文		肥前産又は肥前系
1359	SK84	磁器 染付	小杯 丸形	6.8	3.1	2.1	—	外) 白 断) 白	外) 半菊文		肥前産
1360	SK84	磁器 染付	小杯 丸形	6.8	2.9	2.3	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 笹文		肥前産
1361	SK84 上層	白磁	小杯 丸形	6.0	2.7	2.6	—	外) 灰白N8/ 断) 白			肥前産
1362	SK84 上層	磁器 染付	小杯 桶形	5.2	4.3	3.0	—	外) 灰白N8/ 断) 白	外) 山水文		肥前産 1780~1860年代
1363	SK84 上層	白磁	小杯 桶形	4.6	3.3	3.0	—	外) 灰白10Y8/1 断) 白			肥前産 1780~1860年代
1364	SK84	白磁	小杯 桶形	3.8	3.1	2.0	—	外) 白 断) 白			肥前産 1780~1860年代
1365	SK84	磁器 染付	薄手 酒杯 端反形	6.0	3.0	2.4	—	外) 白 断) 白	外) 鶴	胎土は透明感をもつ。	関西系
1366	SK84	磁器 染付	薄手 酒杯 端反形	6.7	3.4	3.3	—	外) 白 断) 白	外) 人物 内) 提灯 見込み) 寿		肥前産
1367	SK84 上層	磁器 染付	薄手 酒杯 端反形	7.1	4.7	3.1	—	外) 白 断) 白	内) 菊・鉢 口縁内) 圈線・唐草文 か		肥前産
1368	SK84 上層	磁器 色絵	小杯 木盃形	—	—	3.5	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	内) 上絵付 (赤) による 鶴	胎土は透明感をもつ。	関西系
1369	SK84 上層	磁器 色絵	小杯 木盃形	9.8	—	—	—	外) 灰白N8/ 断) 白	内) 上絵付 (赤・剥離) による文様	胎土は透明感をもつ。	関西系
1370	SK84 上層	磁器 染付	小皿 輪花形	10.0	2.5	5.9	—	外) 白 断) 白	内) 山水文 高台内) 角枠内「茶」	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯 1820年代~幕末 角枠内「茶」銘。
1371	SK84 最下層	磁器 染付	小皿 輪花形	9.2	2.4	5.4	—	外) 灰白5Y8/1 断) 白	内) 山水文・波 高台内)「サ」	呉須は緑灰色に発色。透明釉は貫 入が入る。	能茶山窯 1820年代~幕末 「サ」銘。
1372	SK84 上層	磁器 染付	小皿 輪花形	9.6	2.3	5.2	—	外) 白 断) 白	内) 山水文 高台内)「サ」	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯 1820年代~幕末 「サ」銘。
1373	SK84 上層	磁器 染付	小皿 輪花形	9.2	2.4	6.0	—	外) 灰白5Y8/1 断) 白	内) 山水文 高台内)「サ」	呉須は暗緑灰色に発色。焼成不良 気味で透明釉は白濁。	能茶山窯 1820年代~幕末 「サ」銘。
1374	SK84 上層	磁器 染付	小皿 輪花形	14.0	3.8	7.7	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 草・土坡 内) 鳥・草・矢羽文 高台内) 角枠内「茶山」	口縁部輪花形。蛇の目凹形高台。 口縁端部に呉須。	能茶山窯 1820年代~幕末 角枠内「茶山」銘。
1375	SK84 上層	磁器 染付	五寸皿 輪花形	13.6	4.0	7.6	—	外) 灰白N8/ 断) 白	内) 山水文 口緒	蛇の目凹形高台。	肥前産又は肥前系
1376	SK84 上層	磁器 染付	小皿 輪花形	13.0	3.1	8.0	—	外) 灰白N8/ 断) 白	内) 若松・鶴	蛇の目凹形高台。	肥前産又は肥前系
1377	SK84 上層	磁器 染付	小皿 丸形	13.4	3.5	8.0	—	外) 灰白5Y8/1 断) 白	内) 草文・格子文	口縁部玉縁状。蛇の目凹形高台。 内底に目痕3足。	肥前産又は肥前系
1378	SK84 最下層	磁器 染付	小皿 輪花形	12.4	3.4	7.4	—	外) 白 断) 白	外) 笹文 内) 区画内に山水文・ 唐草文	蛇の目凹形高台。	肥前産
1379	SK84 上層	磁器 染付	小皿	9.8	2.3	4.6	—	外) 白 断) 白	外) 芙蓉手・宝珠・環 珞文 内) 芙蓉手・花卉・宝文	口縁部輪花形。	肥前産 有田 18世紀後半
1380	SK84 最下層	磁器 色絵 染付	小皿 鐔形	10.4	2.2	5.4	—	外) 白 断) 白	内) 呉須による圈線・ 上絵付 (赤・薄緑・黒) による松文		肥前産
1381	SK84 最下層	磁器 染付	小皿 丸形	10.0	1.8	5.2	—	外) 灰白7.5GY8/1 断) 白	外) 雲 内) 氷裂文・梅花・文 字「□武年制」 高台内) 銘	胎土は透明感をもつ。	関西系
1382	SK84	白磁	皿	—	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 陽刻による菊花	陽刻型打成形。	肥前産

Tab.59 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1383	SK84 上層	白磁	小皿 稜皿形	10.2	2.2	5.6	—	外) 灰白N8/ 断) 白	内) 印刻による文字	胎土は透明感をもつ。	瀬戸・美濃産
1384	SK84	白磁	小皿 菊花形	9.3	—	—	—	外) 灰白10Y8/1 断) 白		透明釉は貫入が入る。貼付高台。 高台は剥離し、剥離部分に布目痕 が残る。	肥前系
1385	SK84 上層	磁器	小皿 方形	—	2.4	—	—	外) 青 断) 白	内) 型による陽刻文 様、鳥・樹木 瑠璃釉	型打成形。	
1386	SK84 最下層	磁器 染付	五寸皿 盤形	14.7	3.0	11.2	—	外) 白 断) 白	外) 草・土坡・流水 高台外) 二重圏線 内) 人物・柳・蛙・垣	蛇の目凹形高台。	肥前産
1387	SK84 上層	磁器 染付	中皿 輪花形	21.3	3.4	12.1	—	外) 白 断) 白	外) 草 高台外) 二重圏線 内) 山水文 高台内) 圏線	高台内にハリ支え痕。	肥前産
1388	SK84 最下層	磁器 色絵	大皿又 は大鉢	—	—	—	—	外) 明緑灰10GY8/1 断) 灰白N8/ 断) 灰白N8/	外) 上絵付(剥離)に よる雲 内) 上絵付(黄・黒・そ の他剥離)による文様		肥前産
1389	SK84 上層	磁器 染付	大皿 輪花形	28.0	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 野菜文		肥前産
1390	SK84 下層	青磁	鉢又 は皿	28.0	—	—	—	外) 明緑灰7.5GY7/1 断) 灰白N8/ 断) 灰白N8/	青磁釉		肥前産
1391	SK84 上層・ 下層	磁器 染付	猪口 腰張形	8.6	6.1	4.2	—	外) 灰白N8/ 断) 灰白N8/ 断) 灰白N8/	外) 帯線・区画割りに 山水文と不明文様 高台外) 二重圏線 口縁内) 帯線 見込み) 水に岩・木		能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に角枠内 「茶」銘。
1392	SK84 上層	磁器 染付	猪口 広東形	8.2	6.5	5.1	—	外) 白 断) 白	外) 山水文 見込み) 網代	透明釉は貫入が入る。断面は粗い。	能茶山窯又は肥前 系
1393	SK84 上層	磁器 染付	猪口 桶形	7.4	5.6	11.6	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白5GY8/1 断) 灰白5GY8/1	外) 石畳地文 口縁内) 四方櫛 見込み) 昆虫文	蛇の目凹形高台。	肥前産 1780～1810年代
1394	SK84	磁器 染付	鉢	—	—	5.9	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 不明 内) 丸に十字・他 高台内) 角枠内「茶山」	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に角枠内 「茶山」銘。
1395	SK84 上層	磁器 染付	鉢 六角形	15.4	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 区画割りに鶴・草 花 口縁内) 不明	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯か
1396	SK84 上層・ 最下層	磁器 染付	鉢	22.8	6.9	12.7	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 草と土坡 内) 山水文 高台内) 銘	蛇の目凹形高台。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に角枠内 「茶山」銘。
1397	SK84 上層	磁器 染付	鉢 端反形	—	—	5.8	—	外) 白 断) 白	外) 区画割りに草花 高台外) 二重圏線 内) 区画割りに草花・ 唐草	透明釉は貫入が入る。	肥前産
1398	SK84 上層	磁器 染付	鉢	—	—	8.0	—	外) 白 断) 白	外) 如意頭連続唐草文 内) 雪輪に松竹梅・人 物	蛇の目凹形高台。	肥前産
1399	SK84 上層	青磁	鉢	—	—	—	—	外) オリーブ灰 5GY5/1 断) 灰白N8/ 断) 灰白N8/	外) 陽刻による花唐草 文	形押し成形。	三田焼
1400	SK84	磁器色 絵染付	鉢	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 呉須による丸文、 上絵付(赤・薄緑・黒) による雲		肥前産
1401	SK84 上層	磁器 染付	蓋物蓋	笠部径 11.0	3.5	かえり 径 9.6	摘み径 3.4	外) 白 断) 白	外) 蛸唐草文・蝶・圏 線・帯線	摘みを貼付。かえり無釉。	肥前産
1402	SK84 上層	磁器 染付	蓋物蓋	笠部径 13.4	—	かえり 径 11.6	摘み径 5.2	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 区画間に山水文	摘みを貼付。かえり無釉。	肥前産
1403	SK84 上層	磁器 染付	蓋物蓋	笠部径 8.0	2.2	かえり 径 7.0	摘み径 2.2	外) 白 断) 白	外) 窓に宝珠・山水文	摘みを貼付。かえり無釉。	肥前産
1404	SK84 上層	磁器 染付	蓋物蓋	笠部径 8.0	—	かえり 径 7.0	摘み径 2.0	外) 灰白10Y8/1 断) 白	外) 二重圏線・花唐草・ 蝶	摘みを貼付。かえり無釉。	肥前産
1405	SK84 中層・ 最下層	磁器 染付	蓋物蓋	笠部径 6.3	2.1	かえり 径 5.6	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 菊文	摘みを貼付。かえり無釉。	肥前産

Tab.60 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1406	SK84 上層	磁器 染付	蓋物蓋	笠部径 5.6	1.9	かえり 径 4.4	摘み径 1.4	外) 白 断) 白	外) 草花・蝶	摘みを貼付。かえり無釉。	肥前産
1407	SK84 上層	磁器 染付	蓋物蓋	笠部径 5.7	1.6	かえり 径 4.4	摘み径 1.7	外) 白 断) 白	外) 格子	摘みを貼付。かえり無釉。呉須は 暗青灰色。	肥前産
1408	SK84 上層	磁器 染付	合子蓋	笠部径 8.4	1.5	—	—	外) 白 断) 白	外) 樹木	口縁部内面と端部無釉。	肥前産
1409	SK84 上層	磁器 染付	合子蓋	笠部径 9.4	—	かえり 径 8.0	—	外) 白 断) 白	外) 鶴	かえり無釉。	肥前産
1410	SK84 上層	磁器 染付	段重	12.6	5.0	8.0	—	外) 白 断) 白	外) 窓に草花・梅花	腰部括れあり。口縁部内面と端部 無釉。	肥前産
1411	SK84 最下層	磁器色 絵染付	段重	12.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 上絵付(赤)による 格子文と窓、呉須による 圏線・不明文様	口縁部内面と端部無釉。	肥前産
1412	SK84 上層	磁器 染付	蓋物 腰張形	10.2	5.9	5.4	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 草花文・圏線 高台内)「サ」	口縁部内面と端部無釉。呉須は青 灰色。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に「サ」銘。
1413	SK84 上層	磁器 染付	蓋物 腰張形	8.2	4.4	4.0	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 丸文・福・寿・圏線 高台外) 二重圏線	口縁部内面と端部無釉。	肥前産
1414	SK84 最下層	磁器 染付	蓋物	5.2	2.6	2.6	—	外) 灰白N8/ 断) 白	外) 帯線	透明釉は貫入が入る。	肥前産又は肥前系
1415	SK84 上層	白磁	合子	5.2	2.1	3.2	—	外) 白 断) 白	外) 陽刻による蓮弁文 と菊弁	形押し成形。内面施釉。外底無釉。 かえり無釉。	肥前産
1416	SK84 上層・ 下層	磁器 染付	火鉢	15.2	17.5	12.6	17.9	外) 灰白2.5GY8/1 断) 白	外) 山水文	基筒底。内面ロクロ目。内面下半 無釉。呉須は滲む。透明釉は貫入 が入る。	肥前系
1417	SK84 上層	磁器 染付	髪油壺 胴丸形	2.4	9.7	5.0	9.8	外) 灰白2.5GY8/1 断) 不明	外) 草花文	内面無釉。呉須は暗オリーブ灰色。	肥前産
1418	SK84 下層・ 最下層	磁器 染付	髪油壺 胴丸形	2.1	8.4	4.2	9.6	外) 灰白10Y7/1 断) 灰白N8/ 断) 白	外) 草花文	内面無釉。呉須は青灰色。	肥前産
1419	SK84 最下層	磁器 色絵	髪油壺	—	—	5.0	8.0	外) 明緑灰10GY8/1 断) 白	外) 上絵付(赤)による 文様	内面無釉。	肥前産
1420	SK84 上層	磁器 染付	小瓶 端反辣 韭形	2.6	7.0	2.8	3.4	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/ 断) 白	外) 梅花・笹	内面無釉。呉須は暗緑灰色。畳付 に褐色の粗砂が付着。	肥前産
1421	SK84 最下層	磁器 染付	小瓶 端反辣 韭形	1.7	9.5	3.0	4.7	外) 灰白2.5GY8/1 断) 灰白N8/ 断) 白	外) 草花文	内面無釉。呉須は青灰色。	肥前産
1422	SK84 上層	磁器 染付	小瓶か	—	—	4.4	—	外) 白 断) 白	外) 蓮弁文・草花文	内面無釉。	肥前産
1423	SK84 上層	磁器 染付	瓶 辣韭形	—	—	7.0	12.0	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 草花文	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前産
1424	SK84 上層	白磁又は 染付	大瓶	—	—	10.3	19.4	外) 白 断) 白		内面無釉。内面ロクロ目。外面縞 やかなロクロ目。	肥前産
1425	SK84 中層	磁器 染付	仏飯器	3.2	—	—	—	外) 灰白2.5GY8/1 断) 白	外) 半菊文・圏線		肥前産 1780～1860年代
1426	SK84 最下層	白磁又は 染付	仏飯器	—	—	4.0	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白			肥前産
1427	SK84	磁器 染付	うがい 茶碗	15.4	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	内) 山水文		肥前産
1428	SK84 下層	白磁	紅皿 菊花形	4.4	1.3	1.4	—	外) 白 断) 白	外) 菊弁	形押し成形。外面無釉。	肥前産
1429	SK84	白磁	ミニ チュア	2.4	1.1	0.6	—	外) 白 断) 白	外) 菊弁	形押し成形。外面無釉。	肥前産
1430	SK84	白磁	ミニ チュア	2.4	0.9	1.0	—	外) 白 断) 白	外) 菊弁	型押し成形。	肥前産
1431	SK84 上層	磁器	蓋物	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	外) 型による粒状と花 弁状の陽刻文様	型押し成形。内面ユビオサエ・ナデ。 透明釉を施釉。	
1432	SK84 上層	磁器	蓋物か	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 型による陽刻文様 透明釉・鉄錆	外面陽刻型押し。内面回転ナデ。口 縁部周辺に菊弁状の陽刻文様。体 部に粒状の陽刻文様を施し鉄錆を 薄く施釉。	
1433	SK84 上層	磁器 染付	水滴	全長 6.0	全厚 1.7	全幅 4.0	—	外) 灰白N8/ 断) 灰白N8/ 断) 白	外) 型による陽刻文 様、菊花文	型押し成形。上面に円孔2穴。葉は 呉須、花は鉄錆で塗り分ける。内 面と外底布目。	肥前産

Tab.61 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1434	SK84	磁器 染付	水滴	—	—	—	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	外) 型による陽刻文様	型押成形。内面ユビオサエ・ユビ ナデ。内底と外底布目。	肥前産
1435	SK84 上層	青花 釉裏紅	蓋か	—	—	—	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	外) 呉須と釉裏紅によ る草花文	方形。周縁に円形の透かし文様。	中国 景德鎮窯 18世紀第4四半期 ～19世紀中頃
1436	SK84 上層	磁器 染付	筆筒か	5.6	10.2	4.6	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	外) 暦手又は縞透かし 文様	中位に切り抜きとヘラ彫りによる 透かし文様。内面施釉。	肥前産
1437	SK84	白磁	戸車	径 4.9	全厚 1.2	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 不明		上面と下面に灰白色の粗砂が付 着。	
1438	SK84 上層・ 最下層	陶器	中碗 丸形	12.2	7.0	5.4	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	外) 白土と鉄錆による 花文 灰釉	高台内に渦状の皷痕。高台無釉。 灰釉は焼成不良気味で白濁。	尾戸窯
1439	SK84 下層	陶器	中碗 広束形	12.3	6.3	5.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	外) 錆絵、笹文	高台内平坦。高台施釉。灰黄色を 帯びる透明の釉で貫入が入る。内 底に目痕4足。	尾戸窯
1440	SK84	陶器	中碗 腰張形	11.4	—	—	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 浅黄橙 10YR8/3～灰5Y6/1	外) 錆絵、注連縄文か 灰釉	光沢の強い透明の釉で粗い貫入が 入る。	尾戸窯
1441	SK84 上層	陶器	中碗 腰張形	12.0	9.5	5.0	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰5Y6/1	灰釉	高台内平坦。高台無釉。白濁した 灰白色の釉。内底に目痕4足。	尾戸窯
1442	SK84 上層	陶器	中碗 腰張形	11.1	8.2	5.1	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 黄灰2.5Y6/1	灰釉	外面ロクロ目。高台内平坦。高台 無釉。白濁した灰白色の釉。内底 に目痕4足。	尾戸窯
1443	SK84 上層	陶器	中碗 腰張形	11.0	8.8	4.5	—	外) にぶい黄橙 10YR7/2 断) 灰白10YR8/2	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明 の釉で細かい貫入が入る。内底に 目痕3足。	尾戸窯
1444	SK84 上層	陶器	中碗 腰張形	10.4	7.1	4.6	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰5Y6/1	白化粧土・灰釉	高台内平坦。高台無釉。白化粧土 施釉の後、灰白色の釉を施釉。内 底に目痕4足。	尾戸窯
1445	SK84 上層	陶器	中碗 腰張形	—	—	4.3	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 灰白2.5Y8/2	外) 錆絵 灰釉	高台内平坦。高台無釉。内底に目 痕3足。	尾戸窯
1446	SK84 上層	陶器	中碗	—	—	4.4	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 浅黄橙10YR8/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。高台無釉。灰黄 色を帯びる白濁した釉。	肥前産 1590～1630年代
1447	SK84 最下層	陶器	中碗 丸形	10.2	5.9	4.5	—	外) 灰オリーブ 5Y4/2 断) 黄灰2.5Y6/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。高台内兜巾状。 高台無釉。灰オリーブ色の釉。	肥前産 17世紀初頭
1448	SK84 床	陶器	小碗 端反形	10.0	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	灰釉	基筒底。高台無釉。灰白色の白濁 した釉。	尾戸窯
1449	SK84 最下層	陶器	小碗 端反形	8.2	4.3	3.2	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉・緑釉	口縁部内外面に緑釉。高台無釉。 淡黄色を帯びる透明の釉で貫入が 入る。	信楽 19世紀
1450	SK84	陶器	小碗	—	—	3.1	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白5Y8/1	灰釉	外面下位に多条の沈線。高台施釉。 灰白色を帯びる半透明の釉で細か い貫入が入る。	関西系
1451	SK84 上層	陶器	小碗	—	—	4.2	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明 の釉で細かい貫入が入る。	
1452	SK84 上層	陶器	小碗	7.2	4.1	2.8	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) 淡黄2.5Y8/3	外) 鉄錆と白土による 宇治橋・文字「通圓」 灰釉	外面下位に多条の沈線。高台内に 裝飾的な渦状の皷痕。高台施釉。 にぶい黄橙色を帯びる透明の釉で 細かい貫入が入る。	
1453	SK84 上層	陶器	小碗	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/1	外) 丸彫りによる縦筋 灰釉	外面に面取り。外面下位に丸彫り による縦筋。高台施釉。灰オリー ブ色を帯びる透明の釉で粗い貫入 が入る。	
1454	SK84 上層	陶器	小碗	—	—	3.8	—	外) にぶい黄 2.5Y6/3 断) 灰白2.5Y7/1	外) 白化粧土・灰釉	片側に白化粧土を掛け分け、その 後灰釉施釉。胎土中に黒色粒を多 く含む。	舞子焼
1455	SK84 上層	未製品 又は 土師質 土器	小碗	5.8	4.1	3.0	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	外) 鉄錆と赤色顔料に よる花文	外面下位回転ケズリ後ナデ。	
1456	SK84 上層	陶器	小皿	12.6	5.2	4.4	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	外) 錆絵、笹文 灰釉	外面の両側に笹文。外面に3段の 稜。見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ 部分に白土を刷毛塗り。高台内平 坦。高台無釉。灰白色を帯びる半 透明の釉で細かい貫入が入る。	尾戸窯
1457	SK84 最下層	陶器	小皿	12.3	5.5	4.3	—	外) 灰黄2.5Y7/2～ 灰白7.5YR8/2断) に ぶい橙 7.5YR7/4	外) 錆絵、笹文 灰釉	外面に3段の稜。見込み蛇の目釉 剥ぎ。釉剥ぎ部分に白土を刷毛塗 り。高台内平坦。高台無釉。灰白 色を帯びる半透明の釉で細かい貫 入が入る。	尾戸窯

Tab.62 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大径				
1458	SK84 上層	陶器	小皿 端反形	12.7	4.9	4.2	—	外) 黒褐10YR3/2 断) 黄灰2.5Y4/1	外) 沈線 鉄釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部分に白土を刷毛塗り。高台内平坦。畳付に面取り。高台無釉。黒褐色の釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
1459	SK84 上層・ 下層	陶器	小皿	12.6	4.8	4.8	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	外) 笹文 灰釉	外面に3段の稜。見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部分に白土を刷毛塗り。高台内平坦。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。	尾戸窯
1460	SK84 上層	陶器	小皿 端反形	12.4	4.7	5.0	—	外) 黒褐10YR3/2 断) 暗灰N3/	外) 沈線 鉄釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台内平坦。畳付に面取り。高台無釉。黒褐色の釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
1461	SK84 上層	陶器	小皿 端反形	12.4	4.7	4.5	—	外) 黒褐10YR3/2 断) 黄灰2.5Y4/1	外) 沈線 鉄釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部分に白土を刷毛塗り。高台内平坦。畳付に面取り。高台無釉。黒褐色の釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
1462	SK84 上層	陶器	小皿 端反形	9.8	2.7	4.0	—	外) 灰黄褐10YR4/2 断) 黄灰2.5Y5/1	内) 白土イッチン描き による文様 灰釉	高台内平坦。内底に、目痕3足。	
1463	SK84 上層	陶器	小皿	8.6	3.0	4.9	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	内) 呉須による草文 灰釉	蛇の目高台。高台無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。内底に目痕3足。	
1464	SK84 上層	陶器	中皿 丸形	17.8	4.2	7.4	—	外) 灰褐7.5YR4/2 断) におい橙 7.5YR7/4	灰釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部分に白土を刷毛塗り。高台内平坦。畳付に面取り。高台無釉。光沢の強い透明の釉。	能茶山窯又は尾戸窯
1465	SK84 上層	陶器	小皿	—	—	5.2	—	外) 赤褐10R4/3 断) におい赤橙 10R6/4	内) 陽刻による牡丹焼 締め	内面型による陽刻文様。	備前19世紀
1466	SK84 上層	陶器	皿 変形形	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	灰釉	口縁部輪花形。灰白色を帯びる光沢の強い半透明の釉で貫入が入る。	
1467	SK84 上層	陶器	中皿 端反形	23.0	6.8	8.6	—	外) におい黄橙 10YR7/2 断) 灰白10YR7/1	内) 錆絵、宝珠 灰釉	見込み蛇の目釉剥ぎし白土を刷毛塗り。高台内平坦。畳付に面取り。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
1468	SK84 上層	陶器	鉢	—	—	—	—	外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 断) 灰白N8/	灰釉	ロクロ成形の後、口縁部を輪花形に変形させる。外面ロクロ目。外面下位無釉。光沢の強い灰オリーブ色の釉で粗い貫入が入る。	尾戸窯か 外面に別個体の口 縁部片が溶着。
1469	SK84 床	陶器	皿又は 鉢 変形形	—	—	—	—	外) におい黄 2.5Y6/3 断) 灰黄2.5Y7/2	灰釉	ロクロ成形後、口縁を切り取り花状の透かしを入れる。外面ロクロ目。におい黄色の半透明の釉。	
1470	SK84 下層	陶器	向付か	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 錆絵 長石釉	外底に脚を貼付。釉は粗い貫入が入る。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
1471	SK84 上層	陶器	鉢又は 碗	—	—	—	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	灰白色の釉で粗い貫入が入る。	瀬戸・美濃産
1472	SK84 上層	陶器	鉢又は 碗	—	—	—	—	外) 灰白7.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	外面に強いロクロ目。灰白色を帯びる半透明の釉。	瀬戸・美濃産
1473	SK84 上層	陶器	鉢か	—	—	8.4	—	外) 黒2.5Y2/1 断) 灰白2.5Y8/2	鉄釉	高台に抉り。高台施釉。高台内無釉。黒色の釉。	
1474	SK84 上層	陶器	捏鉢	42.6	16.3	18.0	—	外) 灰褐7.5YR4/2 断) 明赤褐5YR5/6	焼締め	内面回転ナデ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面ケズリ後ナデ。外底に凹凸と粗砂の付着。	
1475	SK84 上層	陶器	播鉢	17.6	6.0	9.0	—	外) 黒褐5YR3/1 断) 明赤褐5YR5/6	錆釉	内面に櫛目。口縁部外面凹線。外底に凹凸。体部外面ナデ。内面と口縁部外面施釉。外面無釉。	
1476	SK84 上層	陶器	播鉢	—	—	13.6	—	外) におい赤褐 5YR4/3 断) 灰白2.5Y8/2	錆釉	内面に櫛目。口縁部外面凹線。外面イタナデ。内外面と外底に錆釉。	瀬戸・美濃産
1477	SK84 最下層	陶器	播鉢	25.4	8.8	13.0	—	外) 明赤褐2.5YR4/6 断) 明赤褐2.5YR4/6	焼締め	内面に櫛目。内底に放射状の櫛目。口縁部外面凹線。口縁部内面櫛目後回転ナデ。体部外面ケズリ後回転ナデ。外底に凹凸、粗砂が多量に付着。	明石系
1478	SK84 上層	陶器	片口	18.2	9.5	8.0	—	外) 極暗赤褐 5YR2/4 断) におい橙 5YR6/3	鉄釉	半透明の暗内底に目痕。外面下半無釉。半透明の暗赤褐色の釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
1479	SK84 上層	陶器	大鉢 端反形	32.2	—	—	—	外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 断) 黄灰2.5Y5/1	外) 白化粧土刷毛目・ 打刷毛目 内) 白化粧土刷毛目透 明釉		

Tab.63 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1480	SK84 最下層	陶器	鍋	9.2	7.5	7.8	—	外)黒7.5YR2/1 断)黄灰2.5Y6/1	鉄釉	紐状の双耳を貼付。三足を貼付。 暗褐色の釉。目痕4足。	能茶山窯か 外底に煤。
1481	SK84 最下層	陶器	鍋	20.0	9.8	9.2	—	外)黒褐5YR3/1 断)浅黄橙7.5YR8/4	鉄釉	紐状の双耳を貼付。三足を貼付。 黒褐色の釉。内底に目痕。	能茶山窯か 外底に煤。
1482	SK84 上層	陶器	鍋	14.6	6.7	5.6	—	外)暗褐7.5YR3/3 断)褐灰10YR6/1	鉄釉	紐状の双耳を貼付。三足を貼付。 暗褐色の釉。目痕4足。	能茶山窯か 外底に煤。
1483	SK84 上層	陶器	行平	15.1	8.3	5.7	—	外)にぶい黄 2.5Y6/3 断)灰黄2.5Y7/2	灰釉	把手は欠損する。三足を貼付。に ぶい黄色の釉。内底に目痕。	外底に煤。
1484	SK84 下層	陶器	行平	—	—	—	—	外)灰褐7.5YR4/2 断)にぶい橙 7.5YR7/4	外)陽刻による人物	行平の把手。	
1485	SK84 上層	陶器	鍋蓋	—	—	摘み径 3.2	—	外)褐7.5YR4/3 内)褐灰7.5YR4/1 断)にぶい橙 7.5YR7/3	外)周縁に飛鉋、白土 イッチン描き、白土と 緑釉による菖蒲文 内)鉄釉	摘みは削り出しによる。菖蒲文は 白土で素地を塗り、緑釉を重ねる。	
1486	SK84 上層	陶器	鍋蓋	笠部径 15.8	器高 5.1	摘み径 2.9	—	外)にぶい黄橙 10YR7/4 内)灰オリーブ 5Y6/2 断)灰白5Y7/1	外)焼締め・白色の釉 イッチン描き 内)灰釉	外面回転削り。外面に削りによる 多段の沈線。摘みの中央に渦状の 削り痕。灰オリーブ色の釉。	
1487	SK84 最下層	陶器	土瓶 胴折形	8.8	11.0	7.8	17.7	外)オリーブ褐 2.5Y4/4 断)にぶい赤褐 5YR5/4	褐釉	三足を貼付。内面下位施釉。半透 明のオリーブ褐色の釉。	能茶山窯か
1488	SK84 上層	陶器	土瓶	—	—	—	—	外)灰白5Y7/1 断)灰5Y5/1	灰釉	内面無釉。灰白色の白濁した釉。	
1489	SK84	陶器	土瓶	6.2	—	—	—	外)淡黄2.5Y8/3 断)灰白2.5Y8/1	外)錆絵灰釉	淡黄色を帯びる透明の釉で細かい 貫入が入る。	
1490	SK84 上層	陶器	土瓶	4.4	7.4	5.6	10.4	外)灰白5Y8/2 断)灰白5Y7/1	白化粧土・灰釉・緑釉	外面に白化粧土の後、灰釉施釉。 肩部に緑釉を流し掛け。内面無釉。	外底に煤。
1491	SK84 最下層	陶器	土瓶 後手雲 助形	5.4	10.5	3.8	—	外)灰白5Y7/2 断)灰白2.5Y8/2	外)呉須による草花と 蝶 灰釉	三足を貼付。口縁端部と内面上半 無釉。灰オリーブ色を帯びる光沢 の強い透明の釉。	外底に煤。 1491・1498同一個 体。
1492	SK84 上層	陶器	土瓶	9.8	—	—	14.8	外)灰オリーブ 5Y6/2 断)灰白N8/	外)白土イッチン描き による多条圏線と花文	注口部は欠損。内面無釉。	1492・1494同一個 体。
1493	SK84 上層	陶器	土瓶か 後手雲 助形	6.0	13.5	6.6	12.2	外)にぶい赤褐 5YR5/3 断)にぶい橙 5YR7/4	外)白土・鉄錆・呉須・ 緑釉による人物と巻物	薄手の体部。二重の底部をもつ。 三足を貼付。内面無釉。白土を盛 上げるように塗りその上面に文様 を描く。	
1494	SK84 上層	陶器	蓋	笠部径 9.0	—	—	—	外)灰オリーブ 5Y6/2 断)灰白N8/	外)白土イッチン描き による文様 灰釉	灰オリーブ色を帯びる光沢の強い 透明の釉。	1492・1494同一個 体。
1495	SK84 上層	陶器	土瓶蓋	笠部径 10.8	器高 2.3	—	摘み径 1.9	外)灰オリーブ 7.5Y6/2 断)黄灰2.5YR6/1	灰釉	摘みを貼付し三方から折り曲げて 変形させる。外面無釉。灰オリー ブ色を帯びる半透明の釉で粗い貫 入が入る。	
1496	SK84 上層	陶器	土瓶蓋	笠部径 10.2	器高 3.5	かえり 径 6.8	摘み径 1.9	外)にぶい黄褐 10YR4/3 断)橙2.5YR6/6	褐釉	算盤玉形の摘みを貼付。内面とか えり無釉。にぶい黄褐色の透明の 釉。	能茶山窯か
1497	SK84 上層	陶器	土瓶蓋	笠部径 5.0	器高 2.3	かえり 径 3.6	摘み径 1.1	外)にぶい黄橙 10YR7/4 断)灰白10YR8/2	灰釉	内面とかえり無釉。にぶい黄褐色 の釉。	
1498	SK84 最下層	陶器	土瓶蓋	笠部径 6.0	器高 3.6	かえり 径 4.0	摘み径 1.4	外)灰白5Y7/2 断)灰白2.5Y8/2	外)呉須による蝶 灰釉	かえりと内面無釉。	1491・1498同一個 体。
1499	SK84 上層	陶器	土瓶蓋	笠部径 6.8	器高 3.3	かえり 径 4.2	摘み径 1.3	外)にぶい橙 5YR6/4 断)橙5YR7/6	外)白土イッチン描き の後、鉄錆・緑釉・呉 須による丸文と放射状 の文様	上面に円孔。笠部周縁に1条圏線。 内面とかえり無釉。	
1500	SK84 上層	陶器	蓋	笠部径 10.6	器高 5.4	かえり 径 8.2	摘み径 2.3	外)灰白5Y7/1 断)灰白5Y7/1	灰釉・緑釉	摘みは削り出しによる。内面とか えり無釉。灰白色を帯びる透明の 釉。	
1501	SK84 中層	陶器	水注後 手半筒 形	6.6	11.1	8.4	—	外)灰オリーブ 5Y6/2 断)灰白7.5Y7/1	外)錆絵、草文か 灰釉	把手は欠損。口縁端部無釉。内面 施釉。底部無釉。	尾戸窯
1502	SK84 最下層	陶器	水注後 手筒形	9.0	12.9	6.0	—	外)灰白5Y8/2 断)灰白5Y8/1	外)錆絵、半菊文 灰釉	外面下位無釉。淡黄色を帯びる透 明の釉で細かい貫入が入る。内底 に目痕3足。	京都系
1503	SK84	陶器	水注後 手半筒 形	6.6	6.5	6.6	—	外)褐7.5YR4/4 断)灰白10YR8/1	鉄釉	内面施釉。褐色の釉。目痕3足。	

Tab.64 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1504	SK84 上層	陶器	甕	20.0	—	—	24.0	外) 褐7.5YR4/3 断) 灰黄2.5Y6/2	鉄釉	外面上位に多条の沈線。肩部に黒色の釉が流れる。内面施釉。褐色の釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
1505	SK84 上層	陶器	甕	22.8	—	—	24.6	外) 灰褐7.5YR4/2 断) におい黄橙 10YR7/2	鉄釉	外面上位に多段の凹線。内面ロクロ目。内面施釉。灰褐色の釉。上位の釉は黒褐色に発色し流れる。	能茶山窯 1820年代～幕末
1506	SK84 上層	陶器	甕	11.2	—	—	—	外) 暗褐7.5YR3/4 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉	暗褐色の釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
1507	SK84 上層	陶器	甕	19.2	—	—	21.9	外) 暗褐7.5YR 断) 灰黄2.5Y6/1	鉄釉	外面上位に櫛描波状文。内面施釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
1508	SK84 上層	陶器	壺又は甕	—	—	15.6	—	外) 暗赤褐5YR3/2 断) 褐灰5YR5/1	鉄釉	内外面ロクロ目。外底に不定方向のナデ。内面施釉。暗赤褐色の釉。内底に棒状の目痕。	能茶山窯 1820年代～幕末
1509	SK84 上層・ 下層	陶器	甕	24.6	26.2	14.6	26.6	外) 暗褐10YR3/3 断) におい黄橙 10YR7/2	鉄釉	内外面ロクロ目。外底に凹凸。内面施釉。暗褐色の釉。内底に目痕3足。	
1510	SK84 下層	陶器	小瓶 肩張 寸胴形	2.3	12.9	5.0	9.2	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 灰黄2.5Y5/1	鉄釉	口縁部玉縁形。内面無釉。	
1511	SK84	陶器	小瓶 肩張り	2.8	—	—	—	外) 褐7.5YR4/2 断) 灰黄2.5Y7/2	鉄釉	頸部内面シボリ目。内面ロクロ目。内面無釉。褐色の釉。	
1512	SK84 上層	陶器	小瓶	—	—	5.0	9.4	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	内外面ロクロ目。灰白色を帯びる半透明の釉。	
1513	SK84 下層	陶器	花生か	7.8	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	内外面ロクロ目。内面無釉。釉は焼成不良で白濁。	尾戸窯か
1514	SK84 上層	陶器	植木鉢	30.0	—	20.0	—	外) 浅黄2.5Y7/4 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉	底部に径3.2cmの円孔。内面に粘土帯接合痕。内外面回転ナデ。内面無釉。浅黄色の釉。内底に砂目。	瀬戸・美濃産
1515	SK84 最下層	陶器	小瓶	2.0	4.6	3.5	6.1	外) 灰黄 2.5Y7/2・暗緑 灰10GY4/1 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉・銅緑釉	口縁部から肩部に銅緑釉を施釉。外底回転削り。	
1516	SK84 上層	陶器	花生 円筒形	13.2	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉・緑釉	内面ロクロ目。灰白色を帯びる透明の釉で細かい貫入が入る。口縁部から緑釉を流し掛け。緑釉は水色から白色に発色。	
1517	SK84 上層	陶器	灯明 受皿	10.8	2.2	4.4	—	外) 淡黄2.5Y7/3 断) 灰白2.5Y8/2	内) 櫛目 灰釉	外面無釉。浅黄色を帯びる透明の釉で細かい貫入が入る。目痕3足。	京都系口縁部に タール状の油痕。
1518	SK84 上層	陶器	灯明 受皿	6.7	1.5	3.0	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 不明	内) 櫛目 灰釉	外面無釉。灰黄色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。目痕3足。	京都系口縁部に タール状の油痕。
1519	SK84 最下層	陶器	灯明 受皿	8.8	2.0	3.0	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	外面無釉。淡黄色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。目痕3足。	京都系口縁部に灯 芯油痕。
1520	SK84 上層	陶器	灯明 受皿	10.6	—	—	—	外) 黒褐7.5YR3/2 断) 褐灰10YR6/1	焼締め	外底回転糸切り。褐色の釉。	
1521	SK84 上層	陶器	灯明 受皿	10.6	2.3	3.4	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	外面無釉。淡黄色を帯びる透明の釉で細かい貫入が入る。	京都系
1522	SK84 上層	陶器	灯明 受皿	10.2	2.2	4.0	—	外) 淡黄2.5Y7/3 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	外面無釉。浅黄色を帯びる透明の釉で細かい貫入が入る。	京都系
1523	SK84 最下層	陶器	灯明 受皿 台付き	6.4	6.2	3.7	—	外) 灰褐7.5YR4/2 断) 灰白10YR7/1	鉄釉		尾戸窯又は能茶山 窯
1524	SK84 下層	陶器	焜炉	22.0	—	—	—	外) 暗褐10YR3/4 断) 灰黄2.5Y7/2	外) 多状の沈線 鉄釉	前方に口縁部から切り込む窓。内面に手捏ねによる突起を貼付。後方に径1.9cmの円孔。斜め後方に径1.4cmの円孔数穴。内面下半無釉。暗褐色の透明の釉。	
1525	SK84 上層	陶器	火入れ	7.6	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	白化粧土・灰釉	外面に白化粧土の後、灰釉施釉。内面無釉。灰釉は粗い貫入が入る。	口縁部に敲打痕。
1526	SK84	陶器	手焙り	8.4	—	—	17.8	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y8/1	外) 青白色の釉と鉄釉 の流し掛け 灰釉	内面無釉。	
1527	SK84 上層	陶器	蓋物蓋	笠部径 10.8	1.5	かえり 径 8.8	—	外) 灰白7.5Y8/1 断) 灰白7.5Y8/1	灰釉	内面とかえり無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。	京都・信楽系
1528	SK84 上層	陶器	蓋物 半筒形	9.0	6.0	5.2	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	端部無釉。高台無釉。淡黄色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。内底に目痕3足。	京都・信楽系
1529	SK84 上層	陶器	合子蓋	笠部径 5.8	1.1	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	外) 鉄錆と呉須による 紅葉 灰釉	端部無釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉で粗い貫入が入る。	



Tab.65 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大径				
1530	SK84 最下層	陶器	水注 類か	7.0	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	外) 錆絵 灰釉	把手、注口の有無は不明。内面施 釉。口縁部内面と端部無釉。	京都系
1531	SK84 上層	陶器	柄杓	8.4	6.0	4.6	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/2	内) 鉄錆による圏線 灰釉	把手の差し込み上下に円孔あり。 高台無釉。浅黄色を帯びる透明の 釉で貫入が入る。目痕3足。	京都・信楽系
1532	SK84 上層	陶器	柄杓	7.8	5.1	4.2	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白N8/	内) 鉄錆による圏線 灰釉	柄は欠損。高台無釉。灰白色を帯 び光沢の強い透明の釉で粗い貫入 が入る。内底に目痕3足。	京都・信楽系
1533	SK84 上層	陶器	不明	15.6	—	—	—	外) 灰黄褐10YR6/2 断) 灰白2.5Y7/1	焼締め・鉄釉	内外面強いロクロ目。部分的に暗 褐色の釉を掛け分ける。内面無釉。	
1534	SK84 上層	陶器	水指か	14.2	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	内面下位無釉。灰白色を帯びる半 透明の釉で細かい貫入が入る。	尾戸窯
1535	SK84	陶器	蓋か	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y8/1	灰釉	摘みを貼付。内外面施釉。灰白色 を帯びる半透明の釉で細かい貫入 が入る。	尾戸窯
1536	SK84	陶器	不明 変形形	—	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	灰釉・錆釉	側面に円形と楕円形の透かし。外 側面に錆釉。内外面に灰釉。灰白 色を帯びる透明の釉で細かい貫入 が入る。	
1537	SK84 最下層	陶器	ミニ チュア 瓢箪	0.7	3.7	—	2.2	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/1	外) 錆絵、梅花・格子 灰釉・緑釉	手握ね成形。外底と口縁部無釉。 部分的に緑釉を流し掛け。	美濃 織部焼 17世紀前葉
1538	SK84 上層	未成品 素焼き	不明	—	—	—	—	外) 白 断) 白		削り出し高台。内面回転ナデ。外 面回転ケズリ後回転ナデ。	
1539	SK84 上層	窯道具	トチン	—	—	8.5	—	外) 灰赤2.5YR4/2 断) 灰N6/		手握ね成形。外面にシボリ目。	尾戸窯 外底に刻印。
1540	SK84 上層	窯道具	ハマ	径5.3	1.5	—	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2		たたら成形。円盤状の体部に三足 を貼付。上面と下面に回転糸切り 痕。体部、三足とも灰白色の胎土 を使用。	尾戸窯三足の先端 は使用により欠 損。
1541	SK84	窯道具	ハマ	径10.1	2.1	—	—	外) 灰黄褐10YR5/2 断) 不明		たたら成形。リング状の体部に五 足を貼付。上面と下面に回転糸切 り痕。体部は褐色、五足は灰白色 の胎土を使用。	尾戸窯か五足の先 端は使用により欠 損。
1542	SK84 上層	土師質 土器	杯	11.4	3.6	6.6	—	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1543	SK84	土師質 土器	小皿	6.2	1.0	4.4	—	外) 橙5YR7/6 断) 橙5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1544	SK84 上層	土師質 土器	小皿	6.0	1.2	3.6	—	外) 橙2.5YR6/6 断) 橙2.5YR6/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1545	SK84 最下層	土師質 土器	小皿	6.0	0.9	4.2	—	外) 橙5YR7/6 断) 橙5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1546	SK84 上層	土師質 土器	白土器 小皿	12.0	2.4	8.4	—	外) 灰白7.5YR8/2 断) 灰白7.5YR8/2	内) 陽刻による寿字文	内底に型による陽刻文様。内面周 縁ヨコナデ。外面ヨコナデ。外底 ケズリ後直線方向のナデ。	尾戸窯
1547	SK84 上層	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	7.6	—	外) 灰白10YR8/1 断) 灰白10YR8/1	内) 陽刻による寿字文	内底に型による陽刻文様。内面周 縁回転ナデ。口縁部外面回転ナデ。 外面下位と外底回転ケズリ。	尾戸窯
1548	SK84 上層	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	8.0	—	外) 灰白10YR8/1 断) 灰白10YR8/1	内) 陽刻による寿字文	内底に型による陽刻文様。内面周 縁回転ナデ。口縁部外面回転ナデ。 外面下位回転ケズリ後回転ナデ。 外底回転ケズリ後ナデ。	尾戸窯
1549	SK84 最下層	土師質 土器	白土器 小皿	11.4	1.8	8.8	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による寿字文	内底に型による陽刻文様。内面周 縁ヨコナデ。外面ヨコナデ。外底 直線方向のナデ。	尾戸窯
1550	SK84	土師質 土器	白土器 小皿	12.2	2.4	7.8	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による寿字文	内底に型による陽刻文様。内面周 縁回転ナデ。口縁部外面回転ナデ。 外面下位と外底回転ケズリ。	尾戸窯
1551	SK84 上層	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	7.4	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	内) 陽刻による寿字文	内底に型による陽刻文様。内面周 縁ヨコナデ。口縁部外面ヨコナデ。 外面下位と外底回転ケズリ。	尾戸窯
1552	SK84 上層	土師質 土器	白土器 小皿	11.8	2.1	8.2	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による高砂文	内底に型による陽刻文様。内面周 縁回転ナデ。外面と外底回転ケズ リ。器面調整は粗い。	尾戸窯
1553	SK84 上層	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	8.6	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による高砂文	内底に型による陽刻文様。内面周 縁回転ナデ。外面と外底回転ケズ リ。	尾戸窯
1554	SK84 上層	土師質 土器	白土器 小皿	11.4	2.0	6.8	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	内) 陽刻による松竹梅 鶴亀文	内底に型による陽刻文様。内面周 縁回転ナデ。口縁部外面回転ナデ。 外面下位と外底回転ケズリ。	尾戸窯
1555	SK84 上層	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	7.0	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	内) 陽刻による高砂文	輪高台をもつ。内底に型による陽 刻文様。外底に回転方向のナデ。	尾戸窯

Tab.66 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大径				
1556	SK84	土師質土器	焙烙	32.0	—	—	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4		口縁部内外面と内底回転ナデ。外底に凹凸。	関西系 口縁部外面に煤。 内底に焦げ。
1557	SK84 上層	土師質土器	焙烙	34.0	—	—	—	外)にぶい黄橙 10YR5/3 断)にぶい黄橙 10YR5/3		口縁部内外面と内底回転ナデ。外底に凹凸。	関西系 外底に煤。
1558	SK84	土師質土器	焙烙	28.2	4.6	—	—	外) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰黄2.5Y6/2		口縁部内外面と内底回転ナデ。外底に凹凸とチヂレ目。	関西系 口縁部外面に煤。 内底に焦げ。
1559	SK84 上層	施釉土器	胡麻煎り	—	—	—	—	外) 橙7.5YR6/6 断) 橙5YR7/6	外) 型による陽刻文様と文字「胡麻萌」 橙色の低火度釉	型押成形上下貼り合わせ。上面に楕円形の窓。把手は中空。外面チヂレ目。内面ナデ。内面と外底無釉。	内面に焦げ。外底に煤。 1559・1560同一型。
1560	SK84 上層	施釉土器	胡麻煎り	—	—	—	—	外) 明赤褐5YR5/8 断) 橙5YR7/6	外) 型による陽刻文様と文字「胡麻萌」 橙色の低火度釉	型押成形上下貼り合わせ。上面に楕円形の窓。把手は中空で先端部に円孔あり。外面チヂレ目。内面ナデ。内面と外底無釉。	内面に焦げ。把手下面に煤。 1559・1560同一型。
1561	SK84	土師質土器	胡麻煎り	—	—	—	—	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい黄橙 10YR7/3	外) 型による陽刻文様、唐草と文字「□□」	型押成形上下貼り合わせ。上面に窓。外面チヂレ目。内面ユビオサエ・ナデ。	
1562	SK84	土師質土器	胡麻煎り	—	—	—	—	外) 橙7.5YR7/6 断) 橙7.5YR7/6		型押成形上下貼り合わせ。外面チヂレ目。内面ユビオサエ・ナデ。接合部に櫛目。	外底に煤。
1563	SK84 上層	土師質土器	羽釜	—	—	5.2	12.9	外) 浅黄橙10YR8/3 断) 浅黄橙10YR8/3		内面回転ナデ。外底と体部下半回転ケズリ。	外面に煤。
1564	SK84 床上層	土師質土器	蓋か	笠部径 9.2	2.1	かえり 径 6.6	—	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6	練り込み手	天井部に円孔4穴。外面ナデ・ミガキ。内面回転ナデ。胎土は橙色の素地に灰白色の粘土を練り込む。	
1565	SK84 上層	土師質土器	焜炉丸形	15.0	—	—	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4		内面に型による内部突起を貼付。窓の有無は不明。外面ナデ。内面回転ナデ。	在地系 口縁部に煤と滲み。
1566	SK84 上層	土師質土器	焜炉丸形	—	—	17.4	—	外)にぶい黄橙 10YR7/4 断) 黄灰2.5Y6/1		体部に径8mmの円孔数穴。外面ナデ。底部に輪高台を貼付。	
1567	SK84 上層	土師質土器	焜炉筒形	16.6	—	—	—	外)にぶい黄橙 10YR6/3 断)にぶい黄橙 10YR6/3		内面に手握ねによる突起を貼付。体部中位に円孔。外面縦方向のイタナデ。内面ヨコハケ。	口縁部に煤。
1568	SK84 上層	土師質土器	焜炉筒形	14.0	—	—	16.0	外)にぶい黄橙 10YR7/4 断)にぶい黄橙 10YR7/4		粘土紐積み上げ成形。窓と内部突起の有無は不明。口縁部にアーチ状の切り込みあり。体部中位に径1cmの円孔あり。内面ユビオサエ後回転ナデ。外面回転ナデ。	口縁部内面に煤。
1569	SK84 上層	土師質土器	焜炉筒形	—	—	17.0	—	外)にぶい黄橙 10YR7/4 断)にぶい黄橙 10YR7/4		内面下位に断面三角形の突帯を貼付。内外面回転ナデ。外底ナデ。三足は剥離。	
1570	SK84 上層	土師質土器	焜炉筒形	14.0	—	14.4	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1		外面体部前方下位に窓。口縁部内面に箱形の突起を貼付。内部施設をもつ。内部施設の前下方位に方形の窓、上位に円孔数穴。内面クロ目。外面ナデ・ミガキ。削り出し高台。高台の三方にアーチ状の挟り。	京都系 口縁部内面に煤。
1571	SK84 上層	土師質土器	焜炉筒形	—	—	18.6	—	外) 赤橙10R6/6 内)にぶい黄橙 10YR7/4 断)にぶい黄橙 10YR7/4	外) 赤彩	体部前方に窓。輪高台を貼付。高台にアーチ状の挟りあり。体部外面赤彩、内面ヨコナデ。外底ナデ。	
1572	SK84	土師質土器	焜炉筒形	—	—	—	—	外)にぶい黄橙 10YR6/4 断)にぶい黄橙 10YR6/4		体部前方下位に窓。内面下位に断面三角形の突帯を貼付。外面に粗いイタナデ。内面回転ナデ。	
1573	SK84 上層	土師質土器	焜炉筒形	—	—	12.0	—	外) 橙7.5YR7/6 断)にぶい橙 7.5YR7/4		内面下位に断面三角形の突帯を貼付。前方下位に楕円形の窓。外面ナデ、内面に回転ナデ。外面ナデ。外底イタナデ。	
1574	SK84 上層	土師質土器	焜炉筒形	—	—	13.0	—	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断) 灰白7.5YR8/1		体部前方下位に楕円形の窓。内面下位に段。外面ナデ。内面ヨコハケ。外底ナデ。	

Tab.67 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1575	SK84 上層	瓦質 土器	焜炉 箱形	20.0	19.2	—	20.6	外) 黄灰2.5Y4/1 断) ぶい黄橙 10YR6/3		たたら成形。体部前方下位に方形の窓を設け枠を貼付。側面に扇形の把手を貼付。内部施設は欠損する。外面ナデ・ミガキ。内面タテハケ。	
1576	SK84 上層	土師質 土器	焜炉 さな	7.0	1.3	3.6	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。径1.3cmの円孔数穴。	
1577	SK84 下層	土師質 土器	焜炉 さな	径 10.9	全厚 0.8	—	—	外) ぶい橙 7.5YR6/4 断) ぶい橙 7.5YR6/4		たたら成形。径1.3cmの円孔数穴。	
1578	SK84 上層	瓦質 土器	焜炉 箱形	18.0	—	—	—	外) オリーブ黒 5Y3/1 断) ぶい黄橙 10YR7/3	外) 印花文	たたら成形。体部前方下位に窓。側面に松笠形の把手を貼付。内部施設は欠損する。外面ミガキ。内面に凹凸。	
1579	SK84 上層・ SK52	土師質 土器	竈	32.0	28.5	33.0	—	外) ぶい橙 7.5YR7/4 断) ぶい橙 7.5YR7/4	外) 列点文	粘土紐積み上げ成形。口縁部外面に粘土帯を貼付し口縁端部を拡張させる。外面にヘラ彫りによる列点文。内外面横方向のイタナデ。	
1580	SK84 上層	土師質 土器	竈	29.0	—	—	—	外) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰黄2.5Y6/2	外) 列点文	粘土紐積み上げ成形。体部前方にアーチ状の窓。口縁端部を拡張させ、外面上位にヘラ彫りによる列点文を巡らす。外面回転ナデ。内面ユビオサエ・回転ナデ。	外面と口縁部内面に強い煤。
1581	SK84 上層	土師質 土器	竈	28.8	—	—	—	外) ぶい黄橙 10YR6/4 断) ぶい黄橙 10YR6/4	外) 列点文	粘土紐積み上げ成形。体部前方に窓。口縁端部を拡張させ、外面上位にヘラ彫りによる列点文を巡らす。外面回転ナデ。内面ココナデ。	外面と口縁部内面に強い煤。
1582	SK84 上層	土師質 土器	竈・焜 炉類か	—	—	12.2	—	外) ぶい黄橙 10YR6/4 断) ぶい黄橙 10YR6/4		底部をもたない。内面下位に断面三角形の突帯を貼付。外面に縦方向の粗いイタナデ。底部外面の1箇所に粘土塊を貼付。	
1583	SK84 上層・ 中層	土師質 土器	火消壺	17.0	25.5	18.0	24.2	外) ぶい橙 7.5YR6/4 断) ぶい橙 7.5YR6/4		外面ナデ。内面ロクロ目。外底に凹凸。	
1584	SK84 下層	土師質 土器	火消壺	13.0	22.3	14.2	19.8	外) ぶい黄橙 10YR7/4 断) ぶい黄橙 10YR7/4		外面回転ナデ。内面ナデ。内面に粘土紐接合痕。	内面に煤。
1585	SK84 上層・ 中層	瓦質 土器	火鉢 半筒形	17.8	8.0	14.8	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 黒2.5Y2/1		内外面回転ナデ。外底に板状原体の圧痕。外底に三足を貼付。	
1586	SK84 上層	瓦質 土器	火鉢 半筒形	16.8	8.7	17.2	—	外) 灰黄2.5Y7/2 内) 黒2.5Y2/1 断) 灰黄2.5Y7/2		内外面回転ナデ。外底周縁ナデ。外底中央に板状原体の圧痕。外底に三足を貼付。	
1587	SK84 上層	瓦質 土器	火鉢か	26.1	—	—	—	外) 黒2.5Y2/1 断) 灰黄 2.5Y7/2・黒 2.5Y2/1		外面ミガキ。内面回転ナデ。	
1588	SK84 上層	瓦質 土器	火鉢 箱形	—	7.5	—	—	外) 灰5Y5/1 断) 灰白5Y7/1		外面ナデ。内面ユビナデ。三足を貼付。	
1589	SK84 下層	瓦質 土器	火鉢	—	—	—	—	外) 黄灰2.5Y4/1 断) 灰白 2.5Y8/1・黄灰 2.5Y4/1		外面型による粒状の文様と印花文。外面上位に断面三角形の突帯を貼付。獣面の双耳を貼付。	
1590	SK84 床	施釉 土器	ミニ チュア 焜炉	5.0	—	—	—	外) ぶい黄橙 10YR6/4 断) ぶい黄橙 10YR7/3	外) 薄緑を帯びる透明の低火度釉	ロクロ成形。前方に口縁部から切り込む窓をもつ。窓の周縁に手捏ねによる枠を貼付。内部突起を貼付。体部に円孔。内面無釉。	
1591	SK84 上層	施釉 土器	ミニ チュア 土瓶	—	—	—	—	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6	透明の低下度釉	型作り。	
1592	SK84 下層	土師質 土器	蓋 (蓋物 又は香 合か)	—	—	—	—	外) 浅黄 2.5Y7/3・ぶい橙 5YR6/4 断) 浅黄 2.5Y7/3・ぶい橙 5YR6/4	南瓜か	手捏ね成形。外面ナデ後ヘラ彫りと刺突。摘み部分は橙色、その他の部分は浅黄色の胎土を使い分ける。南瓜等を表したものの蓋部分か。	
1593	SK84 上層・ 中層	土師質 土器	玩具 類か	径 7.2	1.2	—	—	外) ぶい黄橙 10YR7/3 断) ぶい黄橙 10YR7/3	外) 型による陰刻文 様、菊花	型押成形。中央に径4mmの円孔。外底に凹凸。	
1594	SK84 上層・ 中層	土師質 土器	型	径 7.6	2.5	—	—	外) 橙7.5YR6/6 断) 橙7.5YR6/6	菊花	外面ナデ。	

Tab.68 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1595	SK84	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外)にぶい橙 2.5YR6/4 断)にぶい橙 2.5YR6/4	達磨か	型押成形貼り合わせ。中空。内面 ユビオサエ。	
1642	SK85	白磁	猪口 腰張形	9.6	5.2	4.4	—	外)白 断)白		口縁部端反形。	肥前産
1643	SK85	陶器	中碗 轆轤形	—	—	3.8	—	外)灰白5Y7/2 断)灰白2.5Y7/1	灰釉	外面に強いロクロ目。高台無釉。 灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯
1644	SK85	土師質 土器	白土器 小皿	11.8	1.9	8.0	—	外)灰白2.5Y8/1 断)灰白2.5Y8/1	無文	器面は摩耗し調整不明。	尾戸窯
1646	SK88	磁器 染付	猪口 広東形	8.2	6.2	5.2	—	外)白 断)白	外)山水文 見込み)水に網代		肥前産
1647	SK88 上層	磁器 染付	薄手 酒杯	7.2	3.5	2.8	—	外)白 断)白	外)植物 内)植物		肥前産 19世紀前半～幕末
1648	SK88	陶器	不明	—	—	—	—	外)灰白5Y8/1 断)灰白2.5Y8/1	長石釉		美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
1649	SK88 上層	陶器	中碗 筒丸形	11.6	9.3	6.2	—	外)灰黄2.5Y7/2 断)灰白2.5Y8/2	灰釉	外面ロクロ目。高台無釉。淡黄色 を帯びる半透明の釉で細かい貫入 が入る。	尾戸窯
1650	SK88	陶器	中碗 半球形	10.2	—	—	—	外)灰白5Y7/2 断)灰白5Y8/1	外) 錆絵、注連縄文 灰釉	灰釉は透明で粗い貫入が入る。	京都・信楽系
1651	SK88 上層	陶器	中皿	—	—	7.4	—	外)オリーブ黄 5Y6/3 断)灰白5Y7/2	外) 呉須絵、植物	呉須はオリーブ灰色に発色。灰釉 はオリーブ黄色を帯び貫入が入 る。	尾戸窯か
1652	SK88	陶器	灯明 受皿	10.8	2.2	4.0	—	外)灰白5Y8/2 断)灰白2.5Y8/2	灰釉	油溝半月状。外面無釉。灰白色を 帯びる半透明の釉で細かい貫入が 入る。	関西系
1653	SK88 中層 SK89 下層	瓦質 土器	火鉢	25.0	—	—	26.1	外)黒 断)灰白5Y7/1	外) 印花文・菱文	双耳の有無は不明。体部外面に粒 状の圧痕と印刻文様。外面回転ナ デ。内面ユビオサエ・回転ナデ。 内面に粘土紐接合痕。三足に貫通 する径4mmの穿孔あり。	
1654	SK88 上層	土師質 土器	焜炉 丸形	—	—	16.0	—	外)灰白10YR8/2 内)黄灰2.5Y4/1 断)灰白10YR8/2		円形の三足を貼付。外面ミガキ。 内面回転ナデ。内面のみに炭素吸 着。	京都 外底に角枠内「深 草一古」銘印。
1655	SK92	陶器	小皿 丸形	10.0	—	—	—	外)灰オリーブ 5Y4/2 断)黄灰2.5Y5/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。目痕の有無は不 明。高台無釉。灰オリーブ色の釉。	肥前産 1590～1630年代
1656	SK92 下層	土師質 土器	杯	11.2	3.2	5.0	—	外)灰黄2.5Y7/2 断)灰黄2.5Y7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1657	SK92 下層	土師質 土器	杯	10.8	3.1	6.0	—	外)にぶい橙 7.5YR6/4 断)にぶい橙 7.5YR6/4		摩耗し調整不明。	外面に煤。
1658	SK92 下層	土師質 土器	杯	10.4	2.8	5.0	—	外)灰黄2.5Y7/2 断)灰黄2.5Y7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	内外面が強く煤け る。
1659	SK92 下層	土師質 土器	皿又 は杯	9.4	2.4	5.0	—	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1660	SK93 下層	青花	中皿 折縁形	19.6	—	—	—	外)白 断)白	外) 宝文 内)芙蓉手		中国 景德鎮窯系 17世紀
1661	SK93 下層	陶器	小皿 丸形	10.8	2.4	4.6	—	外)オリーブ黄 5Y6/3 断)灰白2.5Y8/2	灰釉	高台無釉。オリーブ黄色の釉で粗 い貫入が入る。内底に灰白色の粘 土が溶着。	瀬戸 16世紀
1662	SK93 下層	土師質 土器	杯	10.2	3.1	5.0	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1663	SK93 下層	土師質 土器	焼塩壺	6.6	—	—	8.0	外)にぶい橙 7.5YR7/3 断)にぶい橙 7.5YR7/3		内外面ユビオサエ・ユビナデ。内 面にシボリ目。	
1664	SK94 下層	磁器 染付	中碗 丸形	10.3	6.9	2.6	—	外)明緑灰7.5GY8/1 断)白	外) 山水文・圏線 高台外)圏線	初期伊万里。高台内兜巾状。高台 内無釉。高台外側まで施釉。呉須 は暗青灰色。	肥前産 1650～1660年代
1665	SK94 下層	土師質 土器	人形	—	—	全幅 3.6	—	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい橙 7.5YR7/4	船と人物	型押成形。中実。外面にキラ粉。 底部から斜め方向に穿孔を穿つ。	

Tab.69 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1666	SK95	陶器	向付	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	外) 錆絵 内) 錆絵 灰釉		美濃 17世紀初頭 織部焼
1667	SK95	陶器	瓶類か	—	—	—	—	外) 黄灰2.5Y6/1 断) にぶい黄橙 10YR7/3	外) 錆絵	絵唐津。内面布目。内面施釉。	肥前産 1590～1610年代
1668	SK96	青磁	中碗	—	—	4.5	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	青磁釉	高台内兜巾状。高台無釉。畳付に 灰黄色の粗砂が多量に付着。	肥前産 1630～1640年代
1669	SK96	磁器 染付	瓶	—	—	7.0	—	外) 白 断) 白	外) 圏線 高台外) 二重圏線	捻りを表した瓢箪形の瓶か。外面 に削り出しによる縦筋。高台内無 釉。	肥前産 有田 17世紀後半
1670	SK96	陶器	中皿 折縁形	20.0	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y8/1	灰釉	外面ロクロ目。高台無釉。灰白色 を帯びる透明の釉。	
1671	SK97	青磁	皿 方形	10.6	2.7	5.5	—	外) オリーブ灰 5GY6/1 断) 白	内) 型による陽刻文 様、動物と植物	型打成形。高台施釉。オリーブ灰 色の釉。露胎部は橙色に発色。	三田焼
1672	SK97	磁器 染付	段重	12.0	4.9	6.4	—	外) 白 断) 白	外) 丸に松・竹・梅、 網目文	口縁部内面と端部無釉。内面施 釉。底部脇に灰白色の砂が多量に 付着。	肥前系
1673	SK97	磁器 染付	燗徳利	3.4	—	—	7.1	外) 白 断) 白	外) 雷文帯・草花文 白土	呉須絵の後、花を白土を盛り上げ る様にして塗り分ける。胎土は透 明感をもつ。	関西系
1674	SK97 上層	陶器	片口	15.8	8.0	6.8	—	外) 黒褐5YR2/2 断) 黄灰2.5Y4/1	鉄釉	高台無釉。内底に目痕5足。	能茶山窯 1820年代～幕末
1675	SK97 上層	陶器	小瓶	—	—	5.6	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	外) 鉄錆による文字 「□□神」 灰釉	内面無釉。高台施釉。灰白色を帯 びる透明の釉で細かい貫入が入 る。	尾戸窯
1676	SK97	陶器	甕	26.0	—	15.0	27.2	外) 暗赤褐5YR3/3 断) 褐灰10YR5/1	鉄釉	外面上位に5条と2条の沈線。内外 面ロクロ目。内面施釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
1677	SK97	陶器	甕	19.2	21.0	16.0	22.4	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 褐灰10YR5/1	鉄釉	外面上位に4条と2条の沈線。内外 面ロクロ目。内面施釉。内底に目 痕。外底周縁に団子状の胎土目剥 離痕。	能茶山窯 1820年代～幕末
1678	SK97	土師質 土器	小皿	5.6	7.0	4.0	—	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1679	SK97	瓦質 土器	焙烙	31.6	—	—	—	外) 灰5Y5/1 断) にぶい黄橙 10YR7/2		口縁部外面回転ナデ。外底に凹凸。 内面回転ナデ。炭素吸着は弱い。	関西系
1680	SK97	土師質 土器	焙烙	43.0	—	—	—	外) 褐7.5YR4/3 断) にぶい橙 7.5YR6/4		口縁部外面ヨコナデ。外底イタナ デ。内面ヨコナデ。	讃岐 岡本系 外面に煤。内底に 焦げ。
1681	SK97	土師質 土器	焜炉 筒形	14.0	—	—	15.7	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 7.5YR6/4		外面ナデ。内面ユビオサエ・ヨコ ナデ。口縁部内面回転ナデ。径9 mmの円孔あり。	内面に煤。
1682	SK97	土師質 土器	焜炉 筒形	—	—	—	—	外) にぶい黄橙 10YR6/3 断) にぶい黄橙 10YR6/3		底部をもたない。内面下位に断面 三角形の突帯を貼付。外面ユビオ サエ・ナデ。内面回転ナデ。	関西産
1683	SK97	土師質 土器	泥面子	全長 2.4	全厚 0.8	全幅 2.5	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4	侍	型押成形。裏面ナデ・チヂレ目。	関西産
1684	SK97	土師質 土器	型	—	—	—	—	外) 橙7.5YR7/6 断) 橙7.5YR7/6		内外面ナデ。内外面にキラ粉。	
1689	SK100	磁器 染付	中碗 端反形	10.6	6.0	4.8	—	外) 白 断) 白	外) 山水文 高台外) 二重圏線 口縁内) 二重圏線 見込み) 不明・圏線 高台内) 角枠内「茶」 銘		能茶山窯 1820年代～幕末 高台内角枠内「茶」 銘
1690	SK100	磁器 染付	中碗 端反形	10.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 区画割りに草花文 口縁内) 帯線・圏線 見込み) 不明・二重圏 線		肥前産又は肥前系 1820～1260年代
1691	SK100	磁器 染付	皿又は鉢	—	—	5.5	—	外) 白 断) 白	外) 宝文か 内) 縞・花卉 高台内) 「大観丁□作 之」銘・圏線		肥前系
1692	SK100	磁器 染付	小皿	10.8	2.7	6.0	—	外) 白 断) 白	外) 草文か 内) 墨弾きによる宝文	口縁部輪花形。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に「サ」銘。

Tab.70 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1693	SK100	磁器 染付	皿又は鉢	—	—	—	—	外)白 断)白	外)如意頭文 内)陽刻文様	陽刻型打成形。	肥前産
1694	SK100	磁器 色絵 染付	鉢 輪花形	—	—	—	—	外)灰白2.5GY8/1 断)白	内外)呉須と上絵付 (赤・緑・黄・黒・金) による草花文	金襴手様式。	肥前産 有田 1690～1730年代
1695	SK100	磁器 染付	紅猪 口か	5.6	1.9	3.6	—	外)白 断)白	内)草文	口縁部輪花形。	肥前産
1696	SK100	白磁	紅皿 菊花形	4.6	1.3	1.4	—	外)白 断)白	外)菊弁	型押成形。外面下半無釉。	肥前産
1697	SK100	磁器 染付	蓋物 蓋	笠部径 5.2	器高 1.8	かえり 径 4.4	摘み径 1.8	外)白 断)白	外)草花文・二重圏線	内面施釉。かえり無釉。	肥前産
1698	SK100	磁器 染付	人形又は 水滴	—	—	—	—	外)白 断)白	動物	型押成形貼り合わせ。内面ユビオ サエ・ユビナデ。内底に布目。	
1699	SK100	白磁	水滴又は 人形	—	—	—	—	外)白 断)白	魚	型押成形貼り合わせ。内面ユビオ サエ・ユビナデ。	肥前産
1700	SK100	陶器	中碗	—	—	5.2	—	外)灰白5Y7/1 断)灰白5Y7/1	灰釉	高台内に渦状の鉋痕。高台施釉。 釉は焼成不良気味で部分的に白 濁。	尾戸窯
1701	SK100	陶器	鉢 浅丸形	12.8	—	—	—	外)にぶい橙 7.5YR7/3 断)にぶい橙 7.5YR7/4	外)錆絵、笹文 灰釉	外面に強いロクロ目による段。灰 釉は灰白色を帯びる透明の釉で細 かい貫入が入る。	尾戸窯
1702	SK100	陶器	香炉又は 火入れか	—	—	—	—	外)灰褐5YR4/2 断)灰褐5YR4/2	外)型による陰刻文 様、宝文 焼締め		備前か
1703	SK100	陶器	播鉢	29.8	13.9	17.0	—	外)明赤褐2.5YR5/6 断)明赤褐2.5YR5/6	焼締め	口縁部外面に凹線。内面に櫛目。 内底に放射状の櫛目。体部外面イ タナデ。外底に凹凸。	堺・明石系
1704	SK100	土師質 土器	杯	10.8	2.9	5.0	—	外)にぶい黄橙 10YR6/3 断)にぶい黄橙 10YR6/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1705	SK100	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	7.7	—	外)淡黄2.5Y8/2 断)淡黄2.5Y8/2	内)陽刻による高砂文	内底に型による陽刻文様。内面周 縁回転ナデ。外面下位回転ケズリ。 外底回転ケズリ。	尾戸窯
1706	SK100	土師質 土器	胡麻 煎り	—	—	把手径 3.2	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4		型押成形上下貼り合わせ。中空。 内面ユビオサエ・ユビナデ。外面 にキラ粉。把手先端の上面に円孔。	外底に煤。
1707	SK100	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外)にぶい橙 7.5YR6/4 断)にぶい橙 7.5YR6/4	不明	型押成形前後貼り合わせ。中空。 内面ユビオサエ・ユビナデ。	
1709	SK102	磁器 染付	小皿	—	—	4.6	—	外)灰白5GY8/1 断)白	内)草花文	初期伊万里。呉須はオリブ灰色 に発色。内面に灰白色の粗砂が落 ちる。	肥前産 1630～1650年代
1710	SK102	陶器	中碗	—	—	6.4	—	外)灰黄2.5Y6/2 断)浅黄2.5Y7/3	灰釉	外面ケズリによる稜。高台内に渦 状の鉋痕。内底に渦状のロクロ目。 高台施釉。灰黄色を帯びる透明の 釉で光沢が強い。	
1712	SK115	磁器 染付	小皿 丸形	11.4	3.0	6.2	—	外)白 断)白	外)如意頭連続唐草 文・圏線 高台外)二重圏線 内)菊水・二重圏線 見込み)蝶 高台内)角枠内渦 「福」・圏線		肥前産
1713	SK115 上層	青磁	小皿 丸形	12.2	3.3	5.6	—	外)明オリブ灰 2.5GY7/1 断)灰白N8/	内)丸彫りによる菊花 青磁釉	蛇の目凹形高台。高台内兜巾状。 高台施釉。	肥前 波佐見 17世紀後葉～18世 紀前半
1714	SK115 上層	青磁	小皿 丸形	12.4	3.3	6.0	—	外)明オリブ灰 2.5GY7/1 断)灰白N8/	内)丸彫りによる文様 青磁釉	蛇の目凹形高台。高台内兜巾状。 高台施釉。	肥前 波佐見 17世紀後葉～18世 紀前半
1715	SK115	磁器 染付	中碗 丸形	9.9	—	—	—	外)白 断)白	外)草花文	透明釉は貫入が入る。	肥前産
1716	SK115	磁器 染付	瓶	—	—	6.6	10.2	外)白 断)白	外)不明	呉須は青灰色で滲む。畳付に白色 の粗砂が付着。	肥前産
1717	SK115	陶器	中碗	9.0	—	—	—	外)褐灰10YR6/1 断)灰黄褐10YR6/2	外)白象嵌による七宝 文 灰釉	内面に強いロクロ目。灰白色を帯 びる半透明の釉で細かい貫入が入 る。	尾戸窯

Tab.71 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版番号	出土地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大径				
1718	SK115	陶器	鉢か 変形形	—	—	—	—	外) におい黄褐 2.5Y5/3 断) 灰黄褐10YR6/2	灰釉	ロクロ成形の後、変形させ口縁を 切り取る。円形の透かしをもつ。 内面回転ナデ。	
1719	SK115	土師質 土器	杯	9.8	2.8	6.0	—	外) におい橙 7.5YR7/4 断) におい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1720	SK116	陶器	小皿	10.4	1.8	6.0	—	外) 黒褐10YR2/2 断) 灰白2.5Y8/2	褐釉	ひだ皿。見込みと高台内に輪状の 胎土目痕。高台施釉。	瀬戸 16世紀
1723	SK118 下層 SK120 上層	磁器 染付	小碗 丸形	9.1	5.3	3.4	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 植物か 高台外) 二重圏線	呉須はオリープ灰色に発色。	肥前産 17世紀後半
1724	SK118 下層	磁器 染付	中碗 丸形	9.0	—	—	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白N8/	外) 網目文	呉須はオリープ灰色に発色。	肥前産 17世紀後半
1725	SK118	白磁	小碗 端反形	7.4	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	白磁釉		肥前産 二次被熱により釉 は変質。
1726	SK118	磁器 色絵	碗か	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 上絵付 (赤) による 文様	内面施釉。	肥前産
1727	SK118	磁器 染付	皿	—	—	9.0	—	外) 白 断) 白	外) 圏線 高台外) 二重圏線 見込み) 五弁花 高台内) 圏線	コンニャク印判による五弁花文。	肥前産 1690~1710年代
1728	SK118 下層・ SK120	青磁	鉢 八角形	—	—	—	—	外) 灰オリープ 7.5Y6/2 断) 灰白N8/	内) 型による陽刻文様	型打成形。	肥前産 1650~1670年代
1729	SK118 下層	青磁	香炉又 は火入れ	11.0	—	—	—	外) オリープ灰 5GY6/1 断) 灰白N7/	青磁釉	内面無釉。	肥前産
1730	SK118	青花	中碗	—	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 不明 口縁内) 四方擗	口縁部の釉が虫食い状に剥げる。	中国 景德鎮窯系 17世紀前葉~中葉
1731	SK118	青花	皿	—	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 人物 高台内) 二重圏線	古染付。	中国 景德鎮窯系 1620~1640年代
1732	SK119 下層	磁器 染付	中碗 端反形	10.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 菊文		肥前産
1733	SK119 下層	磁器 染付	小碗 端反形	8.2	4.6	4.0	—	外) 白 断) 白	外) ヘラ彫りによる文 様と呉須 内) ♪	胎土は透明感をもつ。	関西系
1734	SK119 下層	青花	中碗	15.0	—	—	—	外) 灰白2.5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 波濤文・芭蕉葉 口縁内) 圏線		中国 景德鎮窯系
1735	SK119 下層	磁器 染付	猪口 広東形	8.0	6.3	6.0	—	外) 白 断) 白	外) 螺子文 口縁内) 二重圏線 見込み) 草花文	蛇の目凹形高台。	肥前産
1736	SK120	青花	小皿	—	—	4.2	—	外) におい黄橙 10YR7/2 断) におい黄橙 10YR7/3	外) 圏線 内) 圏線	高台無釉。乳濁色の釉。呉須は緑 灰色。	中国 漳州窯系 16世紀末~17世紀 初頭
1737	SK120	土師質 土器	小皿	7.8	1.2	4.0	—	外) におい橙 7.5YR7/3 断) におい橙 7.5YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1739	SK121 下層	磁器 染付	小碗 筒丸形	7.2	5.8	4.6	—	外) 白 断) 白	外) 花卉・圏線 口縁内) 雷文帯		肥前産 1820~1860年代
1740	SK121 下層	磁器 色絵	小碗 端反形	8.6	4.2	3.2	—	外) 白 断) 白	内) 上絵付 (赤・黒・ その他は剥離) による 花文		肥前産
1741	SK121 下層	磁器 染付	小皿 丸形	10.2	2.2	5.6	—	外) 白 断) 白	内) ヘラ彫りによる獅 子・雲	内面ヘラ彫りによる陰刻文様に呉 須で彩色。胎土は透明感をもつ。	関西系
1742	SK121 下層	磁器 色絵 染付	蓋物 蓋	笠部径 8.0	器高 1.6	かえり 径 6.0	—	外) 白 断) 白	外) 呉須による圏線・ 二重圏線、上絵付 (赤・ 緑・黒) による瓜文	かえり無釉。	肥前産
1743	SK121	陶器	鍋蓋	笠部径 15.0	器高 3.6	—	摘み径 4.4	外) 黒褐7.5YR3/2 断) 黄灰2.5Y4/1	外) 飛鉋灰釉	内外面に灰釉を刷毛塗り。鏝部分 は無釉。	能茶山窯 1820年代~幕末
1744	SK121	陶器	甕	35.0	—	18.0	37.4	外) 褐7.5YR4/3 断) 灰褐7.5YR4/2	外) 5条と1条の沈線鉄 釉	内外面ロクロ目。外底に凹凸。内 面施釉。褐色の釉。部分的に黒色 に発色し流れる。内底に灰褐色の 目痕。	能茶山窯 1820年代~幕末
1745	SK121	土師質 土器	杯	9.4	2.7	6.0	—	外) におい橙 7.5YR6/4 断) におい橙 7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	

Tab.72 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1746	SK121	土師質 土器	小皿	5.8	1.1	4.0	—	外)にぶい黄橙 10YR7/3 断)にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油 痕。
1747	SK121	土師質 土器	焜炉	14.0	—	—	—	外)灰白2.5Y8/1 断)灰白2.5Y8/1		口縁部波縁状。口縁部内面に手捏 ねによる突起を貼付。体部前方に 窓。内外面回転ナデ。	京都系 口縁部内面に強い 煤。
1748	SK121	施釉 土器	不明	—	—	2.5	4.2	外)浅黄橙10YR8/3 断)にぶい橙 7.5YR7/4	外)明黄褐色の低火度 釉	内外面回転ナデ。外底回転糸切り。 内面と外面下位無釉。	
1749	SK121	土師質 土器	泥面子	径 2.7	全厚 0.7	—	—	外)にぶい橙 7.5YR7/4 断)にぶい橙 7.5YR7/4	外)型による陽刻文様	型押成形。裏面ナデ。	
1750	SK122	陶器	小皿	13.0	—	—	—	外)灰黄2.5Y6/2 断)灰褐7.5YR5/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部溝縁状。 灰白色の釉。	肥前産 1610～1630年代
1751	SK122	陶器	小皿	12.0	—	—	—	外)灰黄2.5Y7/2 断)にぶい黄橙 10YR7/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。口縁部溝縁状。 内底に段。外面下位無釉。透明の 釉。	肥前産 1610～1630年代
1752	SK122	陶器	向付	—	—	—	—	外)灰白2.5Y7/1 断)灰白2.5Y7/1	内)錆絵 外)錆絵 長石釉	内面布目。外底ナデ。手捏ねに よる脚を貼付。外底無釉。	美濃 織部焼 17世紀初頭
1753	SK122	陶器	中皿 変形形	約 22.6	7.7	7.4	—	外)灰オリープ 5Y5/2 断)灰5Y6/1	内)錆絵、草文 灰釉	絵唐津。ロクロ成形の後口縁部を 変形させる。高台無釉。	肥前産 1590～1610年代
1754	SK126 最下層	磁器 染付	中碗 丸形	10.2	5.9	3.8	—	外)灰白N8/ 断)灰白N8/	外)草花文 高台外)二重圏線	呉須は暗緑灰色に発色。	肥前産 18世紀
1755	SK124	陶器	甕	18.0	—	—	—	外)灰オリープ 7.5Y6/2 断)灰白2.5Y7/1	外)灰釉 口縁)鉄錆 内)焼締め	肩部に2条の凹線。外面に灰オリ ープ色の釉を施釉。	丹波
1756	SK124	陶器	不明	—	—	5.0	8.0	外)暗灰褐5YR3/3 断)灰白2.5Y7/1	鉄釉	体部前方に楕円形の窓。外底に渦 状の鈎痕。内面施釉。高台施釉。	尾戸窯
1757	SK124	陶器	土瓶	11.6	—	12.8	—	外)灰黄褐10YR6/2 断)灰黄褐10YR6/2	焼締め	手捏ね成形。内外面ユビオサエ・ ユビナデ。外底に布目。	
1758	SK124	陶器	鍋	—	—	—	—	外)灰黄褐10YR5/2 断)褐灰10Y6/1	焼締め		
1759	SK124	陶器	鍋 柳川鍋	18.4	—	—	—	外)黒褐7.5Y3/2 断)浅黄橙7.5YR8/4	内)鉄釉	外面と受部無釉。把手と内面施釉。 内面に鉄釉を刷毛塗り。	能茶山窯 1820年代～幕末
1760	包含層 II層	陶器	甕	40.0	40.0	19.0	39.0	外)にぶい赤褐 5YR4/4 断)にぶい黄橙 10YR6/3	鉄釉	肩部に3条の稜線。肩部に黒色の 釉を流し掛け。内外面ロクロ目。 内面中位に粘土帯接合痕。接合部 付近に当て具痕。内底に褐色の目 痕6足。外底に粗砂が付着し輪状 の焼台の剥離痕が残る。	能茶山窯 1820年代～幕末
1761	SD1	陶胎 染付	中碗	—	—	5.0	—	外)灰7.5Y6/1 断)灰黄2.5Y6/1	外)白化粧土・呉須絵 高台外)圏線	高台施釉。透明釉は貫入が入る。	肥前産 18世紀前半
1762	SD1 上層	陶器	碗	—	—	8.1	—	外)灰黄2.5Y7/2 断)灰白2.5Y8/1	灰釉	高台施釉。灰黄色を帯びる透明の 釉で貫入が入る。	尾戸窯
1763	SD1 下層	陶器	播鉢	11.8	9.4	9.5	—	外)暗赤褐5YR3/3 断)にぶい赤褐 5YR4/3	外)焼締め 内)錆釉	内面に櫛目。口縁部外面に凹線。 体部外面回転ナデ、外面下位ケズ リ。外底に凹凸。	備前
1765	列5-P1	磁器 染付	小碗 丸形	—	—	3.1	—	外)白 断)白	外)桐文・圏線 高台外)二重圏線 高台内)圏線	外面にコンニャク印判による桐 文。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1766	列5-P1	磁器 染付	瓶	—	—	11.0	—	外)白 断)灰白5Y8/1	外)圏線 高台外)二重圏線	内面無釉。透明釉は白濁し粗い貫 入が入る。	肥前産
1767	列4-P2	磁器 染付	仏飯器	8.0	6.5	4.0	—	外)白 断)白	外)唐草文	脚部下位無釉。呉須は淡い青色。	肥前産 17世紀後半
1768	列4-P2	陶器	手鉢か	—	—	—	—	外)灰オリープ 5Y5/2・灰白5Y8/1 断)灰黄2.5Y6/2	灰釉	把手の部分に凹線。	
1769	列4-P2	青磁	中皿 折縁形	20.2	4.9	12.0	—	外)オリープ灰 10Y6/2 断)浅黄橙10YR8/3	外)錆	高台脇に丸彫りによる錆を巡ら す。高台施釉。オリープ灰色の釉。 高台内蛇の目釉剥ぎの後鉄錆を刷 毛塗り。	肥前産 1650～1660年代
1770	P54	白磁	鉢 菊花形	—	—	8.0	—	外)白 断)白		型打成形。内外面に菊弁。	肥前産
1771	P54	陶器	中碗 丸形	12.8	—	—	—	外)灰黄褐 10YR5/2・ 灰白5Y7/2 断)にぶい黄橙 10YR7/3	白化粧土刷毛目・白土 の流し掛け 透明釉	口縁部から部分的に白土の流し掛 け。	肥前産 17世紀後半～18世 紀前半



Tab.73 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1772	P61	磁器 染付	小碗 丸形	8.6	5.0	3.0	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 草文・圏線 高台外) 圏線	畳付に灰白色の粗砂が付着。	肥前産 17世紀前半
1773	P106	陶器	壺	9.0	—	—	—	外) 黒10YR2/1 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉	内面無釉。	二次被熱を受け釉 は変質。
1774	P106	青花	皿	—	—	10.6	—	外) 白 断) 白	高台外) 圏線 内) 不明		
1775	P129 上層	陶器	不明	15.4	—	—	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	長石釉		美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
1777	SX4 最下層	磁器 染付	中碗 丸形	10.4	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 二重圏線・不明 口縁内) 圏線		肥前産
1778	SX4 床	磁器 染付	中碗	—	—	6.0	—	外) 明緑灰10GY8/1 断) 白	外) 区画間に植物	多角形。面取りあり。内面ロクロ 目。内面施釉。	肥前産 1610～1630年代
1779	SX4 最下層	磁器 染付	小杯 杉形	5.0	3.5	2.4	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 雨降り文・柳	内面に紅が付着。紅猪口に転用か。	肥前産 18世紀第1四半期 二次被熱を受け釉 は変質。
1780	SX4	白磁	小杯	—	—	—	—	外) 明緑灰10GY8/1 断) 白	外) 丸彫りによる縞		肥前産
1781	SX4 床	磁器 染付	五寸皿	—	—	8.6	—	外) 白 断) 白	高台外) 二重圏線 内) 草花 高台内) 圏線		肥前産 有田 17世紀後半
1782	SX4 最下層	磁器 染付	五寸皿	—	—	10.6	—	外) 白 断) 白	高台外) 二重圏線 内) 草花 高台内) 銘		肥前産 有田 柿右衛門窯か 1670～1690年代
1783	SX4 最下層	磁器 染付	五寸皿	17.4	—	—	—	外) 灰白2.5GY8/1 断) 白	内) 草花文		肥前産
1784	SX4 最下層	磁器 染付	蓋物蓋	笠部径 9.4	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 草花文	内面施釉。かえり無釉。	肥前産
1785	SX4 最下層	陶器	中碗 腰張形	9.8	7.1	4.4	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y8/1	外) 錆絵、草花文 灰釉	口縁部は歪む。外面ロクロ目。高 台内に渦状の範痕。	尾戸窯 二次被熱を受け釉 は変質。
1786	SX4 最下層	陶器	小皿	—	—	—	—	外) 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 断) 灰黄褐10YR6/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。暗オリーブ褐色 の釉。	肥前産 1590～1630年代
1787	SX4 最下層	陶器	蓋物	9.8	—	—	—	外) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	内面施釉。口縁部内面無釉。	尾戸窯 二次被熱を受け釉 は変質。
1788	SX4 床	土師質 土器	小皿	8.0	1.5	4.0	—	外) 灰白10YR8/2 断) 灰白10YR8/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
1789	SX11	陶胎 染付	中碗	10.0	—	—	—	外) 灰5Y6/1 断) 灰5Y6/1	外) 呉須絵		肥前産 18世紀前半
1790	SX11	磁器 染付	蓋付 の鉢	—	—	6.0	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 唐草・二重圏線 高台外) 圏線		肥前産 17世紀後半
1791	SX11	白磁	鉢	—	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 陽刻による松文	白磁陽刻型打成形。口縁部輪花形。	肥前産 有田 柿右衛門窯か 1670年代～18世紀 初頭
1792	SX11	磁器 染付	瓶	—	—	9.0	—	外) 灰白N8/ 断) 灰白N8/	高台外) 二重圏線	内面無釉。畳付に粗砂が付着。	肥前産
1793	SX11	陶器	甕	17.4	—	—	—	外) 灰褐5YR4/2 断) 灰白2.5Y7/1	焼締め	外面に多段の凹線。外面に自然釉 がかかる。	丹波
1795	SX12 上層	磁器 染付	中碗 望料形	5.8	6.1	4.6	—	外) 白 断) 白	外) 竹・雪輪・蓮弁文 口縁内) 四方摺 見込み) 二重圏線・圏 線・植物		肥前産 18世紀後半
1796	SX12	磁器 染付	猪口 腰張形	8.8	5.8	4.0	—	外) 白 断) 白	外) 草花文 口縁内) 帯線 高台外) 圏線		肥前産
1797	SX12	陶器	中碗 腰張形	11.2	7.2	5.6	—	外) オリーブ黄 5Y6/3 断) 灰白10YR7/1	灰釉	畳付の両側に面取り。高台無釉。 オリーブ黄色を帯びる半透明の釉 で貫入が入る。内底に目痕3足。	肥前系
1798	SX12	陶器	小碗 半筒形	9.0	5.8	5.4	—	外) にぶい赤褐 5YR4/3 断) にぶい橙 7.5YR7/3	鉄釉	内面に沈線。削り調整は荒い。高 台無釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
1799	SX12・ SX10	陶器	灯明 受皿	10.4	2.1	5.0	受部径 7.0	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	油溝半月状。外面下半無釉。灰白 色を帯びる半透明の釉。	尾戸窯か
1800	SX12	土師質 土器	杯	11.2	3.6	6.0	—	外) 浅黄橙7.5YR8/4 断) 浅黄橙7.5YR8/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	

Tab.74 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1801	SX12 上層	土師質 土器	小皿	8.0	1.5	5.0	—	外) 橙7.5YR7/6 断) 橙7.5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。 内底に渦状のロクロ目。	
1804	SX13	磁器 染付	中碗 塑料形	12.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 区画間に植物 口縁内) 四方櫛 内) 二重圏線		肥前産 18世紀後半 1804・1807同一個 体。
1805	SX13 上層	青磁 染付	中碗	12.4	—	—	—	外) 明緑灰7.5GY7/1 断) 灰白N8/	外) 青磁釉 内) 四方櫛・草花文	朝顔形碗。	肥前産 18世紀後半 1805・1808同一個 体。
1806	SX13	磁器 染付	小碗 半筒形	8.6	—	—	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 菊花・氷裂文 内) 四方櫛	呉須は滲む。透明釉は貫入が入る。	肥前産 18世紀後葉～19世 紀初頭
1807	SX13	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.4	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 区画間に垣・植物 内) 四方櫛・二重圏線	塑料碗の蓋。	肥前産 18世紀後半 1804・1807同一個 体。
1808	SX13 上層	青磁 染付	碗蓋	笠部径 10.0	3.0	—	摘み径 4.0	外) 明緑灰10G7/1 断) 灰白N8/	外) 青磁釉 内) 四方櫛・二重圏線・ 草花文 摘み内) 角内渦「福」	朝顔形碗の蓋。	肥前産 18世紀後半 1805・1808同一個 体。
1809	SX13	青磁 染付	碗蓋	笠部径 9.6	3.1	—	摘み径 4.4	外) 明緑灰10GY7/1 断) 白	外) 青磁釉 内) 四方櫛・二重圏線・ 五弁花文 摘み内) 銘	朝顔形碗の蓋。内面に手描きによ る五弁花文。	肥前産 18世紀後半
1810	SX13 上層	青磁	香炉	7.2	5.1	4.2	—	外) オリーブ灰 10Y5/2 断) 灰白N8/	外) 陽刻による算木文	外面に型による陽刻文様。三足を 貼付。内面下位無釉。	肥前産
1811	SX13 上層	磁器 染付	小瓶 辣蕈形	—	—	3.0	4.6	外) 白 断) 白	外) 草花文	体部両側面に文様。	肥前産
1812	SX13 上層	陶器	中碗 丸形	12.0	8.0	5.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 淡黄2.5Y8/3	外) 錆絵、竹文 灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で細か い貫入が入る。	尾戸窯
1813	SX13 上層	陶器	中碗 丸形	12.0	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 淡黄2.5Y8/4	外) 錆絵、宝文 灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で細か い貫入が入る。御本が入る。	尾戸窯
1814	SX13	陶器	中碗	10.6	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	外) 白象嵌による圏線 灰釉	透明の釉で細かい貫入が入る。御 本が入る。	尾戸窯
1815	SX13	陶器	中碗	—	—	5.6	—	外) 灰7.5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	灰釉	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。 灰白色を帯びる透明の釉で細かい 貫入が入る。目痕なし。	尾戸窯
1816	SX13	陶器	中碗	—	—	4.6	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/2	灰釉	高台内に荒い渦状の鉋痕。高台無 釉。白濁した釉。御本が入る。	尾戸窯
1817	SX13	陶器	中碗	—	—	4.0	—	外) 灰白 7.5Y7/1・2.5Y8/2 断) 灰白 2.5Y7/1・2.5Y8/2	灰釉	高台脇に挟り。高台無釉。灰白色 を帯びる透明の釉で細かい貫入が 入る。	尾戸窯
1818	SX13	陶器	碗	—	—	—	—	外) 灰5Y6/1 断) 灰白5Y7/1	外) 錆絵、竹文か 灰釉	外面に強いロクロ目。光沢の強い 透明の釉で粗い貫入が入る。	京都系
1819	SX13	陶器	小碗 半球形	8.4	5.5	3.0	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白5Y8/1	外) 錆絵、草花文 灰釉	灰白色を帯びる透明の釉で細かい 貫入が入る。	京都系
1820	SX13	陶器	皿	—	—	6.6	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 浅黄2.5Y8/3	外) 呉須絵、水仙か 灰釉	高台内中央に円圏状の段。高台無 釉。	京焼 高台内に銘印。 「清」か。
1821	SX13	陶器	不明	—	—	—	—	外) 白 断) 淡黄2.5Y8/3	内) 錆絵 長石釉		美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
1822	SX13 上層	陶器 色絵	火入れ 又は 香炉	—	—	10.0	—	外) 灰白5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	外) 上絵付 (赤・剥離) による菖蒲 灰釉	高台内面無釉。	京焼
1823	SX13 上層	陶器	線香筒 又は 筆筒	—	—	7.0	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰N8/	灰釉	三足を貼付。内面施釉。灰オリー ブ色を帯びる透明の釉で細かい貫 入が入る。胎土中に黒色粒を含む。	
1824	SX13	陶器	水注か	—	—	7.0	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	灰釉	内面施釉。高台施釉。灰白色を帯 びる半透明の釉で細かい貫入が 入る。	尾戸窯
1825	SX13	陶器	水注か	6.6	10.5	6.2	11.2	外) 暗赤褐5YR3/3 断) 灰白2.5Y7/1	鉄釉	内面ロクロ目。内面施釉。高台施 釉。暗赤褐色の釉。	尾戸窯
1826	SX13	陶器	播鉢	14.6	—	—	—	外) 褐7.5YR4/3 断) 灰白5Y8/1	鉄釉	内面櫛目。外面から口縁部内面に 褐色の釉を施す。内面に鉄釉を薄 く施す。	瀬戸
1827	SX13	陶器	鍋	—	—	—	—	外) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰黄2.5Y6/2	焼締め	手握ね成形。内外面ユビオサエ・ ユビナデ。	内外面に弱い煤。

Tab.75 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1828	SX13 上層	陶器	鍋	—	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	焼締め	手握ね成形。把手部分で剥離。	
1829	SX13 上層	陶器	鍋	—	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	焼締め	手握ね成形。把手を貼付。外面 ユビオサエ・布目。内面ユビオサエ・ ユビナデ。	内面に焦げ。
1830	SX13	陶器	蓋	笠部径 13.0	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	焼締め	たたら成形後手握ねで整形。外面 布目、周縁にユビオサエ。内面布 目後ユビオサエ。摘みは欠損。	
1831	SX13	陶器	土瓶	12.6	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	焼締め	手握ね成形。内外面ユビオサエ・ ユビナデ。	
1832	SX13	陶器	土瓶か	—	—	—	—	外) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰黄2.5Y7/2	焼締め	手握ね成形。内外面ユビオサエ・ ユビナデ。外底に布目。	
1833	SX13 上層	瓦質 土器	火鉢	24.0	14.0	19.0	24.8	外) 黒10YR2/1 断) にぶい黄褐 10YR5/3	外) 印花文・粒状の文 様	双耳を貼付。三足を貼付。脚に貫 通する穿孔あり。	関西産
1834	SX13	土師質 土器	人形	—	—	—	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3	虚無僧	型押成形前後貼り合わせ。中実。 外底に径2mmの穿孔。	
1835	SX13	土師質 土器	ミニ チュア	5.0	—	—	—	外) 橙5YR6/6 断) 橙5YR6/6	鉢か	型押成形。三足を貼付。内面ユビ オサエ・ナデ。	
1839	SX16	土器	鞆の 羽口	—	—	—	—	外) 黒 断) 灰白5Y7/2		外面に自然釉が厚く掛かる。	
1840	SX17 上層	磁器 染付	蓋物	9.0	—	—	—	外) 白 断) 白	外) 藤花・圏線	外面コンニャク印判による藤花。 内面施釉。口縁部内面と端部無釉。	肥前産 17世紀末～18世紀 前半
1841	SX17	磁器 色絵 染付	皿又は 鉢	—	—	—	—	外) 明緑灰7.5GY8/1 断) 白	外) 圏線 高台外) 二重圏線 内) 呉須と上絵付 (赤・緑・黒) による 菊花・植物		肥前産
1842	SX17	陶胎 染付	中碗 腰張形	11.4	8.4	6.0	—	外) 灰5Y6/1 断) 褐灰10YR4/1	外) 呉須絵、唐草文・ 二重圏線	透明釉は貫入が入る。	肥前産 18世紀前半 二次被熱を受け釉 は変質。
1843	SX17	磁器 染付	皿又は 鉢	—	—	8.0	—	外) 白 断) 白	外) 花唐草文・圏線 高台外) 二重圏線 高台内) 圏線 内) 松葉	型打成形。六角形の面取り。	肥前産
1844	SX17	陶器	鉢 菊花形	—	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y8/1		型打成形。口縁部輪花形。	京都系又は京焼
1845	SX17	陶器	土瓶又は 急須	6.0	—	—	10.3	外) 黒褐10YR3/2 断) 褐灰7.5YR4/1	鉄釉	手握ねによる注口を貼付。内面無 釉。外面下位無釉。	京都系又は京焼
1846	SX17	陶器	甕	—	—	—	—	外) 黒褐10YR3/1 断) 橙5YR6/6	鉄釉	外面に多段の強いロクロ目。外面 に黒褐色の釉。内面に鉄錆。	
1847	SX17	陶器	甕	23.0	—	—	—	外) 灰褐7.5YR4/2 断) にぶい赤褐 5YR5/4	灰釉	口縁端部無釉。	
1848	SX17	土師質 土器	焜炉 筒形	—	—	13.8	—	外) 灰白10YR8/2 断) 灰白2.5Y8/1		外面ナデ。内面ヨコナデ。外底ケ ズリ。三足を貼付。	京都系
1849	SX22	磁器 染付	中碗 丸形	9.8	—	—	—	外) 灰白10Y8/1 断) 灰白N8/	外) 唐草文		肥前産 17世紀中葉～後半 二次被熱を受け釉 は変質。
1850	SX22	陶器	灯明 受皿か	10.8	—	—	—	外) 灰褐5YR5/2 内) 黒褐10YR3/1 断) 灰褐5YR5/2	内) 鉄釉	外底回転ケズリ。外面無釉。黒褐 色の釉。	
1851	瓦溜2 最下層	磁器 染付	中碗 端反形	10.6	6.3	4.0	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 窓に山水文・雲・ 帯線と鋸歯文 高台外) 圏線 口縁内) 帯線と鋸歯文 見込み) 山水文・二重 圏線 高台内) 銘	呉須は青灰色。透明釉は貫入が入 る。	能茶山窯 1820年代～幕末高 台内に銘。
1852	瓦溜2 最下層	磁器 染付	中碗 端反形	10.4	6.4	4.0	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 草花文 高台外) 二重圏線 口縁内) 雷文帯 見込み) 圏線	呉須は青灰色。透明釉は貫入が入 る。銘の有無は不明。	能茶山窯 1820年代～幕末
1853	瓦溜2 最下層	磁器 染付	中碗 端反形	10.6	6.0	4.0	—	外) 白 断) 白	外) 窓に山水文・雲・ 帯線と鋸歯文 高台外) 二重圏線 口縁内) 帯線と鋸歯文 見込み) 雲・圏線 高台内) 角枠内「茶山」 銘	呉須は青色。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に角枠内 「茶山」銘。

Tab.76 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1854	瓦溜2 最下層	磁器 染付	小碗 端反形	4.2	6.3	3.6	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 山水文 高台外) 二重圏線 口縁内) 帯線 見込み) 花卉・圏線 高台内) 角枠内「茶山」 銘	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に角枠内 「茶山」銘。
1855	瓦溜2最 下層	磁器染 付	薄手酒 杯 端反形	7.2	3.3	4.0	—	外) 白 断) 白	口縁内) 宝文 見込み) 宝文		肥前産
1856	瓦溜2 最下層	白磁	小杯 桶形	3.8	2.9	2.2	—	外) 白 断) 白			肥前産 1780～1820年代
1857	瓦溜2 上層	青磁	小皿	5.2	2.4	6.6	—	外) 緑 断) 白	内) 陽刻による花唐草 文	型打成形。口縁部輪花形。	
1858	瓦溜2 最下層	磁器 染付	うがい 茶碗 平形	7.4	—	—	—	外) 白 断) 白	内) 草花文		肥前産
1859	瓦溜2 最下層	磁器 染付	猪口 桶形	4.8	5.9	6.0	—	外) 白 断) 白	外) 山水文 内) 山水文 見込み) 岩波・圏線	蛇の目凹形高台。	肥前産
1860	瓦溜2 上層・ 最下層	磁器 染付	鉢 端反形	17.8	8.5	9.0	—	外) 明緑灰10GY8/1 断) 白	外) 花唐草文・窓に山 水文 口縁内) 葡萄 見込み) 蒲公英	口縁部輪花形。	肥前産
1861	瓦溜2 上層	青磁	香炉	—	—	6.0	—	外) 明オリーブ灰 5GY7/1 断) 灰白N8/	青磁釉	三足を貼付。内面無釉。高台無釉。	肥前産
1862	瓦溜2 最下層	青磁	香炉	6.4	—	—	—	外) 明オリーブ灰 2.5GY7/1 断) 灰白N8/	外) 片切彫りによる縞 青磁釉	内面無釉。	肥前産
1863	瓦溜2 上層	磁器 染付	神酒 徳利	1.8	8.9	4.0	4.0	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 蛸唐草・草花文	呉須は青灰色。	肥前産
1864	瓦溜2 最下層	磁器 染付	仏飯器	6.2	4.0	—	—	外) 白 断) 白	外) 梅文		肥前産
1865	瓦溜2 下層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	外) 白象嵌による圏線 と列点文、鉄鑄の印花 による丸文 灰釉	外面上半に象嵌文様を巡らす。	尾戸窯
1866	瓦溜2 最下層	陶器	中碗	—	—	5.6	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰黄2.5Y7/2	灰釉	外底に渦状の匏痕。高台無釉。灰 白色を帯びる半透明の釉で細かい 貫入が入る。内底に目痕。	尾戸窯
1867	瓦溜2 最下層	陶器	不明 把手	—	全厚 1.5	全幅 2.0	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰5Y6/1	外) ヘラ彫りによる陰 刻文様	把手。手握ね成形。	尾戸窯
1868	瓦溜2 最下層	陶器	小碗	7.1	5.2	4.5	—	外) オリーブ黄 5Y6/4 断) 灰白2.5Y6/1	外) 型による陰刻文様 灰釉	型押成形。内面ユビオサエ。高台 施釉。胎土中に黒色粒を多量に含 む。	舞子焼か 19世紀
1869	瓦溜2 最下層	陶器	小碗	—	—	4.6	—	外) オリーブ黄 5Y6/4 断) 灰白2.5Y7/1	外) 白土イッチン描き による文字又は文様 灰釉	手握ね成形。内外面ユビオサエ。 貼付高台。高台に挟りあり。高台 無釉。オリーブ黄色を帯びる透明 の釉。胎土中に黒色粒を多量に含 む。	舞子焼か 19世紀
1870	瓦溜2 最下層	陶器	鍋・ 土瓶類 か	—	—	9.8	—	外) 黄褐2.5Y5/3 断) 浅黄2.5Y7/3	灰釉	三足を貼付。内面施釉。外底無 釉。外面に黄褐色を帯びる半透明 の釉。内面に褐色の釉。	京都18世紀後半 外底周縁に角枠内 「錦光山」銘印。 外底に煤。
1871	瓦溜2 下層	陶器	甕	18.2	—	—	23.2	外) 暗赤褐2.5YR3/3 断) 灰白N7/	鉄釉	口縁端部に凹線。外面に多段の凹 線。内面無釉。	丹波
1872	瓦溜2 最下層	陶器	仏花瓶	8.0	15.0	6.2	8.3	外) オリーブ黄 5Y6/3 断) 灰白2.5Y7/1	灰釉	鳥形の双耳を貼付。内面ロクロ目。 内面無釉。高台施釉。オリーブ黄 色の釉。	
1873	瓦溜2 下層	陶器	提子	13.0	—	—	—	外) 暗褐7.5YR3/3 断) にぶい赤褐 2.5YR4/4	鉄釉	外面刷毛目。内面ロクロ目。内面 施釉。外面下位無釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
1874	瓦溜2 最下層	瓦質 土器	焙烙 手付き	16.2	—	—	—	外) 暗灰N3/ 断) 灰白7.5Y7/1		把手を貼付。外底チヂレ目・ヨコ ナデ。内面回転ナデ。	外底に煤。
1875	瓦溜2 下層	土師質 土器	焙烙	28.0	—	—	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4		口縁部外面回転ナデ。内面回転ナ デ。外底チヂレ目。	関西系 外面に煤。内底に 焦げ。
1876	瓦溜2 下層	土師質 土器	焙烙	34.3	—	—	—	外) 褐灰10YR4/2 断) にぶい橙 7.5YR6/4		口縁部外面ヨコナデ。外底不定方 向のイタナデ。内面ヨコナデ。	讃岐 岡本系 外面に煤。

Tab.77 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版 番号	出土 地点	種類	器種 器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年 代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大 径				
1877	瓦溜2 最下層	施釉 土器	焜炉 筒形	14.4	—	—	—	外) におい橙 5YR7/4 断) 浅黄橙 10YR8/3	外) 白土・鉄錆・水色 その他の上絵具による 梅・鶯	内部施設をもつ。体部前方下位に 楕円形の窓。口縁部内面に箱形の 突起を貼付。内面無釉。釉は焼成 不良。	
1878	瓦溜2 最下層	施釉 土器	焜炉 竹形	—	—	13.4	14.8	外) 薄緑 断) 灰白2.5Y8/2	外) 薄緑色の低下度釉	体部前方下位に窓。外底に五角形 の三足を貼付。内外面回転ナデ。 外底回転ケズリ。沈線を数段巡ら せ、竹を模倣する。	京都系
1879	瓦溜2 最下層	土師質 土器	焜炉 箱形	—	—	—	—	外) におい黄橙 10YR7/3 断) におい黄橙 10YR7/3	外) 印花文	内部施設をもつ。上面に径6mmの 貫通しない穿孔。外面ナデ・ミガ キ。内面イタナデ。	口縁部内面に煤。
1880	瓦溜2 最下層	施釉 土器	ひょう そく	4.0	1.6	2.4	—	外) におい黄橙 10YR7/3 内) におい橙 7.5YR6/4 断) におい黄橙 10YR7/3	内) におい橙色の低下 度釉	型押成形。内面ナデ。外面チレ 目。外面無釉。釉は焼成不良気味。	
1881	瓦溜2	施釉 土器	ミニ チュア	全長 2.8	—	全幅 2.2	—	外) 橙5YR6/6 断) におい黄橙 10YR7/3	建物か 橙色の低下度釉・白土・ 緑釉	型押成形。外底にユビオサエによ る窪み。背面と外底無釉。下位は 白土と緑釉で彩色。	
1884	瓦溜3 最下層	磁器 染付	中碗 広東形	11.6	6.2	6.4	—	外) 白 断) 白	外) 磨手 高台外) 二重圏線 口縁内) 磨手 見込み) 文字・圏線		肥前産 1780年代～19世紀 前半
1885	瓦溜3	陶器	合子蓋	全長 5.6	全厚 1.7	全幅 4.8	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	内) 印刻による「福」 灰釉	内外面ナデ。内面無釉。光沢の強 い透明の釉で部分的に白濁。	尾戸窯か
1889	包含層 II層	染付	小碗	—	—	3.4	—	外) 白 断) 白	高台外) 圏線 高台内) 銘「□□製」 (「芭蕉製」か)	景德鎮写しの意匠。	肥前産 有田 1650～1660年代
1890	包含層 II層	青花	小杯	—	—	2.4	—	外) 白 断) 白	高台外) 二重圏線 高台内) 銘「清雅」	人為的に底部周囲を面子状にカッ トし転用。	中国 景德鎮窯 1630～1640年代
1891	包含層 II層	青花	小皿	—	—	9.4	—	外) 白 断) 白	内) 草花文 高台外) 圏線	高台内に放射状の鈍痕。畳付に粗 砂が付着。	中国 景德鎮窯系 16世紀末～17世紀 初頭
1892	包含層 II層	磁器 染付	中碗 端反形	10.2	5.8	4.2	—	外) 白 断) 白	外) 花文・丸に梅 高台外) 二重圏線 口縁内) 雷文帯 見込み) 松竹梅円形 文・圏線		能茶山窯 1820年代～幕末。 高台内に角枠内 「茶」銘。
1893	包含層 II層	磁器 染付	中碗 広東形	10.8	6.4	6.0	—	外) 灰白5GY8/1 断) 白	外) 花・扇 高台外) 二重圏線 口縁内) 二重圏線 見込み) 岩波・圏線 高台内) 銘	呉須は青灰色。内底に目痕3足。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内「サ」銘
1894	包含層 II層	磁器 染付	小碗 端反形	8.6	5.3	3.8	—	外) 灰白5GY8/1 断) 灰白N8/	外) 山水文 高台外) 圏線 高台内) 銘		肥前産
1895	包含層	磁器 色絵	猪口	—	—	—	—	外) 灰白N8/ 断) 灰白N8/	外) 上絵付(赤・紫・緑・ 薄緑・黒)による岩・ 植物		肥前産 有田 1690～1710年代
1896	包含層 II層	磁器 染付	小皿	14.0	3.8	5.8	—	外) 白 断) 白	内) 山水文・人物・圏線 口紅	口縁部輪花形。	肥前産 1640～1650年代
1897	包含層 II層	磁器 染付	大皿	50.0	12.8	19.0	—	外) 白 断) 白	外) 唐草文 高台外) 圏線 内) 松竹梅	高台外面に施釉時の指痕が残る。	肥前産 有田 丸尾窯か 1650年代前後
1898	包含層 II層	白磁	小杯 菊花形	4.4	2.6	2.2	—	外) 白 断) 白	外) 型による菊弁	型打成形。外面に菊弁。	肥前産
1899	包含層 II層	白磁	紅皿	4.9	1.4	1.4	—	外) 白 断) 白	外) 型による菊弁	型押成形。外面に菊弁。外面無釉。	肥前産
1900	包含層 II層	白磁	ミニ チュア 碗	2.2	1.2	1.0	—	外) 白 断) 白	外) 型による菊弁	型押成形。外面に菊弁。内外面施 釉。外底無釉。外底に砂が付着。	肥前産
1901	包含層 II層	白磁	ミニ チュア 碗	2.4	0.9	1.0	—	外) 白 断) 白	外) 型による菊弁	型押成形。外面に菊弁。外面無釉。	肥前産
1902	包含層 II層	陶器	向付	—	—	—	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	外) 錆絵 長石釉	外底無釉。内面に緩やかなクロク ロ目。	美濃 志野焼 16世紀末～17世紀 初頭
1903	包含層 II層	陶器	中碗 半球形	10.4	7.1	4.2	—	外) 灰白7.5Y8/1 断) 灰白5Y8/1	外) 鉄錆と呉須による 注連縄文 灰釉	灰釉は透明で粗い貫入が入る。	京都・信楽系
1904	包含層 II層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰5Y6/1 断) 灰白5Y7/1	外) 白象嵌の磨手文・ 白象嵌の印花文	灰釉は透明で細かい貫入が入る。	尾戸窯

Tab.78 遺物観察表 (陶磁器・土器)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量 (cm)				色調	文様・釉薬・胎土	特徴 (成形・調整・釉調他)	備考 (生産地・生産年代・銘・使用痕他)
				口径	器高	底径	最大径				
1905	包含層Ⅱ層	陶器	不明蓋か	全長 3.8	全厚 1.4	全幅 2.8	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	外) 人物の顔 灰釉・錆釉	型押成形の後、目・口・髪等の細部をヘラ彫り。髪の部分に錆釉。灰釉は透明で細かい貫入が入る。外面部分的にチヂレ目。内面ユビオサエ・ナデ。	尾戸窯
1906	包含層Ⅱ層	陶器	壺	7.4	—	—	—	外) オリーブ褐 2.5Y4/3 断) 黄灰2.5Y5/1	褐釉	内面無釉。オリーブ褐色の釉。	福岡県周辺の窯か 17世紀 二次被熱を受け釉は変質。
1907	包含層Ⅰ層	陶器	蓋物蓋	笠部径 7.8	1.0	かえり径 6.1	—	外) 黄 断) 灰白2.5Y8/2	黄色の釉	内面施釉。かえり無釉。鮮やかなレモン色の釉。	珉平焼 19世紀
1908	包含層Ⅱ層	陶器	土瓶又は急須の蓋か	笠部径 13.0	—	—	—	外) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰黄2.5Y6/2	焼締め	たたら成形後手捏ねで整形。内外面布目、ユビオサエ。	19世紀
1909	包含層Ⅱ層	陶器	急須蓋か	全長 9.8	2.6	全幅 7.9	—	外) にぶい褐 7.5YR5/4 断) 褐灰10YR6/1	外) 陽刻文様 焼締め	たたら成形後手捏ねで整形。手捏ねによる摘みを貼付。外面に型による陽刻文様。内外面布目、ユビオサエ。	19世紀
1910	攪乱	土師質土器	型	全長 8.5	全厚 2.7	全幅 6.0	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3	茄子	外面ナデ。内面チヂレ目。	
1911	包含層Ⅱ層	土師質土器	泥面子	径 2.3	全厚 0.6	—	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4	外) 型による文字	型押成形。外底ナデ・ユビオサエ。	
1912	包含層Ⅱ層	施釉土器	人形	残存長 4.5	全厚 1.8	全幅 3.0	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	布袋 黄褐色と黄色の釉	中空。型押成形貼り合わせ。内面ユビオサエ・ナデ。	
1913	包含層Ⅱ層	施釉土器	人形	残存長 3.1	全厚 2.0	全幅 3.8	—	外) 明黄褐10YR7/6 断) 灰白2.5Y8/2	天神 緑と透明の低下度釉	中実。型押成形前後貼り合わせ。	
1917	包含層Ⅰ層	磁器色絵	中碗丸形	6.8	4.3	3.0	—	外) 白 断) 白	外) 黒・橙・黄・緑による戦闘機・日章旗		現代

Tab.79 遺物観察表 (石製品・金属製品・ガラス製品)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量 (cm)			重量 (g)	特 徴
				全長 [ ] 残存長	全厚 [ ] 残存厚	全幅 [ ] 残存幅		
194	SK3下層	銅製品	煙管雁首	6.4	ラウ接合部径 1.0	火皿径 1.5	[10.3]	側面に接合痕。
195	SK3下層	銅製品	煙管吸口	—	ラウ接合部径 0.9	—	[3.7]	側面に接合痕。
196	SK3下層	銅製品	不明	3.6	0.1	2.0	[1.0]	楕円形。
292	SK7下層	銅製品	煙管吸口	7.3	ラウ接合部径 1.0	吸口径 0.5	[9.0]	陰刻による亀甲文・花文。
293	SK7下層	銅製品	煙管吸口	5.2	ラウ接合部径 1.0	吸口径 0.7	8.6	陰刻による花文。
294	SK7	銅製品	簪か	[15.5]	0.3	0.3	[5.6]	頭部を欠損する。
295	SK7	銅製品	不明	[4.6]	0.4	0.4	[2.7]	断面四角形。
296	SK7	銅製品	不明	4.4	0.3	0.4	[3.2]	道具の部材か。
350	SK12下層	銅製品	棒状製品	16.5	0.3	0.3	[6.0]	簪か。飾り部分を欠損する。
408	SK17	銅製品	匙	[5.9]	0.1	0.5	[2.0]	
409	SK17	銅製品	匙	[5.8]	0.1	0.5	[1.8]	
705	SK19中層	銅製品	お玉	18.2	0.1	8.6	[44.0]	木製の柄を鉄釘で固定する。
706	SK19下層	銅製品	お玉	—	—	—	[17.0]	
707	SK19中層	銅製品	煙管吸口	7.5	ラウ接合部径 1.0	吸口径 0.3	[6.0]	
708	SK19	銅製品	不明	[6.2]	0.7	8.0	[21.0]	断面楕円形。
709	SK19中層	銅製品	錠か	—	—	—	[17.0]	木片に取り付け。
710	SK19下層	銅製品	簪	18.8	0.2	0.6	11.0	断面四角形。
711	SK19下層	銅製品	簪か	[13.5]	0.2	0.2	[4.0]	断面四角形。
712	SK19下層	銅製品	簪か	[13.4]	0.2	0.2	[4.0]	断面四角形。

Tab.80 遺物観察表 (石製品・金属製品・ガラス製品)

図版 番号	出土地点	種類	器種 器形	法量 (cm)			重量 (g)	特 徴
				全長 [ ] 残存長	全厚 [ ] 残存厚	全幅 [ ] 残存幅		
713	SK19	ガラス製品	簪か	—	0.5	0.5	[2.0]	無色透明。外面に螺子状の文様。
714	SK19	象牙	簪	—	0.4	0.5	[3.0]	灰白色。断面楕円形。先端部は尖る。
715	SK19下層	龍甲製か。	棒状製品 簪か	—	0.4	0.8	[7.0]	明黄褐色。断面長方形。両側を欠損する。半透明で明黄褐色。
716	SK19中層	石製品	硯	[9.5]	[1.2]	6.4	[117.0]	粘板岩製。硯を砥石に転用。
717	SK19中層	石製品	砥石	[9.5]	1.7	5.8	[128.0]	中央部は使用により窪む。
738	SK20上層	銅製品	煙管 雁首	7.0	ラウ接合部径 1.0	火皿径 1.4	[12.8]	ラウが残存する。脂返しは僅かに湾曲する。側面に接合痕あり。
739	SK20上層	銅製品	煙管 吸口	[6.8]	ラウ接合部径 1.0	吸口径 0.5	[2.5]	胴部は長く、口縁部に向かい緩やかに細くなる。
922	SK25中層	銅製品	不明	—	—	—	1.7	
951	SK30	石製品	硯	—	—	—	[211.0]	凝灰岩製。陸部中央は使用により窪む。裏面に釘彫りによる文字。部分的に墨が付着。
1061	SK42	ガラス製品	不明	—	—	—	[4.0]	無色透明
1094	SK43中層	銅製品	煙管 吸口	5.5	ラウ接合部径 0.8	吸口径 0.3	[4.0]	ラウが残存する。
1095	SK43	銅製品	把手か	—	—	—	13.0	
1096	SK43	銅製品	不明	[4.5]	0.2	0.7	[3.0]	
1097	SK43	銅製品	不明	—	—	—	[55.0]	薄手。花形。中央に円孔あり。
1098	SK43	銅製品	棒状製品	42.0	0.7	1.0	147.0	棒状。断面四角形。端部の片側が鍵状。片側に円孔。
1286	SK68	石製品	砥石か	[3.9]	0.6	2.3	[8.0]	滑石製。
1287	SK67	石製品	石臼	—	—	—	[1000]	石臼の上臼。下面は使用により摩耗する。
1303	SK72	石製品	碁石	2.1	0.5	2.1	3.0	粘板岩製。
1305	SK74	銅製品	不明	—	—	—	[44.0]	
1596	SK84	石製品	硯・砥石	8.8	0.8	3.4	[47.0]	粘板岩製。箱形。硯を砥石に転用したものか。両面に擦痕あり。両面に釘彫り。
1597	SK84	石製品	硯	[14.8]	3.5	[7.3]	[75.0]	箱形。凝灰岩製
1598	SK84床	石製品	不明	27.5	4.3	10.6	1460	扁平な棒状。全面に斜方向の刻み。
1599	SK84	銅製品	煙管 雁首	[6.3]	ラウ接合部径 1.0	火皿径 —	[11.0]	火皿を欠損する。断面六角形。外面に陰刻文様。陰刻による楹垣・七宝文
1600	SK84中層	銅製品	簪か	[12.9]	0.3	0.3	[5.0]	棒状。断面四角形。
1601	SK84	銅製品	簪か	[11.5]	0.2	0.3	[4.0]	棒状。断面四角形。
1602	SK84中層	鉄製品	不明	9.9	0.3	0.8	[11.0]	扁平棒状。扁平な頭部をもつ。頭部の2箇所に円孔。
1603	SK84下層	銅製品	不明	[7.5]	0.1	2.8	[7.0]	板状製品。
1604	SK84下層	銅製品	不明	—	0.05	—	[10.0]	薄い円盤状。腐食が著しく観察不能。
1605	SK84中層	鉄製品	釘	[5.0]	0.5	0.5	[3.0]	断面四角形。頭部を欠損する。
1606	SK84中層	鉄製品	刀子か	[5.1]	0.3	1.4	[4.0]	板状製品。
1645	SK85	石製品	温石か	[5.7]	2.0	3.6	[77.0]	粘板岩製。半分を欠損する。表面に陰刻文様。裏面の隅に面取りを施す。径0.4cmの円孔あり。
1685	SK97	銅製品	不明	[6.5]	0.1	4.3	[10.0]	薄い板状。
1711	SK102	銅製品	匙	[4.8]	0.2	0.8	[3.0]	
1721	SK116	鉄製品	不明	16.0	0.6	3.0	200	断面は扁平な長方形。
1738	SK120上層	銅製品	煙管 雁首	5.1	ラウ接合部径 1.8	火皿径 1.4	5.0	外面に2条沈線。
1776	P125	石製品	石臼	29.6	9.1	—	[4600]	砂岩製。石臼の上臼。上面に円孔。側面に方形の穿孔あり。
1836	SX13	銅製品	煙管 雁首	[7.0]	ラウ接合部径 1.0	—	[4.0]	
1837	SX13	銅製品	煙管 吸口	[7.3]	ラウ接合部径 1.0	—	[4.0]	
1914	包含層Ⅱ層	石製品	硯	18.4	1.6	7.5	520	粘板岩製。小判形。硯背に窪みをもつ。陸部は使用により窪む。外底に釘彫。
1916	包含層Ⅱ層	銅製品	火箸	16.2	0.6	0.5	20.0	扁平な頭部をもつ。断面円形。

※欠損、錆等がみられるものは重量を [ ] 表記した。

Tab.81 遺物観察表 (古銭)

図版番号	出土地点	種類	法量 (cm)			重量 (g)	銭種・铸造年代他	備考
			外径	孔径	厚さ			
718	SK19上層	寛永通宝(新)	2.5	0.6	0.1	3.0	文銭・背文、1668年以降	
919	SK25下層	寛永通宝(新)	2.3	0.6	0.1	2.0	1697年以降	
920	SK25	寛永通宝(新)	2.4	0.6	0.1	—	新寛永は1697年以降、鉄銭は1739年以降	銅銭と鉄銭が6枚重なり溶着する。
921	SK25下層	雁首銭	2.0	0.8×0.3	0.1	2.0		煙管雁首を転用。
1024	SK37	寛永通宝(古)	2.4	0.6	0.1	3.0	1636年以降	
1099	SK43	寛永通宝(古)	2.4	0.5	0.1	[4.0]	1636年以降	
1607	SK84上層	寛永通宝(新)	2.5	0.6	0.1	[3.0]	文銭・背文、1668年以降	1607・1608が2枚重なり溶着する。
1608	SK84上層	寛永通宝(新)	2.2	0.6	0.1	[2.0]	1697年以降	同上
1609	SK84	寛永通宝(新)	2.3	0.6	0.1	2.0	出羽国秋田、1736年以降	
1610	SK84上層	寛永通宝(新)	2.4	0.6	0.1	2.0	1697年以降	
1611	SK84中層	寛永通宝(新)	2.2	0.6	0.1	2.0	背元、1741～1743年	
1722	SK113	寛永通宝(古)	2.5	0.6	0.1	[3.0]	建仁寺銭か、1653年以降	
1764	SD1	寛永通宝(古)	2.4	0.6	0.1	[3.0]	芝銭か、1636年以降	
1794	SX11	寛永通宝(新)	2.4	0.6	0.1	[3.0]	山城国京都七条、1700～1707年	
1883	瓦溜2下層	寛永通宝(新)	2.5	0.6	0.1	3.0	文銭・背文、1668年以降	
1915	包含層II層	寛永通宝(新)	2.3	0.6	0.1	[2.0]	出羽国秋田か、1736年以降	

※欠損、錆等がみられるものは重量を [ ] 表記した。

Tab.82 遺物観察表 (瓦)

図版番号	出土地点	種類	法量 (cm)			色調	特徴	備考 (生産地・銘)
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区径	平瓦厚			
10	SK1	軒平瓦	—	—	—	外) 灰N4/ 断) 灰白N7/	中心飾りは丁子又は花卉。両側に均整唐草文。	角枠内「□□」銘印あり。
11	SK1	平瓦	—	—	1.7	外) 灰5Y5/1 断) 灰5Y5/1・灰白5Y7/1		高知県高知市一宮 角枠内「一宮」銘印あり。
12	SK1	平瓦	—	—	1.6	外) 灰N4/ 断) 灰白7.5Y7/1		銘印あり。
13	SK1	平瓦	—	—	1.7～1.9	外) 灰N4/ 断) 灰白N7/		「小の忠」銘印あり。
190	SK3	軒丸瓦	15.9	11.8	1.6	外) 5Y5/1灰 断) 5Y7/1灰白	三ツ巴文・連珠。	
191	SK3 上層	棟飾り瓦	—	—	—	外) 灰5Y5/1 断) 灰5Y4/1・灰白5Y7/1	桐文。炭素吸着は弱い。	
192	SK3 上層	棟飾り瓦	—	—	—	外) 灰5Y5/1 断) 灰白5Y7/1・白5Y5/1	桐文。炭素吸着は弱い。	
193	SK3 上層	棟飾り瓦	—	—	—	外) におい黄橙10YR7/3 断) におい黄橙10YR7/3	桐文。炭素吸着は弱い。	
209	SK4	平瓦	—	—	1.6	外) 黒 断) 灰白N7/1		高知県香美市土佐山田町片地 「片常」銘印あり。
345	SK12	軒平瓦 右棧瓦	4.7	3.1	1.7	外) 暗灰N3/ 断) 灰白5Y7/1	中心飾りは三ツ巴文。両側に均整唐草文。キラ粉を使用。	
346	SK12	軒平瓦 右棧瓦	4.8	3.2	1.7	外) 暗灰N3/ 断) 灰白5Y7/1	中心飾りは三ツ巴文。両側に均整唐草文。	
347	SK12	軒平瓦 右棧瓦	—	—	—	外) 灰N4/ 断) 灰白5Y7/1	文様不明。	「け□」銘印あり。
348	SK12	平瓦	—	—	1.6	外) 灰N4/ 断) 灰白5Y7/1		角枠内「□の□」銘印あり。
349	SK12	平瓦	—	—	1.8	外) 暗灰N3/ 断) 灰5Y5/1		銘印あり。
406	SK17	軒丸瓦	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	三ツ巴文・連珠。	
407	SK17	丸瓦	—	—	2.0	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	厚手。外面イタナデ、内面刷毛。	被熱し変色する。
699	SK19 下層	軒丸瓦	16.2	12.0	—	外) 暗灰N3/ 断) 灰5Y6/1	三ツ巴文。珠数は12個。	
700	SK19 上層	軒丸瓦	—	—	1.8	外) 暗灰N3/ 断) 灰N5/	三ツ巴文・連珠。	
701	SK19 下層	軒平瓦 右棧瓦	—	—	1.6	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N8/	均整唐草文。	高知県香南市徳王子 「とく」銘印あり。
702	SK19 下層	平瓦	—	—	1.5	外) 灰10Y4/1 断) 灰白N7/		高知県安芸市 「御瓦師」銘印あり。



Tab.83 遺物観察表 (瓦)

図版番号	出土地点	種類	法量 (cm)			色調	特徴	備考 (生産地・銘)
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区径	平瓦厚			
703	SK19 下層	平瓦	—	—	1.5	外) 灰N4/ 断) 灰白N8/	キラ粉を使用。	高知県安芸市 「アキ□」銘印あり。
704	SK19 下層	平瓦	—	—	1.8	外) 灰N4/ 断) 灰N4/		高知県香南市徳王子 「王子」銘印あり。
740	SK20	丸瓦	—	—	—	外) 灰5Y5/1 断) 灰白5Y7/1	外面ナデ、内面布目。	花形の刻印あり。
741	SK20	軒丸瓦	—	—	—	外) 灰7.5Y4/1 断) 灰白7.5Y8/1	三ツ葉柏文。瓦当に粗砂が多く 付着。	
742	SK20	平瓦	—	—	2.1	外) 灰N5/ 断) 灰白5Y7/1		
743	SK20	丸瓦	—	—	—	外) 灰5Y5/1 断) 灰白5Y7/1	外面ナデ、内面布目。	菱形の刻印あり。
768	SK21 下層	軒平瓦 左棧瓦	—	—	1.5		均整唐草文。外面にキラ粉。	角枠内「小の□」銘印あり。
769	SK21	軒平瓦	4.7	3.4	—	外) 黄灰2.5Y5/1 断) 灰白2.5Y7/1	中心飾りは丁子か。両側に均整 唐草文。	
770	SK21 下層	平瓦	—	—	1.4	外) 灰N4/ 断) 灰白N8/	外面にキラ粉。	銘印あり。
771	SK21 下層	平瓦	—	—	1.7	外) 灰5Y5/1 断) 灰白N7/	外面にキラ粉。	高知県安芸市 角枠内「安芸友」銘印あり。
772	SK21 下層	平瓦	—	—	1.5	外) 灰N4/ 断) 灰白7.5Y8/1		高知県香南市徳王子 角枠内「徳善平」銘印あり。
773	SK21 下層	平瓦	—	—	1.5	外) 灰N5/ 断) 灰白N8/	外面にキラ粉。	高知県香南市徳王子 角枠内「徳善平」銘印。
917	SK25	平瓦	—	—	1.9	外) 灰5Y5/1 断) 灰白5Y7/1		高知県香南市徳王子 「とく」銘印あり。
918	SK25	平瓦	—	—	1.8	外) 灰5Y5/1 断) 灰5Y6/1		高知県安芸郡芸西村和食 「和食」銘印あり。
924	SK26 下層	平瓦	—	—	1.6	外) 灰N4/ 断) 灰白7.5Y7/1		高知県安芸市 「安喜重蔵」銘印あり。
981	SK36 2層	軒平瓦	—	—	—	外) 灰5Y4/1 断) 灰5Y6/1	中心飾りは三ツ巴文。両側に均 整唐草文。キラ粉を使用。	高知県安芸市 「アキ□」銘印あり。
982	SK36 2層	軒平瓦 左棧瓦	—	—	1.5	外) 灰N4/ 断) 灰5Y6/1	中心飾りは花又は桐文。両側に 均整唐草文。	
983	SK36 1層	平瓦	—	—	1.8	外) 灰7.5Y4/1 断) 灰白7.5Y7/1	キラ粉を使用。	角枠内「下田幸」銘印。
1025	SK37 下層	軒平瓦 右棧瓦	—	—	—	外) 灰N4/ 断) 灰白5Y7/1	均整唐草文。陽刻による「王」字。	
1026	SK37 下層	平瓦	—	—	1.5	外) 灰5Y5/1 断) 灰白5Y7/1	キラ粉を使用。	銘印あり。
1033	SK39	棟飾り瓦	—	—	1.5	外) 灰N4/ 断) 灰白N7/	三ツ巴文と連珠12個。三ツ巴文 と均整唐草文。キラ粉を使用。	
1034	SK39	棟飾り瓦	8.3	6.1	—	外) 灰N3/ 断) 灰白N7/	三ツ巴文。連珠12個。キラ粉を 使用。	
1035	SK39	軒丸瓦	14.5	11.0	—	外) 灰N4/ 断) 灰白N7/	三ツ巴文。連珠12個。キラ粉を 使用。	
1036	SK39	軒平瓦	—	—	1.6	外) 灰N4/ 断) 灰白N7/	均整唐草文。キラ粉を使用。	高知県安芸市 「□□小松郊三郎」銘印あり。
1037	SK39	軒平瓦	—	—	—	外) 灰N3/ 断) 灰白N7/		高知県香南市夜須町 角枠内「ヤス兼」銘印あり。
1038	SK39	軒平瓦 左棧瓦	4.0	2.6	1.5	外) 灰N4/ 断) 灰白N6/	中心飾りは三ツ巴文。両側に均 整唐草文。キラ粉を使用。	高知県香南市夜須町 「ヤス□」銘印あり。
1039	SK39	軒平瓦 右棧瓦	4.5	2.8	1.7	外) 灰N3/ 断) 灰白N7/	中心飾りは三ツ巴文。両側に均 整唐草文。キラ粉を使用。	
1040	SK39	軒平瓦	—	—	1.5	外) 灰N4/ 断) 灰白N7/		「久慶□」銘印あり。
1041	SK39	平瓦	—	—	1.5	外) 灰N4/ 断) 灰白N7/		高知県香南市夜須町 角枠内「ヤス兼」銘印あり。
1042	SK39	平瓦	—	—	1.7	外) 灰N3/ 断) 灰白N7/		高知県香南市夜須町 角枠内「ヤス兼」銘印あり。
1043	SK39	平瓦	—	—	1.7	外) 灰N4/ 断) 灰白N7/		高知県香南市夜須町 「ヤス三」銘印あり。
1044	SK39	平瓦	—	—	1.7	外) 灰N4/ 断) 灰N5/		高知県香南市夜須町 角枠内「ヤス貞」銘印あり。
1045	SK39	平瓦	—	—	1.5	外) 灰N3/ 断) 灰N6/		高知県香南市夜須町 角枠内「ヤス貞」銘印あり。
1046	SK39	平瓦	—	—	1.7	外) 灰N4/ 断) 灰白N7/		「□□□□」銘印あり。
1047	SK39	平瓦	—	—	1.6	外) 灰N4/ 断) 灰白N7/		高知県高知市布師田 角枠内「布源」銘印あり。

Tab.84 遺物観察表 (瓦)

図版番号	出土地点	種類	法量 (cm)			色調	特徴	備考 (生産地・銘)
			瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区径	平瓦厚			
1048	SK39	平瓦	—	—	1.6	外) 灰N4/ 断) 灰白N7/		高知県安芸市 「アキ小松卯三郎」銘印あり。
1062	SK42	軒平瓦 左棧瓦	4.5	2.8	1.6	外) 黒 断) 灰白N8/	中心飾りは三ツ巴文。両側に均 整唐草文。キラ粉を使用。	高知県香南市徳王子 「王子定」銘印あり。
1063	SK42	軒平瓦	4.2	2.5	1.5	外) 灰N4/ 断) 灰白N7/	中心飾りは三ツ巴文。両側に均 整唐草文。キラ粉を使用。	高知県香南市徳王子 「王子定」銘印あり。
1064	SK42	平瓦	—	—	1.6	外) 灰4/ 断) 灰白N7/		角枠内「下田□」銘印あり。
1100	SK43 上層	平瓦	—	—	1.6	外) 灰N4/ 断) 灰N7/		銘印あり。
1288	SK68	平瓦	—	—	2.8	外) 灰N6/ 断) 灰白N8/		
1330	SK83	軒平瓦 右棧瓦	5.4	3.2	1.6	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N8/	中心飾りは花文。両側に均整唐 草文。	高知県香南市徳王子 「とく」銘印あり。
1331	SK83	軒平瓦 右棧瓦	5.3	3.1	1.6	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N8/	中心飾りは花文。両側に均整唐 草文。	高知県香南市徳王子 「とく」銘印あり。
1332	SK83	軒平瓦 右棧瓦	—	—	—	外) 灰N5/ 断) 灰白2.5Y7/1	均整唐草文。キラ粉を使用。	「にろ□」銘印あり。
1612	SK84 下層	軒平瓦 右棧瓦	4.6	3.0	1.5	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N7/	中心飾りは丁子又は花卉。両側 に均整唐草文。	
1613	SK84	軒平瓦 右棧瓦	4.2	3.0	1.5	外) 暗灰N3/ 断) 灰N6/	中心飾りは丁子又は花卉。両側 に均整唐草文。キラ粉を使用。	
1614	SK84	軒平瓦	4.3	3.0	—	外) 暗灰N3/ 断) 灰N6/	中心飾りは丁子又は花卉。両側 に均整唐草文。キラ粉を使用。	
1615	SK84	軒平瓦 右棧瓦	4.5	2.7	1.5	外) 灰5Y6/1 断) 灰白5Y7/1	中心飾りは花文。両側に均整唐 草文。炭素吸着は弱い。	
1616	SK84	軒平瓦	4.2	2.7	—	外) 暗灰N3/ 断) 灰N6/	中心飾りは菊花文。両側に均整 唐草文。キラ粉を使用。	
1617	SK84	軒平瓦 右棧瓦	5.1	3.1	1.5	外) 灰N4/ 断) 灰白N7/	中心飾りは花文。両側に均整唐 草文。キラ粉を使用。	高知県香南市徳王子 「とく」銘印あり。
1618	SK84	軒平瓦 右棧瓦	—	—	1.7	外) 灰5Y4/ 断) 灰5Y6/1	中心飾りは不明。両側に均整唐 草文。	「ノニミ」銘印あり。
1619	SK84 下層	軒平瓦 左棧瓦	—	—	1.5	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N7/	両側に均整唐草文。唐草は巻き が少ない。	高知県香南市徳王子 「とく」銘印あり。
1620	SK84 下層	軒平瓦 左棧瓦	—	—	1.6	外) 灰N4/ 断) 灰5Y5/1	中心飾りは巴文。両側に均整唐 草文。キラ粉を使用。	高知県香南市徳王子 「□子定」銘印あり。
1621	SK84 下層	丸瓦	—	—	1.7	外) 黄灰2.5Y6/1 断) 灰白2.5Y7/1		
1622	SK84 下層	平瓦	—	—	1.4	外) 灰7.5Y6/1 断) 灰白N7/	キラ粉を使用。	角枠内「トク周」銘印。
1623	SK84 下層	平瓦	—	—	1.5	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N7/		高知県香南市徳王子 「とく」銘印あり。
1624	SK84 下層	平瓦	—	—	1.6	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N7/		高知県香南市徳王子 「とく」銘印あり。
1625	SK84 上層	平瓦	—	—	1.9	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N7/		高知県安芸市 「安喜」銘印あり。
1626	SK84 上層	平瓦	—	—	1.5	外) 暗灰N3/ 断) 暗灰N3/		角枠内「御瓦□」銘印あり。
1686	SK97	軒平瓦	3.7	2.7	1.5	外) 暗灰N3/ 断) 灰N6/	中心飾りは花文。両側に均整唐 草文。キラ粉を使用。	大阪府堺市か 丸枠内「堺」銘印か。
1687	SK97	軒平瓦	5.1	3.4	1.5	外) 暗灰N3/ 断) 灰N7/	中心飾りは丁子又は花文。両側 に均整唐草文。キラ粉を使用。	
1688	SK97	平瓦	—	—	1.5	外) 暗灰N3/ 断) 灰N7/	キラ粉を使用。	「御用師卯平」銘印あり。
1708	SK100	軒平瓦	4.7	3.3	1.7	外) 灰5Y4/1 断) 灰白5Y8/1	中心飾りは三ツ巴文。両側に均 整唐草文。	
1802	SX12	軒平瓦	—	—	1.5	外) 灰N4/ 断) 灰白N7/	中心飾りは花文。両側に均整唐 草文。	
1803	SX12	平瓦	—	—	1.6	外) 暗灰N3/ 断) 灰N6/・灰白N8/	キラ粉を使用。	「け□□」銘印あり。
1838	SX13 上層	軒平瓦	—	—	1.5	外) 黄灰2.5Y4/1 断) 灰白N7/	側面に均整唐草文。	角枠内「小の□」銘印。
1882	瓦溜2 最下層	軒丸瓦	15.0	—	—	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N8/・黒	三巴文。珠数18個。キラ粉を使 用。	
1886	瓦溜3	軒平瓦	—	—	1.5	外) 暗灰N3/ 断) 灰白N7/	中心飾りは丁子。側面に均整唐 草文。	
1887	瓦溜3	軒平瓦	—	—	1.5	外) 黄灰2.5Y4/1 断) 灰白N7/	中心飾りは花文。	
1888	瓦溜3	平瓦	—	—	1.6	外) 灰N4/ 断) 灰N4/		高知県香南市徳王子 「王子弥」銘印あり。

Tab.85 遺物観察表（木製品）

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			特徴・使用痕他
			全長 [ ] 残存長	全厚 [ ] 残存厚	全幅 [ ] 残存幅	
1627	SK84 下層	下駄 草履下駄	22.7	2.3	6.8	小判形。台部前方に1対の釘穴、後方に穿孔4穴。裏面にアーチ状の削り。
1628	SK84 下層	下駄 草履下駄	[16.7]	1.5	6.4	小判形。台部前方に穿孔1穴。裏面にアーチ状の削り。下部は欠損。
1629	SK84 下層	下駄 草履下駄	15.0	2.2	4.8	小判形。台部前方に穿孔1穴、後方に穿孔4穴。裏面にアーチ状の削り。
1630	SK84 下層	下駄 連歯下駄	19.3	4.7	8.6	角形。台部の断面は厚さ1.1cmの板状。歯は削り出しによる。歯の厚み2.5cm、残存高3.5cm。棕櫚縄の鼻緒を伴う。歯の接地面は使用によって摩耗する。
1631	SK84 下層	箸	14.8	0.5	0.5	面取りを施し断面円形に整形。
1632	SK84 下層	不明	28.1	0.5	[1.9]	用途不明の板状製品。片面に赤漆、片面に黒漆を施す。
1633-a	SK84 床	桶	27.8	1.2	27.7	桶の底。5枚の板を組み合わせる。各板の接合面に2箇所の本釘穴あり。
1633-b	SK84 床	桶	25.6	1.4	9.0	桶の側板。内面下位に抉りあり。
1634-a	SK84 下層	桶	27.0	1.6	27.3	桶の底。3～4枚の板を組み合わせる。各板の接合面に2箇所の本釘穴あり。
1634-b	SK84 下層	桶	29.2	1.2	9.2	桶の側板。外面上位と下位にたがの痕が残る。内面下位に底板の圧痕あり。
1635	SK84 下層	手桶	20.9	1.2	21.2	桶の底。1枚板を円形に削り出す。1635・1636・1637同一個体。
1636	SK84 下層	手桶	26.0	1.2	7.2	手桶の側板。柄の部分。穴あり。
1637	SK84 下層	手桶	18.5	1.2	7.2	手桶の側板。内面下位に底板の圧痕あり。
1638	SK84 床	桶	40.5	1.2	10.5	桶の側板。径1cmの円孔2穴を設け棕櫚縄を結び付ける。外面の上位と下位にたがの痕が残る。内面下位に底板の圧痕。
1639	SK84 床	桶	[25.1]	1.3	10.8	桶の側板。径1cmの円孔2穴を設け、棕櫚縄を結び付ける。下部は欠損。
1640	SK84 床	不明	4.6	0.4	2.9	周囲を粗く削り取り、瓢箪形に整形する。
1641	SK84 床	不明	16.2	1.5	14.0	方形。板状。両面に墨書。

[遺物観察表凡例]

○色調欄の略号「外」は外面、「内」は内面、「断」は断面を表している。

○色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帳」による。

○古銭については泉幸代、陶磁器については赤松和佳、日下正剛、佐藤公保、鈴木裕子、乗岡実、東中川忠美、西田宏子、能芝勉、各氏よりご教示を賜った。また下記の遺物については大橋康二氏よりご教示を賜った。

(33・67・70・83・84・94・99・104・107・108・199・389・396・453・494・723・947・948・1030・1185・1278・1307・1309・1311・1324・1325・1379・1435・1664・1668・1669・1694・1723・1724・1727・1728・1765・1766・1778・1781・1782・1779・1790・1791・1849・1895・1897・1906・1909)

## 第V章 考察

### 第1節 史料にみる西弘小路遺跡の性格と変遷

#### はじめに

西弘小路遺跡が立地する高知城内堀西側の地域は、近年まで「西弘小路」の町名が残り、近世には御馬廻などの侍屋敷が並ぶ上級武士の居住区であった。また内堀の西に接するこの地域は、江戸前期には西大門と下屋敷に近く、中期には広小路が新設され後期には近隣に馬場や藩の諸施設が設けられるなど、近世を通じてその景観を転じてきた地域でもある。

平成19年度の発掘調査では、侍屋敷に関連する近世初頭から幕末までの遺構を多数検出し、遺構内から多量の遺物が出土した。廃棄遺物には上手の陶磁器の他、土器、陶磁器、木製品その他からなる日用の生活用具が含まれ、当時の上級武士の生活実態を知る貴重な資料が得られている。

これらの検出遺構や遺物の性格を知る手掛かりとして、本節ではまず、関連の絵図や文献史料を用いながら、西弘小路遺跡の居住者の性格や変遷、立地上の特質やその歴史的背景をみていくこととしたい。

#### 1. 居住者の変遷

##### 居住者の推定

西弘小路遺跡が立地する高知城内堀西側の地域には、江戸時代前期には、西大門から西に向かう西大門筋と、内堀に沿って南北に延びる筋があった。寛文9年(1669)の『寛文己酉高知絵図』(Fig.227-図1)では、南北筋の両側に侍屋敷が並び、西側には北から「若尾忠兵衛」「樫井太兵衛」「神戸曾右エ門」「第十孫三郎」の侍屋敷が見えている。西弘小路遺跡は、この南北筋の西に面する屋敷区画にあたっているため、ここでは、今次調査区の範囲がどの侍屋敷に該当するのか、検討しておきたい。

まず、『寛文己酉高知絵図』は、藩差し出しの絵図として、その精度に高い評価がなされている<sup>(註1)</sup>のものである。ここに表された内堀西側の町並みと、現在の街路地図を対照させると、当時外堀の機能を果たしていた江の口川が、改修によってその流路を変更している点や、内堀の一部が埋められている他は、現況の街路区画が近世の町並みをほぼ引き継いでいることが分かる。これを前提とすれば、史料をもとに、近世の屋敷地の範囲を復元し、居住者を推定することが可能であろう。

17世紀中葉に推定される『侍町小割帳』<sup>(註2)</sup>(史料1)には、南北筋西側の侍屋敷は、南角から「第十孫六」「遠山新兵衛」「樫井五郎右衛門」「若尾忠兵衛」の順に居住者名が記されている。同史料によると「第十孫六」の項に「式拾五間半」、「遠山新兵衛」に「式拾六間」、「樫井五郎右衛門」に「拾四間」、「若尾忠兵衛」に「三拾間」と、各々の屋敷地の間口も記入されており、この間口の比率を現在の地図に対照させると、南北の敷地は北からA・B・C・Dの4区画に復元できよう。(Fig.226)そして、今次調査区の北部はB区画に該当する「樫井五郎右衛門」、南部はC区画に該当する「遠山新兵衛」の屋敷があったと推定される。

次に、寛文9年(1669)『寛文己酉高知絵図』(Fig.227-図1)では、今次調査区は北部が「榎井太兵衛」、南部が「神戸曾右衛門」の屋敷となっている。このうち、「神戸曾右衛門」は遠山氏2代目の「遠山新兵衛政春」の別姓であり、該当地では、榎井、遠山の両氏が引き続いて屋敷に居を構えていることになる。

以下、各年代の絵図資料と文献をもとに、今次調査地点南北の居住者の変遷を示したものがTab.86である。これによると、17世紀前葉の実態は明らかでないが、17世紀中葉(特に1640年代～1669年)に北に「榎井」、南に「遠山」。17世紀末(1689・1690年)に北に「片岡」、南に「飯沼」。同じく17世紀末(1697～1699年)に北に「飯沼」、南に「前野」。18世紀中葉(1746年)に北に「黒田」、南に「若尾」の屋敷があったことが分かり、以後幕末まで若尾氏と黒田氏が居住している。そして、近世には最低3度の屋敷替えが行われており、17世紀後葉から18世紀初めにかけて、侍屋敷の入れ替えが特に多い。

この様に、今回の調査地点では、17世紀後葉から18世紀初め頃まで居住者が比較的短期間の内に入れ替わり、18世紀前葉頃以降は「若尾」「黒田」の両家が江戸末期まで居住したことが分かる。こうした動向をもとに、以下では近世の西弘小路遺跡を、前半期(17世紀～18世紀初頭)と後半期(18世紀前葉～幕末)に分け、景観の変遷と各居住者の性格をみておきたい。

## 2. 江戸前期の西弘小路遺跡と居住者

### 17世紀の景観と居住者

西弘小路遺跡は高知城内堀の西側に並行して立地するが、その近隣には城の西大門とそこから東西に延びる西大門筋があった。正保年間(1644～1648)の絵図<sup>(註3)</sup>によると、西大門から入った城山麓の敷地は「下屋敷」となっており、江戸前期には、西大門の周辺区域が極めて重要な地点として扱われたことが窺われる。

17世紀中葉の『侍町小割帳』の記載では、南北筋に並ぶ侍屋敷のうち、西大門に最も近い北端の敷地は「若尾忠兵衛」の屋敷であり、そこから南へ「榎井五郎右衛門」「遠山新兵衛」「第十孫六」と続いている。また、寛文9年(1669)『寛文己酉高知絵図』(Fig.227-図1)では、引き続き北から「若尾忠兵衛」「榎井太兵衛」「神戸曾右エ門」「第十孫三郎」となっており、居住者の入れ替わりは見られない。しかし、元禄2・3年間(1689・1690)の絵図(Fig.227-図2)では、北端の若尾氏を除いて居住者が入れ替わっており、北から「若尾」「片岡」「飯沼」「乾」、また元禄10～12年間(1697～1699)の絵図(Fig.227-図3)では北から「若尾忠兵衛」「飯沼太右衛門」「前野新五郎」「岡田又兵衛」となっている。

以下では、調査区北部に屋敷を置いた榎井、片岡、飯沼、南部に屋敷を置いた遠山(神戸)、飯沼、前野各氏について、関連の文献史料をもとに、その性格と動向をみておきたい。

### 榎井氏について

榎井氏については、『御侍中先祖書系図牒』<sup>(註4)</sup>に系譜が示される他、山内家史料に収められた幾つかの記録中にその名が見える。

榎井氏の元祖である榎井内蔵丞正信は、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いで、伊予国分城主小川土佐守に従って東軍に属し、西軍の軍師大谷刑部吉継の勇将平塚因幡守為広を討ち取るという功績をあげた人物である。慶長6年（1601）には山内一豊の土佐入国に際して召し抱えられ、1500石を給されている。この内蔵丞正信については、後に関ヶ原での功績を2代藩主忠義から尋ねられ、その功績を誇らない態度が賞賛されたとの逸話が残る。<sup>(註5)</sup> 内蔵丞正信の跡目を継いだ2代目兵太夫は、嫡子が寛文8年（1668）に病死したため、これに替わって支家の五郎右衛門（勘解由）が榎井家の家督を相続する。この五郎右衛門（勘解由）を2代目に改め、榎井氏は以降9代目銘次郎まで山内氏に仕え、江戸勤番などを務めた。

『御侍中先祖書系図牒』に収められた、初代以降の跡目相続の期間と役職その他の内容は次の通りである。

元祖 内蔵丞正信（太兵衛）慶長6年（1601）登用 寛永16年（1639）没 知行1300石  
2代 兵太夫 寛永17年（1640）相続 正保元年（1644）没 跡目断絶 知行1500石  
2代 五郎右衛門（勘解由）寛永17年（1640）相続 万治2年（1659）没 御馬廻 知行500石  
3代 五郎右衛門正幸（能之助、太兵衛）万治2年（1659）相続 享保元年（1716）没 御馬廻  
4代 太兵衛正重（八五郎）享保2年（1717）相続 享保10年（1725）没 御馬廻  
5代 五郎右衛門政高（八五郎）享保18年（1733）相続 明和9年（1772）没 御馬廻  
6代 八兵衛政尾 安永2年（1773）相続 安永4年（1775）没  
7代 官太夫政栄（鉄次郎、五兵衛）安永4年（1775）相続 文政元年（1818）没  
8代 新八郎正水（新太郎、太兵衛）文政元年（1818）相続 文久3年（1863）没  
9代 銘次郎正浄 文久3年（1863）相続

各々の家督相続の期間からみて、『侍町小割帳』に見える「榎井五郎右衛門」は、次期2代目の五郎右衛門（相続期間1640～1659）、『寛文己酉高知絵図』に見える「榎井太兵衛」は、太兵衛の前名をもつ3代目五郎右衛門正幸（相続期間1659～1716）と考えられる。

### 遠山氏について

遠山氏についても、『御侍中先祖書系図牒』及び、山内家史料に収められた幾つかの記録中にその名が見える。

まず、慶長15年（1610）、尾張名古屋普請の折の出役人の名簿<sup>(註6)</sup>に、「六百石 遠山茂兵衛」の名が見える。また慶長20年（1615）の大坂出陣の記事<sup>(註7)</sup>にも、「遠山茂兵衛」が一番手の陣に置かれ、遠山氏が山内家古参の家臣として重用された家系であることが窺われる。

『御侍中先祖書系図牒』に収められた遠山氏系譜には、先の「遠山茂兵衛」の名は記載されておらず、両者の関わりがつかみ難いが、元和4年（1618）の家臣300余人の連署の名簿<sup>(註8)</sup>にも「遠山茂兵衛」以外の遠山姓は見えておらず、同じ家系につながるものであろうか。『御侍中先祖書系図牒』の系譜に見える初代遠山馬之丞政行は、もと甲州武田信玄に仕え、慶長14年（1609）に山内忠義に登用されて550石を給されている。その後、2代目遠山新兵衛政春に続き、3代目を子の神戸曾右衛門が継ぐが、延宝元年（1673）に跡目が断絶する。このため、支家にあたる遠山甚右衛門正膳が家督を継いで改めて初代となり、以下8代目遠山甚太政満まで山内氏に仕えている。

『御侍中先祖書系図牒』に収められた初代以降の跡目相続の期間と役職その他の内容は、次の通りである。

元祖	遠山馬之丞政行	慶長14年(1609)登用	寛永元年(1624)没	知行550石
2代	新兵衛政春	寛永元年(1624)相続	承応年中(1652~1655)没	御馬廻 知行550石
3代	神戸曾右衛門	承応元年(1652)相続	延宝元年(1673)跡目断絶	
初代	遠山甚右衛門正膳	寛永19年(1642)登用	明暦3年(1657)没	五人扶持
2代	宅右衛門政武	明暦3年(1657)相続	元禄9年(1696)没	御馬廻
3代	八太夫政永	元禄10年(1697)相続	没年不明	御馬廻 知行500石
4代	八太夫政得	明和2年(1765)寛政5年(1793)没		御馬廻
5代	宅丞政堅	寛政5年(1793)相続	天保2年(1831)没	御馬廻 知行500石
6代	唯七政明	天保3年(1832)相続	天保9年(1838)没	
7代	八太夫政寧	天保9年(1838)相続	文久2年(1862)没	
8代	甚太政満	文久2年(1862)相続		

各々の家督相続の期間からみて、『侍町小割帳』に見える「遠山新兵衛」は、2代目の遠山新兵衛政春(相続期間1624~1652)、『寛文己酉高知絵図』に見える「神戸曾右衛門」は、3代目の神戸曾右衛門(相続期間1652~1673)が該当すると考えられる。また、遠山氏本家が1673年に断絶となったことから、遠山氏の屋敷替えがこの頃にあった可能性も考えられよう。

#### 片岡氏について

片岡氏については、先の元和4年(1618)の家臣300余人の連署の名簿に「片岡加右衛門」の名が見える。しかし、西弘小路遺跡に関わる片岡氏の情報としては、『元禄二、三年間之図』(1689~1690)に「片岡」とあるのみで、『御侍中先祖書系図牒』に収められる複数の片岡氏のうち、何れが該当するのかは明らかにできない。

#### 飯沼氏について

飯沼氏の先祖である飯沼平左衛門はもと安芸備後の福島氏に仕えたが、福島氏没落の後は浪人となり、その後、平左衛門の嫡子である飯沼助進直吉が元和6年(1620)に藩主山内忠義に登用されたものである。飯沼氏は初代助進直吉以下9代まで山内氏に仕え、江戸勤番などの務めに従事している。

『御侍中先祖書系図牒』に収められた初代以降の跡目相続の期間と役職その他の内容は、次の通りである。

元祖	助進直吉	元和6年(1620)登用	万治元年(1658)没	御馬廻 知行300石
2代	太右衛門直房	万治元年(1658)相続	元禄12年(1699)没	知行300石 江戸勤番
3代	幸左衛門直重	元禄12年(1699)相続	延享元年(1744)没	江戸勤番
4代	権兵衛直善	延享元年(1744)相続	延享2年(1745)没	江戸勤番
5代	幸左衛門為徳	延享2年(1745)相続	安永6年(1777)没	
6代	長左衛門直従	安永6年(1777)相続	寛政9年(1797)没	江戸勤番
7代	克右衛門直勝	寛政9年(1797)相続	文化14年(1817)没	

8代 太門直忠 文化14年(1817)相続 明治3年(1870)没

9代 太吉直増 明治3年(1870)相続

『元禄二、三年間之図』(1689・1690)『元禄自十年至十二年間之図』(1697～1699)に見える「飯沼太右衛門」は2代の飯沼太右衛門直房(相続期間1658～1699)が該当するとみられる。

#### 前野氏について

前野氏は山内一豊の土佐入国以前から仕えた古参の家臣であり、後に山内姓を賜って中老となった藩の重臣である。元祖は尾州黒田村の領主であったとされ、初代の前野勘兵衛が近州長浜にて山内一豊に召し出されている。嫡子の勘八は遠州掛川で500石取となり、山内姓を賜って山内掃部豊成と名乗り、その後、慶長5年(1600)には600石を賜って奉行職となる。またその子、山内中務豊長は1000石を賜り、慶長17年(1612)まで中老職を務めた。

前野勘兵衛以下の家系の他にも前野氏は数家に分かれており、西弘小路遺跡に屋敷を置いた「前野新五郎」の家系もその一つである。『御侍中先祖書系図牒』に収められた、初代以降の跡目相続の期間と役職その他の内容は、次の通りである。

元祖 新五郎正勝 天和2年(1682)相続 正徳4年(1714)没 御馬廻 知行150石 江戸勤番

2代 新五郎正胤 正徳4年(1714)相続 寛延2年(1749)没 江戸勤番

3代 市之進正□ 寛延2年(1749)相続 明和5年(1768)没

4代 新五郎正輔 明和5年(1768)相続 安永9年(1780)没

5代 盛右衛門正恒 安永9年(1780)相続 天保12年(1841)没

6代 新五郎正道 天保12年(1841)相続 文久2年(1862)没

7代 盛吉正護 文久2年(1862)相続

上記のうち『元禄自十年至十二年間之図』(1697～1699)に見える「前野新五郎」は初代の新五郎正勝(相続期間1682～1714)が該当するとみられる。

この様に、江戸前期の西弘小路遺跡では、初代が知行1300～1500石を与えられその後500石取となった榎井氏を筆頭に、知行550石の遠山氏など、古参の家臣が屋敷を賜り、その後も中老職の家系につながる前野氏など、知行150石～300石の上級武士が屋敷地を与えられた。

### 3. 江戸中期～後期の西弘小路遺跡と居住者

#### 元禄、享保の大火と周辺の動向

近世の西弘小路遺跡において、居住者の入れ替わりが17世紀末～18世紀初めの間に特に多かったことは先に触れた通りであるが、これには、跡目断絶などの各家の諸事情の他に、災害やそれに伴う景観の変化も影響を及ぼしたと考えられる。

西弘小路遺跡の発掘調査では18世紀前葉の火災に関連する焼土溜まりが数箇所確認された他、近隣する高知城伝下屋敷跡<sup>(註9)</sup>、高知城跡西堀地区の発掘調査(平成17年度調査)<sup>(註10)</sup>や試掘確認調査(平成19年度調査)<sup>(註11)</sup>でも火災に伴う廃棄土坑が確認され、内堀西側の地区一帯が甚大な被害を受けたことが窺える。そこで以下では、元禄11年及び享保12年の大火に関わる幾つかの記事の



うち、特に内堀西側周辺での被害の状況が分かるものを取り上げ、当時の西弘小路遺跡の動向を検証しておきたい。

まず、城内の下屋敷と太鼓丸が焼失した元禄11年（1698）の大火について、『皆山集』に収められた記事「元禄十一年寅ノ十月六日家焼失覚」<sup>(註12)</sup>には、北奉公人町、内堤、帯屋町筋、大門町、本町筋、中島町、与力町、南片町の焼失した屋敷が列挙されており、この内の「御侍屋敷家数百八拾軒 但与力衆共」の項に「岡田又兵衛 飯沼太右衛門 安藤藤十郎 長屋彦太夫」の名が挙がる。ここには、『皆山集』の『元禄自十年至十二年間之図』（Fig.227-図3）で南北筋西側に屋敷を置いた「岡田又兵衛」「飯沼太右衛門」の名が見える。また、南北筋を挟んで東側に対面する「安藤藤十郎」「長屋彦太夫」の屋敷も被害を受けており、南北筋に面する侍屋敷の多くが焼失したことが分かる。

次に享保12年（1727）の大火について、『南路志』<sup>(註13)</sup>に収められた「城下大火、御城本丸まで焼失 附公義御差出」の記事によると、大手門、西ノ口大門、北ノ口大門を除いて、天守、本丸、二の丸、三の丸をはじめとする城内の殆どが焼失した他、郭中の侍屋敷387軒と、廿代町、細工町、種崎町、蓮池町、農人町、新町、新市町、北奉公人町、堺町、唐人町、浦戸町、掛川町、朝倉町の町屋が焼失したことが記されている。この中で、郭中の侍屋敷については「郭内残家 帯屋町北側山田多門屋敷 下堀端火之見迄拾六軒。同南側高屋又兵衛宅 今田清左衛門迄拾壹軒。本町乾又五郎、大黒甚左衛門、野中六左衛門迄三軒。西大門北藪際、佐藤五郎左衛門壹軒。金子橋藪之内北小笠原又右衛門外輪 南鷹匠町堺迄、東ハ大塚藤右衛門、金子傅十郎 合而八軒。鷹匠町南側西ハ八軒。同北側後藤甚五右衛門一軒。外江ノ口分鷺見市丞壹軒。合四拾九軒残。」と、焼け残った侍屋敷の範囲が示されており、こうした記載からみて、堀西側一帯の侍屋敷は「西大門北藪際、佐藤五郎左衛門」の屋敷1軒を除く他は残らず焼失したことが窺われる。

これらの火災以後、城西側の景観にも変化がもたらされた。『皆山集』の記載によれば、「詒謀記事云西大門廣小路も元禄十一寅年火事以前ハ西ノ口瀬戸氏門前より南不破氏の辺迄両輪侍屋敷二て第十某など云侍居けると也 火事以後東側ハ除きて廣小路と成也」<sup>(註14)</sup>とあり、城内の下屋敷と太鼓丸が焼失した元禄11年（1698）の大火以後、堀西側の侍屋敷が撤去され、南北の筋が広小路になったとされる。さらに、享保12年（1727）の大火を経て、延享4年（1747）9月27日には城門の呼称が変更される<sup>(註15)</sup>とともに、「西大門筋」も「西弘小路」に改められたという。

元禄11年（1698）火災の時に、今次調査区の北に居住したのは飯沼太右衛門、南に居住したのは前野新五郎である。一方、享保12年（1727）火災時の居住者は、北は飯沼氏と黒田氏、南側は前野氏と若尾氏が可能性をもつが、この間の史料を欠き、屋敷替えがいつ行われたのかは明らかにできない。しかし、相次いだ災害と景観の変化は、侍屋敷の配置にも強い影響を与えたのではないかと推察される。

この次に黒田氏と若尾氏の居住が確認できるのは延享3年（1746）の『延享三年之図』（Fig.227-図4）からであり、西弘小路遺跡では、以降幕末まで両氏の居住が確認できる。以下、調査区北に屋敷を置いた黒田氏、南に屋敷を置いた若尾氏について、その性格と動向をみておきたい。

#### 黒田氏について

黒田氏は山内一豊公の代より務めた古参の家臣である。『御侍中先祖書系図牒』に収められた

初代以降の跡目相続の期間と役職その他の内容は次の通りである。

元祖	堪右衛門時成	天正12年(1584)	登用	寛永19年(1642)	没	知行200石
2代	小右衛門時政	相続年不明		寛文11年(1671)	没	御小姓組
3代	又市時盛	寛文11年(1671)	相続	正徳4年(1714)	没	御馬廻
4代	又左衛門守直	正徳4年(1714)	相続	宝暦7年(1757)	没	御馬廻 知行150石
5代	又市恒保	宝暦7年(1757)	相続	明和9年(1772)	没	
6代	仁右衛門時直(清兵衛)	安永元年(1772)	相続	文化10年(1813)	没	御馬廻 知行150石
7代	勇蔵時堅	文化10年(1813)	相続	天保13年(1842)	没	
8代	隆治時器	天保13年(1842)	相続	嘉永6年(1853)	没	御馬廻
9代	勝吉時泰	嘉永6年(1853)	相続	御馬廻		知行200石

延享3年(1746)絵図に現れる「黒田又左衛門」は4代目の又左衛門守直であり、以後、9代目まで城西側の屋敷に居住したことが分かる。

### 若尾氏について

南北筋西側の屋敷のうち最も北端に屋敷を置く若尾氏は本家にあたり、17世紀から幕末まで居住する。この本家若尾氏は、慶長10年(1605)に山内忠義によって、初代の若尾六左衛門が知行250石を賜り召し抱えられたもので、近世を通じて山内氏に仕え、御馬廻組頭、御側御用役、御仕置役、御近習目付、江戸勤番、御火消役などの要職を勤めている。

この本家から3代目若尾忠兵衛重綱の次男、若尾八郎右衛門正勝が分家し、さらに正勝の次男である若尾楨右衛門正信も分家したため、若尾氏は3家に分かれている。18世紀中葉以降、今次調査区の位置に屋敷を置いている若尾家は、分家した若尾楨右衛門正信以下の若尾氏である。

『御侍中先祖書系図牒』に収められた、若尾楨右衛門正信以下の系譜にみえる、跡目相続の期間と役職その他の概要は次の通りである。

初代	楨右衛門正信	元禄10年(1697)	登用	明和6年(1769)	没	御扨従組 知行200石
2代	内蔵太正栄	明和6年(1769)	相続	安永8年(1779)	没	江戸勤番
3代	楨右衛門以鑑	安永8年(1779)	相続	天保6年(1835)	没	御馬廻
4代	忠左衛門惇徳	天保6年(1835)	相続	安政5年(1858)	没	
5代	直馬允元	安政5年(1858)	相続	御馬廻		知行180石 御側御用役
6代	小平太信之			御馬廻		知行230石

ところで、若尾氏については、若尾家の養育に入った猪助なる人物が天保3年(1832)に郷士職を得て、梶原に領地を給され深尾氏に仕えている。この、若尾猪助につながる家系からは、明治の俳人若尾蘭水が輩出されている。

### 江戸後期の景観

さて、18世紀以降、当調査区に該当する地点には若尾氏と黒田氏が屋敷を賜り、幕末まで入れ替わりは無い。また、延享3年(1746)(Fig.227-図4)、享和元年(1801)(Fig.228-図7)、天保元年(1830)(Fig.228-図8)の絵図に見えるように、東側の南北筋は「西大門廣小路」「西弘小路」と呼称される南北の大道となり、18世紀初めから19世紀前葉にかけてほぼ変化が無い。

しかし、享和元年（1801）の絵図（Fig.228-図7）では、広小路の南の詰めに「御厩」が現れており、以降の絵図でも、該当地には「御厩馬場」「御馬屋」などの表記があり幕末まで継続している。

次に、内堀の南西角外側の一角の敷地では、天保元年（1830）絵図（Fig.228-図8）に、周囲を堀で囲み南東に小さな建物を伴った施設の絵が描かれており、建物の脇に「御番所」の文字が記されている。続いて、弘化年間（1844～1848）の『弘化年間旧郭中絵図』（Fig.228-図9）でも建物はみられないが堀で囲んだ施設が描かれており、先の天保元年絵図に描かれる番所と同様のものかと思われる。

また、内堀の西側にも再び変化が見え、弘化年間（1844～1848）の絵図（Fig.228-図9）で、もとの広小路の一部が「新御馬場」となっている。また『皆山集』に収められた文久3年（1863）の絵図（Fig.228-図10）、幕末頃とされる『高知郭中図』（Fig.228-図11）でも「新馬場」とされている。この「新馬場」新設の時期については、『皆山集』に、「嘉永二酉年五月初テ馬場トナル東西八間南北九十六間」とあり、嘉永2年（1849）に設けられたとされている。<sup>(註16)</sup>

## おわりに

ここまで、絵図と文献史料をもとに、西弘小路遺跡の居住者の動向と周辺の景観変遷をみてきた。堀西側の一帯は、17世紀には西の搦手門と藩主の下屋敷に近接するという重要な位置にあり、高い禄を賜った古参の家臣や、重臣の縁戚などの上級武士が屋敷を与えられた。また17世紀末～18世紀初めには広小路が新設され、19世紀には周囲に厩や番所などの藩の施設が現れるとともに堀の西岸へも馬場が設けられ、その機能が拡大していった。こうしてみると、西弘小路遺跡とその周辺は、近世を通じて多様に変化した地域であったといえよう。そしてそれは、当地域が藩政の重要な役割を担うに有利な立地であったからともいえる。

西弘小路遺跡は侍の居住地であり生活の場であったが、城の西に隣接するという立地環境から、周囲には常に藩政上の重要な施設が置かれてきた。そのため、そこに勤める藩士間の交流や、物品や情報の流れなども極めて活発な場所であったと推察される。こうした環境は居住者の暮らしぶりにどう反映され、所持品にどのような特徴として現れるのだろうか。また、災害や配置替え等の事象は遺構の廃絶や遺物廃棄の在り方にどのように関わっているのだろうか。これらの課題については、発掘調査の成果をもとに後節にて検討することとしたい。

## 謝辞

今回の報告にあたっては、絵図資料の調査について吉松靖峯氏より、多くのご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

## [註]

- 1) 『寛文己酉高知絵図』（高知市民図書館所蔵）は作成者や年時を示す奥書は欠落しており、図中の屋敷名などから松野尾章行が寛文9年頃の図と判定したと推測されている。また、同絵図は内容の詳細さと製図手法の正確さが高く評価されており、藩内用に藩が作成したものと推測されている。大脇保彦「高知城下町絵図について－歴史空間の情報源としての吟味と課題」『土佐女子短期大学紀要8』土佐女子短期大学2001
- 2) 絵図上に記載される「樫井五郎右衛門」の相続年代（1640～1659年）、「遠山新兵衛」の相続年代（1624～1652）を当てはめると、『侍町小割帳』の年代を1640～1652年の間に推定することが可能であろう。加えて、郭中西端の金子橋周辺に屋敷を置く「金子弥右衛門宅明」も同史料に記載されるが、正保2年（1645）に没しており、この点も考慮すると史料の年代観を1640年代頃まで絞り込むことも可能であろう。
- 3) 国立公文書館内閣文庫所蔵
- 4) 『御侍中先祖書系図帳』土佐山内家宝物資料館
- 5) 「常山紀談御家中先祖書」『土佐偉人伝』寺石正路より引用。
- 6) 『土佐國群書類従』二十所収の記事「尾州名護屋御普請御家人役帳」による。『山内家史料 第二代忠義公紀第一編』山内神社宝物資料館 昭和55年より引用。
- 7) 慶長20年（1615）大坂出陣の記事。『山内家史料 第二代忠義公紀第一編』山内神社宝物資料館より引用。
- 8) 元和4年（1618）家臣連署の名簿。「四年午戌正月山内修理亮豊康君等一門家臣三百人連署ノ名簿ヲ高野山正覚院ニ納國壇那タルコトヲ約ス」『山内家史料 第二代忠義公紀第一編』山内神社宝物資料館より引用。
- 9) 『高知城下屋敷敷－高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年
- 10) 『高知城跡（旧営林局跡地）試掘確認調査記者発表現地説明会資料』高知市教育委員会2005年
- 11) 『高知城跡－西堀地区試掘確認調査報告書』高知市教育委員会2009年
- 12) 『皆山集』。『土佐之國史料類纂 皆山集第六卷』高知県立図書館より引用。
- 13) 『南路志』卷七十五、豊敷公御代一。『土佐之國史料集成 南路志第七卷』高知県立図書館より引用。
- 14) 「高知市街誌稿」『皆山集』。『土佐國史料類纂 皆山集第九卷』高知県立図書館より引用。
- 15) 『皆山集』
- 16) 「高知市街誌稿」『皆山集』。『土佐國史料類纂 皆山集第九卷』高知県立図書館より引用。

## [参考文献]

- 大脇保彦「高知城下町絵図について－歴史空間の情報源としての吟味と課題」『土佐女子短期大学紀要8』土佐女子短期大学2001
- 寺石正路『土佐名家系譜』歴史図書社
- 『土佐國史料集成－南路志』高知県立図書館 1994年
- 『土佐之國史料類纂 皆山集』高知県立図書館 1973年
- 『土佐國史料集成 土佐國群書類』高知県立図書館 2006年
- 『御侍中先祖書系図帳』土佐山内家宝物資料館
- 『高知城下町読本－改訂版－』土佐史談会・高知市教育委員会 2004年

『特別展－絵図の世界』安芸市歴史民俗資料館1998年

**[絵図出典その他]**

- No.1)『正保城絵図』国立公文書館内閣文庫所蔵。
- No.2)『慶安五年高知郭中絵図』高知市立市民図書館所蔵。
- No.4)『寛文己酉高知絵図』高知市立市民図書館平尾文庫所蔵。
- No.5)『元禄二、三年間之図』皆山集稿本所載。
- No.6)『元禄自十年至十二年間之図』皆山集稿本所載。
- No.7)『高知城郭内図絵』高知県立図書館所蔵。
- No.8)『延享三年之図』吉松靖峯氏所蔵。吉松清氏による現代の写し。県立図書館所蔵の同年絵図と内容が共通する。
- No.9)『寛延年間頃高知城下郭中之図』吉松靖峯氏所蔵。吉松清氏によって写されたもので、「高知城復元上棟祭資料展示前に築屋敷住の萩野成實氏蔵の図より写す昭和廿九年四月六日 吉松靖容」の奥書を伴う。
- No.10)『天明年間前後高知絵図』吉松靖峯氏所蔵。吉松清氏による現代の写し。
- No.11)『高知御家中等籠図』安芸市立歴史民俗資料館所蔵。文化8年の写し。
- No.12)『天保元年高知之図』吉松靖峯氏所蔵。吉松清氏による現代の写し。高知市発行『図録高知市史』より転載。
- No.13)『土佐国高知城下町絵図』国立公文書館所蔵。竹内重意が天保12年に作図との奥書あり。『中・四国の市街古図』鹿島出版会 昭和54年より引用。
- No.14)『弘化年間旧郭中絵図』町田尚友氏所蔵。高知市発行『図録高知市史』より転載。
- No.15)『天保二年後古図廓中』高知市立市民図書館近森文庫所蔵。
- No.16)安政5年(1858)郭中図…複写資料、高知市立市民図書館所蔵。「安政五戊午年夏□製 同庚申暮春写之ト有 慶応四年戊辰春写之」の奥書を伴う。
- No.17)文久3年(1863)絵図 皆山集稿本所載。
- No.18)『高知郭中図』『高知城下町読本－改訂版－』土佐史談会・高知市教育委員会2004年より転載。

Tab.86 絵図・史料にみる西弘小路遺跡の変遷

No.	挿図番号	年代	資料名	調査区北側 屋敷の記載	調査区南側 屋敷の記載	所蔵・引用	資料の性格・備考
1		正保年間 (1644～1648)	『正保城絵図』	「侍屋敷」	「侍屋敷」	国立公文書館内閣文庫所蔵	藩による幕府差し出しの絵図。
2		慶安5年 (1652)	『慶安五年高知郭中絵図』	「侍屋敷」	「侍屋敷」	高知市立市民図書館所蔵	藩による幕府差し出しの絵図の控え。
3		1640年代か	『侍町小割帳』	「樫井五郎右衛門」	「遠山新兵衛」		
4	Fig.227-図1	寛文9年 (1669)	『寛文己酉高知絵図』	「樫井太兵衛」	「神戸曾右衛門」 (遠山)	高知市立市民図書館 平尾文庫所蔵	
5	Fig.227-図2	元禄2, 3年 (1689・1690)	『元禄二、三年間之図』	「片岡」	「飯沼」	皆山集稿本所蔵	松野尾章行による、近代の写し。
6	Fig.227-図3	元禄10～12年 (1697～1699)	『元禄自十年至十二年間之図』	「飯沼太右衛門」	「前野新五郎」	皆山集稿本所蔵	松野尾章行による、近代の写し。
7		延享3年 (1746)	『高知城郭内図絵』			高知県立図書館所蔵	同年の絵図と内容が同じ。
8	Fig.227-図4	延享3年 (1746)	『延享三年之図』	「黒田又左衛門」	「若尾楨右衛門」	吉松靖峯氏所蔵	吉松清氏による現代の写し。 県立図書館所蔵の同年絵図と内容が同じ。
9	Fig.227-図5	寛延年間 (1748～1751)	『寛延年間頃高知城下郭中之図』	「黒田又左衛門」	「若尾楨右衛門」	吉松靖峯氏所蔵	吉松清氏による現代の写し。
10	Fig.228-図6	天明年間 (1781～1789)	『天明年間前後高知絵図』	「黒田清兵衛」	「若尾楨右衛門」	吉松靖峯氏所蔵	吉松清氏による現代の写し。
11	Fig.228-図7	享和元年 (1801)	『高知御家中等巻図』	「黒田清兵衛」	「若尾楨右衛門」	安芸市立歴史民俗資料館所蔵	文化8年の写し。
12	Fig.228-図8	天保元年 (1830)	『天保元年高知之図』	「黒田勇藏」	「若尾忠左衛門」	吉松靖峯氏所蔵	写し。
13		天保12年 (1841)	『土佐国高知城下町絵図』			国立公文書館所蔵	竹内重意が天保12年に作図との奥書あり。
14	Fig.228-図9	弘化年間 (1844～1848)	『弘化年間旧廓中絵図』	「黒田勇三」	「若尾忠左衛門」	町田尚友氏所蔵	写し。
15		天保2年以降 (1831～)	『天保二年後古図廓中』			高知市立市民図書館 近森文庫所蔵	写し。
16		安政5年 (1858)	郭中図			複写資料、高知市立市民図書館所蔵。	「慶応四年に写す」の奥書あり。
17	Fig.228-図10	文久3年 (1863)		「黒田」	「若尾」	皆山集稿本所蔵	近代の写し。
18	Fig.228-図11	幕末頃	『高知郭中図』	「黒田勝吉」	「若尾直馬」		

史料1 『侍町小割帳』（抜粋）

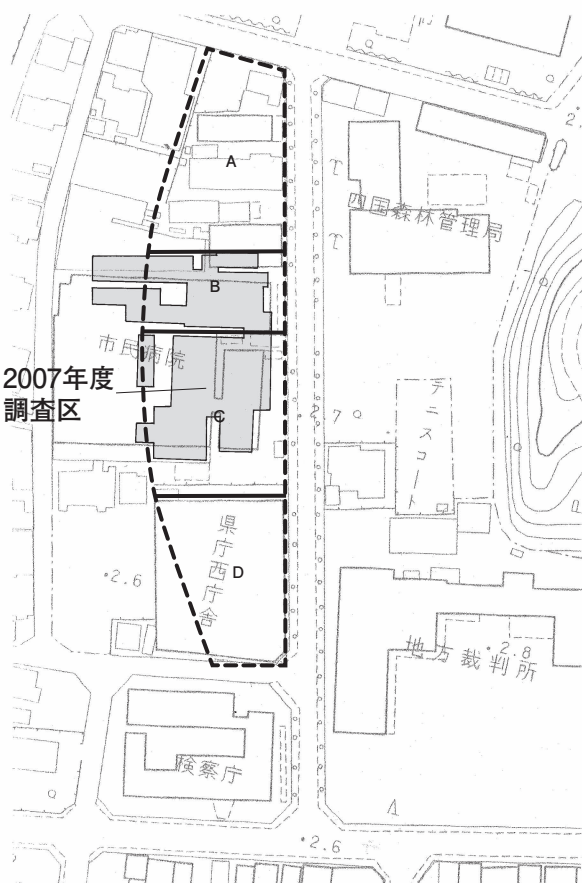
- メ式百六拾間半
- 同町北西川南角と
- 一式拾五間半
- 一式拾六間
- 一拾四間
- 一三拾間 北横拾間
- メ九拾九間五尺式寸五分
- 西大門立町東のはし北川
- 一式拾九間
- 一式拾三間
- 一三拾貳間 立町四間式尺
- 一三拾老間
- 一式拾六間五尺 南面拾九間半
- ……（中略）……
- 岡村平次
- 安藤宇右衛門
- 沼津玄達
- 平井数馬 橋次右衛門
- 百々平兵衛 瀬戸金平
- 西一番北南横町東川北のはしと
- 不設市郎右衛門
- 第十孫六
- 若尾貞次郎
- 遠山新兵衛
- 黒田清兵衛
- 榎井五郎右衛門 久左衛門
- 若尾忠兵衛

右御侍屋敷小割帖年曆相記し無之二付、時代難考候得共、仙石忠右衛門・間宮九左衛門両士之屋敷有之ヲ以、考に候處、寛永より万治の年間御改正明亮也。其證如左。

寛永元年於江戸、御當家へ被召抱、仙石忠右衛門。万治二年百姓と出入有之。他國へ御暇被遣、間宮九左衛門。

寛政三年亥九月十五日写之。  
文政九年戌十一月十九日写之。市原辰登

所傳傳書ハ本書付札也。



屋敷割の推定位置図

（—は『侍町小割帳』、-----は『寛文己酉高知絵図』の記載をもとに復元。）



『寛文己酉高知絵図』寛文9年（1669）

（高知市立市民図書館所蔵の絵図より抜粋。）

Fig.226 西弘小路遺跡居住者の推定



図1 『寛文己酉高知絵図』 寛文9年 (1669) (高知市立市民図書館所蔵)

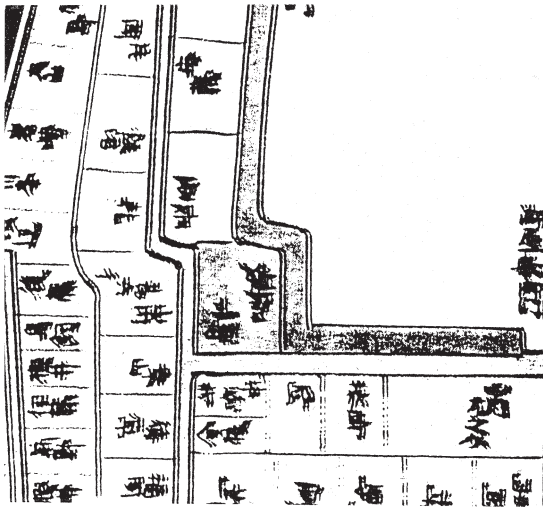


図2 『元禄二、三年間之図』  
元禄2・3年 (1689・1690) (皆山集稿本所載)

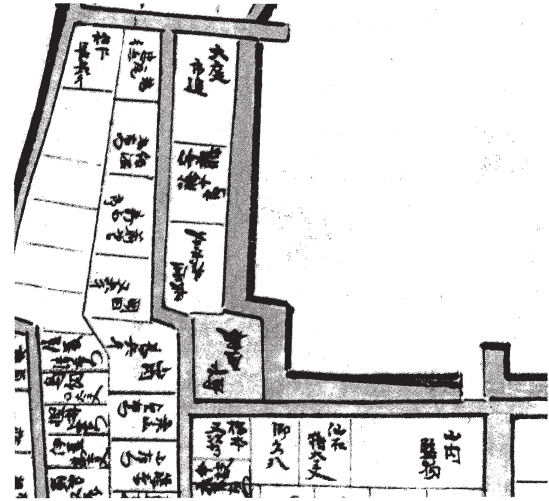


図3 『元禄自十年至十二年間之図』  
元禄10～12年 (1697～1699) (皆山集稿本所載)

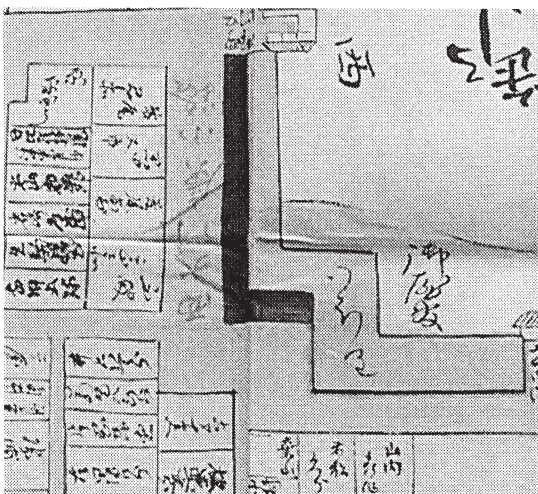


図4 『延享三年之図』 延享3年 (1746)  
(吉松靖峯氏所蔵)

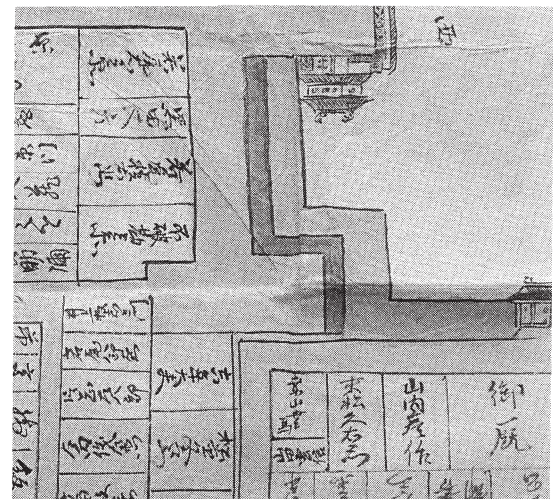


図5 『寛延年間頃高知城下郭中之図』  
寛延年間 (1748～1751) (吉松靖峯氏所蔵)

Fig.227 絵図にみる西弘小路遺跡の変遷 (1)



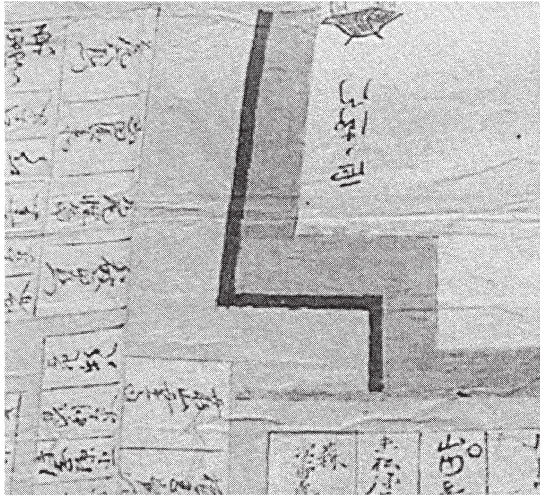


図6 『天明年間前後高知絵図』  
天明年間 (1781 ~ 1789) (吉松靖峯氏所蔵)

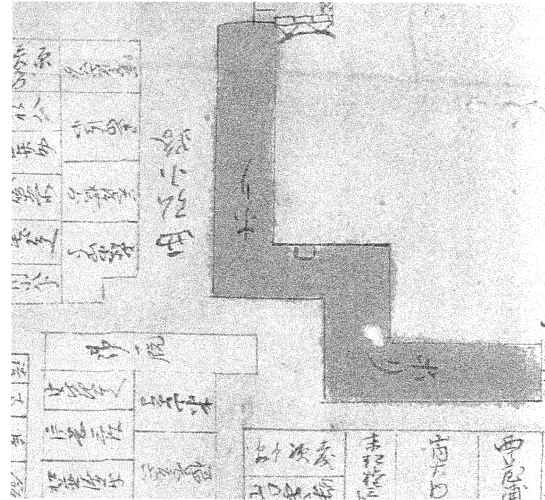


図7 『高知御家中等籠図』  
享和元年 (1801) (安芸市立歴史民俗資料館所蔵)

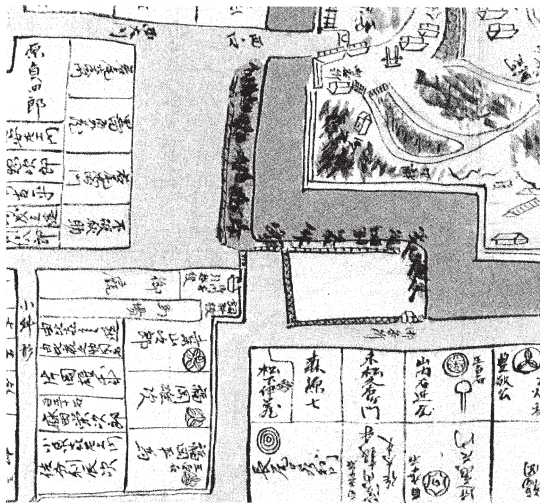


図8 『天保元年高知之図』  
天保元年 (1830) (吉松靖峯氏所蔵)

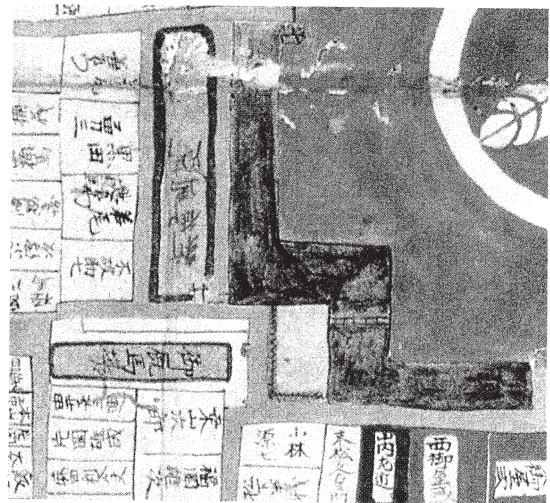


図9 『弘化年間旧廓中絵図』  
弘化年間 (1844 ~ 1848) (町田尚友氏所蔵)

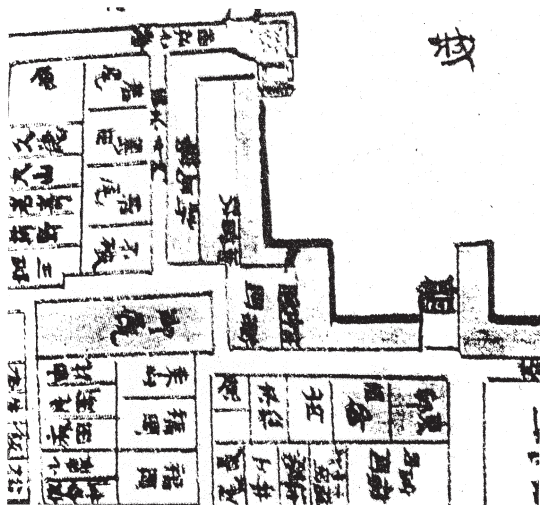


図10 文久3年 (1863) 絵図  
(皆山集稿本所載)

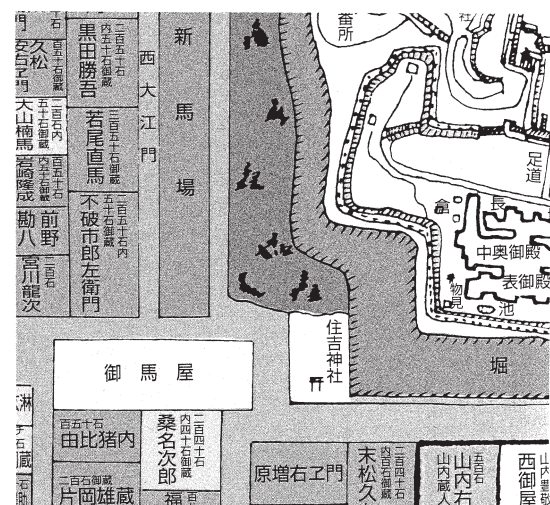


図11 『高知郭中図』幕末頃  
(ペン字を活字化したもの。『高知城下町読本』より転載。)

Fig.228 絵図にみる西弘小路遺跡の変遷 (2)

## 第2節 西弘小路遺跡検出遺構の性格と変遷

### はじめに

近世の西弘小路遺跡は、高知城内堀の西に立地する上級武士の屋敷地であった。江戸前期から後期にわたるそこでの居住者の入れ替わりの様子は、絵図や文献史料からもつかむことができ、今次調査区が近世には南部と北部2棟の侍屋敷に分かれ、檜井氏、遠山氏以下複数の上級武士が居住したことは、前節にて触れた通りである。

今回の調査では、調査区の南部側を中心に、近世の土坑、溝状遺構、ピット、ピット列、焼土溜まりなどの多数の遺構を検出している。本節ではこれらの検出遺構の特徴をまとめ、その性格を検討したい。また、年代毎の遺構の出現と廃絶の状況を追いながら、遺構の年代の変遷、屋敷地の空間構成についてもみていくこととする。

### 1. 検出遺構の概要

今回の調査では、近世の土坑121基、溝状遺構10条、ピット180個、ピット列9箇所、石列3箇所、性格不明遺構4基、焼土溜まり3箇所、瓦溜まり2箇所を検出した。以下、主な検出遺構について、その概要を述べておく。

#### (1) 溝状遺構

溝状遺構は、SD1～10を検出した。しかし、何れも下層への砂の堆積等は認められず、また検出長も短いことから、引水・排水溝としての機能は考え難いものであった。出土遺物が乏しいため、多くは年代が不明であるが、SD1が18世紀前葉、SD2が18世紀前葉～幕末の間、SD3は18世紀末以降、SD4が18世紀末～19世紀に廃絶年代を求められる。

これらは、A群：N-11°-Wの軸方向をもつ南北溝（SD1・2・4・5）、B群：N-11°-Eの軸方向をもつ南北溝（SD6・8～10）とそれに直角の軸方向をもつN-79°-Wの東西溝（SD7）、C群：他とやはずれをなす軸方向N-2°-Wの南北溝（SD3）、に大きく分けられる。このうち、A群としたSD1・2・4・5の軸方向は、現在の東側道路の軸とほぼ一致しており、また、今次調査区の内では堀や柵の可能性をもつピット列2～8、石列1～3とも軸が一致している。

#### (2) ピット列

ピット列1～8を検出した。ピット列1については、柱間寸法が1.7～1.8mと長く、周辺に柱痕を伴うピットが多く分布することなども考慮すると、掘立柱建物に伴う柱穴列の可能性もある。また、調査区の東部側では、この他にも柱痕や根石を伴うピットがいくつか見られ、複数の掘立柱建物が存在していた可能性がある。

一方、調査区東端部と南部西寄りで見出されたピット列2～8については、柱間寸法が0.7～1.0m前後の狭いものが多く、同一地点で繰り返し建て替えられていることなどからみて堀や柵など、屋敷地あるいは屋敷地内での境界施設として機能していた可能性が考えられる。これらは何れもN-11°-Wの軸方向を示しており、溝状遺構SD1・2・4・5や、石列1～3、現在の東側道路とも軸が一致する。年代的には18世紀前葉の火災層によって切られ、柱穴自身も焼土を含むものがあること

から、18世紀前葉以前から機能しており、火災によって廃絶したと考えられる。

### (3) 土坑

今回、最も検出数が多かったもので、近世の土坑121基を確認した。

まず、貯水機能をもつものとして、土坑内に甕を埋め込んだ円形の埋甕遺構（SK127・128）を検出している。

その他のものは楕円形や不整形の廃棄土坑であり、今回検出されたものの殆どはこれに該当する。検出された廃棄土坑には、径5m以上の大型のもの（SK3・17・19・21・52・84）と、径2m～5mの中型のもの（SK6・20・25・28・32・37・39・43・50・58・100・119）、径2m未満の小型のもの（SK1・2・12・13・16・18・22～24・26・27・29・30他）があった。

また、規模や形態等の外形上の違いの他に、出土遺物の内容や廃棄の在り方についても、いくつかのタイプがあった。今回見られた廃棄のタイプは次の通りである。

A：廃棄される遺物の量が比較的少量であるもの。

B-1：大型の土坑内に土器・陶磁器他の多量の生活用具が廃棄され、中に一通りの生活用具一式が含まれているもの。

B-2：近隣する複数の土坑に同時に廃棄が行われており、全体として遺物量が多く生活用具一式が廃棄されているもの。

C-1：瓦や漆喰を多量に廃棄しているもの。

C-2：大型の土坑内に土器・陶磁器他の多量の生活用具が廃棄され、かつ同時期とみられる瓦や漆喰の廃棄を周囲に伴うもの。

D：焼土、二次焼成を受けた瓦や陶磁器を多く含むもの。

Aは日常生活の中で行われる廃棄。B-1とB-2は屋敷替えなど、居住者の転居に伴う家財道具の一括廃棄とみられるもので、大型廃棄土坑SK3・19・21・52・84や、SK3と遺物の接合関係が認められたSK6などがある。C-1とC-2は建物の取り壊しに伴う廃棄であり、多量の瓦と漆喰を廃棄したSK1・10・39がある。また、大型廃棄土坑SK84の上面とその周囲に瓦や漆喰が廃棄された例もあり、居住者の転居と建物の取り壊しが同時に行われている。Dは火災に伴う処理遺構で、今次調査では18世紀前葉の火災関連遺構SK30・45・116・118・120がある。なお、類例の火災関連の遺構では、土坑以外に焼土溜まりSX4・11・22が確認されている。

## 2. 遺構の年代の変遷と空間構成

次に、今次調査区での遺構の検出状況を年代毎にまとめ、その変遷を振り返っておきたい。

### (1) 遺構の変遷

#### ①17世紀前半

17世紀前半以前の検出遺構は少なく、出土遺物の量も全体に少ない傾向がみられた。この時期の遺構で注目されるものでは、南部屋敷区画の北東端で検出した17世紀前葉の土坑SK17がある。SK17は径7mを超える大型の土坑であり、床面からは炭化物の集中とともに鉄滓、焼けて堅化した焼土、轆の羽口など鍛冶関連の遺物が出土している。

その他の17世紀前半の土坑では、1m前後の規模をもつ小型のSK92・93・95、径2.5m前後の規模をもつ中型のSK122を検出する。これらは何れも南部屋敷地区画の北東端の位置に分布しており、遺物量は極めて少ない。

この時期の南部屋敷地の居住者としては、遠山氏が挙げられる。しかし、史料から遠山氏の居住が確認できるのは1640年代以降であり、17世紀前葉段階から同氏の居住が開始されていたのかどうかは明らかでない。しかし、17世紀前葉に、鍛冶などの生産活動を行う屋敷が存在したことは推察できよう。

### ②17世紀後半～18世紀前葉

この時期の遺構で注目できるものには、径7m以上の規模をもつ17世紀末の大型廃棄土坑SK3がある。検出位置は北部屋敷区画の南西端にあたり、位置関係からみて、屋敷裏手の庭空間に設けられた廃棄土坑と考えられる。この他、該当期の土坑にはSK56・59・60・63・94・102・113～116・118・120・123があるが、何れも規模1.0～2.0m前後であり、遺物量も少ない。

また、南部屋敷区画の東側と西側を南北方向に延びるピット列2～8もある。先に触れたように、これらは塀や柵などの境界施設として機能していた可能性をもつものである。

この他、18世紀前葉の遺構で特徴的なものとして、南部屋敷区画の東部側で検出された焼土溜まりSX4・11・22が挙げられる。これらは埋土中に焼土ブロックと炭化物を多量に含んでおり、出土する陶磁器や瓦片には二次焼成を受け変質したものが多く含まれる。埋土中からは18世紀前葉の肥前産陶磁器が出土しており、その年代を18世紀前葉に求めることができるものである。

類例の遺構を周辺の遺跡にしてみると、東に近接する高知城跡西堀地区旧営林局跡地点<sup>(註1)</sup>、高知城跡西堀地区試掘確認調査<sup>(註2)</sup>、高知城伝下屋敷跡<sup>(註3)</sup>でも、同時期頃の焼土と被熱遺物を含む廃棄土坑や瓦溜まりが検出されており、内堀西側の地域一帯で同時期の火災関連遺構が確認されている。内堀西側の侍屋敷が被災し焼失した記録は、第1節にて取り上げた、元禄11年(1698)大火と享保12年(1727)大火が挙げられ、元禄11年には北側の屋敷区画にあたる飯沼の屋敷が焼失し、享保12年には南北の屋敷区画も含めて、城西側の侍屋敷の殆どが類焼したことが記録に残っている。これらの記事や、周辺遺跡の状況、出土遺物の内容などからみて、本調査区 SX4・11・22については、享保12年大火に伴う片付け跡の可能性が高い。また、SX4・11・22の廃棄遺物には赤変した瓦片が多数みられることなどから、この火災で、屋敷内の瓦葺き建物の多くが焼失し、崩壊に至った様子が窺われる。

18世紀前葉の火災をもって廃絶に至った遺構では、他に溝状遺構SD1があり、やはり埋土中に焼土が多く含まれている。また、先に取り上げた、境界施設とみられるピット列2～8も火災によって焼失している。このピット列は、焼土層の堆積以降は現れておらず、甚大な被害を被った18世紀前葉の火災以降、屋敷地内での境界施設の在り方が変化した可能性も考えられる。

### ③18世紀中葉～19世紀前葉

この時期、特に18世紀後半以降になると検出遺構数が増加し、土坑内の出土遺物量も多くなる。該当期の遺構としては、SK5・22・25・35・43・50・52・68～70・72・79・80・83がある。このうち、径5.9mの規模をもつ19世紀前葉の大型土坑SK19は、南部屋敷区画の南端位置にあり、屋敷地隅の

庭空間に設けられた廃棄土坑とみられる。この他にも、廃棄土坑は屋敷地の南部側、北東部側に多く分布している。

土坑の他にも、調査区の東部を中心に数箇所で見積り遺構を検出している。出土遺物が乏しく年代の不明なものが多いが、SD2が18世紀前葉以降幕末までの間、SD3は18世紀末以降、SD4が18世紀末～19世紀に廃絶年代を求められる。

#### ④19世紀中葉

南部屋敷区画の南西位置で、東西方向と南北方向の石列1～3を検出しており、これが幕末の瓦溜まり2・3とともに廃絶している。

他に注目される遺構として、幕末期のSK84がある。SK84は径7.2mの大型土坑で、南部屋敷地の北東隅に位置している。SK84の最上面には瓦や礫、橙色の漆喰を含む層が広がっており、近くには瓦と漆喰を多量に廃棄した土坑SK39も存在する。こうした状況からみて、SK84は居住者の転居と屋敷の取り壊しに伴う廃棄土坑と捉えることができる。この他、該当期の廃棄土坑には、SK7・12・21・29・37・42・47・84・88・89・97・100・117・121・124がある。

また各検出遺構の直上の面では、建物の取り壊しに伴うとみられる、瓦片を含む橙色土の堆積が各所で確認された。

この様に、19世紀中葉には、幕末の転換期の中で屋敷地全体が廃絶に至っており、それに伴う遺構廃絶と大量の遺物廃棄が認められている。

### (2) 屋敷地の空間構成と変化

ここまでみてきた各年代の遺構の出現と廃絶の状況をまとめ、時期別の遺構の分布状況を示したものがFig.229である。同図で境界Aと示した東西のラインは、第1節にて導き出した南北の屋敷地の境界推定位置である。ここで示した調査区南部の区画は、近世には遠山氏以下、若尾氏までの屋敷が存在した区画に該当している。また今次調査区では、享保12年（1727）の大火を境に前後で遺構配置に変化がみえたことから、これをもって、前半期（17世紀前葉～18世紀前年）と後半期（18世紀後半～19世紀中葉）に分けて示している。

まず、土坑その他の遺構の分布状況についてみると、前半期、後半期ともに、屋敷地の東部側と南部側に遺構が集中する傾向がみられる。

一方、屋敷区画の中央部から北西部にかけては、近世の遺物包含層が残存し攪乱を受けた痕跡が見えないにもかかわらず、土坑の分布密度が極めて低い空間が存在し、この空間が前半期から後半期まで続いている。今回の調査区では、火災や屋敷地の取り壊しに伴う廃棄遺物内に多くの瓦片が含まれており、敷地内に瓦葺きの礎石建物が存在していたことが暗示されているが、建物の基礎となる礎石は未検出であった。しかし、周囲への遺構の分布状況も含めて屋敷地全体の空間構成を考えると、礎石建物が中央部から北西部の空間に存在していた可能性が考えられよう。

また、井戸跡は検出できなかったが、近・現代の井戸跡がこの中央の空間地からやや南に寄った位置で確認されている。この他、中央の空間地からやや西に寄った位置では、口径40cm、胴径39cmの甕を埋めた埋甕土坑SK127も検出しており、やはり、この中央部から北西部にかけての範囲に居住空間としての色彩が強い。

対して、廃棄土坑が掘り続けられた屋敷地東部と南西部は、庭などの空間であったと考えられる。ここでは、日常生活の中で小規模な土坑が各所に掘られる他、転居などの非日常的な出来事に際しては、大型の廃棄土坑が屋敷地の裏手にあたる南西部と、東の道路に面する北東部に掘られている。

この様に本屋敷地では、居住空間と庭空間の位置関係については、近世を通して大幅な変更はなかったとみられる。それに対して、前半期から後半期の間で違いが表れたものは、南北方向の境界施設である。先に触れた様に、前半期には屋敷地の東部と西部にピットを伴う境界施設が存在していたが、18世紀前葉の火災で廃絶した以降は、この境界施設は継続しない。こうしたことから、地域一帯に甚大な被害を与え本屋敷地も焼失に至った18世紀前葉の火災を境に、屋敷地内の境界施設の位置や形態にも変化が生じたと考えられる。また、前半期に掘立柱建物跡が存在した屋敷地南東部側の位置においても掘立柱建物は継続せず、ここでも小規模な付属建物の位置や構造に変化が生じている。

【註】

- 1) 『平成17年度高知城跡（旧営林局跡地）発掘調査 記者発表現地説明会資料』高知市教育委員会2005年より引用。
- 2) 『高知城跡－西堀地区試掘確認調査報告書』高知市教育委員会2009年
- 3) 『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年

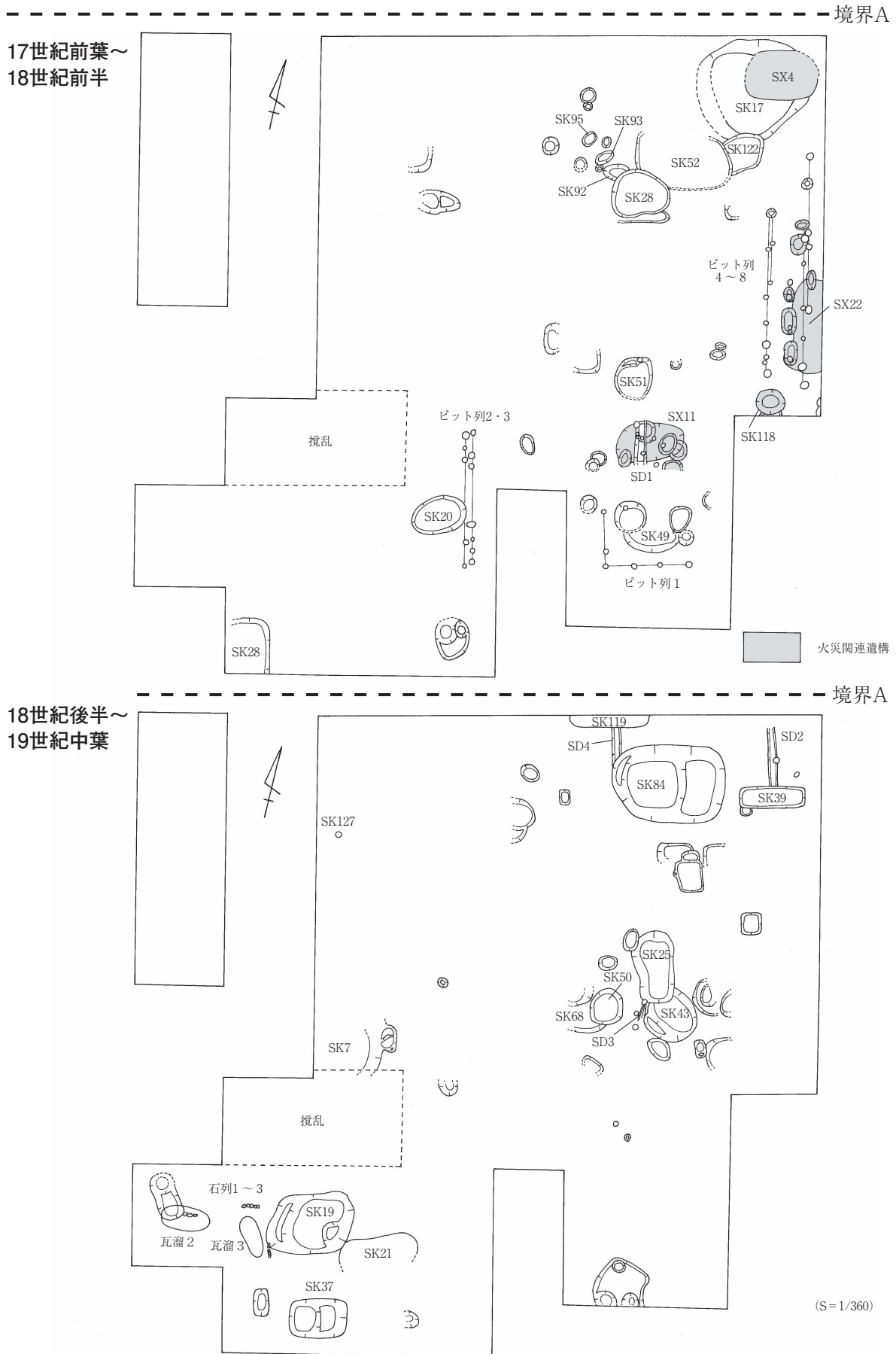


Fig.229 西弘小路遺跡南部検出遺構の分布と変遷

## 第3節 西弘小路遺跡出土遺物の様相

### はじめに

前節までで触れたように、本調査区では、18世紀前半までに廃絶する遺構群と18世紀後半～19世紀の遺構群、19世紀中葉の屋敷地の廃絶に伴う一括した廃棄遺構群があり、遺構廃絶にも数回のピークが認められた。これらの遺構内には、伝世品を含め、当地域に屋敷が構えられる17世紀前半以来の遺物が廃棄されており、遺構内に含まれる遺物の年代幅が大きいことや各生産地製品の種類の多さなど、その内容の豊かさも本遺跡の特徴の一つとなっている。

本節では、これらの廃棄遺物に含まれる陶磁器・土器の様相を検討し、西弘小路遺跡居住者の生活形態や経済力、嗜好等を知る手掛かりとする。また、各時期の遺物組成を検討することによって、上級武士層の陶磁器所有の在り方とその年代的な変化についても触れることとしたい。

### 1. 江戸前期の様相

17世紀の遺構は、SK3・17・31・92・93・95・96・98・102・122などがあつた。大型の土坑では17世紀前葉に比定されるSK17と、17世紀末に比定されるSK3があり、その他の土坑は規模の小さいものが多く遺物量も全体に少ない。この時期の良好な一括資料は県下でも例が少なく、実態の不明瞭な部分が多いため、ここでは、遺物量が最も多かつたSK3出土資料と、遺物量が少ないが特徴的な内容をもつSK17出土資料を取り上げ、その内容を検討しておきたい。

#### (1) SK3出土資料の性格

SK3は調査区北側の屋敷地に該当する。位置関係では、東に正面をもつ屋敷地の南西隅にあたり、屋敷裏手に掘削された廃棄土坑とみられる。ここでは、径7mを越える大型の土坑内に土器、陶磁器、石製品、金属製品等が廃棄されている。土坑の南部側が攪乱を受けるため廃棄遺物の全体像を把握することが出来ておらず、また、相対的な遺物の密度も特に高いとは言えないが、コンテナ箱2.5箱程の量が得られており、全体的な遺物量の多さは該当期の遺構中で最も多い。また、東に近接するSK6とは遺物の接合関係があり、複数遺構への同時廃棄が行われている。こうしたあり方から、SK3は居住者の入れ替わりなどの非日常的な出来事に際して掘削された廃棄土坑の可能性がある。また、ここでは多量の瓦の廃棄は認められず、建物の取り壊しの痕跡は認められない。また、火災に関連する二次焼成を受けた遺物や焼土の含有も認められない。

SK3出土資料には、17世紀初頭から17世紀末までの遺物が含まれ、特に17世紀前葉～中葉の遺物が多い。また、被熱した遺物が含まれないことから、被災記録の残る元禄11年（1698）の火災以前の廃棄遺構の可能性がある。ただし、1680～1690年代以降出現するコンニャク印判の染付文様を施した小杯（52）1点が下層から出土しており、遺構の廃絶年代は1680年代以降とみている。

ところで、今次調査区において17世紀末頃に居住者の入れ替わりがあつたことは、第1節にて触れた通りであり、絵図資料では、SK3が位置する調査区北部は、1669年の絵図に榎井氏、1689・1690年絵図に片岡氏、1697～1699年の絵図に飯沼氏、1746年の絵図に黒田氏の屋敷が描かれ、以降は幕末まで黒田氏の屋敷があつたことが分かっている。また、元禄11年（1698）大火の記事では、



飯沼氏の屋敷が同年、当地点にあって焼失している。

各氏の入れ替わりの時期を検討すると、SK3の遺物所者としては榎井氏と片岡氏が挙げられるが、廃棄された遺物は17世紀前葉～中葉のものが大部分を占め、最も早くから居住が確認できる榎井氏に関わる廃棄遺物であった可能性が高い。また、榎井氏に特定できるとすれば、榎井氏から片岡氏への入れ替わりの時期はコンニャク印判技法の開始時期である1680～1690年代以降であり、かつ元禄2・3年の絵図に片岡氏の居住が示された1689・1690年までの間となり、1680年代あたりに限定されてこよう。

なお、榎井氏については、慶長6年（1601）に登用された初代榎井内蔵丞正信（没年1639年）が知行1300石、2代兵太夫（没年1644年）が知行1500石、続いて家督を継いだ3代五郎右衛門（没年1659年）が知行500石を与えられている。

## (2) SK3廃棄資料の組成と特徴

SK3出土遺物における器種別出土点数<sup>(註1)</sup>と組成比はTab.87、陶磁器の生産地別出土点数<sup>(註2)</sup>と組成比はTab.88に示した通りである。これによると、碗が27.3%、皿が28.3%と、碗・皿の出土比率が最も高い。その他の器種では、小杯、鉢、向付、猪口などの供膳具、播鉢、捏鉢などの調理具、その他瓶、壺、甕、蓋物、灯明受皿、香炉、火入れ、火鉢、人形などが出土しているが、江戸後期以降の陶磁器の組成に比較すると種類に乏しい。また、土器皿の占める比率が25.3%と高いのも特徴的である。次に陶磁器の生産地別の比率をみると、磁器では肥前が95.8%と最も高く、この他中国製品が4.2%含まれる。陶器では、やはり肥前が67.2%と高く、その他に、備前、瀬戸・美濃、地元の尾戸窯、丹波、京都又は京都系（尾戸窯の可能性をもつもの）などの製品が含まれる。

各地の特徴的な製品についてみると、磁器では肥前産の白磁小杯（48～51）、初期伊万里小皿（55～68）、初期伊万里瓶（104）など、初期の肥前磁器を多く所有している点に特徴が見える他、釉裏紅の文様を施した瓶（107）などの有田産の高級な磁器製品も含まれる。また、中国製品では、景德鎮窯系青花小杯（54）、景德鎮系青花皿（77～80）、漳州窯系五彩皿（81・82）の他、14世紀～15世紀に生産された龍泉窯の青磁壺（99）がみられる。

陶器でもやはり肥前製品が最も多い。肥前産陶器は、碗では高台施釉の灰釉丸碗が約30個体出土し、皿では鉄絵の蛇の目釉剥ぎ小皿が5個体揃いで出土するなど、これらの碗や皿が日用の食器として需要されたことが窺われる。この他にも、肥前の唐津系灰釉陶器小皿（138～140）、肥前系の唐津系灰釉陶器小皿（141）、絵唐津大皿（144）、絵唐津瓶類又は火入れ（165）、刷毛目二彩手の中皿と鉢（146・151）、三島手皿（148）、絵唐津小鉢（152）、甕（169）などがあり、バリエーションが多い様子は県下の近世遺跡でも突出している。この他、備前焼の播鉢、丹波焼の播鉢、瀬戸の播鉢が含まれるが、丹波、瀬戸の播鉢は県下の近世遺跡では殆ど確認できていないもので、ここにも当遺跡の特徴が見える。また、少量ではあるが志野焼、織部焼の向付なども含まれる。尾戸焼は器種不明の底部（174）と把手（175）がある。

土器では、土器皿が最も多く、径8～10cm大のもので灯明受皿としての使用痕をもつものが含まれる。土器はこの他、尾戸窯の白土器小皿、関西産の焙烙、焼塩壺、火鉢がある。

この様に、SK3では、供膳具、調理具、貯蔵具、暖房具、灯明具などの日用品を主体とし、これ

に茶の湯や武家の饗応に関わる上手の食器、調度品などが少量加わっている。こうした所有のあり方は、当時の上級武士の生活スタイルを反映しているものであろう。

### (3) SK17の性格と出土遺物の特質

SK17は径7m以上と、非常に大型の土坑で、廃絶年代は17世紀前葉に推定される。検出位置は調査区南部側の屋敷地の北東隅であり、東側に正面をもつ屋敷の正面北端にあたる。遺物量は少なく、内容的にも偏りがあって、家財道具の一括廃棄を目的とした廃棄土坑と捉えることは難しい。所有者としては、調査区南側の屋敷地に、17世紀中葉～末までの居住が確認できた遠山氏が挙げられるが、この時期の史料を欠き、17世紀前葉から同氏の居住がすでに開始されていたのかどうかは明らかでない。なお、この頃に該当する初代の遠山馬之丞政行（没年1624年）は知行550石、2代の新兵衛政春（没年1652～1655年）も知行550石を与えられていた。

ここに廃棄された遺物はコンテナ箱にして0.5箱にも満たず、遺構の規模に比較すると非常に少ない。SK17の器種別出土点数と組成比を示したTab.89によると、やはり土器小皿が52.6%と出土比率が高い。またこれに碗9.7%、皿14.9%、鉢と向付11.4%、播鉢6.1%、その他、瓶、香炉、香合、匙などが続くが、特に上手の食器や茶の湯に関わる道具が多く含まれる。

具体的な陶磁器の内容をみると、中国製品では、景德鎮窯系の青花碗と皿（352・354）、漳州窯系の青花碗と皿（353・355）、白磁碗（356）、青磁香炉（389）など。肥前の製品では、唐津系灰釉陶器の碗（358～361）、小皿（366～369）、大皿（372）、絵唐津の皿（357・370・371）。その他には、瀬戸大窯期の皿（373・374）、志野焼の皿、向付（376～384）、志野焼の香合（388）、織部焼の向付（385・386）、初期京焼にあたる軟質施釉陶器の碗（362～365）などがある。また、この他銅製品ではあるが匙（408・409）などがある。これらのうち、茶の湯に使用されたとみられるものは、初期京焼の茶碗、青磁香炉、志野焼の香合、志野焼や織部焼の向付、青花皿、匙などで、中国産13世紀～14世紀の青磁香炉などは、骨董的価値から求められたものだろうか。

この他、SK17では、鞆の羽口や鉄滓などの鍛冶関連の遺物も出土しており、当時の生産活動の一端が垣間見える。

## 2. 江戸後期の様相

江戸後期の一括廃棄資料には、18世紀末～19世紀初頭の中型の廃棄土坑SK25・43・72、19世紀前葉の廃棄土坑SK19、19世紀中葉の廃棄土坑SK7・12・21・29・37・39・84・88・89・124などがあり、今次調査区では数回の廃棄のピークが認められる。ここでは、最も多くの廃棄遺物が認められたSK84の遺物組成について検討を行いたい。

### (1) SK84出土資料の性格

SK84は径7.2mの大型土坑で、調査区南部側の屋敷地の北東隅に位置している。この位置は、17世紀前葉にSK17とSK122、18世紀中葉にSK52、19世紀中葉にSK84が掘削されており、同一地点内に大型の土坑が掘られ、数度の廃棄が行われている。SK84の最上面には瓦や礫、橙色の漆喰を含む堆積層が広がっており、近くには瓦と漆喰を多量に廃棄した土坑SK39も存在するため、SK84は居住者の転居と屋敷の取り壊しに伴う廃棄土坑と捉えることができる。SK84内には、土器、陶磁

器の他、石製品、金属製品、下駄や手桶などの木製品、家具や家屋の部材ともとれる木片や木屑等も多量に廃棄されており、家財のあらゆるものをまとめて投げ捨てた状況であった。

SK84の遺物所有者としては、18世紀中葉から居住を開始した若尾氏が挙げられる。第1節で触れた様に、この若尾氏は北側2件隣に屋敷を構える若尾氏の分家にあたり、幕末期には知行350石を与えられていた。

## (2) SK84廃棄資料の組成と特徴

SK84出土遺物における器種別出土点数と組成比はTab.91、陶磁器の生産地別出土点数と組成比はTab.92に示した通りである。これによると、器種では碗が30.7%、皿が13.6%と、出土比率が最も高く、それに続いて、小杯、鉢、猪口、搦鉢、捏鉢、片口、鍋、土瓶、急須、爛徳利、胡麻煎り、焙烙、羽釜、柄杓、水注、瓶、壺、甕、灯明受皿、火鉢、焜炉、竈、火消し壺、仏飯器、神酒徳利、うがい茶碗、紅皿、髪油壺、段重、水滴、火入れ、ミニチュア、泥面子、人形、餌鉢、鳥の水入れ、蓋物、合子、香炉、水鉢、植木鉢など、多様な用途の遺物が認められている。

これらの器種の中には、紅皿(1428)、うがい茶碗(1427)、髪油壺(1417～1419)、段重(1410・1411)などの化粧具、ミニチュア(1429・1430・1590・1591)、面子状の土製品(1593)などの玩具など、女性や子供を含めた家族に関わる遺物が含まれていることが分かる。また、江戸前期までの出土資料に見られた茶の湯に関わる遺物は減少し、代わって、小碗や土瓶、急須、焜炉など煎茶に関わる道具が豊富に見られるようになる。

次に陶磁器の生産地別の比率をみると、磁器では肥前産・肥前系が88.2%と最も高く、この他瀬戸・美濃産磁器が5.6%、在地の能茶山窯産磁器が5.3%、三田その他の関西系磁器が0.7%、中国産磁器が0.2%含まれる。陶器では、在地の尾戸窯と能茶山窯の製品が43.8%と最も高く、他に、肥前産・肥前系、備前、瀬戸・美濃、京都、信楽、堺、その他関西の諸窯など、多様な生産地の製品が流通している点が江戸前期と大きく異なっている。また特に需要が高まった尾戸窯と能茶山窯の陶器製品は、日用の食器や調理具、貯蔵具などの用途で多く買い求められている。

SK84の出土遺物全般についてその特徴をみると、多くが日常生活に使用される諸道具であり、日用の食器や調理具、貯蔵具については、在地産の陶磁器や肥前系磁器など、集落部や下級武士層の屋敷地でも流通するタイプの製品が所有されていることが分かる。

一方、集落部との違いが見えるものは、食器の一部や、化粧具、文房具、玩具などにおける器種の豊富さであろう。また、色絵の碗皿などの食器の一部や、釉裏紅を加えた景德鎮窯の青花蓋(1435)、肥前有田で生産された芙蓉手の小皿(1379)、伝世とみられる志野焼の向付(1470)、などの高級品を所有する点にも特徴がある。ただし組成全体をみると、江戸前期に比べて高級品の所持数は少なくなっていることに気付く。

## 3. 出土遺物にみる西弘小路遺跡の特質

### (1) 出土遺物の特徴と高級品の所持

ここまで、17世紀と19世紀中葉の土坑出土資料を検討し、遺物組成とその特徴をみてきた。江戸前期から後期までの間には、新たな器種の出現や、流通する生産地の増加など、幾つかなの変化が認

められたが、使用の場面に応じて日用品と高級品の使い分けがなされるあり方は、各年代を通じてみられた特徴である。茶道具や高級品の所持は、高知城伝下屋敷跡<sup>(註3)</sup>、高知城跡西堀地区<sup>(註4)</sup>、金子橋遺跡<sup>(註5)</sup>などでも認められたが、西弘小路遺跡では特にその数と種類が豊富であった。

そこで以下には、遺構内及び包含層出土の遺物の中から特徴的なものを取り上げ、高級品、すなわち製品の所持が富裕層に限定されてくるタイプのものでは、こういった器種のどの生産地の製品が求められているのか見ていきたい。

なお、西弘小路遺跡では年代によって居住者が入れ替わっており、各々の遺物の経済的背景にも若干の違いが予想されるため、3時期に区分して表記した。またこの場合、高級品は伝世し易く、購入から廃棄までのサイクルが長いという特質があるため、ここでは、廃棄年代ではなく生産年代によって時期区分を行った。また、中世の製品で骨董的価値から買い求められたことが予想される遺物については廃棄年代、尾戸焼についても年代観が不明なものが多いため廃棄年代によって区分した。

#### ① 1期 (17世紀前半)

茶の湯に関連する道具としては、初期京焼の碗(362～365)、志野焼の香合(388)、伝世品とみられる中国の青磁香炉(389)、匙(408・409)、信楽の茶壺(1292)などがある。また志野焼の向付や皿(376～379・381～384・932・936・1199・1250・1470・1902)、織部焼の向付(153・385・386・1666・1752)、景德鎮窯系の青花碗(352・777・1730)、青花小杯(54・1890)、青花皿(77～80・301・356・1185・1219～1221・1277・1310・1660・1731・1891)、青花鉢(95)、漳州窯系の青花碗(353・1208)、青花皿(355・1184・1222・1736)、五彩皿(81・82)などの食器は、茶の湯の懐石用食器や、饗応の器などに用いられたとみられる。この他、面取を施した初期伊万里の碗(1778)、初期伊万里の大皿(1897)、有田産の初期の小杯(1309)も上手のものである。

食器以外では、景德鎮窯の青花段重(1030)、有田産の辰砂の瓶(107)、14～15世紀の龍泉窯の青磁壺(99)などもある。このうち、青花段重(1030)はヨーロッパ輸出向けの製品として景德鎮窯で生産されたもので、ヨーロッパでは化粧具入れなどとして使用されるものであるが、国内での出土は稀である。また、龍泉窯の青磁壺(99)は出土事例が沖縄の首里城跡などに限定され、非常に稀少なものである。

#### ② 2期 (17世紀後半～18世紀前半)

茶の湯に関わる道具としては、瀬戸・美濃産の天目形碗(131)、象嵌文の尾戸焼碗(1230・1231・1717他)、鉄錆や呉須で幾何文や暦手文を描いた尾戸焼碗(1194・1232)、灰釉尾戸焼碗(302～304・325・1192・1193他)、備前焼の水指(605)、尾戸焼の水指(793)、絵唐津の小鉢(152)などが挙げられる。その他上手の食器としては、有田の色絵猪口(1895)、有田の瑠璃釉菊花形五寸皿(453)、有田の糸切り細工の鶴文変形皿(723)、有田産の金欄手様式の色絵鉢(1694)、有田産の染付大皿(84)・有田柿右衛門窯とみられる染付皿(1782)、有田柿右衛門窯とみられる白磁陽刻の皿(1791)、京焼の色絵碗(786)、京焼碗(787)、京焼の皿や鉢(1055・1101)などがある。また、京焼の色絵火入れ又は香炉(1151・1822)、有田の象の白磁水滴(494)・有田の瓢箪形の瓶(1669)、有田の釉裏紅の瓶(107)など、文房具や調度品にも上手のものがある。

### ③ 3期（18世紀後半～19世紀中葉）

茶の湯関連のものとしては、尾戸焼の水指（1004）と花生（1513）などがある。上手の食器には鍋島焼の染付中皿（199）、肥前有田の芙蓉手の小皿（1379）、景德鎮窯の青花小碗（1324）、その他の器種では、14～15世紀の瀬戸の灰釉小壺（1311）、景德鎮窯の釉裏紅を施した青花蓋（1435）がある。

#### （2）西弘小路遺跡出土遺物の特質

さて、こうしてみると、西弘小路遺跡では茶の湯に関するものや、饗応の器、調度品など、武家の交際場で用いられる諸道具に、特に高価なものや珍しいものを揃えた様子が窺われる。またその内容では、17世紀前半は中国産磁器や、初期伊万里、志野焼、織部焼など、17世紀後半以降は肥前有田の磁器、京焼などが買い求められており、この傾向は特に17世紀から18世紀初めにかけて顕著であった。

一方、18世紀後半以降は、廃棄遺物の全体量が増加しているにもかかわらず、茶の湯の道具や稀少な調度品類の出土数は減少しており、代わって、煎茶に関わる道具や、色絵の小杯や皿、鉢などからなる宴席用の食器が増加している。これには所有者の経済力の変化もあろうが、喫茶法や武家のもてなしの在り方などの、生活スタイルの変化が所持品の内容に反映したと思われる。

最後に、今回、黒田氏の屋敷内にあたる19世紀中葉の土坑SK4から、後期鍋島焼の七寸皿（199）1点が出土したことについても、若干触れておきたい。鍋島焼は、鍋島藩が将軍家への献上を主な目的として作った食器であり、その性格から、出土する遺跡も限定されている。地域的には、東京（江戸）での出土事例が最も多く、将軍家の他、鍋島藩と姻戚関係にある大名屋敷跡、幕府の要職を勤めた大名・旗本の屋敷跡から出土している。<sup>（註6）</sup>また、その他にも京都、長崎、小田原、鍋島藩地元の佐賀などで確認されているが、全国的にみてその出土例は極めて少ない。今回、西弘小路遺跡より出土した鍋島焼の皿は後期鍋島焼に属するもので、各地での出土が増加する時期でもあるが、将軍家への献上品や、姻戚関係にある大名家や幕府要人への贈答品などという鍋島焼の性格を考えると、土佐に鍋島焼が渡ったその背景は興味深い。まず土佐藩と鍋島藩との繋がりを考えた時、山内家と姻戚関係にあった宇和島藩伊達家が、鍋島家とも姻戚関係にあったことが挙げられる。近年の調査では、江戸の宇和島藩上屋敷で多くの出土事例が報告されており、宇和島藩伊達家が鍋島焼を多く入手できる立場にあったことが分かる。

土佐山内家はこの宇和島藩伊達家と幕末まで深い親交を保っており、こうしたルートから土佐に鍋島焼が渡った可能性も考えられよう。ただし、今回は知行150～200石取の上級武士の屋敷地内から出土したのであり、こうした性格の遺物がどういう経緯をもって侍屋敷の敷地内に廃棄されるに至ったかとなると、さらに疑問が深まる。幕末の諸施設の取り壊しの中であって城内の廃棄遺物がこちら側にもたらされたのか、あるいは何らかの経緯で黒田氏が鍋島焼を所有するに至ったのか、何れも結論付けられる根拠は無く、推論の域を出ない。しかし、各年代それぞれに稀少品や特殊な遺物が出土する状況を見ると、やはり立地環境からくる本遺跡の特異性が現れているように感じられる。

## 謝辞

今回の報告にあたっては、鍋島焼その他の陶磁器について大橋康二氏、石岡ひとみ氏より貴重なご教示を賜りました。心より感謝申し上げます。

### 【註】

- 1) 数値はいずれも推定個体数。個体数の算出は、口縁部点数と底部点数をもとに行った。この場合、接合不能な複数の口縁部片でも形態・調整痕・釉調・胎土等の観察から同一個体とみられるものは1個体とみなしてカウントした。また底部は、同一個体の口縁部を伴わないもののみを1個体としてカウントしている。ただし、土器小皿については底部点数、水滴、人形については別個体と判断できる体部片の点数を用いた。また同一個体の蓋と身を伴う蓋物・鍋・土瓶などは1点と数えた。なお、出土遺物のうち、窯道具、釘、瓦、鞆の羽口は除外した。
- 2) 信楽産陶器のうちで、京都産と識別出来ない色絵半球形碗や柄杓などは、「京都・信楽系」としてカウントした。また、尾戸窯製品については未だ実態の分からないものがあるため、京焼と識別のつかないものを「京都系」としてカウントした。堺・明石の播鉢以外で、「その他の関西」とした陶器には、舞子焼、産地不明の関西系甕、土瓶などが含まれる。
- 3) 『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年
- 4) 『高知城跡－西堀地区試掘確認調査報告書』高知市教育委員会2009年
- 5) 『金子橋遺跡』高知市教育委員会2008年
- 6) 大橋康二「鍋島焼生産目的と出土遺物の性格について」『扶桑－田村晃一先生喜寿記念論文集（青山考古第25・26号合併号）』青山考古学会田村晃一先生喜寿記念論文集刊行会2009年

Tab.87 SK3出土遺物の器種別出土点数と組成比

	磁器	陶器	土器 (瓦質・土師質・ 施釉土器)	石製品・金属製品・ その他	出土点数計	組成比%
中碗	56	64			120	22.3%
小碗	25	2			27	5.0%
小杯	22				22	4.1%
小皿	70	57			127	23.6%
中皿	10	10			20	3.7%
大皿		2			2	0.3%
皿(法量不明)	4				4	0.7%
鉢・向付	3	5			8	1.5%
猪口	8				8	1.5%
播鉢		16			16	3.0%
捏鉢		3			3	0.6%
焙烙			1		1	0.2%
瓶	6	6			12	2.2%
壺・甕	3	4			7	1.3%
蓋物・蓋	2	1			3	0.6%
火鉢			1		1	0.2%
灯明受皿		2			2	0.4%
香炉		2			2	0.4%
火入れ又は香炉		1			1	0.2%
人形	1				1	0.2%
土器小皿			136		136	25.3%
焼塩壺			1		1	0.2%
不明	3	11			14	2.6%
計	213	186	139	0	538	100.1%

Tab.88 SK3陶磁器の生産地別出土点数と組成比

	磁器			陶器							
	肥前	中国	磁器計	尾戸	肥前	瀬戸・ 美濃	京都又は 京都系	丹波	備前	不明	陶器計
碗	80	1	81		56	4				6	66
小杯	21	1	22								
皿	79	5	84		64		1			4	69
鉢・向付	2	1	3		2	2			1		5
猪口	8		8								
播鉢						1		1	14		16
捏鉢										3	3
瓶・德利	6		6		1					5	6
壺・甕	2	1	3		2					2	4
蓋物・蓋	2		2							1	1
灯明受皿										2	2
香炉										2	2
火入れ又は香炉										1	1
人形	1		1								
不明	3		3	2		1				8	11
計(点)	204	9	213	2	125	8	1	1	15	34	186
組成比 %	95.8 %	4.2 %	100.0 %	1.0 %	67.2 %	4.3 %	0.5 %	0.5 %	8.0 %	18.2 %	99.7 %

Tab.89 SK17出土遺物の器種別出土点数と組成比

	磁器	陶器	土器 (瓦質・土師質・ 施釉土器)	石製品・金属製品・ その他	出土点数計	組成比%
中碗	3	8			11	9.7%
小皿	2	11			13	11.4%
中皿		4			4	3.5%
鉢・向付		13			13	11.4%
播鉢		7			7	6.1%
瓶		1			1	0.9%
香炉・香合	1	1			2	1.8%
匙				2	2	1.8%
土器小皿			60		60	52.6%
不明		1			1	0.9%
計	6	46	60	2	114	100.1%

Tab.90 SK17陶磁器の生産地別出土点数と組成比

	磁器				陶器					
	肥前	中国	不明	磁器計	肥前	瀬戸・ 美濃	京都	備前	不明	陶器計
碗		2	1	3	4		4			8
皿		2		2	13	2				15
鉢・向付					1	11		1		13
播鉢								7		7
瓶								1		1
香炉・香合	1			1		1				1
不明									1	1
計(点)	1	4	1	6	18	14	4	9	1	46
組成比 %	16.7 %	66.7 %	16.7 %	100.1 %	39.1 %	30.4 %	8.7 %	19.6 %	2.2 %	100.0 %



Tab.91 SK84出土遺物の器種別出土点数と組成比

	磁器	陶器	土器 (瓦質・土師質・ 施釉土器)	石製品・金属製品・ その他	出土点数計	組成比%
中碗	156	59			215	21.3%
小碗	71	24			95	9.4%
小杯	52	1			53	5.3%
小皿・五寸皿	86	41			127	12.6%
中皿	2	6			8	0.8%
大皿	2				2	0.2%
鉢	24	9			33	3.3%
猪口	18				18	1.8%
碗蓋	49				49	4.9%
播鉢		26			26	2.6%
捏鉢・片口		8			8	0.8%
鍋		26			26	2.6%
羽釜			2		2	0.2%
焙烙			11		11	1.1%
胡麻煎り			5		5	0.5%
土瓶・急須		25			25	2.5%
燗德利		1			1	0.1%
瓶(德利・その他)	15	11			26	2.6%
水注		6			6	0.6%
壺・甕		23			23	2.3%
蓋物	18	11			29	2.9%
火消し壺			3		3	0.3%
焜戸・七輪			21		21	2.1%
竈			5		5	0.5%
火鉢	1	4	4		9	0.9%
灯受明皿		34			34	3.4%
香炉	4	2			6	0.6%
仏飯器	3				3	0.3%
神酒德利	6				6	0.6%
紅皿	15				15	1.5%
うがい茶碗	1				1	0.1%
髪油壺	5				5	0.5%
合子	5	1			6	0.6%
段重	11				11	1.1%
水滴	2				2	0.2%
火入れ		2			2	0.2%
柄杓		4			4	0.4%
餌鉢・鳥の水入れ		5			5	0.5%
植木鉢・水鉢		6			6	0.6%
人形			1		1	0.1%
人形・ミニチュア・ 泥面子・型	1	3	3		7	0.7%
土器小皿			41		41	4.1%
土器杯			4		4	0.4%
硯				2	2	0.2%
煙管・簪・匙				4	4	0.4%
不明	5	11		1	17	1.7%
計	552	349	100	7	1008	100.4%

Tab.92 SK84陶磁器の生産地別出土点数と組成比

	磁器						陶器										
	能茶山	肥前産・肥前系	瀬戸・美濃	関西	中国	磁器計	尾戸	尾戸又は能茶山	能茶山	肥前産・肥前系	瀬戸・美濃	京都・京都系	備前	堺・明石	その他の関西	在地系・不明	陶器計
中碗	15	126	15			156	29	6		12	2	6				4	59
小碗	6	49	14	2		71	4					12			1	7	24
小杯		51		1		52	1										1
皿	5	83	2			90	3	6	23	6	2		1			6	47
鉢	2	21		1		24	4				3					2	9
猪口		18				18											
碗蓋		49				49											
搦鉢											1		19	6			26
捏鉢・片口								2	6								8
鍋								26									26
土瓶・急須								2							1	22	25
燗徳利																1	1
瓶・徳利		15				15	1	5				1				4	11
水注							1					2				3	6
壺・甕							2	1	12						3	5	23
蓋物	1	16			1	18	2		1			4				4	11
火鉢		1				1					3					1	4
灯受皿							1	2				31					34
香炉		4				4						1				1	2
仏飯器		3				3											
神酒徳利		6				6											
紅皿		15				15											
うがい茶碗		1				1											
髪油壺		5				5											
合子・段重		16				16										1	1
水滴		2				2											
火入れ								2									2
柄杓												4					4
餌鉢・鳥の水入れ								5									5
植木鉢											1					3	4
水鉢											2						2
ミニチュア		1				1					1					2	3
不明		5				5	4		2		2					3	11
点数計	29	487	31	4	1	552	52	57	44	18	17	61	20	6	5	69	349
組成比 %	5.3 %	88.2 %	5.6 %	0.7 %	0.2 %	100.0 %	14.9 %	16.3 %	12.6 %	5.2 %	4.9 %	17.5 %	5.7 %	1.7 %	1.4 %	19.8 %	100.0 %

## 第4節 西弘小路遺跡出土の尾戸焼について

### はじめに

尾戸窯は、2代藩主忠義の命によって開かれた土佐の藩窯で、承応2年（1653）の開窯以来、茶陶を中心に多くの優れた陶器を生産した。その開始にあたっては、高原焼の陶工、久野正伯が大坂より招かれ、正伯のもとで初代陶工の森田久右衛門と山崎平内が尾戸焼の製作に従事した。初期の窯は城の北側にある尾戸に開かれ、以降19世紀までこの尾戸の窯場で陶器生産が続けられた。その後、1820年に藩の磁器窯と陶器窯が能茶山に開窯されるに伴って、尾戸の窯場も能茶山へ移転することとなる。

近世の尾戸焼については、初代陶工森田久右衛門が記した『森田久右衛門江戸日記』<sup>(註1)</sup>や森田家文書『戸陶値段表』<sup>(註2)</sup>などの史料から、その製品像を把握することができる。また、考古資料の面でも、生産地関連遺跡である尾戸窯跡<sup>(註3)</sup>の他、高知城跡<sup>(註4)</sup>、高知城伝下屋敷跡<sup>(註5)</sup>、金子橋遺跡<sup>(註6)</sup>などの城と城下町、小籠遺跡<sup>(註7)</sup>、田村遺跡<sup>(註8)</sup>などの集落部の遺跡から尾戸焼の出土事例が報告され、江戸後期を中心に尾戸焼の出土資料が蓄積されている。しかし、全体的には資料数もまだ少なく、県下での江戸前期の遺構の報告数が少ないこともあって、特に17世紀後半から18世紀前半にかけての尾戸焼の流通状況については不明な点が多く残されている。

今回の発掘調査では、17世紀前葉から幕末までの廃棄土坑が多数検出され、200点以上の尾戸焼の出土が確認された。西弘小路遺跡は尾戸の窯場から400m程の近距離にあって、城下でも特に尾戸焼を入手しやすい立地環境にあったと思われる。また、居住者が様々な製品を入手出来る高い経済力をもち、茶の湯に関わる遺物も多く所持していたことは前節にて触れた通りであり、今回の資料から、各年代に流通する尾戸焼の基礎資料が良好な形で得られると期待される。

本節では、各年代の遺構出土資料を検討し、尾戸焼の製品特徴とその年代的な変化を概観していきたい。また、尾戸焼の流通の問題や、城下の上級武士の屋敷地において尾戸焼がどのように所有されていたのかという、その需要の在り方についても見ていくこととしたい。

### 1. 出土資料の検討

今回の調査では17世紀前葉から幕末までの遺構が検出されており、17世紀末のSK3以降、各年代を通して尾戸焼の出土が確認できている。以下には、西弘小路遺跡での尾戸焼の出土時期を1～4期に区分し、各期の遺構出土資料を示した。なお、各資料の年代は遺構の廃絶年代とした。<sup>(註9)</sup>

#### ① 1期：17世紀後半

##### SK3（17世紀末）

[器種不明（174・175）、白土器（179～182）、窯道具（176～178）]

#### ② 2期：18世紀前半

##### SK45・115・SD1・SX4（18世紀前葉）

[中碗（1717・1762・1785）、皿又は鉢（1102）、蓋物（1787）]

中碗には、白象嵌の七宝文を施した灰釉碗（1717）、鉄錆で草花文を描いた灰釉腰張形碗（1785）、

無文とみられる灰釉碗（1762）がある。その他、鉄鑄で暦手文を描いた皿又は鉢（1102）、灰釉の蓋物（1787）がある。

#### SK8・9・11・28・41（18世紀前半）

[中碗（302～306・325・931・933・1054・1192～1196）、皿（315）、土器小皿（332）、白土器小皿（942・943）]

中碗には、鑄絵碗（1195）、鉄鑄と呉須で幾何文と圏線を描いた碗（1194）、薄手で外面下位にヘラ彫りの列点文を施した灰釉碗（933）などの文様意匠のものがあり、その他は無文の灰釉碗（302～306・325・931・1054・1192・1193）からなる。皿は無文の灰釉皿（315）がある。

#### ③ 3期：18世紀後半～19世紀前葉

##### SK52（18世紀中葉）

[中碗（1230～1238）、中皿（1247）、小皿（1248）、未成品（1239）]

中碗には、白象嵌による圏線と印花文の碗（1230）、白象嵌による暦手文の碗（1231）、呉須で檜垣と暦手文を描く碗（1232）、上位に凹線を施した碗（1233）、鑄絵笹文の碗（1234）、無文の灰釉碗（1235～1237）がある。皿には、鑄絵中皿（1247）、見込み蛇の目釉剥ぎ小皿（1248）がある。

##### SK24・35・50（18世紀後半）

[中碗（781～784・956・957・960・1133～1135）、小碗（958・1136）、大碗（959）、皿（961）、水指（793）、白土器小皿（1168・1169）]

中碗には、鉄鑄と呉須で稲束と笠を描いた碗（781）、鑄絵宝文碗（1134）、無文の灰釉碗（782～784・956・957・960・1133・1135）がある。その他には、鑄絵小碗（1136）、箱形の灰釉水指（793）、無文の灰釉皿（961）がある。

##### SK25・43（18世紀末～19世紀初頭）

[中碗（832～838・1074～1076）、小碗（840・841）、鉢（856）、碗蓋（1082）、瓶（870）、水注（857）、香炉又は火入れ（876）、灯明受皿（1086）、餌鉢（883）、人形又は水滴（884～886）、白土器小皿（900～905）、不明（875）]

中碗には、鑄絵草文（836）、鑄絵笹文（837）、無文の灰釉碗（832～835・838・875）がある。その他、輪花形の小碗（840）、鉄鑄と白土で梅文を描く小碗（841）、鉄釉の水注（857）、呉須で獅子と草花を描く瓶（870）、鉄鑄で笹文を描く香炉又は火入れ（876）、灰釉の餌鉢（883）、灰釉の人形又は水滴（884～886）がある。

##### SK19・83（19世紀前葉）

[中碗（507～512・514～518・1327）、小碗（513）、手塩皿（540）、小皿（542）、中皿（545）、鉢（547・551・1328）、片口（554）、瓶（587）、不明（606）、鳥の水入れ（620）、餌猪口（622）、白土器小皿（626～639）、土器小皿（640・641）]

中碗には、鉄鑄と白土で梅文を描いた広東形碗（507）、印刻による黒象嵌の桐文を施した碗（508）、鑄絵注連縄文碗（510）、鑄絵笹文碗（511）、鉄釉碗（512）、広東形碗（516）、無文の灰釉碗（509・514・515・517・1327）、粗製で厚手の灰釉碗（518）がある。その他、梅花を表した変形形の灰釉手塩皿（540）、鉄釉小皿（542）、鉄鑄で文字を描いた灰釉中皿（545）、輪花形の鉢（547）、鑄絵山

水文の鉢（551）などがある。

#### SK10・36（19世紀前半）

[中碗（321・973）、香炉又は火もらい（975）]

鏽絵の丸碗（321・973）、鉄釉を施した香炉又は火もらい（975）がある。

#### ④ 4期：19世紀中葉

#### SK7・12・21・37・97（19世紀中葉）

[中碗（337・998・1438～1445・1649・1700・1865・1866）、小碗（1448）、小杯（1000）、小皿・五寸皿（1002・1456・1457・1459）、中皿（1467・1651）、鉢（1468・1701）、土瓶又は急須の蓋（271）、水注（1501）、蓋（1003・1535）、火入れ（273）、白土器小皿（274～279・1019～1021・1546～1555・1705）、瓶（1675）、神酒徳利（339）、花生（1513）、碗又は鉢（754）、灯明受皿（1523）、水指（1004・1534）、合子（1885）、不明（1756・1867）]

中碗には、鉄鑄で略化した注連縄文を描いた碗（1440）、鏽絵の碗（1445）、無文の灰釉碗（998・1700）、粗製で厚手の灰釉碗（1441～1444）、鉄鑄で笹文を描いた広東形碗（1439）がある。皿には、鏽絵の灰釉皿（1002）、鉄鑄で笹文を描いた見込み蛇の目釉剥ぎの灰釉小皿（1456・1457・1459）、鉄鑄で宝珠を描いた見込み蛇の目釉剥ぎの灰釉中皿（1467）、呉須絵の中皿（1651）がある。その他、小碗、小杯、鉢、土瓶又は急須、水注、火入れ、瓶、神酒徳利、花生、灯明受皿、水指、合子、土器小皿など多様な器種が認められる。

## 2. 17世紀後半～18世紀前半の尾戸焼

ここまで各期の尾戸焼出土資料を見てきたが、以下ではその流通に関わる問題と文様意匠などについて、文献史料や他遺跡の出土事例も交えながら検討しておきたい。

### 流通に関わる問題

西弘小路遺跡では、尾戸窯が操業を開始する17世紀後半の資料は殆ど確認することができず、最も早く出土が認められるのは、17世紀末の大型廃棄土坑SK3からである。また、その内容も器種不明の2点の陶器片と白土器、及び窯跡からもたらされたとみられる窯道具のみであり、SK3の出土遺物点数全体からみるとごく僅かなものであった。

次に、18世紀前葉と18世紀前半の資料になると出土点数が増加している。器種は、碗、皿、皿または鉢、蓋物、土器小皿であり、特に器高の高い高台無釉の碗が大部分を占めている。こうしたことから、西弘小路遺跡において尾戸焼の出土が本格的に見られ始めるのは、18世紀前葉以降と考えられる。

消費地での出土がこの頃から増え始める背景について、史料では、享保（1716～1736）初年頃、6代藩主豊隆から出された通達に「尾戸焼物師共、向後ハ惣而諸品念入候手きは能き細工指止、龜相之仕成ニて御国中末末迄要用可相達雑物器焼出シ可申事。」との記事<sup>(註10)</sup>が見え、この頃に藩窯経営の転換があったことを知ることができる。また、この通達以前にも、元禄15年（1702）には藩財政逼迫による贈答の停止の記事<sup>(註11)</sup>があり、18世紀の初め頃から藩財政の急迫を理由に贈答を減じる動きが見え始めていたことが分かる。そのため、17世紀後半に多かった尾戸焼の贈答も、こ

の頃から減少に向かっていたと推察されよう。

こうして、藩窯ではそれまでの手間をかけた上手の製品製作を取り止め、18世紀前半には、尾戸窯の経営は民間向けの販売品製作主体へ転じていたと考えられる。西弘小路遺跡に見られる18世紀前半の出土資料は、尾戸窯が贈答品や藩用品製作を主体としたそれまでの在り方から、販売品製作に主力を移し始める頃の製品内容を示しているものであろう。

### 文様意匠にみる特徴

次に、この時期の西弘小路遺跡出土の尾戸焼を見ると、18世紀前葉と18世紀前半の出土資料では、無文の灰釉碗や皿の他に、象嵌文の碗（1717）や、鉄錆と呉須で幾何文と圏線を描いた碗（1194）、鉄錆で暦手文を描いた皿又は鉢（1102）など、17世紀の御本茶碗に共通する意匠のものが含まれている。また、薄手で繊細な印象をもつ灰釉碗（933）など、これ以降のやや厚手でおおらかな作りの尾戸焼とは異なるタイプのものも含まれていた。

西弘小路遺跡以外でこの薄手タイプの尾戸焼が出土した事例としては、東京都の丸の内三丁目遺跡<sup>(註12)</sup>カ地区瓦溜出土資料がある。同資料は、江戸の土佐藩上屋敷の元禄11年（1698）大火に伴う廃棄資料で、碗や皿は何れも器壁が薄く全体に丁寧な作りであり、藩の江戸上屋敷という遺跡の性格からみて上手の尾戸焼が取り揃えられていたと考えられるものであった。<sup>(註13)</sup>ここに含まれる碗は、無文の灰釉碗に加えて、象嵌の暦手文、雲鶴文、丸文など御本手の意匠を取り入れたものが多く見られ、また、皿は型作りによる変形ものの皿や周縁に透かしを入れた角皿など、京焼風の意匠のものも見られた。

17世紀後半～18世紀前半の尾戸焼にこうした薄手の碗や皿が見られる背景を考えた時、陶工の技量や作風の違いが多少反映されたとも考えられよう。<sup>(註14)</sup>しかし18世紀初め頃まで、尾戸窯では贈答品や藩用品の製作を目的として優品の生産を目指しており、こうした藩窯の経営方針が、その製品内容に大きく関わっていたと思われる。18世紀前半までに見られる薄手の碗や皿は、当時流行していた京焼の碗や皿ともよく似ており、高台形態や胎土に特徴があるものを除けば、殆ど見分けがつかない程である。御本手碗や京焼を意識した作風は、贈答を目的として製作した時期ならではのもので、当時贈答を受けた人々（山内家と縁戚関係のある武家、諸大名、幕府要人など）の好みに応じたものであろう。

そして、薄手の碗、皿が城下の遺跡から出土することは稀であり、西弘小路遺跡においてもその出土数は少量であった。<sup>(註15)</sup>土佐国内向けの販売品が増加した18世紀前葉以降には、地方窯独自のおおらかで厚手の作りの碗が増加しており、以降このタイプの碗が尾戸窯の主流となっている。

## 3. 18世紀後半以降の尾戸焼

### 器種組成と意匠の変化

次に18世紀後半以降の状況であるが、西弘小路遺跡では、18世紀末以降、蛇の目釉剥ぎの小皿、片口、水注、土瓶、瓶、神酒徳利、鳥の水入れ、餌鉢などの日用品が多くなっている。こうした内容は、金子橋遺跡などの城下の侍屋敷や、小籠遺跡、田村遺跡などの集落遺跡でも同様で、18世紀末以降には尾戸窯産の日用雑器が広く流通したことが分かる。

碗においては、小碗が18世紀後半から目立ち始めているが、これは京都や関西諸窯の製品にも共通しており、喫茶習慣の変化に尾戸窯の碗生産が対応した結果であろう。また、19世紀以降は飯碗とみられる広東形碗（507・516・1439）が現れており、当時流行した肥前産磁器碗の形態を取り入れている。一方、初期以来の尾戸茶碗の系譜を引く高台無釉で器高の高い丸碗は、19世紀まで器形変化が殆ど無く作り続けられている。

ただし、器高の高い高台無釉の丸碗では、19世紀以降、厚手でやや大振りの粗製碗（518・1441・1442・1443）が加わっている。これに類似した丸碗は、土佐では18世紀前半まで肥前産の高台施釉灰釉丸碗が城下町、集落ともに広く流通していたが、18世紀後半以降には肥前の陶器碗生産が停止し、肥前産灰釉丸碗の流通も途絶える。しかしその後も、土佐では同タイプ碗の需要が続いており、尾戸窯の粗製丸碗もこうした需要に応じて生産が続けられたとみられる。

碗の文様意匠については、18世紀中葉のSK52出土資料に、象嵌文の碗（1230・1231）、呉須で檜垣や暦手文を描く碗（1232）などが含まれ、18世紀前半以前に見られた象嵌文や暦手の文様意匠が引き続き残っている。またこの他にも、廃絶年代が18世紀の可能性をもつSK81から象嵌の印花文と暦手文の碗（1323）、18世紀末～19世紀のSX13から象嵌の圏線を施した碗（1814）、19世紀前葉のSK19から象嵌の桐文碗（508）、19世紀前半～中葉のSK74から象嵌の暦手文碗（1304）、19世紀中葉の瓦溜2から象嵌の丸文と列点文の碗（1865）、近世の包含層から象嵌の印花文と暦手文の碗（1904）などが出土しており、18世紀後半以後の遺構や包含層内からも象嵌文碗の出土が認められている。<sup>（註16）</sup>

しかし全体に見ると、こうした象嵌文や暦手の文様意匠はごく僅かであり、碗ではやはり無文の灰釉碗が最も多く、その他には、鉄錆や呉須のおおらかな筆ぶりで稲束や宝文、草文、笹文などの文様を描いたもの（511・781・836・837・1134・1234・1439他）が多い。また、鉄錆と白土で梅文を描いた広東形碗（507）や小碗（841）など、鉄絵や呉須絵の一部に白土を加えた文様も加わっている。

## おわりに

ここまで、尾戸焼の流通時期や器種組成の変化、意匠の問題などについて検討してきたが、最後に、西弘小路遺跡における尾戸焼の使用の在り方についても若干触れることとしたい。

本遺跡では、18世紀前半までは尾戸焼の碗、皿、鉢、蓋物、土器小皿などが所有されていたが、その中でも特に器高の高い高台無釉碗が大部分を占めていた。このタイプの碗は文様をもつもの、無文のものを含めて、全体に上手の作りのものが多く、茶碗として用いられた可能性が高い。西弘小路遺跡で江戸前期以来、茶の湯に関わる道具が多く所有されていたことは第3節にて触れた通りで、茶碗では17世紀前葉に初期京焼の碗、17世紀末に瀬戸・美濃産の天目形碗があった。そして、これらに代わって、18世紀以降には尾戸焼の茶碗が受け入れられたと考えられる。

18世紀後半以降には、日用品的性格の器種に尾戸焼が多く見える様になり、その内容にも変化が現れるが、水指、香炉、水滴、食器の一部などでは上手の尾戸焼もあり、多様なものが所有されている。様々な用途に対応して製品を製作した、尾戸窯の経営上の特質がこの辺りからも窺われよう。

[註]

- 1) 『森田久右衛門日記』は森田家の初代陶工森田久右衛門の、延宝6年から7年の江戸出府の記録である。
- 2) 森田家文書『戸陶値段表』丸山和雄『土佐の陶磁』より引用。
- 3) 『尾戸窯跡』高知市教育委員会2007年
- 4) 『高知城跡－西堀地区試掘確認調査報告書』高知市教育委員会2009年
- 5) 『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年
- 6) 『金子橋遺跡』高知市教育委員会2008年
- 7) 『小籠遺跡Ⅱ』高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年『小籠遺跡Ⅲ』高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997年
- 8) 『田村遺跡群Ⅱ－第1分冊』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004年
- 9) なお、遺構の年代については、第4章にて検討した廃絶年代を基準としたため、18世紀中葉のSK52、19世紀前半のSK10・36など設定した時期区分におさまらないものがあつたが、最も近い様相を示している方に区分した。また廃絶年代の曖昧な遺構は除外した。
- 10) 平尾道雄『土佐藩工業経済史』より引用。
- 11) 元禄15年8月16日の記事。「一、御国年年洪水御損亡、旁々ニ付御勝手御逼迫故、御役人中様江は前前之通御音信御贈答可被成由、御自分御音信御贈答は御断、被遂御儉約被成度旨、今朝阿部豊後守様へ山川久左衛門を以被仰込候処、御尤ニ思召候間、御仲ヶ間中江も可被仰談之旨申参也、」山内家史料『豊房公紀』所引「御日記」。尾本師子「山内家資料にみる大名家の贈答関係と尾戸焼」『第8回四国城下町研究会 四国・淡路の陶磁器Ⅳ－尾戸窯の経営とその周辺－』四国城下町研究会2007年より引用。
- 12) 『丸の内三丁目遺跡』東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター 1994年
- 13) 浜田恵子「近世尾戸窯の経営と製品」『第8回四国城下町研究会 四国・淡路の陶磁器Ⅳ－尾戸窯の経営とその周辺－』四国城下町研究会2007年
- 14) 作陶にあつた森田家の動向からみると、18世紀前葉までは、初代の森田久右衛門（1715年没）、2代三郎兵衛（1727年没）が従事していた。
- 15) 西弘小路遺跡出土の薄手の尾戸焼には、廃絶年代を18世紀前半とするSK28出土の灰釉碗（933）、廃絶年代を18世紀とするSK48・49出土の変形形の鉢（1107）がある。ただし、上手の製品は伝世しやすく生産から廃棄までに開きが出る可能性もあるため、その年代観については注意を要する。
- 16) 西弘小路遺跡出土の象嵌文の尾戸焼には、廃絶年代を19世紀前葉とするSK19出土の象嵌の桐文碗（508）、廃絶年代を18世紀中葉とするSK52出土の象嵌の印花文碗（1230）と象嵌の暦手文碗（1231）、廃絶年代を19世紀前半～中葉とするSK74出土の象嵌の暦手文碗（1304）、廃絶年代が18世紀の可能性をもつSK81出土の象嵌の印花文・暦手文の碗（1323）、廃絶年代を18世紀前葉とするSK115出土の象嵌の七宝文の碗（1717）、廃絶年代を18世紀末～19世紀とするSX13出土の象嵌の圏線の碗（1814）、廃絶年代を19世紀中葉とする瓦溜2出土の象嵌の丸文・列点文の碗（1865）、包含層Ⅱ層出土の象嵌の印花文・暦手文の碗（1904）がある。象嵌文碗は19世紀の遺構までその出土が認められるが、上手の碗は伝世する可能性もあるためその年代観については注意を要する。



[参考文献]

丸山和雄『土佐の陶磁』雄山閣出版1973年

丸山和雄「森田久右衛門江戸日記」「森田久右衛門江戸日記について」『東洋陶磁Vol.5』東洋陶磁学会1978年

平尾道雄『土佐藩工業経済史』高知市民図書館1957年

尾本師子「山内家資料にみる大名家の贈答関係と尾戸焼」『第8回四国城下町研究会 四国・淡路の陶磁器

IV－尾戸窯の経営とその周辺－』四国城下町研究会2007年

# 写 真 图 版



調査区遠景（南より）



調査区風景

PL. 2



調査区東壁



東壁セクション



東西バンク北壁とSX4焼土



東西セクションとSX4焼土

PL. 4



東部完掘状況（西より）



東部完掘状況（西より）



南東部完掘状況（西より）



南東部完掘状況（北より）



SK3セクション (南より)



SK3完掘状況 (北より)





SK8礫出土状況（北より）



SK17完掘状況（東より）



SK19西部完掘状況（南西より）



SK19遺物出土状況



SK77・78セクション (西より)



SK84 (南より)



SK84セクション及び遺物出土状況（西より）



SK84遺物出土状況



SK86セクション (南より)



SK116セクション (南より)



SD1遺物出土状況



ピット列1・P36・37完掘状況（西より）



P29柱痕検出状況



P45礫出土状況



瓦溜2・石列1・3 (西より)

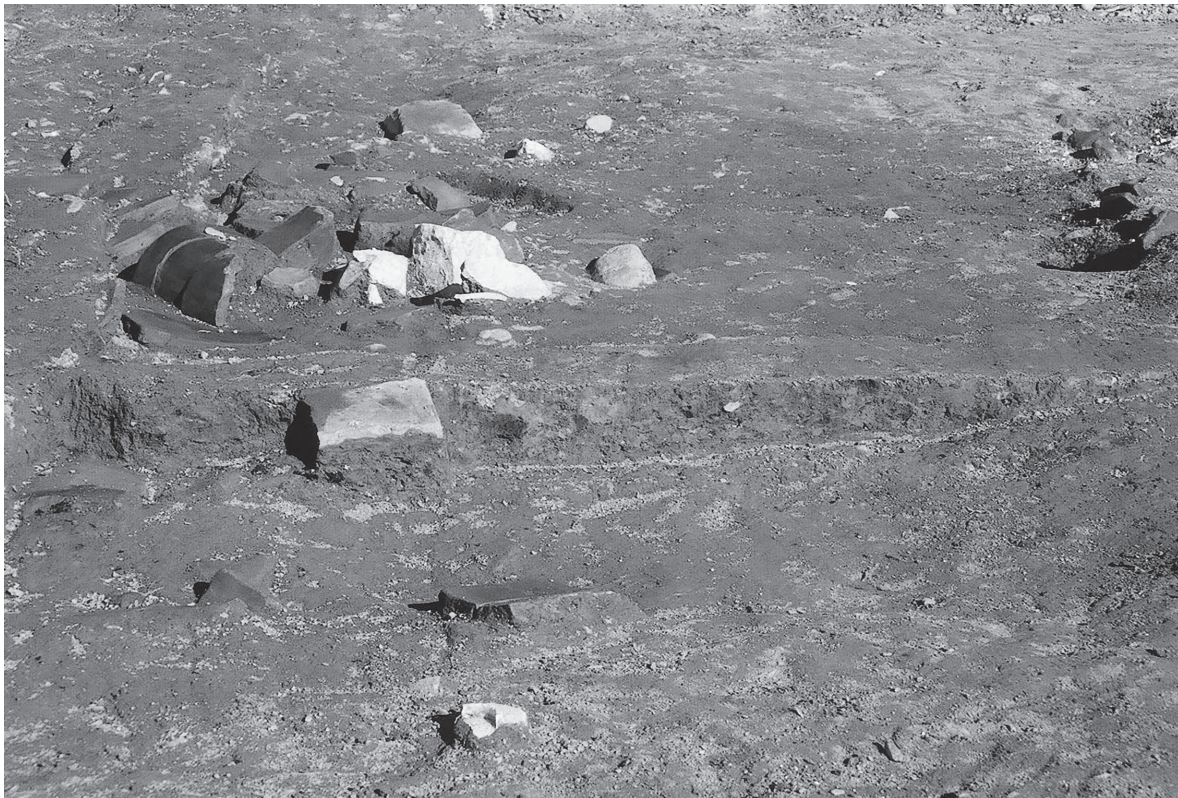


石列1 (南より)





SX4遺物出土状況（西より）



SX4セクション（西より）



SK1セクション (西より)



SK3セクション (北より)



SK5セクション (北東より)



SK6セクション (南より)



SK7セクション (南より)



SK20セクション (東より)



SK25セクション (南より)



SK28セクション (西より)



SK32セクション (西より)



SK35セクション (南より)



SK38セクション (南より)



SK41セクション (北より)



SK43・SX12・13セクション (南より)



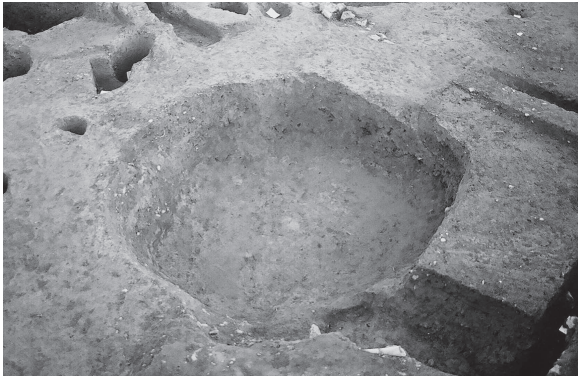
SK48セクション (南より)



SK49完掘状況 (西より)



SK50セクション (南より)



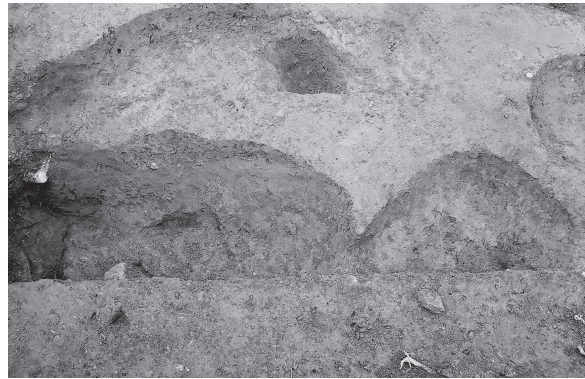
SK50完掘状況（西より）



SK51セクション（北より）



SK53セクション（南より）



SK77・78完掘状況（東より）



SK115セクション（南より）



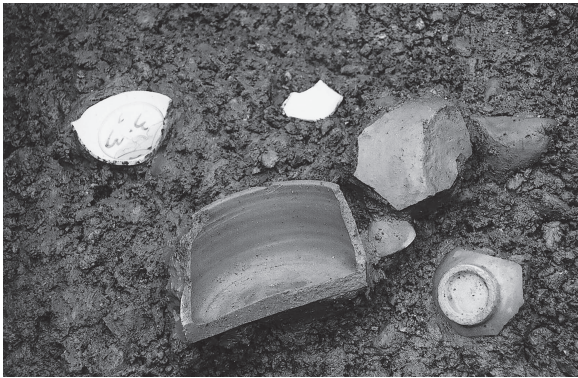
SK118・120完掘状況（西より）



SK127遺物出土状況



P5礫出土状況



SK3遺物出土状況 (22)



SK3遺物出土状況 (75・76)



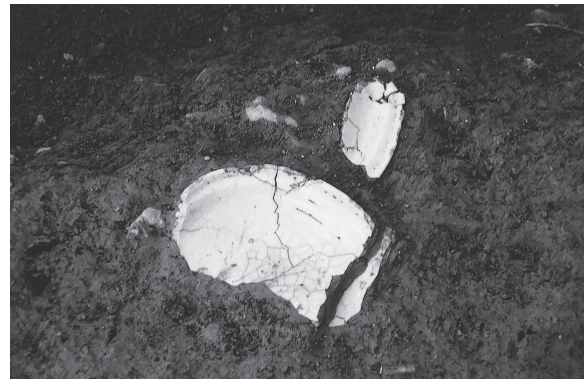
SK3遺物出土状況 (152)



SK3遺物出土状況 (161)



SK7遺物出土状況 (274・293)



SK17遺物出土状況 (379)



SK17遺物出土状況 (378)



SK17遺物出土状況 (384)